明治三十四年五月五日發行
每月一回五日發行

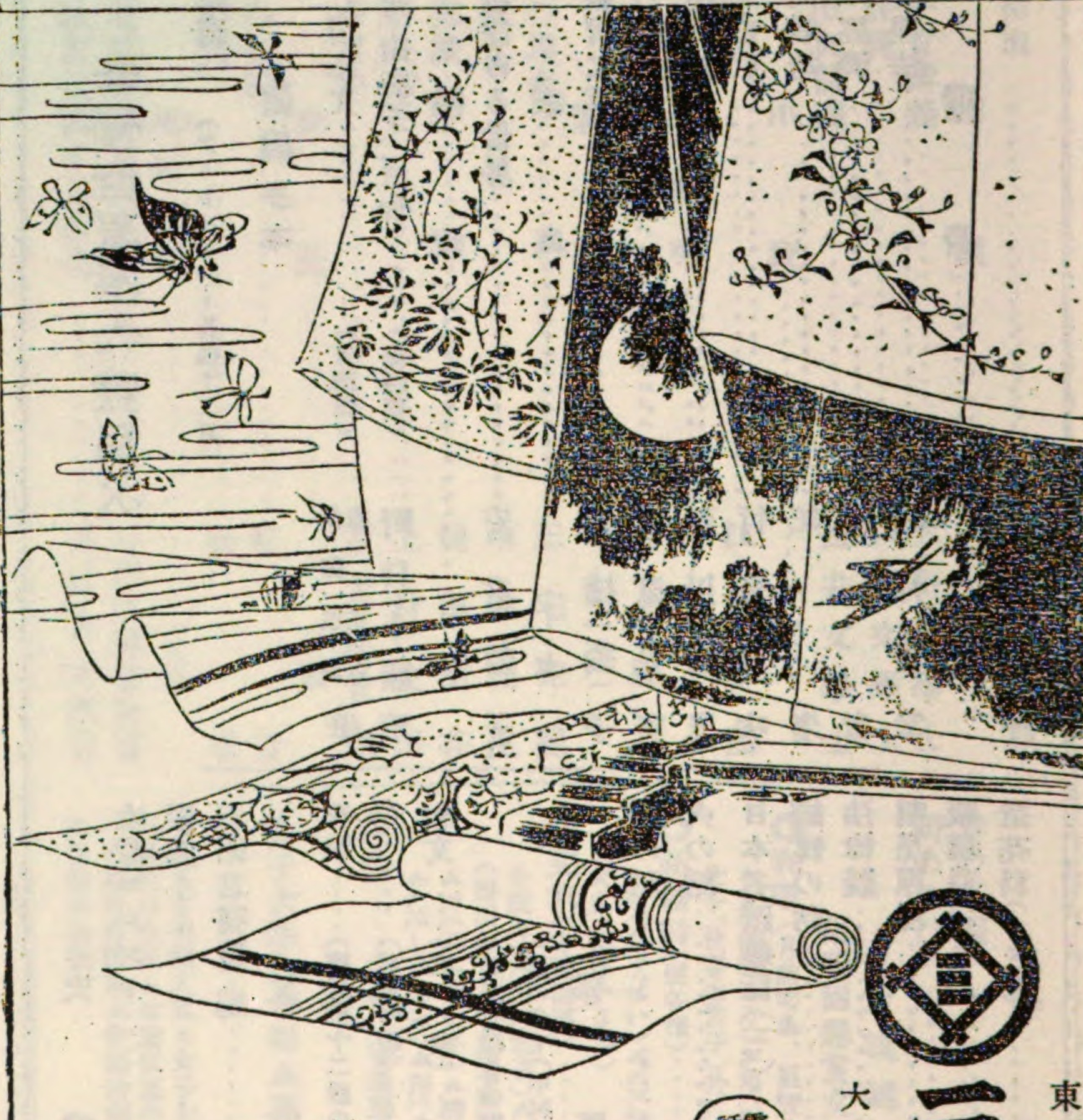
明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可

女學世界

第一巻第六號

口繪





女學世界第六號目次

大清國何如璋大人序文　大日本市川清流先生校正
大清國王治本大人選文　大日本高井思明先生編纂

三音四聲字貫

製本既成

全部五册　銅刻和綴

絹表紙一千六百四十枚印刷頗鮮明

正價桐函入金六圓八十錢（一貫目方）帙入金六圓（八百目方）……☞

豫約特賣（五月中前金にて御申込に限り）函入金五圓五十錢帙入金四圓八十錢（外に郵税を要す）

◉御注文凡て前金着金之順序に依り送本可仕候

三音とは何ぞ漢音呉音支那音なり、四聲とは何ぞ平上去入二百六韻なり。世に説文玉篇より康熙字典に至るまで舶來の字書多しと雖も初學其義を解せず、其訓の得がたきを苦しむ、是を以て高井先生拮据勉勵年を閲する五年、博く彼の諸書に就き假名を以て漢呉兩音を點し、之に加ふるに清音を以てし且つ之に訓を附し、本書を著す、總計字數四萬四千七百四十有一、又以て其完璧なるを知るに足るべし、字義を解し、文意に達せんとするの士は是非共一本を坐右に備へざるべからず、其印刷鮮明製本堅牢文士机上の寶册といふべし。

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館



伏見宮禎子女王殿下



英國皇帝の内親王ビクトリア並モード殿下



和蘭女皇陛下結婚式



（齋藤紫白氏撮影）

王子瀧の川（櫻花爛漫の景）

新刊廣告

（製本出來）

遞信省總務長官田健次郎君序

遞信省通信局長小松謙次郎君序文

遞信書記官
遞信省郵便電信學校教授　法學士田中次郎君著

通信法釋義

全壹冊洋裝菊判
總クロース金文字
入紙數七百五十二頁
正價金壹圓貳拾錢
郵稅金拾八錢

曩に發布せられたる諸般の**通信法律**は各個人及運送業者等に拘束を與ふること少なからず是に於てか本館之が註釋を實際的學理的素養ある著者に托して茲に本書を出版す**本書の特色は學理を充分に闡明し立法の精神を發揮し**一方には著者實務上の經驗に參酌し且つ**總論**に於て通信の概念と難問とを解釋し**各論**を章に分ちて**逐條**「其精神」「釋義」及び「解疑」を設け飽く迄**丁寧明確に理由を附し**たるにあり、世の**通信吏員**は勿論或は**運送業者學生**及**辯護士**等之を繙かば**特別專門の智識**を得るに於て蓋し尠なからざる利益を享くべきなり

注意

郵便局員に限り（證明を要す）**來る五月三十一日**までに御申込の分は特に**正價の貳割引を以て貴需に應じ可申候**（御注文は凡て前金の事）

博文館編輯局編纂 **郵便電信規則全書** 全壹冊洋裝袖珍 正價廿五錢 郵稅六錢

（甲の一）

發兌元 東京本町 博文館

正岡藝陽君著述

婦人の側面

定價貳拾錢
郵税金四錢

婦人とは如何なる者ぞ？、此千古未了の問題を解釋せんが爲に、最も興味ある二十有餘の項目を列ねて、縱論、横議、婦人の光明と闇黒との兩面を説明し盡くして、其眞相を明にせり。

掲載要目

處女●女學生●偽善の使途
戀人●醜業婦●妻、母、姑
結婚●理想の妻●女子の境遇
家庭●男女同權●市井の女子
美貌●牝鷄司晨●田園の少女
其他興味ある題目、八項

東京神田錦町二丁 新聲社

高等小説新刊

久保天随筆

小説 醉人の妻

『醉人の妻』は純清高潔の小説なり。紊亂せる家庭の讀物にあらず、又墮落せる學生の讀物にあらず『醉人の妻』は文學上特殊の地位に立ちて一種の異彩を放つものなり。淫靡を好む者の讀物にあらず、又趣味低き者の讀物にあらず。誠に其思想を清新にし其感情を高尚にするに於て『醉人の妻』は倫を當代に絶つ。温良なる家庭の讀物、淑女良妻賢母の讀物、學者教育家宗教家の必ず讀むべきものなり。

やまと綴
美麗裝本
定價金六十五錢
郵税金六錢

發兌 東京本郷區森川町一 育成會

●博文館諸雜誌 廣告大取次
東京市神田區千代田町二番地
博報堂

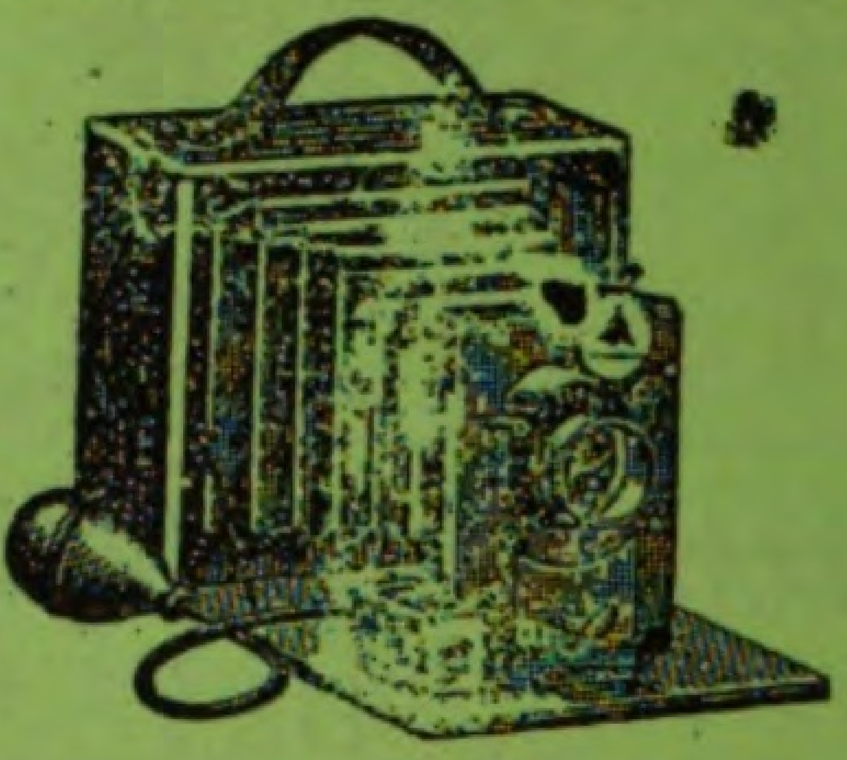
●京にしき
づゝう早なをし薬
定價一枚一錢送料二錢
この品はづゝう、めまい、すりきずに特効あり
東京本石町二丁目角 博愛堂

(甲の二)

寫眞器械

寫眞は趣味あり尠くも身躰を健全にす

素人用●營業用●舶來



如何なる素人も直に撮影し得る事保證す

開業を望む者懇切教授す

此技術は婦人の職業に適す

正價 壹組貳圓より參百圓迄種々

注文方 御來車の方實驗に供す

目錄書 郵券二錢で送る

遠國は小包にて送荷す

東京神田裏神保町六番地

寫眞及付屬品輸入製造

東京芙蓉館

治肺新法

附錄 肺病全快實歷談

此書は拙者肺病全快に付其實地經驗の方法を詳記したる物郵券三錢封入申込者に無代施本致べし

東京下谷上根岸町百十一
(電話本局一二一五九番)

藥學得業士 金澤巖

日本女禮式大全

坪谷善四郎君著

禮式は人間處世の大本、人品尊卑の因て分る所、殊に婦人にして禮なきは、最も卑しむべし、而して近來女子禮式の書少なからねど、古に偏して今の世に實行し難きあり新奇に走りて全く禮法に合はざるあり能く古今を折衷し、詳略の宜しきを得たるもの稀なり編者之を憂ひ日本女禮式を著はし頗る世上に好評を博し實に十三版を重ぬ、然れども今より之を見れば未だ不完全なるもの多し故に更に多年此道を研究し各般の事一々之を實驗に徵し或は專門家に質し本書を編し名けて大全さ云ふ平易の文章に多くの繪畫を挿み叮嚀周密を極めたり良妻賢母の友、貴女令孃婚姻の際必ず携へ玉ふべき良書なり。

洋裝全一冊正價七拾五錢 郵稅六錢

特製和裝全二冊蒔繪箱入 正價壹圓

目方四百匁

◯簡易複寫インキ

奏効確實 器械不要

蒟蒻版寒天版及び其他の印刷又は器械藥品等を要せず此のインキ一品にて簡便迅速座上立ごころに同一の文書圖畫數十百枚を印刷し得べし○即ち此インキを以て書したる原稿より直接他の白紙へ字痕を透徹する者にして一枚の原稿より凡七八十枚宛を寫し一瓶のインキにて原稿百數十枚を作り複寫壹萬餘枚を得るものなり

(使用法說明書を附す)

◉本品は既に諸官衙及郡區村役塲等の御用品たり

◉定價 二オンス 堅裝鑵入 送料共 金四拾錢 爲替神田郵便電信局郵券壹割增

發賣元 神田區末廣町三十八番地 中村屋商店

名流筆蹟



（坂正臣氏所藏）

故税所權掌侍　　北白川宮女王　　小池權掌侍

名流小照

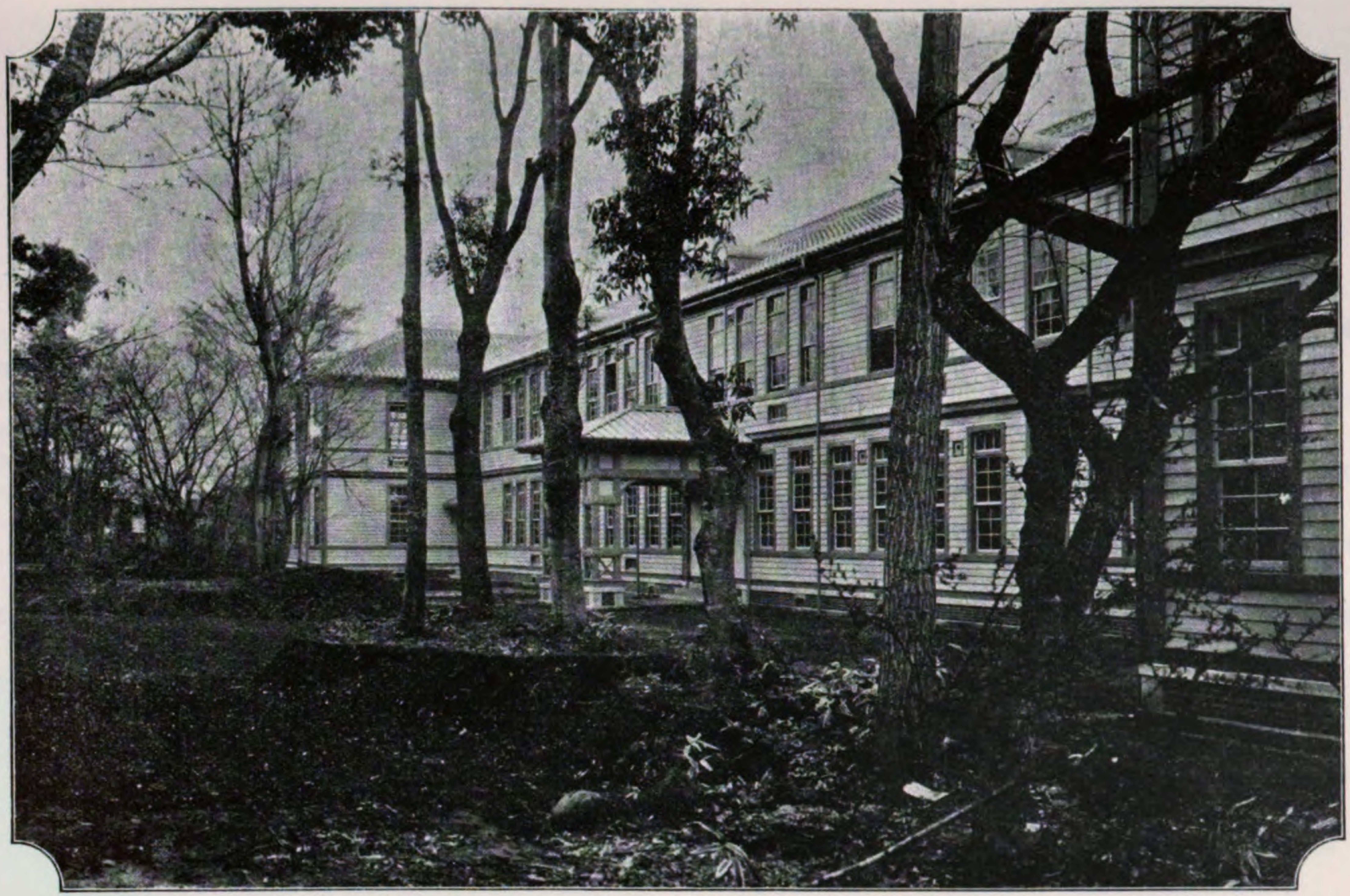


三輪田眞佐子刀自



野口小蘋女史

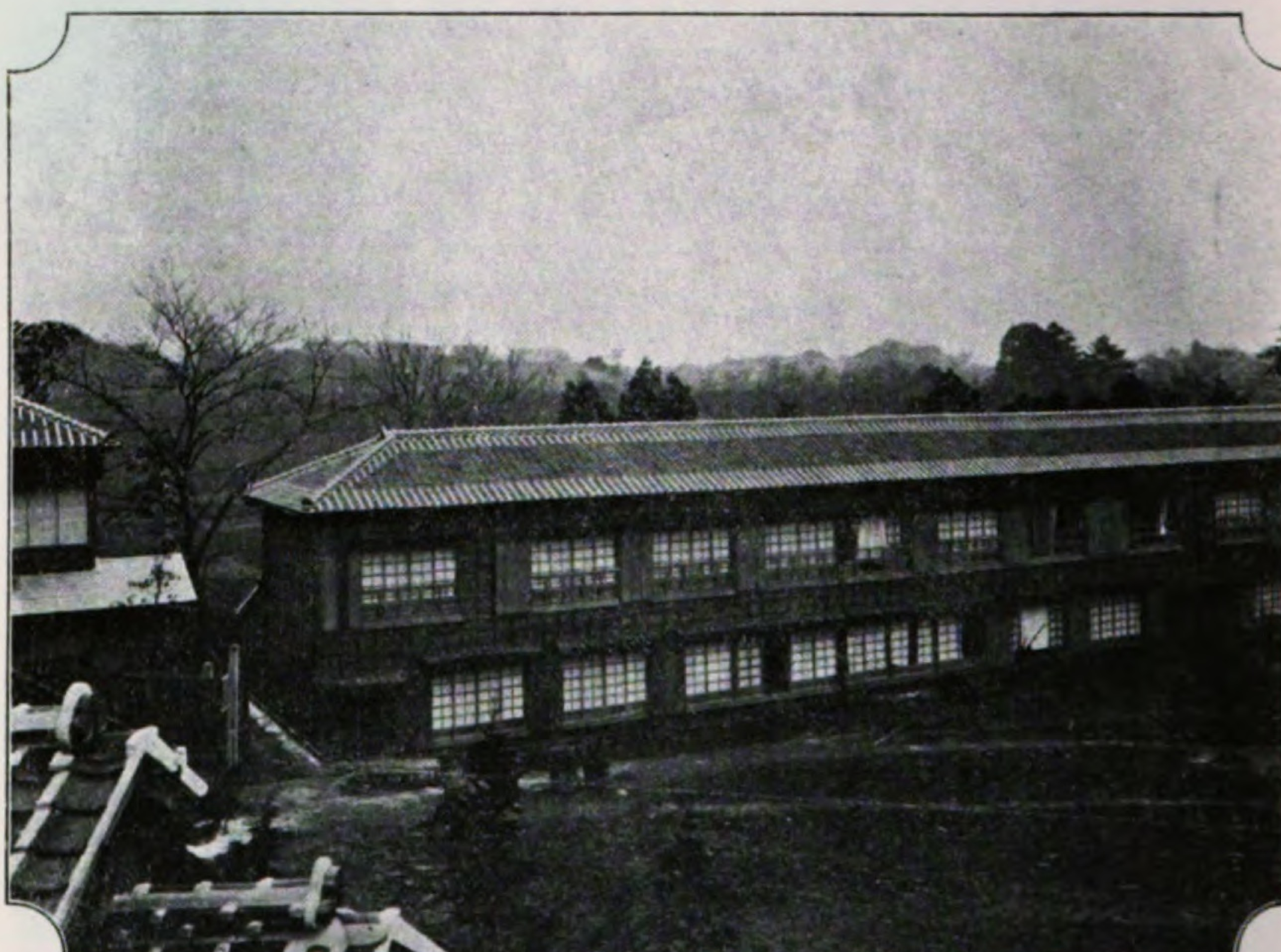
（齋藤紫白氏撮影）

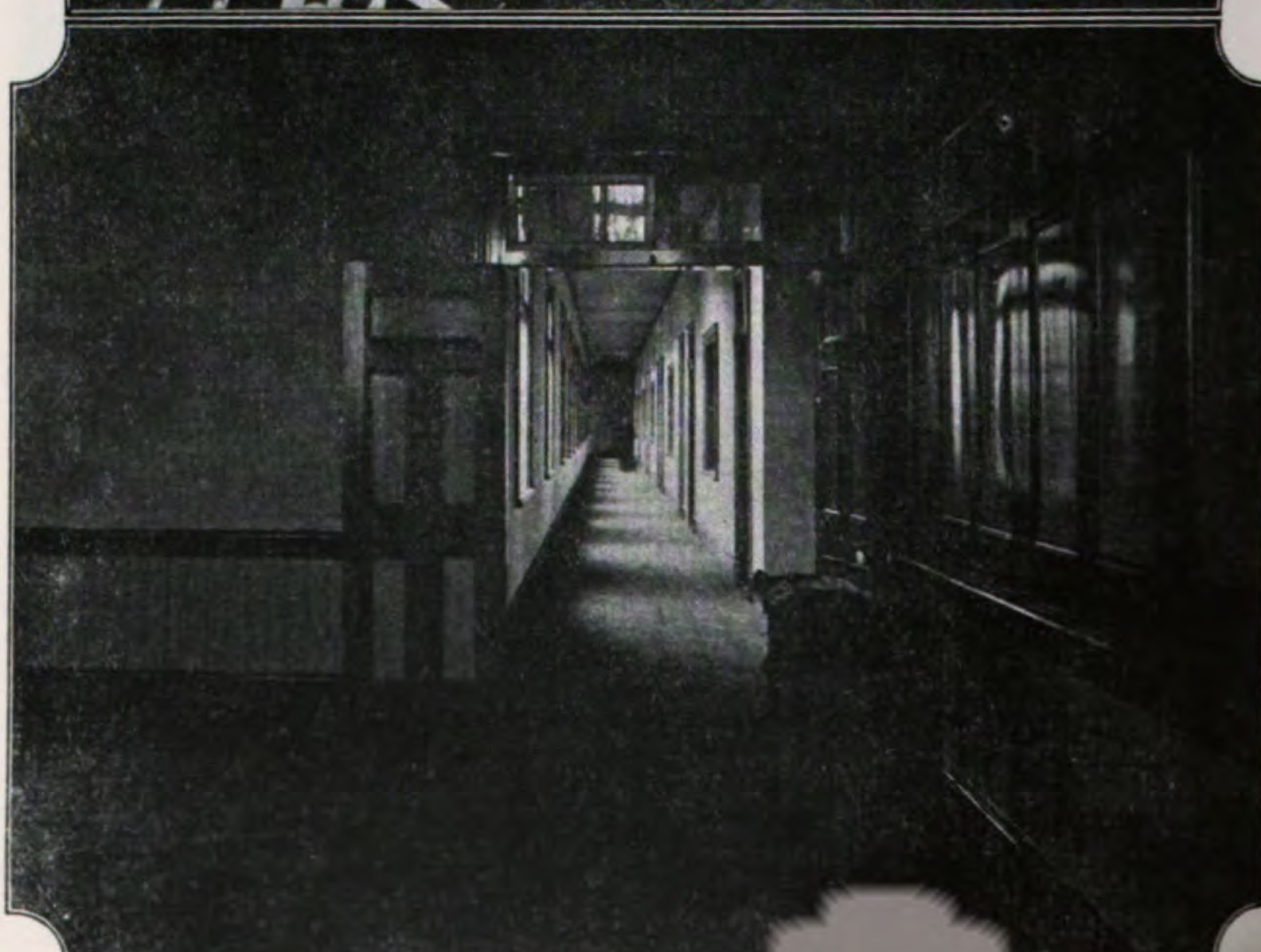


日本女子大學校（玄關前側面）

日本女子大學校（其二）

寄宿舍及校長室の一部





上の通廊

（齋藤紫白氏撮影）



堀切の菖蒲

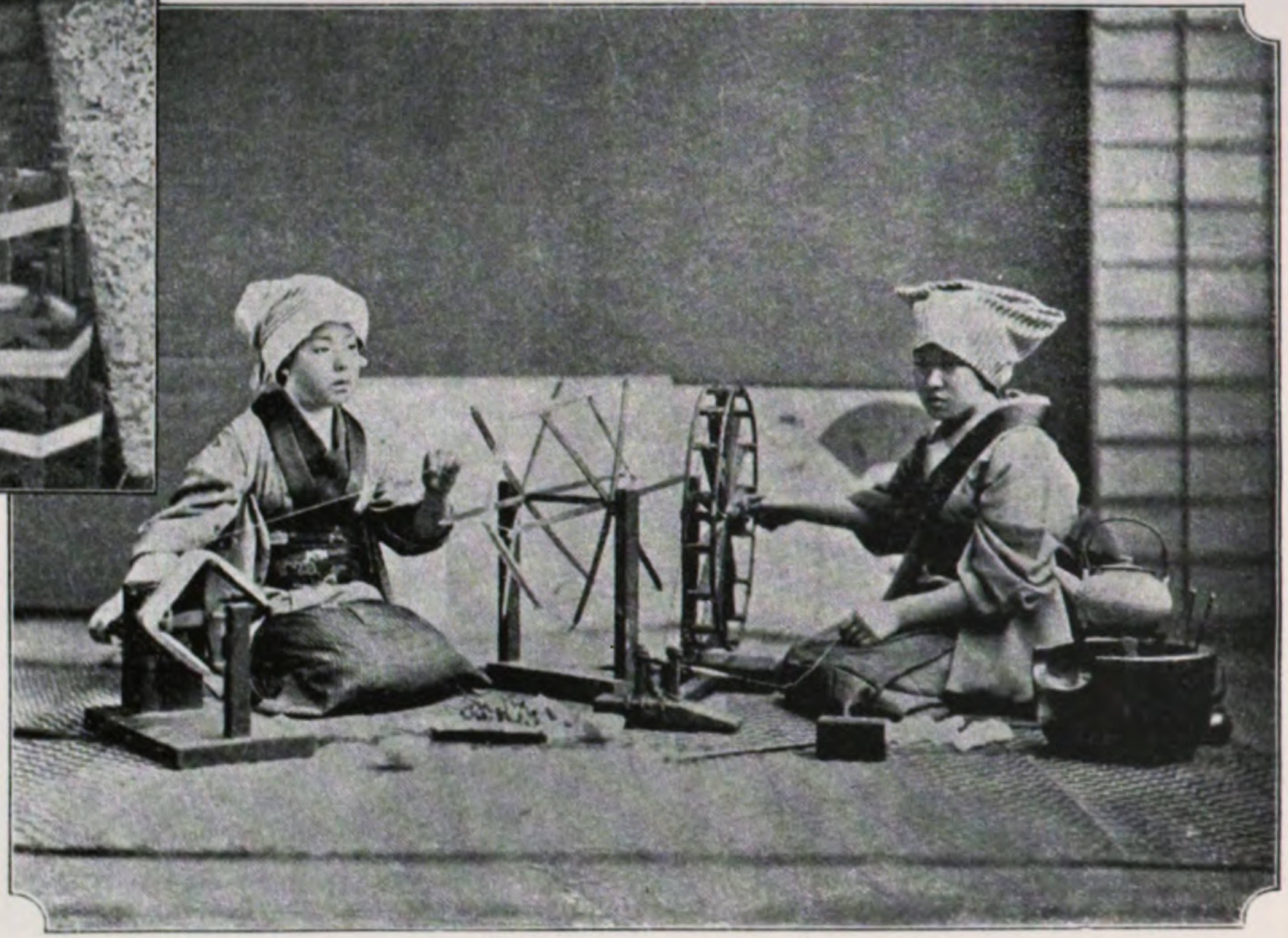


女子職業學校卒業生並職員

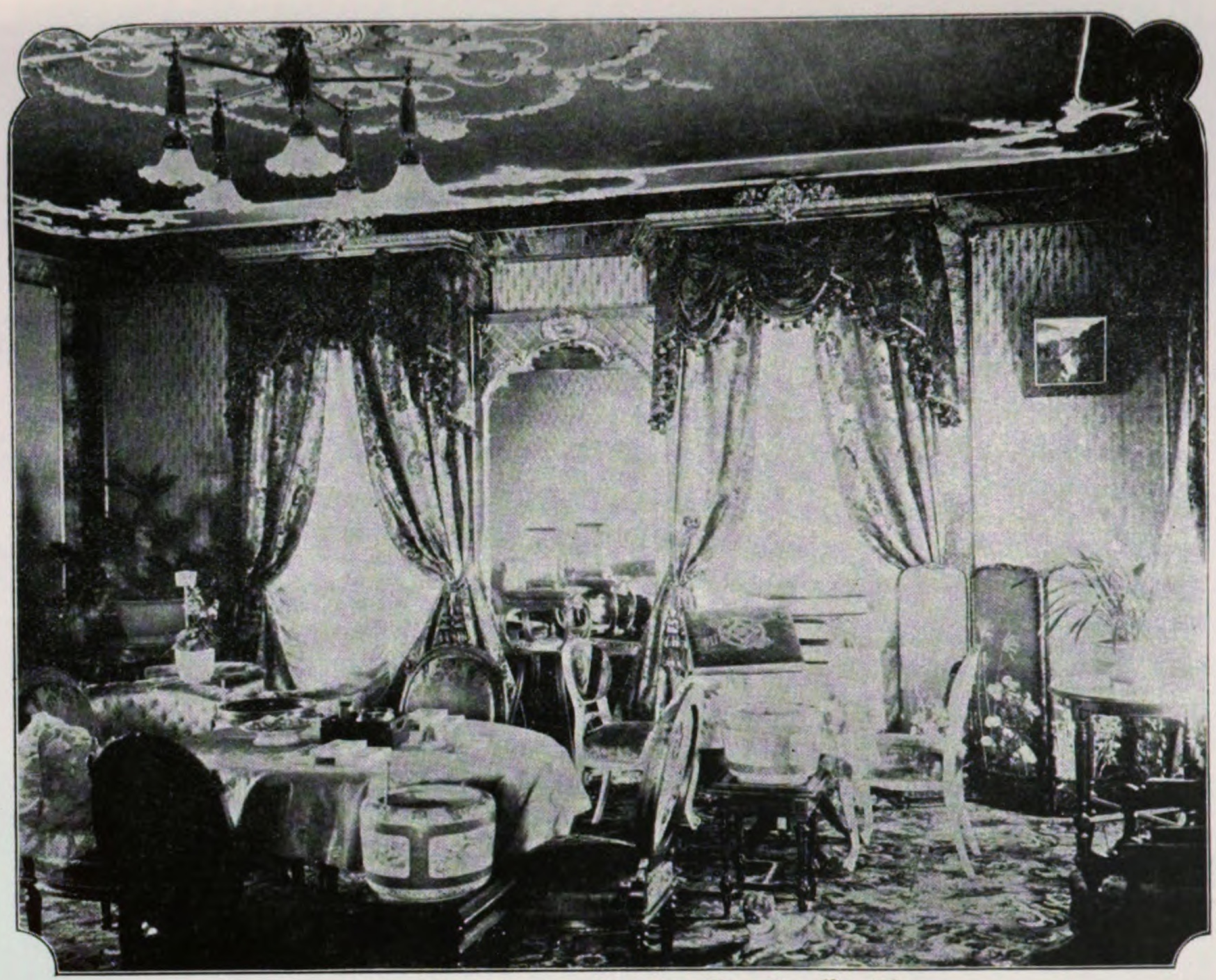
女子の職業



坐繰



紡車と框車



三井呉服店樓上休憩所

全部完成 家庭文庫

華族女學校學監正五位 下田歌子女史著

下田歌子女史、學東西を究め、一種超凡の新智識と新卓見を以て、現に子弟教育の道に從事せらる。本書各編皆な精實を極む、故に他の空論と異り上下を通じて、一般社會の家庭上に適用するは勿論なり。全部十二冊、皆な是れ著者が多年の實驗上より出でたるもの、如何に在來の家庭書類と、其趣を異にするかを驗せられよと云爾。

正價 一冊金三十五錢●三冊前金壹圓●六冊前金壹圓九拾錢●郵稅一冊六錢

第壹編●女子書翰文
第貳編●女子普通禮式
第參編●詠歌の栞
第四編●料理手引草
第五編●婦女家庭訓
第六編●母親の心得

全部十二冊 和裝菊判美本

第七編●家事要訣
第八編●女子手藝要訣
第九編●女子普道文典
第十編●女子作文の栞
第十一編●女子遊嬉の栞
第十二編●泰西所見家庭教育

新刊●泰西所見 第十二編……全壹冊 家庭教育

社會の汚隆は、家庭教育の良否に隨つて分れ、延きて邦國の盛衰に及ぶ。社會の改良を說く者、先づ家庭の改善より始めざる可らず。本書は多年女子教育に熱中せらるゝ著者が、歐米漫遊の際實地に調査したる家庭教育の狀況を叙し、以て模範を示されたる者、教育家社會學は勿論、何人も一讀を要すべき寶典なり。

發兌元 博文館

(その一)

著名學士大家執筆∴有名和洋畫伯挿繪

洋裝菊判美本

世界歷史譚

壹冊百頁餘

全部五拾冊∴每月壹回發行

第壹編……釋迦……高山文學士著 觀山畫
第貳編……孔子……吉國文學士著 不折畫
第三編……耶蘇……上田文學士著 不折畫
第四編……ビスマーク……笹川法學士著 默堂畫
第五編……ハンニバル……大町文學士著 寄山畫
第六編……マホメット……阪本文學士著 蓮藏畫
第七編……漢高祖……三浦文學士著 蓮藏畫
第八編……ナルソン……島田法學士著 蓮藏畫
第九編……岳飛……笹川文學士著 金秋畫
第拾編……コロンブス……桐生法學士著 白瀧畫
拾壹編……ガリバルヂー……岸崎法學士著 不折畫
拾貳編……彼得大帝……佐藤文學士著 春汀畫

第廿三編

孟子

法學士 永井惟直君著

宮川春汀君挿畫

全壹冊 洋裝

正價拾三錢 郵稅四錢

幼時慈母三遷の敎を享け長して諸侯を遊說し天下の道や德政道を闡明す其行性や英氣勃發論議風生眞是一代の豪儒なる哉本書之を傳して最も精妙を極む

拾三編……華聖頓……福山文學士著 古洞畫
拾四編……孔明……安藤法學士著 松亭畫
拾五編……ソクラテス……久保文學士著 不折畫
拾六編……グラットストン……近松法學士著 不折畫
拾七編……歷山大王……幸田文學士著 不折畫
拾八編……王陽明……白河文學士著 春汀畫
拾九編……ガーフヰルド……酒井文學士著 不折畫
貳拾編……デモステチス……十時文學士著 古洞畫
廿一編……シエクスピーア……中村法學士著 春汀畫
廿二編……那破翁……土井文學士著 不折畫
廿三編……孟子……永井法學士著 春汀畫

正價(金前) ●壹冊拾參錢●六冊七拾錢●拾貳冊壹圓參拾錢●廿四冊貳圓五拾錢●郵稅壹冊四錢

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

(乙の二)

著名文學大家執筆◎有名和洋畫伯挿畫

洋裝菊判美本

少年讀本

壹冊百頁餘

全部五拾冊◎毎月壹回發行

1 再版 高島秋帆　福地櫻痴君著（年方畫）
2 白河樂翁公　中邨秋香君著（永洗畫）
3 河井繼之助　戸川殘花君著（半古畫）
4 三條實美公　依田學海君著（廣業畫）
5 曲亭馬琴　饗庭篁村君著（觀山畫）
6 井伊掃部頭　巖谷小波君著（沖舟畫）
7 山田長政　遲塚麗水君著（春草畫）
8 錢屋五兵衛　桐生悠々君著（永洗畫）
9 春日局　岸上質軒君著（春草畫）
10 水戸烈公　野口珂北君著（大觀畫）
11 桐野利秋　春山鶴峯君著（象堂畫）
12 藤田東湖　大和田建樹君著（不折畫）
13 伊能忠敬　幸田露伴君著（永洗畫）
14 新井白石　武島羽衣君著（敬中畫）
15 水野越州　中村能軒君著（永興畫）

文學士 白川鯉洋君著（第三拾四編）

平野國臣

山中古洞君畫

正價拾三錢　郵稅四錢

東西に流寓 時務策を献靖し國事に盡瘁す百難に屈せず毅然として丈夫の行為を全ふす其壯烈節烈以て本冊に充溢せり

1 池大雅　田山花袋君著（觀山畫）
17 木內宗吾　松原廿三階堂君著（春汀畫）
18 西鄉隆盛　川崎紫山君著（年方畫）
19 阪本龍馬　坂崎紫瀾君著（年方畫）
20 横井小楠　大野酒竹君著（不折畫）
21 貝原益軒　石原笠堂君著（春汀畫）
22 渡邊華山　渡邊霞亭君著（年峯畫）
23 中濱萬次郎　石井研堂君著（耕溪畫）
24 近衞忠凞　勢多章之君著（不抵畫）
25 間宮倫宗　文學士 笹川臨風君著（古洞畫）
26 周布政之助　堺枯川君著（松亭畫）
27 荻生徂徠　內田魯庵君著（葦舟畫）
28 松平伊豆　森山吐虹君著（華邨畫）
29 中江藤樹　國府犀東君著（古洞畫）
30 島津齊彬　春山鶴峯君著（弘光畫）
31 橋本左內　法學士 桐生悠々君著（葦舟畫）
23 平野國臣　文學士 白河鯉洋君著（古洞畫）

正價　前金壹冊拾三錢◎六冊金七拾錢◎拾貳冊金壹圓三拾五錢◎郵稅壹冊に付四錢

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

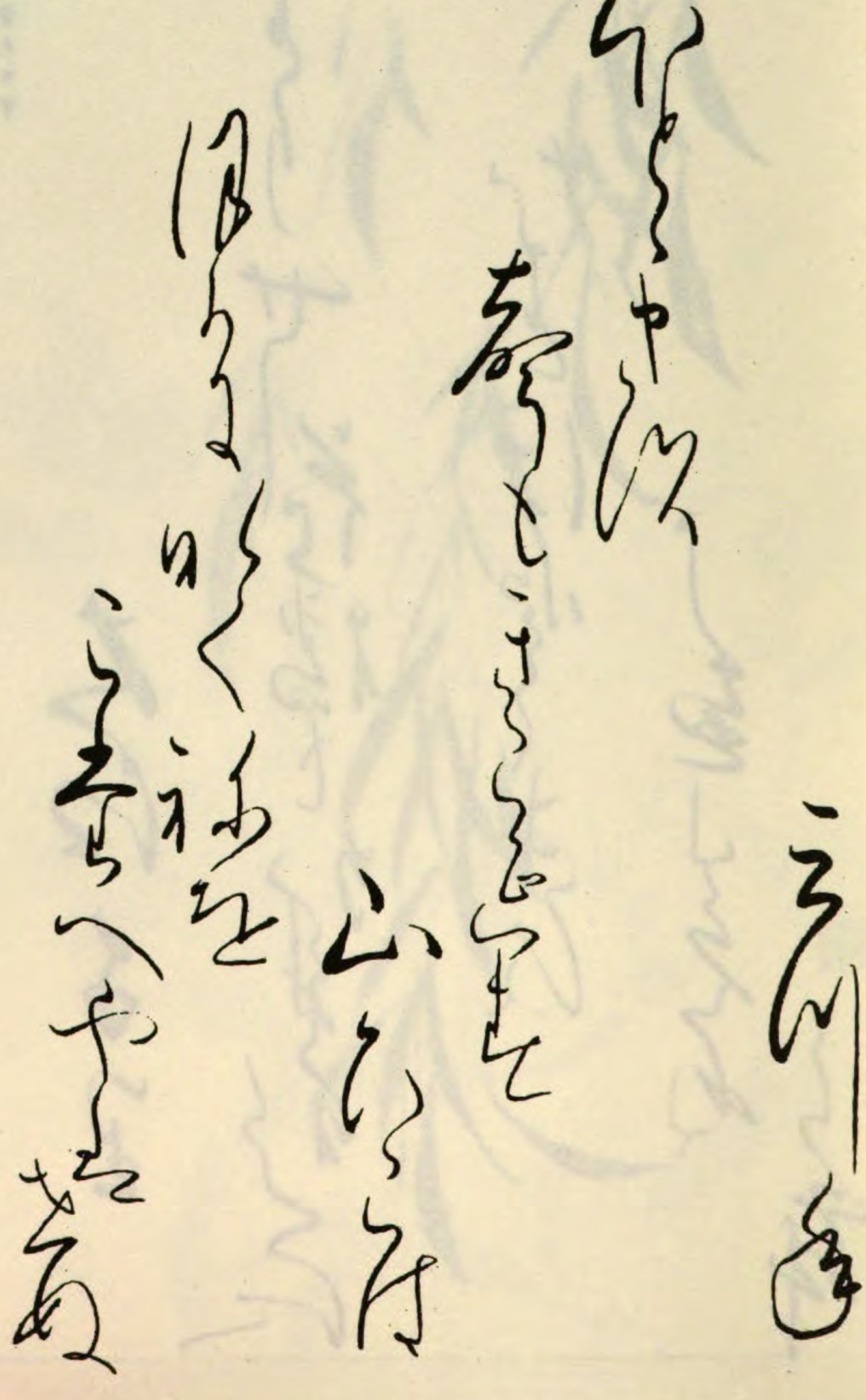
（乙の三）

坂正臣先生筆

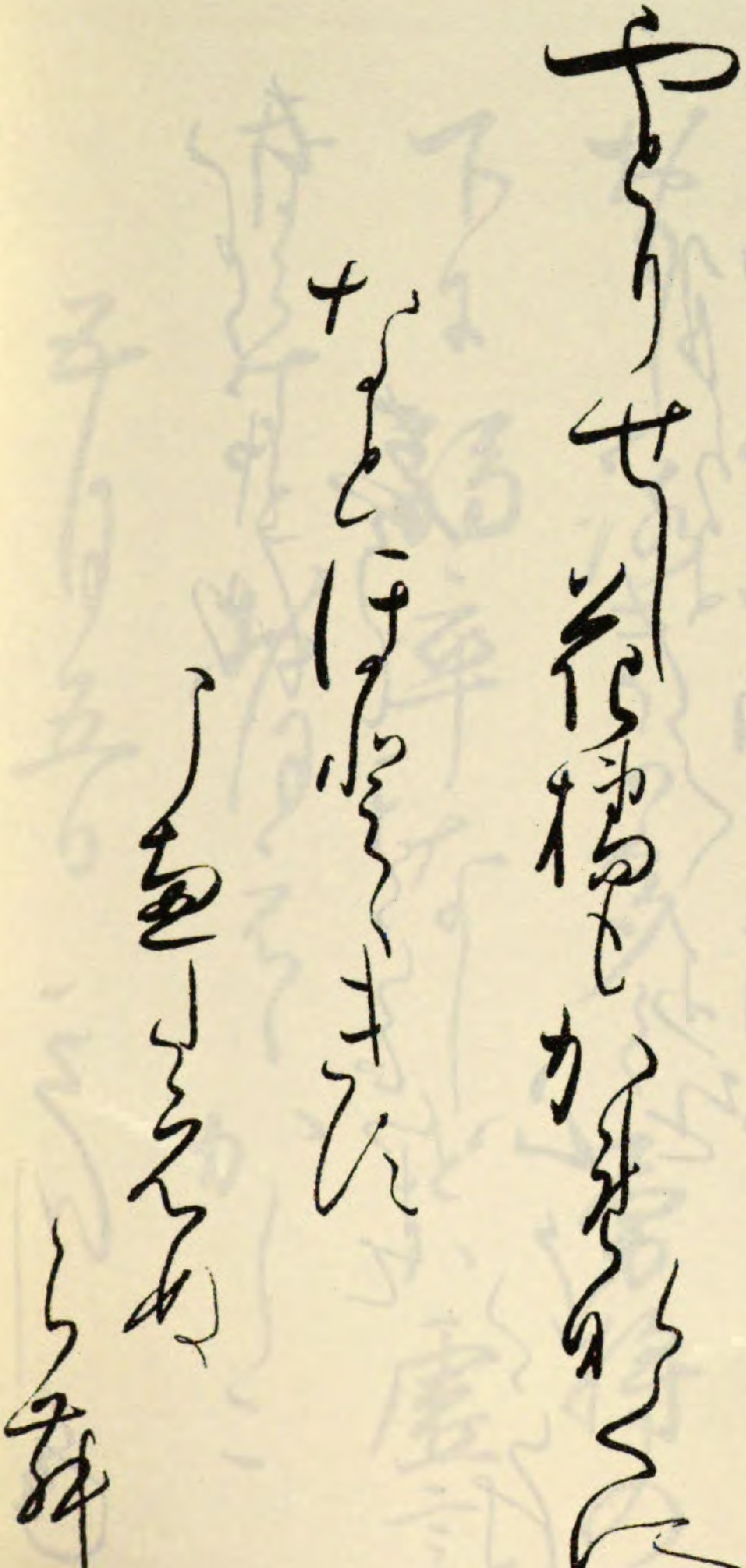
梅よ桜と騒ぎし内に
春も一場の夢と惜まれ
中に先のまゝに示さ
努たるをしの詞より
近刊乃佳柏園集より

よせて隠伝はり安く候
おのし浮きの多く勇将の
下に弱卒なしとハ虚言
なきことおもひ候かしこ
五月五日

多田親愛先生筆



多田親愛先生筆









野口小蘋女史筆

野口小蘋女史畫



大審院檢事
司法省參事官 法學士石渡敏一君校閲
堤一馬君編纂

（製本既成）

現行罰則大全

全一册洋裝
總クロース
紙數千四百頁
正價金貳圓
小包四百匁迄

來る五月卅一日迄に前金にて御申込之分に限り特價金壹圓七拾錢（外に郵税を要す）
御注文は凡て前金着金之順序に依り送本可仕候

本書は明治元年より三十四年までの現行に係る罰則法令を網羅し遺漏なきを期す、法令の數無量貳百數十、類を以て編み章を以て分ち配列順序其宜しきを得たり殊に編者は司法省民刑局に在りて刑事の事務を執る人而して其校閲には特に石渡先生を勞したれば其の正確なる事論を俟たず、職を司法、警察、奉ぜらるゝ諸君は勿論一般人士の坐右一本を缺くべからざるの良書なり

坪谷善四郎君著 ◉改正府縣制郡制釋義 全壹册洋裝 正價三拾錢 郵税六錢

鷲見金三郎君編纂 ◉改正府縣制郡制並關係法規 全壹册洋裝 正價五拾錢 郵税八錢

市岡正一君編纂 ◉改正戸籍事務取扱全書 全壹册洋裝 正價壹圓貳拾錢 郵税拾六錢

市岡正一君編纂 ◉改正市町村事務取扱全書 全壹册洋裝 正價八拾錢 郵税拾貳錢

（丙の一）

發兌元 東京 博文館

博文館發行内外紀行書類

文學士 大町桂月君著

一蓑一笠

全壹冊　洋裝袖珍　正價金參拾錢　郵税六錢

桂月先生筆に健にして脚に健也閑あれば則筆を載せ飄々として天下の名山大川に遊び興到りて筆を落せば筆に聲あり筆致或は雄壯或は優婉花の如き美詞となり詩意暢達の佳編となり千變萬化端倪すべからず此一篇先生の紀行を集む山や川や先生の才筆に驅られて紙表に躍動す以て臥遊に充つべし天下の才人必ず讀まざるべからず

饗庭篁村君著

旅硯

全壹冊　洋裝袖珍　正價金四十五錢　郵税六錢

本書目次
●月ヶ瀬紀行 ●二日の旅 ●さきがけ
●水戸の觀梅 ●おきつ藻 ●はこれ草
●布施詣 ●荒川堤の櫻 ●雨夜の月
●新西遊記 ●紅葉狩

大橋乙羽君著

増補十二版 千山萬水

全壹冊洋裝袖珍頗美本　正價金五十錢　郵税金拾錢

大橋乙羽君著

續千山萬水

全壹冊洋裝袖珍頗美本　正價金五拾錢　郵税金拾錢

田山花袋君著

南船北馬

全壹冊洋裝袖珍　正價金四拾錢　郵税金六錢

大橋乙羽君著

耶馬溪

全壹冊洋裝袖珍　正價金四拾錢　郵税金八錢

大橋乙羽君著

歐山米水

全壹冊洋裝特製頗美本　正價壹圓五拾錢　郵税金十錢

野崎左文君著（洋裝中判美本）

日本名勝地誌

全部拾貳冊●正價壹冊金參拾錢●六冊壹圓七拾五錢●拾貳冊參圓四拾錢●郵税壹冊八錢

全國を五畿八道及び琉球臺灣の十一大部に區別し更に國に分ち郡に分ちて各その都品名勝舊蹟を詳説せるもの名社巨刹の緣起沿革に至るまで縷述して漏らさず。毎編詳細の地圖及風景木版を※挿入して旅客漫遊者には缺くべからざる要書なり

既刊目次

(1)畿內 (2)東海道(上) (3)東海道(下) (4)東山道(上) (5)東山道(下) (6)山陽道 (7)北陸山陰道 (8)南海道 (10)北海道

續刊目次

(9)西海道 (11)琉球 (12)臺灣

發兌元　東京　博文館

石井研堂君編　有名畫伯挿繪

毎月刊行
理科十二ヶ月

全部拾二冊　毎月一回

正價　一冊金十錢○十二冊前金一圓十錢○郵稅一冊四錢ッヽ

四月既刊

四月　汐干狩

全壹冊　正價拾錢　郵稅二錢

退潮百丈遊艇千隻蛤をほり鰈を捕る漫々たる青海原は時ならぬ男女の遊戯場となれるもの是れ當今の潮干狩ならずや本書は學理上より種々魚介の話を面白く認め幼童婦女をして容易く其理を解せしむ

既刊目次

一月　新風船
二月　雪達磨
三月　花の錦

全部目次

一月　新風船　　二月　雪達磨
三月　花の錦　　四月　汐干狩
五月　植物園　　六月　昆蟲綱
七月　游泳臺　　八月　富士詣
九月　二百十日　十月　銃獵者
十一月　幻燈會　十二月　歸省錄

造花の寶庫を開き、天工の妙理を發し、殊に二十世紀の少年小女の理科思想を皷吹せんが爲めに、眼前の實例を骨子とし、平易の文章と精巧の繪畫とを筋肉とし、右の十二題の中に、其月其月に關する動植物理科等の初歩を記述する者即ちこれなり。實に未曾有の珍書破天荒の新案といふべし。希くは續々購讀を賜へ。

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

(丙の五)

文藝倶樂部
定期增刊

親ごゝろ

廣津柳浪作

第七卷 五月十五日發兌 第七號

●木板口繪極彩色……富岡永洗筆 ●寫眞銅版美人……數葉

本誌が始めて讀者に見えしより年を重ぬると玆に七年、明治文壇に其作品を貢献する者實に尠少ならず。然れ共未だ氣運の到らざる故を以て長編大作を江湖に紹介する能はざりしが、今や時は來れり、乃ち廣津柳浪氏が一大作『親ごゝろ』の一編を以て本誌第二次の增刊となす。落想警拔、行文流麗、房州鏡が浦に於ける漁父の親子が如何に怪々奇々の悲劇を演し來るべきか、獰悪の大漢、痴騃の小女、青松紅蘿の纒ふありて、人情世態神來の筆に依て描寫せらる、正に是れ明治文壇の一大奇觀。加ふるに中村不打氏が新警の意匠に成ける表紙、永洗氏が濃艶の筆に成る口繪、此の稀有大作を飾りて錦上の花たるべし、請ふ愛讀を賜へ。

正價	
金貮拾五錢	郵稅二錢五厘

博文館發行

（丙の八）

女學世界

明治三十四年五月五日發行

第壹巻 第六號

紀元二千五百六十一年 西暦一千九百一年（辛丑）

論説

女子の住める世界

女子高等師範學校敎諭 安井哲子

吾等は同じ世界の人類なれども、各自の住める世界は一様ならず。同じく家を東京に有する人々と雖も、實際に住める世界を見れば種々にして、或は日本國の一人として住める者あり。或は一層廣く世界の一人として住める者あり、或は又其住める世界を一町、一家に思ひ狹むる者もなきにあらず。而して吾人見界の廣狹は實に其住める世界の廣狹に依るも

のなり。

男子が外に働き、女子が内を治むるは各其天職にして、如何に此世が開け行くとも、男女が全く其職分を交換する時期の來らざるは必然なり。然れども内を治むる者は全く外に暗きを得ず、外に働く者は全く内と離るべからず。外の何たるを知らざる者如何にして其處に働く者に同情を表する事を得ん、内を省みざる者如何にして一家の幸福を助くる事を得んや。

英國の有名なる女學校の一として知られたる、ウヰカム、アベーの校長ミッスダヴ(Miss Dove)が嘗て女子の體育を奬勵せる論文中に曰く

『世に女子ほど獻身的なる者は非るべし。見よ、彼善良なる妻が、如何に其の身を忘れて、夫の爲めに盡せるかを。又彼親切なる母が、如何に其子の爲めに苦痛を喜べるかを。然り、彼等は實に其身を犧牲にして省みざる者なり。然れども、顧りて之を觀察せよ。彼等の中には往々彼等と同類の家族に對して同情を缺くのみならず、或は其存在をすら忘るゝ者あることを發見せん。故に予は是等の女子を批評して曰ん、彼等は或方面より見れば獻身的なれども、他の方面より見る時は寧自利的なりと』

人々の中或は此の說に同意し、或は同意せざる者あらん。然るに近來公德問題を說く者多く、中には女子を以て殊に此德を缺ける者なりとて反省を促す者あり。其果して然るや否やを茲に論ずるの必要あらざれども、今之を女史の說と思ひ合すときは大小覺る所なきを得ざるなり。

夫女子が己の家族に向ひて興味を感じ、熱心を茲に集むるは至當にして、決して批難すべき事に非ずと雖も、其極や全く外を忘るゝの恐あり。

英國の敎育家サー、ジェー、ジー、フィッチ(Sir J. G. Fitch)曾て曰へる事なり、『一家は愛の團結なり。而して己の幸福を吾愛する者の爲に獻ぐるは何の難き事かあらん。己れの知らざる者に同情し、己れの好まざる者の爲めに其幸福を割きてこそ初めて眞の德は養はるゝなれ』と。

スマイルス曰はずや、『德育を施こすべき初の場處は家庭にして、其次は學校、終は社會なり。而して吾人は必此三大學校を經過せざるべからず』と。家庭は固より必要なる場處なれども、人の德行を研くにはこれのみを以て滿足すべきにあらず。彼英國に於て幼年の男女を遠く學校に寄宿せしむるは必しも其母親が怠惰にして、兒童敎育の職分を盡さゞるが

故にあらず。可成兒女をして自治の精神を養はしめ、己れは或團體の一部にして、決して孤立する者にあらざる事を知らしめんとするにあり。而して寄宿學校の目的も亦實に此に存ず。或は又彼國に於て盛に男女に運動を奬勵するが如きも其目的亦之に外ならず。實に善良なる學校及寄宿舍は兒童に公德の思想を養成し、同情心を發揮せしむるに尤適當なる場處たらざるを得ざるなり。彼英國の學生が、如何に淡泊にして、且公平誠實なるかは以て其證となすに足るべし。狹隘なる社界にのみ生活する人は往々正義の何たるを解せずして同情心に乏しく、此世界は唯吾爲めにのみ存在するかの如き誤解をなすこと少からず。而して女子に於て一層此傾の多きを見る。

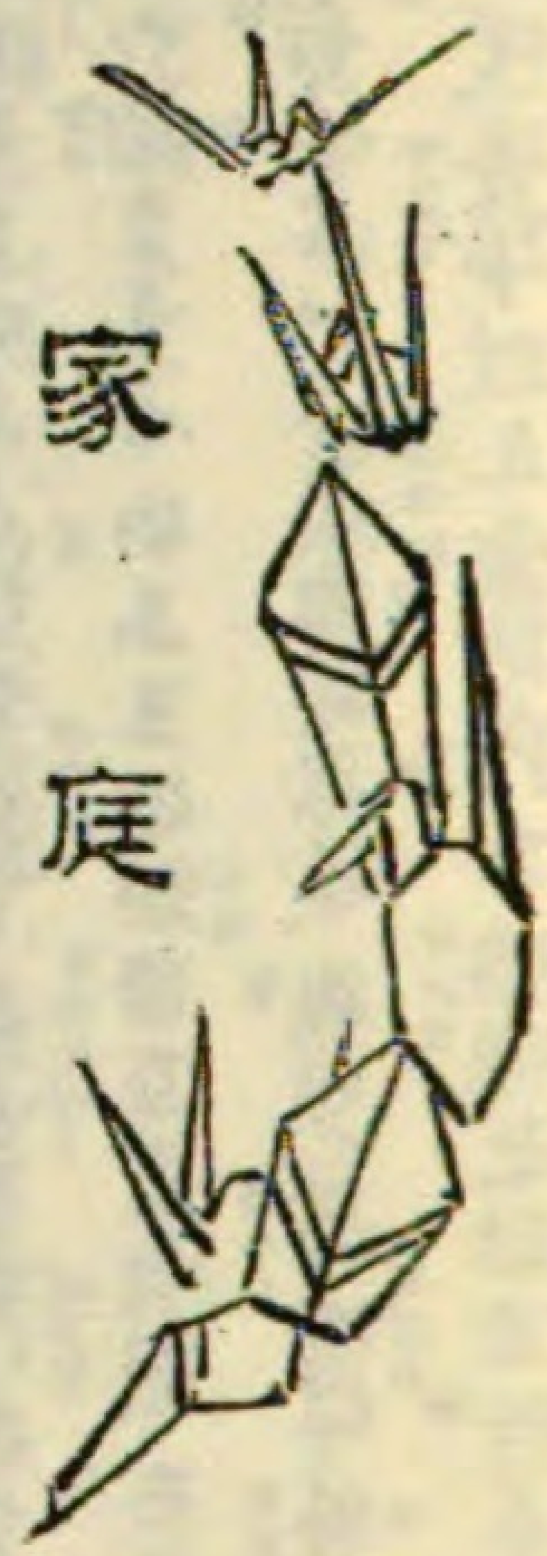
或人は曰く、彼は商人なり、交るべからず。是は勞働者なり、言を交ふべからずと。而して甚しきは同郷の人々のみ堅く結合して他郷の人を疎じ、一層之を狹くしては己れの尤愛する一二の友とのみ相結合して、他の友人を省みざる者すらなきに非ず。此の如きは決して社交動物たるの本分を全くする者にあらざるなり。英國にサンマー、ホリデイ、アツソシエイションなるものありて夏日海岸若くは山中に適當なる場處を撰び、農、商、工、身分の何たるを問はず、平生職業に繁忙なる者にして、一週間以上の靜養を望む者の爲めに、有志

の貴女紳士之れが周旋の勞を取り、或遇間是等の人々と共に起臥寢食し、或は共に近傍の古蹟を尋ねて其れが說明をなし、或は共に動植物を採集して之れが智識を與ふる等其親切至らざる所なし。其の結果能く傲慢、粗野なりし者を變じて、溫順、禮儀なる者となさしめ、男女相助け、貴賤相親しみ其同情の濃やかなる實に人をして感嘆に堪へざらしむ。嗚呼、此の如くにして初めて吾人は我と人と相待ちて組成せられたる此社會の眞相を會得する事を得ん。

女子が男子よりも一層多く家庭に其訓練を受くべきは其天職に依りても明なり。然れども餘り狹隘なる社會にのみ生活せしむるの結果は往々にして、其度量を狹少にし、此困難なる社界に立ちて適當に其身を處置するの方法を知らず、終には不幸に其一生を送らしむることあり。彼可憐なる少女が偶父母の許を辭して他人に接するや、世の無情を悲しみて、病を釀し、或は些細の過失に其身を殺して舅姑の譴責を免れんとするの類は新聞紙上に多く見る所なり。人口の輕薄固より咎むべしと雖も、世の辛酸の幾分を經驗せる者は幾分か之に應ずるの覺悟あり。又忍耐の修練あり、故に一旦不幸に會するも妄りに貴重なる身體を損するの愚をなさず、却りて之れが刺激に依りて、己れを強くすることを得るなり。

ドクター、デュークス云へる事あり。『年頃の女子にして往々神經的の病に罹り、これが爲に學問を中途に廢する者あるは、彼等身體の發育尤も速かなる十一歲乃至十四五歲の時期に於て、餘り偏狹なる壓制的敎育をなしゝに依る』と。一家の和合を缺ける家庭に育ちし少女が年頃に至りて、或は高尙なる敎育を受くるに當り、精神的の病に罹り、或は困難なる處世問題に心力を勞して神經の衰弱を來すが如きは其例少なからず。實に恐るべけんや。されば女子をして其度量を大ならしめ、其見識を高からしめ、其公德の何たるを解せしめんとせば、宜しく家庭の狹隘なる世界にのみ幽閉する事なく、妄りに之を抑制して獨り感情のみを過敏ならしむる事なく、能く家庭なる本領中は在りて、而も其周圍の智識に暗からず、可成見界を廣めて我と人との關係を會得せしむる事を勉めざるべからず。彼己の本分を忘れて唯快樂を外に求めん事をのみ勉むる者は固り稱すべきに非らざれども、世も亦女子の爲めに境壁を切開きて可成其見界を廣め、此世の眞相を覺らしむるは獨り女子の爲のみならず、これに依りて管理せらるゝ一家の幸福を增進し進んで其家族の結合團體たる一國の進步に影響する事、實に大なるべし。

家庭



家庭教育に就て（承前）

棚橋絢子述

それで、私は先日或會でも話ました如く、獨逸や亞米利加などにては、女子が大層多いさうですから、嫁に參りますものが餘りまして、餘儀なく學問技藝を修めて、教師または或方面の業務を取て、獨立自營の道を行なはなければならぬといふことになる、彼の國々はさういふ國風であるから、女子の自分生活して居るものが、多いといふことを聞きました。殊に獨逸國抔にては嫁に參りまするには、相應の財産を持つて行かなければならぬ樣になつて居るさうです、其相應の財産を持つて居る家にしても、家族に兄弟姉妹が多かつたりすると、思ふやうに財産を持つて行かれない、そこで自然と自分の財産より下つた所に嫁さなければならぬといふことになる、よい所へ行くことは誰れも望むことであるけれども、自分の家に相應の財産が有りながら、自分の家の財産より下つた所へ行くといふことであるから、先づ獨立自營の方に趣くのである。

故にその家に居る中に、各々其所長の業務を修練して、生涯獨身で居つても生活に差支ないやうに致し、若し其中に良縁があつたならば、嫁ぐといふことにしても、どちらへ罷り間違つても自分が獨身で以て自營の道を立て、立派に生活し行くといふ丈のことをやつて居りますから極安心であります、そこで學問して教師となり、或は商法家の番頭さんと爲り、或はお醫者さんとなり、或は機械師となつたりする譯でありました、皆餘儀ない所から致すといふのであります、丁度花に喩へて申せば、彼國の女子は室咲きの花のやうなものである、天然自然に咲いたものでなくして、餘儀なく咲かせられたものである、されど室咲きの花は色香がない、天然に咲いた花は麗はしくして何となう生々して居る、丁

度彼國の婦人の獨立して生活して居るといふことは、無據さういふことになつたものであるから、獨立自營の名は立派だが、その實價値がないのです、矢張婦人は婦人の業務を執るが眞の價値であります。尤も日本では女子の方が少いからして、嫁に行くことが出來ます、殊に日本では古より氏無うして玉の輿といふことがあつて、女子は氏が無くても玉の輿に乘れるのであるから、さう何も獨立して行かなくても、學問して心術を練り藝能を磨き、よき價を得さへすれば、自ら玉の輿にも乘られる時期至るべし、どうしても日本の國情では格別に、女子としては一家を治めるといふことを以て、先づ第一の方針としなければならぬと思ひます、女子の嫁に行くといふことは元より極つて居るのであります、男子の方は外に勤め働いて、女子の方け家で働かなければならぬといふとは當然であります、さうしなければ一家の治まりといふものが着きませぬ、それ故に分業して行くといふことになる、先づ男子は外に出て働く方針で、女子は一家の内で整理をして行くといふ方針を執る、是れその各々其方針に從つての學問が必要であります、それで家に居つて整理を致しまするに、種々の學藝を實行せねばならぬ、また子供の教育をしまするにも、自分の教育が不充分であるといふと、矢張子供の教育が不充分となるのでありますから、自分も教育を受けまして相應の道理を解釋することが出來る樣になつて居らぬといふと、一家を治めて行くといふことが出來ない、女子には學問は仕ないでも宜いやうにいふ人もありまするけれども、女子の學問が足らぬといふと、其方針が間違つて飛んだことが出來るやうになる、それであるから、一家の事を整理しまして餘暇が有つたならば、益々學んで怠らぬやうにしなければならぬ、所謂餘力あれば以て文を學ぶといふことが肝要で有ります。

一軒の家といふものは忙しいもので、是れ日も足らないやうなものであるけれども、男子の方でも開明の世國家多端の秋外部の業務に追れ、其職業に從事し内部を顧るに暇なかるべし、故に女子は一家の事を處理し

て行かなければなりませぬ、さういふ樣に自分の行る丈の仕事をやつて倘餘暇が有つたらば、必ず日本の文化を進めて行くといふことに致さなければならない、嫁して敎師をしたり、又た一家の敎育を行つて小供の世話をして行くといふことは、隨分六ヶ敷ものであつて、一家のことを整理して行きましては、中々餘裕の地は澤山にありませぬ、一家を治むることが出來なければ、完全に自分の任務を盡すといふ資格が有りませぬ、或人はさういふことは昔の考であると云ひます、相應の金の取れることを止めて、家で下女の頭をして居るといふことは可愛想ではないか、それよりか、机に凭たれて大きい顏をして敎へて居れば骨も折れず、都合もよきにといひますが、私はさうではなからうと思ひます、家の經濟を能く治むるといふことは、獨り一家の經濟のみならず、又た一國の經濟に關することである、縱令三十圓の月給を取りましても、それで足りるといふことには行きませぬ、其中の二十五圓は使つて仕舞ふ、交際や、衣服や、車賃や、その他色々の事に二十五圓は大方費つて仕舞つて、殘る所は五圓位でありませう、是では下女も何も置けませぬ、矢張下女を三人置くべき所も二人にし、二人なれば一人にして自ら事を執る方が、餘程經濟上もよく都合もよきことゝなりと考へられます。

外國では保姆といふやうなものが有りまして、此者は學問も出來て居りまして、一家の子供を是れに任せて置くのである、併し日本の今日の下女といふものは、未だ自分の大切の子供を任して置くといふことは出來ぬ、さりとて家事多端の母親が保姆の如く子供にのみ打懸る譯にも行かず、そこで古へ子を替て敎ゆるといふこともあり、又た父子善を責ずともあるは、一は行屆かざるを憂ひ、一は親子の親しみを破るの恐あればなり、故に先學校に出して敎師の敎を受けしめ、歸れば母たる者己れが學び得し事を實行し、知らず／＼の間に、其薰陶を受けしめ、內外より子女をして善良に導き、世に有益なる人物を造り出すを熱心にしたらば、その益僅少ならずと思ひます。

又先頃私が弘道會で安樂法といふことに就いて、話しをしたことがある、安樂といへば只安心して居るやうに思はれるが、さういふ譯ではない、身體を充分に働かして、間思雜慮を除き虚心平氣で、物に應じては工夫をこらし、既往の過を悔ひず將來の功を求めず、一心不亂に今日を渡つて行くのが自ら安樂法であります、學問のことにしても、今日世間の事情に後れぬやう益々進んで行かなければならぬが、其中に又心の安心といふことを知らなければならぬと思ふのである、凡ての人が世の中を安樂に行かうと思ふのは、誰しも望む所である、若い時に色々と骨を折つて置くのは、老人になつて安樂に暮さうといふよりすることである、金を貯めて置くのも、子供を育つるのも、皆年を取つてから働けぬやうになるゆゑ、若い時に能く働いて財産を作つて、充分に將來の計畫をするか、又は陰德を積み慈善を爲し、其德によりて自然天の助けを受くる樣にして置かなければなりませぬ、心を安樂に爲せるといふことは、即ち自分の義務を盡しますことで、自分の爲すべきことは正確と務めることである、それに唯人を損害して置いて自分ではかり餘計な儲けをしやうといふのは、或は一時思ふ圖に當らぬには限りますまいけれども、人を損害しておいて自分で善い者にならうとしても、さう行くものではない、人を落せば穴二つで詰り自分の身にかゝつて來ます、世には隨分相當の位置の有る人でありましても、人を排擠して其人の位置をとつてそしらぬ顏して居る人が有ります、そりや固より直接に占位たのでもありますまいが、何程遠回りにして占位ましても、自身の良心で咎めるからして、人が一向知らぬことでも、それに就ては言譯のやうなことを言ふのである、他の人の方では何とも言はないけれども、當人の方では、問ふに落ちずに語たるに落つるやうなことを言ふのである、これを局外の者から見ると、可笑しい樣なことであります、實に德義上から言ひましても、不德義のことであらうと思ふ、口では德義のことや隨分立派なことを言つて居りますけれども、其德義に就ては全く缺けて居る所のものがあります、さういふ人

は、矢張自分から咎めると見えて、其當人に逢へば言譯だら〳〵して居りますが、さういふ風なことは決して安樂の法ではあるまいかと思ひます、安樂の法といふものは、仰いで天に愧ぢず、俯して地に耻ぢずといふ樣でなければなりません、それには、第一に人に讓るといふことがなければならぬ、丁度狹き道路を通りまする時に、他人の通りまする一歩だけを讓つてやるといふ樣にし、又た甘い物を食するにも、七分位にして殘りの三分は人に與へてやるといふ樣にするのが至極安樂の法であると古人もいはれました、此世に處するには安樂法が最も必要であるといふことを、先頃一寸御話しました通り、人に讓つて置けば後で自分の氣持も宜いものである。

食事に喩へて見ても其通りで、餘り澤山食しまするといふと宜けませぬ、美味であるからといつて、充分に食べますといふと、後で氣持が惡いものである、少し控へ目にして置きますれば、氣持の宜いものであります、其控へるといふことが即ち其安樂法であるのでありま

す、他の言葉で言へば安身立命といふやうなものである、何だか佛臭いやうであるが決してさうでない、爲すべきことを爲さず、遊んで居つて、それで心の安樂を求めやうといふことは宜しくない考へである、彼の昔の言葉に、陰德あれば陽報ありといふことがありますが、假令其陽報はなくつても陰德を爲せば、心自然に安樂に居るものであります、內心には誰でも天然自然に眞心といふものを備つて居るものでありますから、惡しきことを爲す時は其眞心が暗まされてあるのである、孟子の曰はれた如く、嬰兒の方さに井に陷らんとする時に當ては、どんな盜賊でも其子を見て可愛想であると思つて援けぬものはない、屹度助けたいといふ觀念を起すものであります、盜賊抔は人を殺すといふやうなことを行つて居ても、さういふ場合には憐れな心を起すものであります、必竟盜賊の人を殺すといふのも、人を殺すといふのが眞の目的でない、他人の金を强奪して其慾を充たして愉快を取らうといふのが主意であります、それを此方で奪られてはならぬといつて抵抗致

しますから、盜賊の方では邪魔になるから殺すといふことになるのである、斯ういふことを爲すものは、眞心が一時慾の爲めに蔽はれて居るのであるが、彼の嬰兒を援けんとするの念慮が起るものは如何なるものでも眞心は存在して到底消滅するものではありませぬからです、况んや毎常善い行を爲して自分の務むべきことを行つて行くなれば、眞心はます〳〵發起して氣の餒るといふことはないのであります、是れ即ち安樂法であつて、其務むべきことを爲さないので、安樂法を得たいといふことは、到底出來得べきものでないと思ひます、以上は只家庭敎育上感じたことだけを述べたので、其話の秩序の正しからず、又た蕪雜を免がれぬのは、諸孃の御諒察を願ひます、（完）

小兒に與ふるお茶とお菓子

醫科大學　石原笠軒

小供が行儀をよくせし時の御褒美として、或は、爾後御行儀をよくせよとて賜はる所の御菓子ほど、小供に取りて嬉しきものは無かるべし、實に御菓子は小供の爲めには一種の生命也、又、家庭敎育上甚だ關係ある物品と云はざるべからず、仍て、聊かこれにつきて注意をなすは、吾人の喜ぶ所なり、尙ほ序にお茶の事をも述ぶべし、これまた、普通に、お菓子と相離るべからざるものなればなり、

幼兒の生齒期の初まりは平均生後七ケ月頃よりとす、齒のそろふは、これ、小兒が乳を廢して、なみの食物に移るべきしるしなり、此際、重湯とか、粥とか、卵とか、其他可成消化し易き食物より與へ始むる事等は別問題に屬すれば、此處には云はず、

然るに、吾々の處へ、小兒を伴れ參り診療を乞ふ者の內に、『二三日來此兒の氣分勝れず、食氣も少く、夜分の睡がわるく、或は啼泣こと多く、顏色もあしく、大便は綠色を帶び、且つ平常と異れる、一種の臭氣を帶べりなど訴ふるものあり、能く、聞糾すに、別段これと云ふ食物上の不攝生をなさしめしことなし、尙よく〳〵たゞす

時は、『二三日前に「ビスケット」を與へたりなど答ふ、此消化障害は果して何より起りしや、「ビスケット」は比較的消化し易き菓子と稱す、砂糖分も比較的に少量を含有するのみ、然るに、如此もの、數多く接するを常とす、依て、思ふに普通、市内の菓子店に鬻ぐ「ビスケット」には、隨分粗造の物あり、しかも、世間の母親たちは、「ビスケット」とし云へば、何れも消化し易きものなりと速解して、これを與へ、爲めに、如斯消化障害を起すものならむ、

右は、單に一例を擧げしのみなり、されども是に類する場合は、日常吾人兒科醫が屡々經驗する事なり、ゆゑに、此一例を導火線として世の母親たる人々の注意を乞はんとす、

菓子の事に就きては、吾邦では、未だ、調査研究が届いて居らざるなり、誠に、耻かしきことなれども、醫學者には、また、そこまでの餘裕無きなり、夫故に、確かにかく〳〵なりとは云ふこと能はざれども、大抵の處を御話すべし、

菓子製造人は、所謂公德問題を解せぬやら、常に製造する品物が、同一の品にても、時によりて、良きことゝ、粗なることゝあり、西洋菓子と云へば、日本出來のものにても大抵品よくして、消化し易きものなりと考ふべからず、東京にても、眞に結構なる西洋菓子で、消化し易く、小兒に與へてよきものを製造するは、僅かの家のみなり、予は今此處に一々何處の何がよしと明示するだけの實際研究は未だ届きませず故に、其處までは、言ひ兼ぬるなり、菓子を買求める人は、右の點を心得られよ、殊に、同じ樣なる「ビスケット」にても代價の高下によりて品に良否あり、これは「ビスケット」に限らざれども、若し、愛兒に與ふるならば、態々、信用ある店にゆき、新らしく製造せるもので、代價の高き品を買求めらるべし、乾蒸製の菓子類は、鑵に入りたるまゝに買求むべし、可成なれば、舶來のものをよしとす、菓子其物が、店に列べられ、空氣にさらされ居ては不可なり、悪きものを與ふるは、寧ろ與へざるの害無きに如かじ

幼兒に與へてよき菓子は、幼兒の胃腸は、固硬のもの

の慣れざるを以て、胃に入りて、容易に且つ早くこわれるものならざるべからず、又勿論、砂糖分の可成少きを可とす、鳩麥煎餅、上等の「カルヽス」煑餅、近頃の「ウエーファース」、上等の「ビスケット」類などよからむ、

長じて、歩行も充分出來、運動も活潑になり、食物も、普通消化し易きものなれば、なんでも食する頃に至れば、菓子も亦必ずしも右の如きものに限りしに非ず、幼稚園にもゆき、尋常小學校にも通ふ頃ならば、餅類、團子の類、固きもの、脂肪分多きもの、砂糖分多きもの等を除くのほかは、大抵差支なかるべし、

菓子は、一日何度位與へてよきや、と云ふに度々與ふるは不可なること云ふ迄も無し、午前、午後の兩度を限りとすべし、可成なれば午後一度としたし、時刻は食前に與ふれば、食物の味がまづく、また、食物を充分に食せざる故、食後一時間位ならばよし、尙、食前にしても二時間より前とすればよろしからむ、

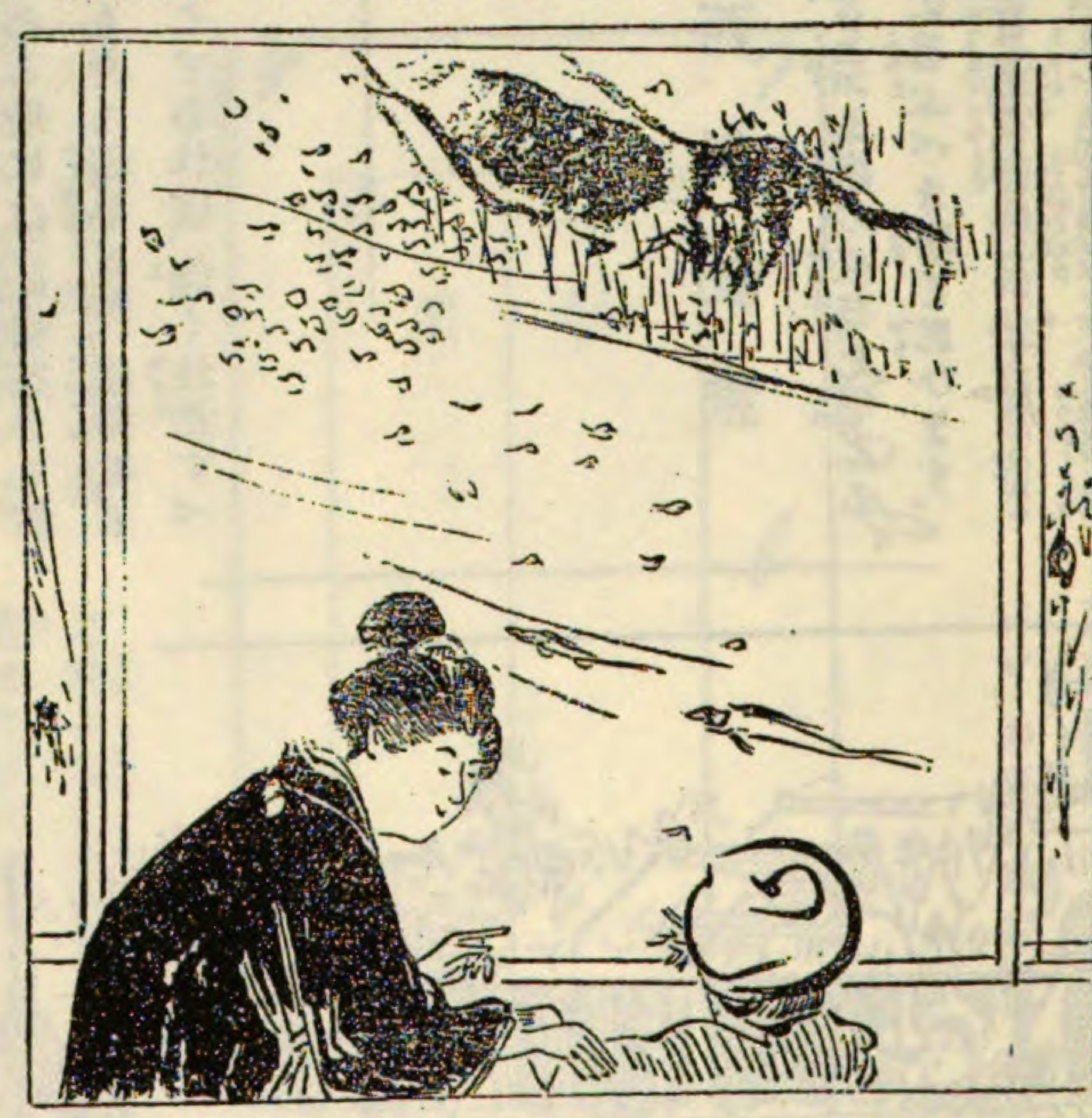
凡て、小兒の養育には習慣が大切なり、菓子とても與ふる度數を、初めより少くすれば小兒はそれにて滿足すべし、此點に餘程留意あり度し丁度哺乳兒に乳を與ふる事と同樣なり、泣くとか、機嫌わしき度每に乳を與ふれば、習へとなりて、度々與へざればやまざるに至るなり、

お茶に關しても、未だ吾邦にては實地上小兒に對して、どうであるかを調べたる人無し、故におもに、西洋の大家の說を基として御話するのほかなし、

お茶にも種々あり、また、お茶と云はざる物にても、お茶と同樣の作用を身體に及ぼすものあり、咖啡、「チョコレート」などの類なり、

通例用ふるものは、煎茶、番茶なり、小兒は菓子を與へたる後、幷に食事の時にお茶を與へてよきや否や如何と云ふに、それも濃厚の度合にも關係するを以て、一槪には云はれず、ノートナーゲルと云ふ大家の說に據れば、凡て、茶類は、男女共に十四五歲迄は少しも必要なし、與へざるを可とす、少くとも十歲になる迄は與ふべからずと云へり、これには色々の條件もあれども、小兒は決して腦を刺戟するの必要無し、何の苦勞もせず、精

神を勞することも無し、如此ものに茶類を與へば、害ありて効無し、與ふれば精神の發達を害することゝなる、
また、安眠を妨ぐることあり、
殊に其血統即ち祖父母なり、父母なりの類に神經系統の病氣ありしものには一層愼まざるべからず、例へて見れば上記の人々に癲癇病者ありしとき、慢性の神經痛などありしとき、其ほかの腦病、精神病、「ヒステリー」等ありし時の類なり、小兒自身に是等の病氣あれば勿論與ふべからず、
また、小兒に胃加答兒ある時には害あり、殊に慢性胃加答兒に然り、これはお茶に限りしに非ず、胃加答兒あれば可成胃をして働くことなからしめ、胃を安靜にするを要す、しかれども、食物を廢すれば身體の營養を害するゆゑ、唯、必要なるもののみを食すべきなり、此時無用なるお茶を飲用すれば、先づ第一、胃をして、餘計に働かしめざるべからず、次に胃液を稀釋する爲めに、胃液の働が鈍くなるなり、是を以てお茶を飲むべからざるものとす、
また、頭が重い時、頭痛のする時、鼻血の出づる時などにも飲むべからず、



お茶の種類にて紅茶、綠茶、など無論あしゝ、前記の咖啡、「チョコレート」も用なし、然らば、食事も、お菓子の後も、全く液體なしにて忍ふべからざるを如何せんと云はゞ、可成ならばお湯にて濟す癖を作り度し、或は少許の牛乳、「コンデスミルク」、或はお湯にては餘り無味、淡白なりとなら

ば、番茶をよく〱こがし、これを湯に出して、極々、稀釋にしたるものを用ふることゝなさん、

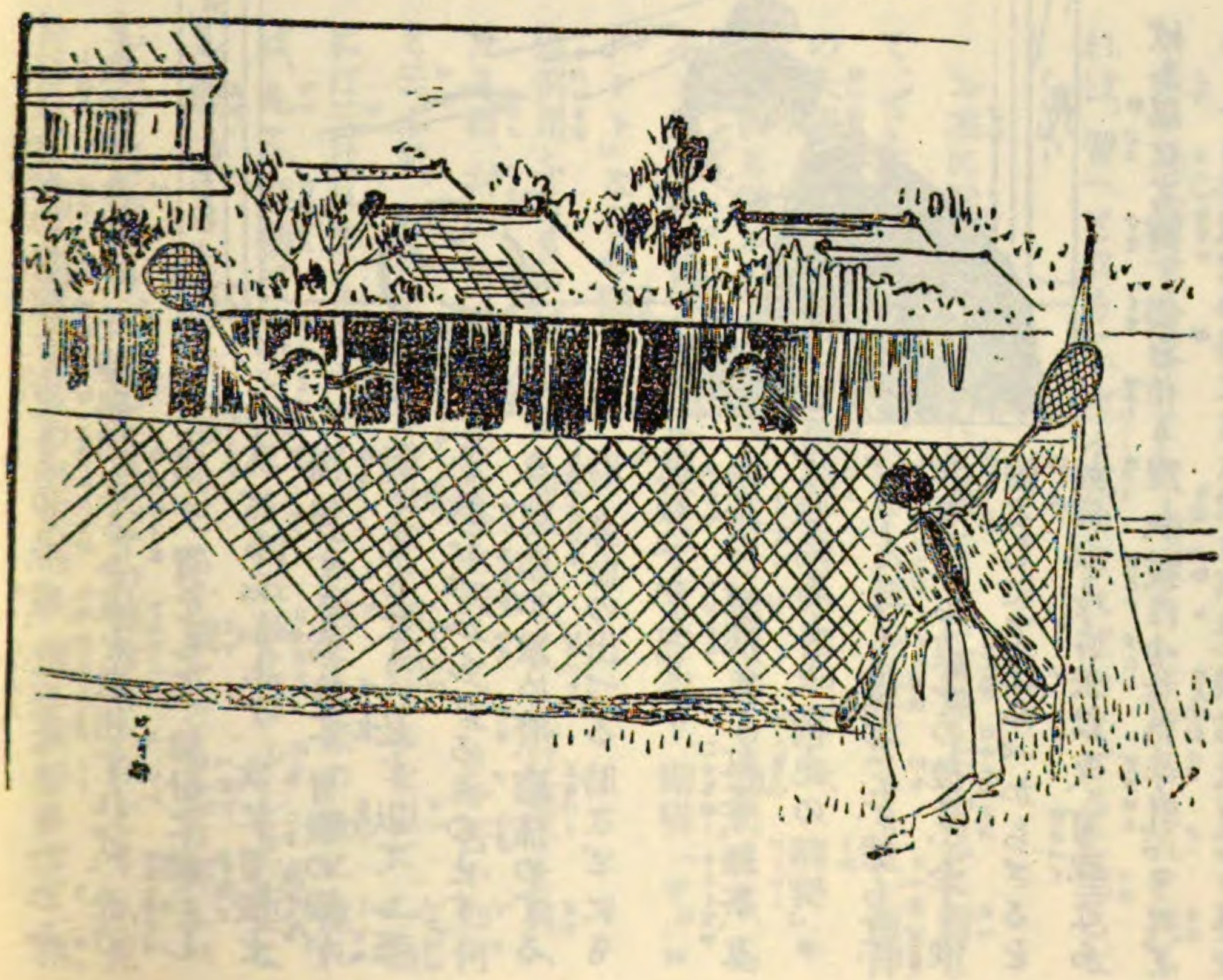
病氣にて醫者より藥を受けゐる時には、此番茶をも飲むべからず、「ビスミット」の入りたる藥品とか、鐵劑などは、これが爲めに無効となることあれば、能く注意すべきなり、

女子運動法

（一）ロンテニス

日本體育會體操學校職員　西川政憲

近頃になりまして女子の體育と云ふ事の必要を唱ふる人の多くなりましたのは誠に喜ぶべき事と思ひます、女子の體育と申しましても今日迄實行いたして居りますものは餘り多くありません、尤も女學校とか小學校では體操も遊戯も行つて居ますけれども、これは學校限りのもので學校以外では餘り行はれて居りませぬ、

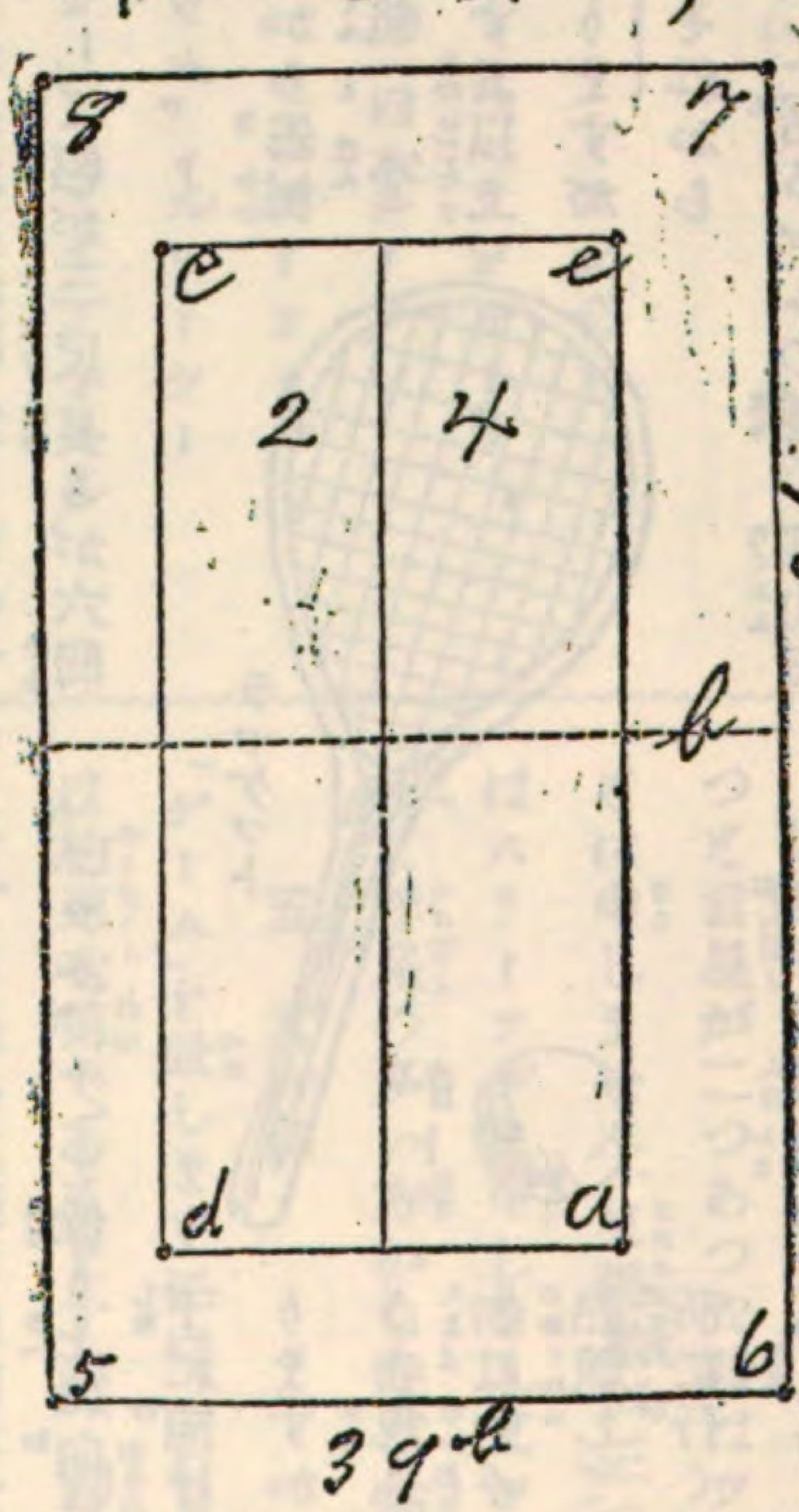


それは社會がそれ程進んで居ませぬから學校以外で行ふべき場所の設備と云ふものが出來て居ませぬ、それ故に世間で女子體育の必要を論じて居る程まだ實行されて居りませぬ、勿論、體育と云ふ事は實行に待たなければ決して効益のあるものではありませぬ、そこで皆様に體育法を實行する事を御勸めいたしますと同時に其運動の方法を簡單に御説明申すことに致しますが、第一番に「ロンテニス」の御話を致します、

一「コート」の構造

「コート」、と申しますのは「ロンテニス」を致します場所であります、其場所は横三十九フィト、縱七十八フィト、の長方形の平らの地面で成る可くは土地を平らに均して其の上に石炭の燒灰を細かにして二寸斗り高く積むと運動が立派になります、「コート」の模様を圖に現はしますと此の外の實線と内の實線を「ライン」と申します、外の「ライン」が「アウトライン」と申して此の「ライン」の外に球が出ますと「アウト」と申して負けになるのです、

テニスコート



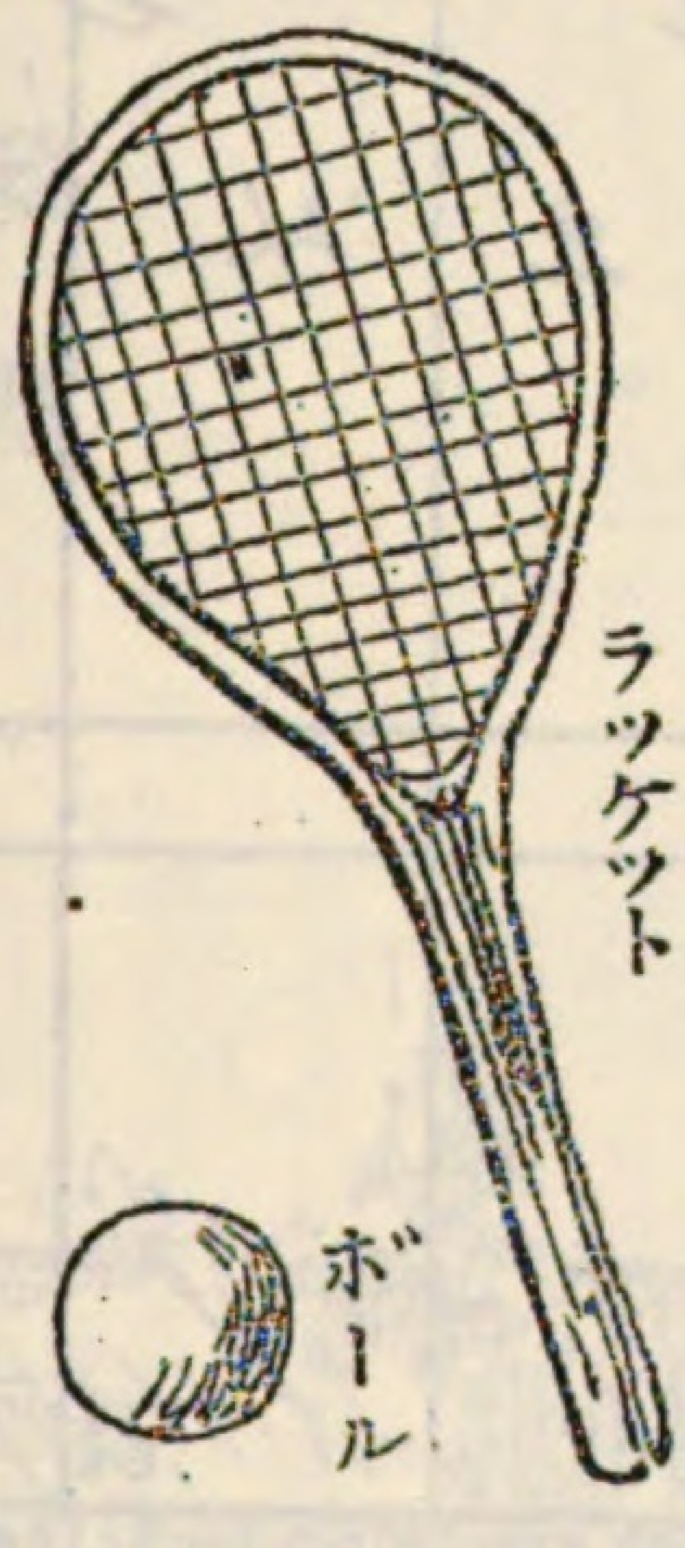
縱の線の中央を横切つて居る點線が「ネット」の線でありますが此の網の高さは三フィトの高さにピンと張つて置くのであります、「ライン」は通常細い木を埋めてあるのですが其代りに細綱を張る事もあるのです併し綱を張ると往々足に掛かゝつて倒れる事がありますから餘程注意せなければなりませぬ。

今一つ簡便の法は此の「ライン」の所に石灰の粉を散布するのです、假りに「コート」を拵へるのは此の法が一

番便利です、

二 器具

テニスを致します器具は極めて簡單な物で「コート」の中央に張ります網と、「ラッケット」と申して球を打つものと、ボールと、此の三種の器具があれば宜しいのです、此の網は糸で出來て居まして幅が三尺長さが六間餘りあれば宜しいので、「ラッケット」は拵らへる譯に參りませんから器械屋で買ふのでありますが一組（四本）が二圓八十錢位からあります其以上は一本で四五圓位いのもありますが最初は安いので澤山です、それからボールは娘方の手毬に突いて居るゴムの毬で澤山です、段々熟練して來ますとテニスボールと申して一個壹圓位のを使ひますけれと初めは一個八錢位ので澤山です。



三 準備演習

「テニス」は此の「ボール」を打つ事が上手でないと困ります、そこで勝負を致します迄は點取りでなく隨意に「ボール」を打つ事を稽古しませぬと初めから勝負をすると腕が上達しませぬ。

「ボール」を打ちますに「ラッケット」を斜めにして打ちますと毬は其斜めに向いた方に飛んでしまいます、亦「ラッケット」を餘り上に向けると球は高く上ります、亦下に向けると球が低く飛んで網に懸りますから、「ラッケット」は毬を遣らうと思ふ所に向けて打つのですが最初は中々うまくまいりませぬ、段々熟練して參りますと自然に毬が思ふ所に行く樣になります、それで初めは何んでも關はずドン／＼稽古するのです、毬が思ふ樣に打てると勝負をしましても充分計畧が行はれるものです、此の計畧が行はれる樣になつて始めて本當の興味が出て參ります。

四 ゲーム

準備演習が出來上ると勝負をするのです、これを「ゲー

ム」と申します、此の勝敗を決しますのは通例續けて四點取るか、四點と二點の時か、五點と三點の時か、五點と四點の時であります、此の勝敗の裁判を致しますのを「アンパイア」と申しまして「チット」の所に立つて居まして毬を打つ度に高聲で點數を呼び上げるのです、

其呼び方は、

○は勝	●は負	
○	●	ワンゼロ
○●	●○	ワンオール
○●○	●○●	ツーワン
○●○●	●○●○	ツーオール
○●○●○	●○●○●	スリーツー
○●○●○●	●○●○●○	スリーオール
○●○●○●○	●○●○●○●	バンテージ
○●○●○●○●	●○●○●○●○	ボスバンテージ
○○○○	●●●●	ゲーム(勝負)
○○○○	○○	ゲーム
○○○○○	○○○○	ゲーム
○○○○○	○○○	ゲーム

こんな工合に勝負が決せられるのです、即ち勝星の數をワン、ツー、スリー、フオア、ファイブ、と云ふ西洋の數で算へるのであります、負星は「ゼロ」と申します、呼びますのも勝星の方を先に申します、假へば勝星が二つと負星が二つあつた時はツーゼロと云つてゼロツーとは申しません、又勝星が三つと負星が二つあつた時はスリーツーと申しましてツースリーとは申しません凡て勝星の多い方から呼び始めるのであります。

五　其方法

「ゲーム」を致しますには、どちらから打ち始めてもそれは約束次第でありますが、初打出す方を「サブ」と申します、

「サブ」の者は圖にありますaかcかの所から打つのです、が玆にてaより打つと致します、そこでaの點に片足を置きまして毬を2の廓内に打ち込むのです、首尾よく2の内に這入れば其所に居る人は之を敵の方の「ア

ウトライン」の内に打ち返へすのです、若し「サブ」の打つた毬が網に懸かるか内の「ライン」より外に出るかすると「フォール」と云つて過失とします此の過失は一回丈け許すとになつて居ます二度目も同じくであれば負けとして「ゼロ」を一つ頂戴するのです、若し打つた毬が網の頂きに觸れるか又は「ライン」の上に落ちた時は勝敗の數に算へませぬ網の頂に觸れた時は「ノーカウント」と云ひ線の上に落ちた時は「ライン」と呼びます。「サブ」の打つた毬が首尾能く2の内に這入つた時cに居るものが受け損じた時若くば受けても打返した毬が「アウトライン」の外に出た時は「ゼロ」を一つ頂戴するのです。

それで最初打出す毬は必ず對角線に打つのです、其次からはどこに打つても「アウトライン」の内でさへあれば關いませぬ、そこで負星を敵でも味方でも一つ頂戴すると一と勝負濟んだので「サブ」の方は其位置を交換して二度目にはaの所が5 4に向つて打つので勝敗毎に「サブ」の方丈け位置を換へるのであります。

此の遊戯は四人で致しますので、「コート」を四分して各其一分を擔當して居ます、ですから自分の持場内に球が落ちたら之を打返すことに就ては全力を盡して其責に任ぜなければなりませぬ、若し軍人であつたら一身を犧牲に供して其任に當らなければならぬのです。

六　ゲームの秘訣

何事でも勝敗を賭して爲ます事に秘術のないものはありませぬ、軍人が戰爭を致しますにも戰術とか作戰計畫とか申すものがあります、男子がボートの競爭を致しますにも隨分秘法があります。

この秘術が巧みに行はれてこそ始めて眞の興味が生ずるものであります、ロンテニスを爲さいますと始めての御方は二樣に興味が出てまゐります、第一の興味は毬が自由に自分の思ふ所に行きますの、毬が自由に行く樣になりますと隨分面白いものであります、第二の興味は秘術の行はれますので言換ふれば敵を巧に欺すのであります、これも中々面白いもので自分の策略が

圖に當り敵を奔命に疲らすのですから此の興味は亦格別です。

そこで「テニス」の秘訣と申しますのは敵の虚を衝くと申すので假令ば、向ふの敵が其受持區域内の中で前面に注意して居るか亦後ろの方に注意して居るか亦前體に渉つて注意して居るか此の三つです、若し敵が前の方即ち「チット」に近い方に注意して居ますれば毬を成る可く後ろの方に打つのです、すると敵は其注意をして居ませぬ後ろの方で不意を衝かれますから堪りませぬ、見事受け損じます、若し亦敵が後ろの方を警戒して居ましたら今度は成る可く近く「チット」の方に毬を打つのです、すると敵は毬が前に來たと思つて出て參ります間に又受け損じます、又若し敵が全體に注意して一寸の隙もない時には致方がありませんから此の時は態と方向違ひに毬を打つて「フォール」を出すのです、すると敵は一寸躊躇して陣を立て直します其虚に乘じて電光石火の勢を以て鋭く毬を打つのです、これで大抵は勝を制する事が出來ます。

凡て毬は低 鋭いのを貴ひます低い毬は受けますに餘程困難であります、勢力の弱い高く飛ぶ毬は誠に受けますに都合の宜いものです、ですから「ゲーム」の時は成る可く低く勢力の強い毬を出すのが得です。

敵方に打つた毬は一旦地に落ちて再び跳ね上る時即ち「バウンド」する時に打ち返すのと、其毬が地に落ちない中は空より空に打ち返すのと二樣ありますが之は毬の來ます模樣です併し大抵ならば「バウンド」してから打つ方が過ちが少ない樣です 空で受けます球は向より來る勢ひと此方より打つ力とで意外の所に球が飛で行くものです。

凡て飛で來る毬は物理學の原則反射角は來射角に等しいと云ふ理に基いて毬が地に落ちる角度にて其正反對の方向に「バウンド」するものですから其角度を計つて「バウンド」した所を打ち返す方が得策であります。

七 勝敗の結果

右申しました方法によりて互に秘術を盡して戰爭した結果どちらが負けましたら、中央に居ます「アンパイア」

即ち審判官は「ゲーム」と稱へて勝敗の決した事を宣告致します、此の宣告がありますと負けた方は退いて新手を交代致します、尤も其時の都合によりて四人とも皆代りて新奇に勝敗を始める事もあります。

右申しました樣な次第でありますから此の遊戲は家庭に置きまして一家族丈けで輕便に出來ます、亦女子の運動法としては最上の遊戲でありますから誠に概略を說明致しまして諸姉に御勸め致します。

數理應用 はやづもり

竹貫直人

早積り、早口問答、之は頗る實用的の遊戲で御座いまして、此法に若し熟達なされやうならば、夫れこそ最早安心なもので御座います。

あら、厭な、何が安心なの、早積りつて何の早積り？譯も左樣云はないで……可笑しいぢやありませんか。

まあ、默つて聞いて居て下さい、さう早口に遣り込められて了つては、直人たるもの大ひに凹まざるを得ない次第で、少々お靜肅に願ひます、尤も其位早口に仰しやることがお出來になれば、此早口問答早積りの目的は既に達せられたものと云つても宜しいやうなもので……

……いや之は失禮！

爰に早積りと申しまするは、着類入用尺の早積りで、之を早口に問答するので御座います、眞實此法を能くお會得になつて居りますれば、呉服屋へお買物などにお出でになつた時、其店頭で速座に積りが出來ますから、折角見付けた柄の好い有切れなどを、入用尺が確と分らない處から、見逃すと云ふやうな遺憾も無く、丈けが何程で袖が何程だから斯樣と、夫れに袵と衿とで……など、勘定する不躰裁も無く、此遊戲の德たるや、蓋し至大なるものと謂つべしでありませう。

前置きは此位で止めて置きまして、さて愈々本文に這入ります。

△、一つお願ひ申します、着物の積りを、並幅物——九

寸五分─で、
問、承知しました、處で着丈けは？
答、三尺五寸です。
問、袖丈けは？
答、一尺五寸、
▲、夫れでは二丈六尺要ります。

斯樣云ふやうに問答するので、成るべく問ふ方も答へる方も早口に願ひたいので……
傍に急く役なり檢査役なりの人が居て、早く〳〵と急きたてながら問答を檢査いたしますれば、猶ほのこと面白う御座います。勿論丈けと袖と適合は無いやうな事を云つたり、物になら無いやうな寸を云つたりしても不可いので御座います。
其處で、今、その當て方、積り方を御傳授申しませうなら、

《並幅物の着物の場合》　着丈けに袖丈けを加へて五二を乘ければ入用尺に成るのであります。即ち前の例では、着丈け三尺五寸に、袖丈け一尺五寸を加へて五尺として、之に五二を乘ければ、入用尺が二丈六尺と分るので御座います。

さて、之から種々な幅物で、種々な着類の場合に就て申して見ませう。

△、一つ願ひます、今度は羽織の積りを、矢張り並幅物で、
問、はい、丈けは？
答、二尺九寸、
問、袖丈けは？
答、一尺五寸、
▲、夫れでは二丈四尺二寸要ります。

《解─並幅物の羽織の場合》　丈けに袖丈けを加へて五五を乘ければ入用尺に成るのであります。即ち此例では、丈け二尺九寸に、袖丈け一尺五寸を加へ四尺五寸として、之に五五を乘ければ、入用尺は二丈四尺二寸と分るので御座います。但し折返しは此外と見て下さい。

△、今度は一つ夜着を願ひます、矢張り並幅物で、

問、夫れで、丈けは？
答、四尺です、
問、袖丈けは？
答、一尺七寸、
▲、夫れでは三丈一尺三寸要ります。

《解—並幅物の夜着の場合》　丈けに袖丈けを加へて五五を乗ければ入用尺に成るのであります。即ち此例では、丈け四尺に袖丈け一尺七寸を加へ五尺七寸として、之に五五を乗ければ、入用尺が三丈一尺三寸と分るので御座います。勿論此内には背入れの尺まで見込んで御座いますので。

△、猶う一つ並幅物で、夜着の裏の積りを願ひます。
問、丈けは？
答、六尺で御座います。
問、袖丈けは？
答、一尺七寸に願います。
▲、夫れでは五丈二尺三寸要ります。

《解—並幅物の夜着裏の場合》　丈けを袖丈けを加へて六八を乗ければ入用尺に成るのであります。即ち此例では、丈け六尺に袖丈け一尺七寸を加へて七尺七寸とし、之に六八を乗ければ、入用尺が五丈二尺三寸と分るので御座います。勿論之も背入れのあるものとして積りましたのです。

△、一つ復た着物を願ひます、中幅物—一尺三四寸で、
問、宜しう御座います、着丈けは？
答、三尺五寸、
問、袖丈けは？
答、一尺五寸、
▲、夫れでは一丈六尺五寸要ります、

《解—中幅物の着物の場合》　着丈けに袖丈けを加へて三三を乗ければ入用尺に成るのであります。即ち此例では、着丈け三尺五寸に、袖丈け一尺五寸を加へて五尺とし、之に三三を乗ければ、入用尺が一丈六尺五寸と分るので御座います。序に申します、幅一尺五六寸までのものは、此仕方で積りまして差支へ無いのであ

りますが、其時には細い落し切れが出ますばかりで御座います。

△、同じく中幅物で羽織を願ひます。
問、はい、處で丈けは？
答、三尺、
問、袖丈けは？
答、一尺五寸、
▲、夫れでは一丈三尺五寸要ります。

（解―中幅物の羽織の場合） 丈けに袖丈けを加へて三を乗ければ入用尺に成るのであります。即ち此例では、丈け三尺に袖丈け一尺五寸を加へて四尺五寸とし、之に三を乗ければ、入用尺が一丈三尺五寸と分るので御座います。之も矢張り折返しは見込んでありませんので。

△、今度は大幅物―二尺―で着物を一つ願ひます。
問、畏りました、着丈けは？
答、三尺五寸です、
問、袖丈けは？
答、一尺五寸、
▲、夫れでは一丈三尺要ります。

（解―大幅物の着物の場合） 着丈けに袖丈けを加へて二六を乗ければ入用尺に成るのであります。即ち此例では、着丈け三尺五寸に、袖丈け一尺五寸を加へて五尺とし、之に二・六を乗ければ、入用尺が一丈三尺と分るので御座います。

△、同じく大幅物で羽織を願ひたう御座います。
問、承知いたしました、お丈けは？
答、二尺五寸に願ひます、
問、お袖の丈けは？
答、一尺五寸で御座います、
▲、夫れでは一丈一尺要ります。

（解―大幅物の羽織の場合） 丈けに袖丈けを加へて二七五を乗ければ入用尺に成るのであります。即ち此例では、丈け二尺五寸に、袖丈け一尺五寸を加へて四尺とし、之に二・七五を乗ければ、入用尺が一丈一尺と分りますので、之も矢張り折返しは見込んで無いので御

座います。

△、では、今度は、三幅物―三尺―で着物の入用尺を積つて見て下さい、

問、着丈けは何程です？

答、三尺三寸に爲て下さい、

問、袖丈けは？

答、矢張り一尺五寸に‥‥

▲、夫れでは入用尺は丁度一丈で御座います。

《解―三幅物の積り方》例の通り丈けに袖丈けを加へて[二]を乗けますれば入用尺が出ますので。即ち此例で申しますと、丈けが三尺五寸に袖丈けが一尺五寸でありますから、之を加へて五尺として、之に二を乗ければ、夫れ一丈と入用尺が分るので御座います。

三幅物は、着物に限らず、羽織でも夜着でも、斯様に丈けと袖丈けを加へて二を乗けますれば、早積りの入用尺は分るので御座います。

尤も羽織ハ方にも例に依つて折返し無く、夜着は表の方と御承知置きを願ひたい。

初めに御意に得まして、くだらぬ事を申上げて、何うも相濟みません。直人の書く遊戯は兎角に何時も理に落ちて、之れでは面白くも御座いますまいけれど、此遊戯は暗算のお稽古にも成りますから、夜分お退屈な折にでも爲て見て頂戴！　（かほり）

家庭的栽培

よろづたなち物の栽培季節といふ八十八夜も間近うなりぬ。さる老人の言に、道樂にても花卉を愛し蔬菜を培養するなどはきわめて美しき心がけの道樂にして人の心もちを寛かにし長壽養生の一法なり。植木好は長生をするものなりと語りき。こはさる深き仔細のあるにもあらじ、その身體にとりて勞働よろしきを得、精神にとりて養氣になれるが爲め、自然と健康養生の法にかなふによる、女性は概して裁縫、育兒、掃除、料理などにたち働くとあるのみにて、今のわが社會のありさまにてはなほその生活、住居の室内的なるを免れざれば、

蔬菜花卉の培養は、經濟的よりいふも又娯樂的よりいふも、はた養生の法よりいふも、家庭上女性の仕事としてきわめて興味あり、益あるとなるべし。

田舍住の庭廣き家にありては勿論ながら、都住居のいとさゝやかに構へたる家にても、多少の空地はあるべし、そこに例へば朝顏の種まきて見よ、期を經ば美しき花はやがて開くべし、緣日もとめ來しを見むよりはおのれが手にてかくは咲かしめたりといふの情にても一層の樂ならむ、そこに菜を蒔きて見よ、軈ては膳に上す香の物とはなるべし。天然はたゞわづかなる人の手をかりて、人に種々の樂と利益とを供するものぞかし。

土を耕すに鍬を用ゐず、竹頭木屑にて用は足るべし、肥料を與ふるには炊水にて澤山なり。かくておのれ培ひたる物の膳に上り、おのれ養ひたる花の觀賞とならむと、如何に樂しかるべき、記者は大かたの家庭の主婦に蔬菜花卉の栽培をすゝむ、今季節に關はるもの數種を擧げん。



◎紫蘇　菜のつまとして必要なり、八十八夜前後種まき初夏（七月上旬）の頃に至れば早く摘とらるゝ樣になる紫蘇の收穫は舊盆頃なり。

◎蕃椒　四月下旬より五月に種まき八九月に盛夏の頃に實る。

◎洋芹　四月下旬種まき、四季折り折りに摘みて用に立つなり。

◎料理菊　四月下旬より五月中旬の間に種まき十一月頃花開く、花を愛するのみならず、また花を食ふ、一擧兩得なり。

◎生姜　四月に種苗を植ゆべし、收穫は九月中旬より十月上旬頃なり。

◎牽牛花　八十八夜に種蒔くべきなれどそれより遲くまきてもよし。培養法は種々あれども、蔓をのばさぬやうにするが花輪を大にし美しくするの一方なり。

◎除蟲菊　四月下旬に播種、六月下旬までに花開

く、此れは順次に開化するものゆゑ、花心半ば開き花粉囊の破裂したる時を計り、摘みとりて二三日間日光に晒らし、乾かして後、藥研又は乳鉢或は細目の石臼にて粉末とし絹篩、寒冷紗もしくは毛篩に細粗を分ち、罎につめて密閉貯藏すべし、今より心がくれば夏時の用に足るべし。

◎ひな菊　花に單瓣重瓣紅白あり、頗る美し、四月下旬播き八月頃より漸次花開く。

◎鳳仙花　各種あり、四月頃種を下し、夏月に至り重瓣單瓣の花をひらく紅白、紫桃色絞り等の各種あり。



◎松葉牡丹　花に艶美の光彩あり、普く人に愛玩せらる、春四月種を蒔き夏秋の間に開く。

◎望江南　春月種を下し芽出でゝ後に一本立とすべし黄色の花を開く、毒虫にさゝれたる時、其葉の液を疵口に塗れば忽ち癒ゆ。

◎菖蒲　種子を春月に下し三年の後花をひらく、風情ある花の姿なり。

庖厨の經濟

飮食料理の事は一家の主婦たるものゝ尤も必要なる責務にして家人の總菜は一日三回づゝ之を調へざるべからざるは勿論、其他に來客あれば之れが饗應の心得なかるべからず、又假令家内の者に供する總菜なりとて毎日同樣の献立をなさば人皆飽きて厭ふべく之に反し同一の材料を用ゐても日々に其方法を異にし目先を新たにするときは人皆喜んで之を賞味すべし況して來客ある時に一々料理屋より仕出しを取寄することは其の經費に堪へず又假令經費を厭はずとも近邊に料理

屋などの尋ねてもなき所多し、故に勝手向の心得中料理法は其第一に居る主婦たる者自から料理の方法を知るときは自己は手を下さずとも下女を指揮して立派に之を製するを得べし、然るに若し料理法の心得なきときは如何に魚鳥菜蔬の料理材料を多く有すとも之を調ひて膳に上せ客に供する能はず、會席料理を爲せば醜陋見るに堪へず、客は箸を下す能はざること多かるべし、此の如きは折角の材料を無用に費やして客を失望せしめ、徒らに主婦の無能を笑はるゝに過ぎず、故に料理の事は委しく知るを要す。

勝手元に於て第一に注意すべきは火の要心なり、飯の火を焚きながら直ぐに水を汲みに出づるが如きは往々見ることにして之が爲めに火を過ち火災を出すか、然らざるも折角炊きたる飯を黒焦と爲し多くの部分を食すべからざるに至らしむるは不經濟の甚だしきなり、其他竈にて火を焚きたる末に焚きのこりを消壺に移して消し貯へれば炭となり其の炭は急に炭火を要する場合には速かに火の移りて甚だ重要なるものなれども其消壺の蓋に少しの間隙あれば火は消へずして終に之れより火災を起すことあり深く注意すべし、又竈の邊に多く薪を散らして之を取片付けずに火を焚くなどは殊に危險にして少しく油斷する間に風の吹き込むことあらば直ぐに其の薪に火の移るものなり戒むべし。



如何なる清潔らしき飲食にても之を製造する場所の不潔なるを見ば忽ち食するものに不快の念を起さしむるものなれば、勝手元は、清潔の上にも清潔を要し何人の立寄り見るも決して不快の感を起さしむること無き樣にすべし總て食物を棚の上などに置くには丁寧に蓋を爲さゞるべからず、然らざれば塵芥、鼠汚を防ぐべからず、殊に夏時には蠅の群がり來りて忽ちに腐敗せしむべし。又棚の上

に食物を置く時は鼠來りて葢を嚙り、又は之を取除けんと欲して器物を墮し破損する事あれば、出來上りたる食物は成るべく棚上に置かず戸棚又は鼠入らずの裡に仕舞ひ置くこと肝要なり。

食物の黴を永がく貯へ腐敗するも尙ほ之を棄つるを惜み終に之を食して食傷又はコレラ病等の惡疫に罹るは愚の至りなり。

元來食物は成るべく家内の人數に考へ、過不足なき樣に調製すること主婦の大切なる技倆なり、不足なるときは家内の不滿を釀し、殊に奉公人などは兎角惡評をなし易きものなれば決して不足なき樣にするは勿論なれども、さればとて多きに過ぎて餘れるは次回に食するも既に其の味不良なり、況んや久しく貯ぶるをや、其味の變るは當然なり、此の如く稍や腐敗の黴あらば斷念して之を狗に與へ若しくは捨つべし。



平素屢々來客ある家にては煙草の火に供すべき火種と、茶を出だすべき湯とは斷へず之を保存すべし、客の來りて坐敷へ通りたる後久しく火鉢若しくは煙草盆を出さず又茶をも供せざるは甚だ不躰裁なり況んや俄かに七輪の下を煽ぎ火を起す音の客間まで聞ゆるなどは殊に不躰裁なり、注意せざるべからず。

輕便料理法

風月堂米津主人考案

◉牛肉の蒲鉾

油身なき牛肉一斤を最初庖丁にて極細かにタヽキ尙摺鉢に入れ、充分に摺りこなし、夫へ玉子一ッの黃身と煎茶々碗に半杯程の醤油と一ッカミのパンの身を水に浸してしぼりたるを入れ、再び摺交ぜ、かくて小さき簾にて海苔卷の鮨を拵へる樣に巻き其上を淸き布巾にて包み熱湯に投じ

四五十分間程湯煮て冷へたるを切りて食すべし。

◉即席ライスカレイ

煎茶々碗に一ぱいのバターと葱三四本をこまかに切りたるを深き鍋に入れ、つよき火に懸け、やゝ葱の柔らかになりたる時煎茶々碗に八分目程の饂飩粉をいれ、絶へず攪き廻しながら、鳶色になるまでいりつけ、煎茶茶碗に半碗のカレイ粉(西洋食料店にあり)をいれ、斯くて鰹魚節の煮汁(これは鰹節半本に御膳茶碗六杯の水にて前に拵へ置くべし)を少しつゝ注き入れながら攪きまわし、醤油を適宜に加へ、十分間程弱き火に懸け、味噌漉にてこし、其汁へ湯煮したる車鰕或は鳥肉を入れ炊きたての御飯へかけて食すべし。

◉牡蠣の天麩羅

牡蠣を生のまゝ油揚にせんには油跳ねて容易に出來ざれどもそれを手輕に揚ぐる法あり、先づ麥粉を濃く水に落し、別に玉子を粉半斤に一個の割にて黄味と白身をわけ、黄味はまづコロモの中に入れて好く掻きまぜ、又白身は別の器にて薄茶を立てる樣に茶筅或は淸きサヽラの如き物にて能く氣長に泡立つまでタテ、斯くて其白身をコロモの中に投じて再び好くかき混ぜ、之に鹽と胡椒を少しづゝ投ずるなり、揚げんとする牡蠣は始めより味噌漉などへ平に並べて好く水を切り置き、此時其コロモに包ませて油に投ずれば跳ねもせずして、フーわりとよく揚がるなり、若し其の油をバターとし、其粉を米利堅粉とすれば純粹の西洋料理オイスタフライなりと知るべし、此品は其他何魚にもよろし、又天麩羅の味好き汁を製せんには醤油と味淋と水とを等分に入れ、鍋に入れて一旦沸騰せしむべし。

◉玉子製鱠

玉子五ツを固く湯煮冷したる後、白身を丁寧に取去り、黄味のみを擂鉢にて鹽少しを加へて充分に擂りこなし、普通の煎茶々碗に一杯の酢を少しづゝ傍より注ぎ入れながら擂りまぜ、更に同量のサラダ油(西洋食糧店にあり)を右同樣の方法にて擂り交ぜるなり、可成氣長く始終絶間なく擂るを肝とす、斯くして之を鉢にうつし、細かに切りたるサラダ(野菜)と湯煮したる白魚

(或は芝鰕其他の魚肉)を前の玉子の白身を賽の目に切り混ぜて後三十分程經て食すべし、夏季には之をガラスのコップに詰め氷にて冷して用ゆるも亦可なり。

◉牛肉茶碗蒸

茶碗むしは種々あれども牛肉を以て製するは未だ耳新しき事なれば左に其要領を記るさんに、鍋の中へ水を入れ、味淋、椎茸、鰹魚節を混和し强き火に懸け沸し更に又牛肉を入れ(油氣を好まぬ人は一度湯がきて入るべし)醬油を程よき味にくわへ、再び沸騰せしめて之をおろし、深き茶碗に各々分ち入れ大なる玉子一個を加へて能く搔き廻し三葉或は葱の類を付け置き御飯蒸樣のものへ水を充分沸騰せしめて前の茶碗を入れ强火にて蒸すべし、凡そ五分間程經ちて玉子の固まるを適度とす。

◉牛乳玉子製菓子

牛乳を鍋にいれ、火の上に懸け置、別のなべに、玉子四ツの白身を去り、黄味のみに煎茶々碗に一杯の上等白砂糖に散蓮花に半程の饂飩粉を混和し充分に攪き混ぜ之に牛乳の沸立んとする處を度として火より卸ろし直ちに注ぎ入れ、手早く攪き混ぜ、再び二分間程火にかけ、後其儘冷き處に置くべし、斯くて白身を乾きたる鍋に入れ茶筅或はサヽラにて雪の如く固まる程に泡立て(此鍋に水氣或は油氣ありては泡立たぬなり注意すべし)夫れへ乾きたる極く細き白砂糖を入れ泡の消へざる樣徐かに搔きまぜ前の汁を小皿に盛り其の眞中へ匕にてよき程の塊にして放てば恰も水中の島のごとし因て浮島の名あり。

修身



女徳

野中千代子

第一　貞操

貞操といふことは、昔より女子といへば貞操　貞操とい

へば女子の異名なるかの如く、浸々と聞馴れた言葉で、女子といへば必ず貞操を聯想せねばならぬ程に思つて居る位で御在まして、少し古めかしくなつて聞厭きたやうな氣味で、又例の貞操かといふやうな鹽梅に、輕く見る傾きがあるのは、眞に言語同斷の事と存じます。全體貞操を今の言葉でいへば、畢竟品行清潔氣品高尙といふことで、心意氣が清淨潔白高尙にして、男子で申せば賤業婦を弄ぶとか、又は妾を蓄ふとか、女子で申せば未婚の女子が窃に男子に通じ、又甚しきは有夫の女子が他の男子に通ずるなど、是等は書くも忌むべく筆の穢れとなる程ですが、無論是程の亂暴狼藉なる所爲でなくとも、露程も不身持なる事のないやうに愼むことをいふので御在まして、是は今更述立る迄もない事で、貞操とは松柏の霜雪に常盤の色を變ぜざるが如しとは、三ッ子の時分から耳に折込で飽までも承知して居ながら、扨實際は屢世間に芳からぬ噂を耳にするのは如何なる理由で御在ませうか、しかも當世の敎育ある學校生徒又は知名の士の家庭などに見るに至りては、無敎育の家庭に之を見るのは無理もないと思ふ程で御在まして、如何な了見になれば斯くも思切つた淺猿き事が出來るであらふかと、實に不思議に堪えませんが、察するに人として是程の惡事の惡事として氣の付ぬ道理は、萬々あるべからざる筈なるに眼昏み心迷ふに至るといふのは、全く知らず識らずの裡に陷るのに外ならぬと思はれます。眞に嘆はしき事と思ふにつけて益々油斷なく謹み守るべきは貞操で御在ます。成程昔の人が耳についた蚊のやうに貞操を蒼蠅く述立たのも實に無理もないと益々思ひ當るので御在ます。西洋だからと云て一概に見上げた事ばかりあらふ筈は御在ませんが、彼國の人は男女共に談じ共に笑ひ、同席同食は愚か相互に手を握るを以て禮とする程の有樣で、我國古來の仕付方に較ぶれば雲泥の差であるのに、其內實を窺へば彼には品行清潔にして能く紳士淑女の體面を保つもの多きに拘らず、我に在りては却て鹿爪らしき家庭より禽獸に均しき不行跡の者を出すとは、何共合點の行かぬ事で實に不思議でありますが、是は全

く彼にありては其氣品高尙にして情慾以上に位する爲に外ならぬので、之を言換れば取りも直さず好く貞操を守るからであると存じます。女子の行を穢し身を傷ふは、おもに男女の交際より起るものなれば、我國の如き在來の表面の儀式よりも正味の氣品を高くする事が遙に大切だと思ひます。是は獨り女子に限りて咎むべき事でない、男子に於ても亦均しく此貞操を守り氣品を高くする事は、共に責め需むべき事であらふと存じます。併し男子が如何に不心得であらふとも、世間の婦女子が總て嚴重に固めて、恰も松が霜雪に色を失はぬやうに毅然として立て居る日には、男子と雖も寸毫も犯す事の出來ないものである事は、女子の先づ覺悟を要することで、徒らに男子の氣品の高くなれかしと他をのみ望みて、己れ自らは手を拱いて傍觀して居るべきではないと思ひます、敵をして犯さしめまいと思へば先づ身方の備を固めなければなりませぬ。今假に或一女子に敢て不行跡といふ程でなくとも、露程も巫山戲れ所業があつたと御覧ぜよ。第一當人の身は惡事千里の譬の通り忽ち世人から指彈せられ、此世に生れ出た甲斐もなく、徒らに日蔭の身となりてすたつてしまひまして、餘事は兎に角一旦被つた汚名ばかりは生涯決して洗去る事は出來ません。又先祖以來の芳名に泥を塗り、現在の父母夫兄弟姉妹は愚か親戚や奴婢までにも耻をあたへ、迚も後ろめたくて人中には出られません。例へば親戚に不行跡な者があつてさへも人の前で、私は其者の親類だとは云ひ惡くて躊躇する程であるのに、況て直接に父母夫兄弟姉妹の身になりては、果して如何な心地が致しませう。夫の耻は妻のはぢ、妻の耻は夫の耻で御在ます、況て親は我子を譽られよとてこそ育てつれ、笑はれよとてはぐゝみ育つるものは一人も御在ません。親は子のよきは嬉しく思ひ、あしきはつらくこそ思へ、決して嬉しく思ふものは御在ません。實に家に對しては不孝、國に對しては不忠の極みで、總論に述べました家に虫がわき、國に虫が付たといふのは即ち是等の事を申すので、國家の上から見れば所謂獅子身中の虫でありますから、同胞は是等

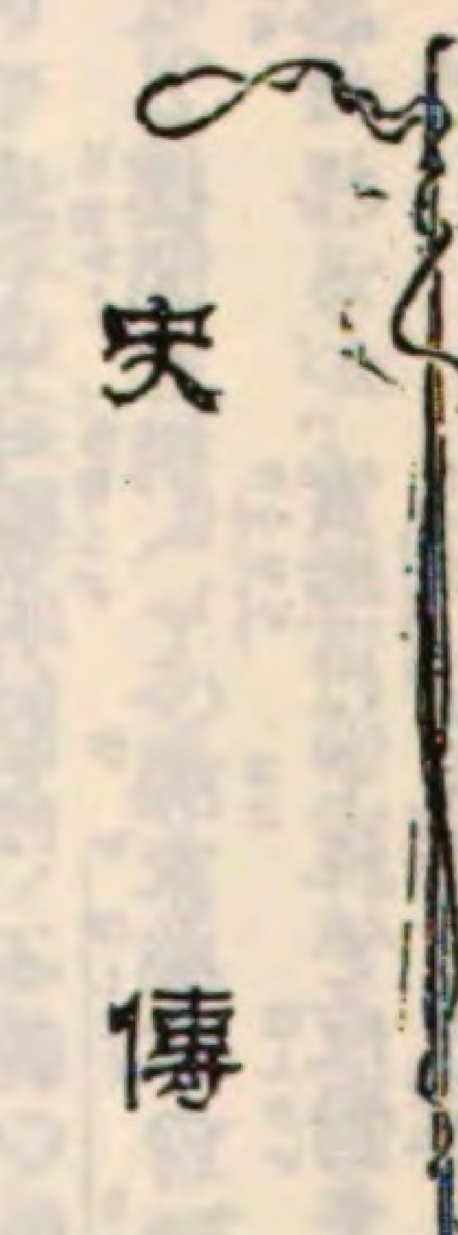
の者に向ひ殘念ながら擧て社會の制裁を加へて、又と再び世間に顏出しのならぬやう懲らしむると同時に、他を戒しめ自己を愼まねばなりませぬ。されば女子の氣品を高尚にして名を瀆すことのないやうにしたいと思へば、幼少の時より父母自らが身持を正しくして、日夜子供に好き手本を示す事が何より肝要なるは勿論で御在ます。斯樣の次第ゆへに女子はたとへ學問もあり才藝もあり萬事人に勝れてえらくとも、塵程でも不行跡なる事がある時は淑女の本領は既に消滅したので、丁度玉の盃の底の無いのと同樣で何の役にも立ちません。俗の諺に萬能一心といへるも、かゝる事をいふので御在まして、不行跡とは必ずしも淫猥の所業をのみ指すのでなく、平生の言行野鄙にして禮儀上の敗德をもいふのであります。左れば寧ろ身を守る事の堅過るのはまだしも宜しいが、柔かなのは必ず節義を失ひ知らず識らず過を招くの基となりて、後悔臍を噬むも詮なき事と相成ますから、男女の別を問はず謹み守るべきは、在來の言葉で申せば貞操、今の言葉に直せば品行清潔氣品高尚にして操を失はぬといふことで御在ます。

第二 溫順

凡にうわにすなほにして、猥に人にさからはざるは女性の本色にして、是等が大に男子と其趣を異にする所でありまして、女子に生れた以上は何處までも此心を失ふてはならぬに相違ありませんが、元來男女の間には外で働くと、內を守るとの別こそあれ、尊卑の區別があらふ筈は御在ませんから、家や身の一大事に當りて言ふべき筋はいひ、爲すべき筋を何處までも爲すは毫も差支へ御在ません。譬ば子女を苦界に沈めんと致したり、又は相手を選はず結婚を強ゆる場合の如きは、如何に家計の爲や利益の爲であらふとも、父母兄弟の命を拒絶して宜いと存じます。又夫や父母にしても內を外にして品行修まらす、畢竟家の爲にならぬと見たならば、妻たり娘たる者は死力を盡して之を爭ふて少しも差支ないと思ひます。前に云へる言ふべき筋、爲す

べき筋をなすといふのは即ち是等の事をいふのでありまして、妻が夫を諫むるのを婦人の例の嫉妬など丶人もいひ、我も思て居るのは大變な了見違で、俗評に僻易して萎縮するこそ却て笑ふべけれ、女子固有の權利を力行して其天職を全うするに何の憚る所が御在ませう。是等の實例は今一々擧げずとも古來賢女孝女烈女節婦などに富んだ我國の事だから、其等の行跡を覽ても分ることで御在ます。總じて從來一口に温順とさへいへば一にも二にも自ら卑め、自ら屈することのやうに思つて居ますが、決して左樣の事では御在ません。夫れはつまり卑屈盲從であつて、所謂温順では御在ません、温順と卑屈盲從とは丁度儉約と吝嗇との區別と同じて混同し易いから餘程注意せねばなりません。温順とは、心より發する言語擧動の柔和に素直なる事をいふので、一切萬事目をつぶつてさからはぬといふ意義では決して御在ません、併し男女に尊卑の別はないからとのみ心得て、理非の別なく何事にも無暗にさからふといふことでは又決して無いことは前にもいふ通りで、猥りにといふのは即ち其處をいふので、其かねあひが眞に六かしいから能く〳〵心を用ゐねばなりませぬ。偖等しく爲すべきは爲し、言ふべきは云ふにしても、又温順の心を、土臺として夫れより發する言語擧動でなければ、或は粗野過激に流れ、又は無遠慮になり、生意氣になり、終には人と爭ひ、又は人を疑つたり、誹つたり、妬むやうな事にもなり行まして、眞に忌むべく惡むべく、全く淑女の本領を失ふてしまひます。世間に間々己れの淺學寡聞を忘れて生意氣に流る丶ものなどのあるのは、實に苦々敷事であります。故に何卒願ふ所は女子に貴ぶ所の優美と愛敬とを失はぬやう、顏色を和げ聲を雅かにして差出がましき事なきやう萬事ひかへめにして、唯々條理を明かにして慇懃に言ふべきは云ひ爲すべきを爲さば、毫も道に違ふことなくして女子の品位を維持することが出來やうと存じます。正を踏で懼るゝことなく、義に勇んで後るゝことなく、斷乎と決して鬼神も避け、凛然として天地も亦慟哭する程の氣慨は、女子とても男子に劣るまじきことなが

ら、其内に別に自ら優婉可憐の心情なくては、猛きをのみ勇ましとするは所謂蠻勇にして、男子とても避るところ況て婦女子に於てをや、眞の剛膽あるものは憫み深く、氣力あるものは涙もろきものぞかし。女子の心を物に譬ふれば、むつけき大木に纏へる蔦かづら、荊蕀ある薔薇の花、岩根に咲るすみれのやうなもので御在ます、女子は常に此心を失なつてはならぬと存じます。凡女子たる者は老少おしなべて此温順の心なければ、貴きも富るも皆其品位を落して仕舞ます、貧しく賤しき者とても矢張同樣です、身分の貴き故を以て又富るの故を以て、温順の徳を守らずとも好いといふことは決してありません。貴人富者は益々之を固く守らねば、如何に身形のみ奇麗でも丁度沐猴に冠を被せたやうなもので、其身分に釣合ませんから是程醜いものは御在ません。又貧いから賤いからといつてソンナ事は如何でも好いといふことは決して有ません、如何に貧く賤くて身形は奇麗でなくとも、温順の徳あるものは、貴人や富者の温順ならざるものに比ぶれば却て遙に上段に見えます、故に是は貴賤貧富の別なく、女子としては老少の別なく守るべき肝要の事で御在ます。



実傳

女傑コルデー

文学士　中内蝶二

下

懐かしき父や伯母には餘所ながらの暇を告げ、名殘惜しげに夕陽うすづく鎮守の森を見かへり〳〵、カンの市を出立したコルデーは、七月十一日の午過ぐる頃、巴里の都に着いて、とある旅館に泊つた。

その日は夕暮頃から雨となつて、風さへすざましう吹き出した。あすは愈よ本意を遂ぐることが出來るかと思へば、何となく胸がとゞろいて、靜かに眠られない。首尾よくいつても、ゆかなくても、どの道おのれの生命

はなくなるにきまつて居るから、心はきめても、さすが女の涙もろく、わが亡くなつた其後では、父や伯母は、どの様に嘆くであらう。わけても父は早く妻にわかれて、我生長を老いさきの樂みとして居るのに、自から進むで命を殞さうといふのは、まことに不幸の至りである。伯母とてもまた、母なき後は、おのれを我眞實の子のやうに養育してくれた大恩人であるのに、その大恩の萬分が一だも報ゐずに死ぬるのは、まことに不幸の至である。われから好むで不幸の子となるよりは、寧そこの企てを廢してしまはうか。それでは幾十萬といふ同胞の生命を救ふことが出來ない。父や伯母の恩も高いが、また佛蘭西の國民の生命も貴い。コルデーは孝と義との二筋道に迷うて、一夜をおもひ明かしたのである。

次の朝に至つて、コルデーは愈よ國家の爲めにマラーを刺殺さうと決心した。さて殺すときめてからが、對手は男子、此方は女子、迂濶に手を出せば失敗の原だ。何うすれば首尾よくマラーに近づいて、本望を遂げることが出來るであらうかと、様々に思ひを凝らしたけれども、此時恰かも、マラーは病氣で、國會へも出席しないと云ふことだから、とても途中に待ち伏せするといふ譯には行かない、兎も角も其邸を訪ねて、面會を乞ふより外に方法がないと、コルデーは朝早く宿を出で、とある刄物商の店で一口の匕首を買ひ求め、ひそかに懐に隱して、醫學校町なるマラーの邸に急いだ。

コルデーはかねてより、此惡魔の住まつて居る家は定めて宏壯な搆へであらうと思うて居たのに、來て見ると案外小さな陋るしい家である。尤もこれには仔細があるので、ちよつと考へると、マラーの如き權勢を有して、己に反對するものは、貴賤上下の差別なく、片端から除いてゆくやうな人間は、不義の榮華を恣まにして、立派なる樓閣を構へて、美衣美食の驕奢を極めて居る様に思はれるが、實際はそれと反對で、マラーが今日の權勢を得たのは、全く過激黨の人望を得たからである。その過激黨の人々は、何れも亂暴で、貴人や富者を惡むのあまり、たゞ粗野を喜び、質撲を好む者はかりだから

マラーは巧みに彼等の氣風に合ふやうにつとめて、わざと驕奢に流るゝことを避けて居るのであつた。
コルデーは再三度案内を乞うたけれども、家を守る者が拒むで面會を許さない。止むを得ず、再び旅館に歸つて思案を凝らしたが、まさか女の身で夜中竊び入るといふ事も出來ないから、今一應押して面會を請ふより他に術がない、それも容易に許さないから、何か策略を用ゐて對手の心を動かさなければならない。人を欺くのは快くないことではあるけれど、時と場合とによれば、また止むを得ないのだから、コルデーは一通の手紙を書いて再びマラーの邸へ行つた。
マラーの妻は、手紙を持つて夫に面會を乞ふものがあると聞き、何人であらうと玄關へ出て見れば、容姿はきはめて美しい一人の少女が立つて居るので、さては夫が竊かに言ひかはせる隠し妻か、或は夫の權勢に惚れて、慕ひ寄らむとせる女か、何れにしても我が爲めには惡き女め、夫の側に近よらせてならうかと、はしたなき心に、嫉妬の炎をもやして、どの樣に賴むでも面會を許さない。
しかるに、マラーはコルデーの持參した手紙を開いて見ると『妾は容易ならぬ秘密の事件を告げまゐらせむが爲めに、わざ／＼カンの市から參りました』といふ旨を書いてある。カンの市といへば、いふまでもなく『ジロンド』派の根據地たるノルマンヂーの都會で、彼等の殘黨は、巴里から此地に遁れて、竊かに逆意を企てゝ居るといふことは、マラーも疾くより耳にして居たのであるから、妻の拒むのも聞かず、喜むで面會を許した。
コルデーが導かれたのは、狹い、薄暗い室で、マラーは入浴中であつた。浴槽の側には、机に代用すべき一枚の粗板が置かれて、其上には外から來た手紙や、記錄や、書きかけの書類などが、所せきまで並べられてある。マラーはつく／＼コルデーが面を眺めて、カンの市の狀態を尋ねた。此方はもとより、今に惡魔が命は無きものと思うて居るから、我が知れる限を悉く答へた。マラーは最後に、其地に隠れて居る反對派の人々

の名を尋ね、コルデーが答ふるに隨つて、一々書き留め終り、心地よげに微笑を洩らして『よし、よし、今一週間の内には、この惡黨ばらを悉く斷頭臺の上に登らしてやるから』と云つた。其言葉が未だ終るか終らざるに、コルデーは突然起つて匕首の鞘をはらひ、電光一閃、マラーが胸を深く刺した。血汐はサッと迸つて、浴槽の湯は紅の色と變り、惡魔は悲鳴をあげて其側に仆れた。

邸の中は大騷動となり、コルデーは警吏の手に捕へられて、革命裁判所に送られだ。七月十七日に、愈よ公判は開かれて、判官は何故に被告が斯かる大膽なる企てを起すやうになつたのであるかと、其犯罪の原因と一切の事情とを尋ねたが、コルデーは固より心に期する所で、首尾よく我本意を遂げた上は、何事も思ひ殘すことがないから、少しも包みかくさずに、ありのまゝの事を述べたてた。

判官は更に、マラーを刺殺した匕首を取り上げて、

『この兇器は被告の所持品に相違ないか』

『相違ございません』

『被告は何故にマラーを殺す氣になつたか』

『かれが罪を憎むあまりに』

『マラーは如何なる罪を犯したのか』

『御存知の如く、佛蘭西の國中は今内亂の最中でございます。其内亂の張本人は、マラーではございますまいか。國家の危難、民の苦しみ、これ皆マラーの身一つから起るのでございます。で妾は、數にも足らぬ自分の一身を犧牲に供して、國や民の災の根を斷つて了いたいと存じまして』

『しかし、被告は女のことであるから、よもや一人で此樣な大膽な所爲に及ばうといふ企を起すことは出來まい、屹度被告を敎唆した者があるに違ない、其男の姓名は何といふか』

コルデーは恨めしげに判官の面を見つめて、

『これは又た異つたお尋ね、此度の事は全く妾一人で思ひ立つたことでございますから、敎唆どころか、夢にも知つて居たものはなからうと思ひます。妾は

今迄一緒に居た伯母にさへ、英國へ行くと申して欺して來た位でございますものを』

『それでは、被告はカンの市を出立する時には、マラーを殺さうとは思はなかつたのか』

コルデーは少しく色を變じて、

『マラーを殺さうと思へばこそ、遙々巴里へ出て參りましたのでございます』

判官は再び匕首を示して、『この兇器は何處から買つて來たのか、また巴里へ來てからは何んな人々と交際をしたのか。また被告の巴里に着いたのは木曜日だと聞いたが、それから今迄何をして居たのか云々』と尋ねた。コルデーは是等の訊問に對して、言葉もよどまず、明かに述べました。

其次の日も、また續いて公判は開かれたが、コルデーの答ふる所は少しも變らない。辯解のしやうによりては、幾らか罪が輕くなつたであらうけれども、毫も其樣なわるびれた根性がないから、判决は豫想の通り死刑ときまつて、即日執行といふことになつた。

天もこの若き女傑の最期をあはれと感じたのであらう、巴里の空俄かにかき曇りて、雷雨はげしく電光閃めきわたつた。コルデーは此あらしの中を車にて刑場に趣いたが、其通過する街々には、情けを知らぬ過激黨の賤民ども、散々に罵詈嘲弄を逞うして、今にも車をたゝき毀さむばかりの勢ひであつたけれども、コルデーは露ばかりも恐怖の色をあらはさなかつた。

車が刑場に着いた時、雨は晴れた。殘むの雲の間を洩るる夕陽の光に、花の如き顏を照らされながら、斷頭臺の石段を登りゆく少女が姿は、いたはしいとも、何ともたとへかたがない。やがて其いたいけ細首は、恐ろしき斧の下に置かれて、醒き風一陣、盛りの花はあへなく散つた。あれはシヤルロツト、コルデー、その類なき績といひ、そのあはれなる末路といひ、まことにオルレアンの處女と好一對の女丈夫である。（をはり）



西施

文學士　久保天隨

絳樹青琴などいふは、支那の美人であるが、ともに、黄帝の時の人であるから、唯だ名前が傳はつて居るだけで、如何なる事を爲た女であつたか、少しも分らない。末喜とか、妲己とか、褒姒とかいふのは、いづれも國を傾けた淫婦であるから、こゝに記するも穢はしい。西施も矢張その類であるが、幾分詩的の處があるから。例の如く、諸書を參考して、始終の略ぼ明かになる樣に、書いて見よう。但しその材料は、確實な者が少いから、折角書き立てた處で、先づ言ひ傳へ位に見て置けば好い。

　西施は越の國の生れで、美人であつたが、素生は頗る賤しい。苧蘿山下に薪を賣つて居た女だともいふし、紗を浣つて砧で敲いて居た女だともいふし、孰れが信であるか、今更決し難い。施といふのは、姓であつて、寰宇記には「會稽に東施家・西施家あり、施は其姓なり」と出で居る。何にしろ、會稽といふ處の一賤婦と見てさへ置けば、間違はない。本當の名は、世人が餘り知らぬ樣だが、夷光といつたとの事である。西施は評判の美人であつたからして、わざ〳〵錢を一文を出して見に行つた色好の男どもが門前に絶えなかつたとのことで、女兒亭といふ故蹟も、今に殘つて居る。莊子の天運篇には、西施が癪を病んで顏をしかめた處が、一層の美を加へたからとて、同じ里の醜婦が眞似をして、止せば好いのに、わざと痛くもない胸を抑へ、しかめ面をした處が、化け物としか見えないからして、里中の富人は門を閉ぢて出て來ず、貧人は妻子を携へて逃げ出したといふ話がある。これは固より拵らへた者に違ないが、西施の一顰一笑、すべて人の心を引く程、美であつたといふことは、これでも分て居る。

　西施は田舍の娘であるから、一體なら、其儘土臭い百姓の妻ともなつて朽ち果つべきであるが、それが呉王の妃となつて、兎に角、名を後世に殘す樣になつたに就いては、頗る譯がある。その初、越王勾踐が呉王夫差と

戰つて、大に負けて、遂に會稽の山に鎖ぢ込められた時、越の謀臣であつた范蠡、大夫種の二人が、さま〴〵に勾踐を説き勸め、一先づ呉に降參し、その後、時節を見計つて、今日の耻を雪ぎ、呉の國を滅して終まつたら善かろうといふことに决し、呉王の寵臣太宰嚭といふ奴に取り入つて、呉王に降參を申し込み、うま〳〵夫差をたぶらかした上で、猶ほ其心を亂し國政に怠るやうにしようとの事で、甚だ卑劣の手段であるが、美人を選で呉國に送ることにして、國中を隅々まで探がした處が、幸にも三人まで見つかつた。西施が筆頭第一で、其次のは脩明一名を鄭旦といつたが、外の一人は名が傳はらない。この三人、姿こそ美麗であるが、根が田舍に生へ抜きの女であるから、派手な都の手ぶりに馴れず、折角呉宮に、送つた處で、直に愛憎を盡かされて終まうと善くないと云ふ所から、此に種々の藝を仕込み、行儀作法を習はせる必要が起つた。そこで、之に羅穀を着せ、敎ゆるに容歩を以てし、三年經つて、やつと世の常の宮女といつても愧かしからぬ位になつた。その地

は、美人宮といつて、古蹟が今でも越國に殘つて居るとのことである。かくて范蠡が之を送つて、愈よ呉に行くことになつた。その途中、西施と范蠡とが密かに相通じて、後に其子を生んだといふ説もあるが、眞僞の程は知れない。何は兎もあれ、西施は一朝にして呉王の宮人となつて、寵を得るやうになつた。太平記には、西施を越王の后だと書き立てた上に、范蠡涙を流して申しけるは、誠に君展轉の思を計るに、臣悲まざるに非ずといへども、若し今西施を惜み給はゞ、呉越の軍再び破れて、呉王又兵を發すべし。去る程ならば、越國を呉に併せらるゝのみならず、西施をも奪はるべし、社稷をも傾けらるべし。臣つら〳〵計るに、呉王淫を好み色に迷ふこと甚し。西施呉の後宮に入り給ふ程ならば、呉王之に迷ひて政を失ふこと疑ふところに非ず。國費え、民背かむ時に及びて、兵を起し、呉を攻められなば、勝つことを立どころに得べし。これ子孫萬歲に及びて夫人連理の御契久しかるべき道となるべしと、一度は泣き、一度は諫めて、理を盡して申しければ……」と

あるが、其本は何處から來たものだか、頗る怪しきが上に、頗る世間に流布して居る書物であるから、こゝに一言その誤たることを斷言して置かう。

かくの如く、越王勾踐は夫差の心を馬鹿にする爲に、美人を送つたところが、元來あまり賢明とはいはれぬ吳王は、うま〳〵其計に乘せられ、其喜は譬ふべき者のない位で、之を椒革の房中に置き、人が見るといけないと云ふところから、細珠をつなぎ合はせて簾をこしらへ、朝には下ろして日の光を遮り、夕には捲き上げて月を待つ樣にした。西施以下の美人が、其中に並んで坐を占め、熒熒たること明星と疑ふばかりなる鏡を開いて、夕化粧を整へる樣は、どんなであつたろう。竊かに窺ふもの、動心驚魂せざる無しと書いてあるのも、至極尤な事と思はれる。この外に、吳王は工事を起して、姑蘇臺をこしらへ、三年かゝつて出來たが、周旋詰曲、橫に亘ること五里とあるから、素張らしい者であつたことは、言はずと知れて居る。その臺中には官妓千人を置いたが、猶ほ滿足しないものと見えて、別に名さへ艷なる春宵宮といふを建て、そこで長夜の飲を爲し、千石も這入る酒船をこしらへ、天池といふを掘つて、池中には青龍船を浮べ、其上に妓樂を陳し、今で言へば端艇競走の樣な水嬉といふ遊事を西施とゝもにやらかした。游宴荒淫のさまは、これで十分に知れるが、本はといへば、美人の色に迷つた結果であつたに違いない。奢るものは久しからず、春の夜の夢の如し、猛きものも終に滅びぬ、風の前の塵に同じといふことを引いて來るのも、古めかしいが、吳國の末路は、實際此外に出ぬのである。夫差は、大忠臣であつた伍子胥を殺して、奸臣太宰嚭の言ふなり次第になつて、宴樂奢侈の爲に、民力を消耗したのみならず、譯もないのに兵を起して、晉と戰つて、大負に負けて、やがて逃げて歸るといふと、間もなく、越の軍兵が江水を渡つて來て、姑蘇の臺上、曉の夢の醒めやらぬ中に、早くも亡國の末路、悲しい運命に出遇つた。そこで兜を軍門に脱いで、越王に降參を申し込んだが、赦されない。止むを得ず、自殺して終まつて、さしも今まで豪奢の盛を極めて居た宮

殿樓閣は、悉く取り毀され、淺茅が原の露深く、秋風身にしみて月の光の隈なき夜など、牡鹿の妻戀ふ聲のみが哀れに聞えて居たといふことである。物色荒涼たる呉中の地は、その後、長く詩人が詠古の感慨を發する處と爲つて終まい、目ざましかりし綺羅の名殘は、僅に小草の花の色香に殘るばかり、これも涙の種であろう。

この時に西施はどうしたかといふと、越兵の亂入するを見ると、あはたゞしく之を樹の下に避けて、今まで恩を受けた呉王の最後に遇はなかつた、簇がり來る兵士どもは、非常の美人、神女かと疑はるゝばかりなるに見惚れて傍に寄り付つものもなく、それで命を全うした。それから跡はどうしたか、善く分らない。恙もなくて故國に送り還へされたといふ説もあるが、越王勾踐は、かゝる美女は又ぞろ人の國を傾くることがあると可けないといふ心配から、己が爲には非常な大功のあつたにも拘はらず、無慘にも之を江水に沈めて、殺して終まつたといふ説もある。晩唐の皮日休が、館娃宮の五絶の中に、

響屧廊中金玉歩、采蘋山上綺羅身、不知水葬今何處、
溪月彎彎欲效顰、

とあるのは、この異聞を述べて、絶代の美人が終を善くしなかつたのを弔ひ、兼ねてまた勾踐の陰險を嘲つた者である。若し之を眞とすれば、西施は生れ付いて來た標致の好かつたのが因果で、空しく勾踐の手玉に使はれて、その陰謀奸策の犠牲となつた上に、罰を以て功に報ゐられたもので、千古の哀くらべ物も無いといつても宜しい。人生莫作婦人身とは、取りも直さず、此事である。

また范蠡と相通じたといふ説を主張する者は、越が呉を滅ぼした後、范蠡は大に悟る所があつて、越王に辭し、五湖に泛んで去つた時、この西施を載せて行つたと云つて居る。この范蠡は、御存の通り、貨財の道に功者であつて、後には億萬の財寶を累ねて、陶朱公といつた人であるからして、西施は此に目出たく金持の御内儀となり澄して、思ふまゝの贅澤をして、結局呉宮に居るよりは、氣の詰ることがなく、却つて安樂に世に過ごし

たかも知れない。かくの如く、諸說紛々として居るから、孰れとも決定することが出來ない。（なはり）

王昭君補遺

天隨生

本誌の第三號に、「王昭君」と題した簡單ながら聊か手數のかゝつた一篇の傳記を揭げたところが、同じ月に出た帝國文學第七卷第三號に、同學の友人飯田龍泉氏が「漢魏六朝の女子文學」と題せる未完の長論文中に、一章を設けて、同じく昭君の事蹟を論究せられたのも、不思議であつた。同氏の書かれたのも、本はといへば、僕のと同じ材料から取られたに相違ないから、大體に於ては誤謬などあるべき筈もないが、枝葉の末に亘つたところでは、少々ながら、材料の取捨に就いて、僕と見を異にした所があるらしい。だからして、こゝに極めて短かく、之を批評して置いて、兼て僕の自說の基礎を明にして置きたいと思ふ。

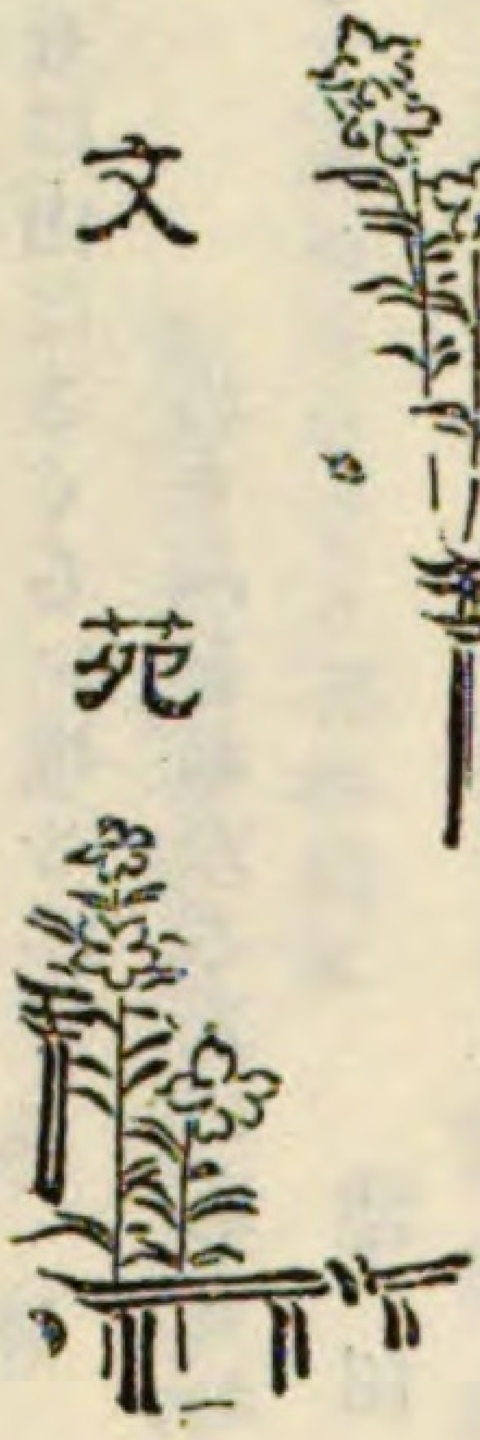
昭君入胡の事に就いては、別に言ふこともないが、氏が引かれた西京雜記は、何だか孫引らしい。漢魏叢書本で半枚もある所を、僅々四十字ばかりに縮めて、「昭君獨り賂はず、乃ち惡しく之を圖す、既にして遂に行く」とせられた手際は、凄しいが、原文の意味がはかくの如き者では無い。「獨王嬙不肯、遂不得見、匈奴入朝、求美人爲閼氏、於是上案圖以昭君行、」とあるのを見れば、一枚の畫が二度天子の覽を經て、昭君が不幸の基となつたので、僕は氏の如き書き方を以て、誤解を招からしむるものだと思ふ。世に愼重なる態度を取つて紀述をするものは、かゝる事をしては成るまいと言ひたいが、氏の意見はどうだろうか、聞きたいものである。

氏は昭君が子を生みし事を記して、前漢書には一男伊屠智牙師を生むといひ、後漢書には二子を生むといひ、兩說相合はずといはれたが、これも亦た、十分に前漢書を精讀せられなかつた過失ではあるまいか。なる程、昭君が呼韓邪に嫁して一子を生んだのは、御說の通りだが、それからその直次に呼韓邪の死を記した一段を見れば、昭君が雕陶莫皐に嫁して二女を生んだことが書いてあるではないか。して見れば、後漢書は後の事だけ特記したのでもあろう。そう見れば、「兩說相合はず」とも言へない。

次に氏は昭君が末期の事に關して、元の馬致遠の漢宮秋を擧げて、「黑龍江に至り、江に投じて死す」と、事々しく一の異說として書かれたが、これは甚だ笑ふべきものである。何となれば、漢宮秋は元代雜劇の一つで、その中に書いてある事柄は、全く作者の想像で出來たからである。僕はまだ其書を見ぬから、善くは知らぬが、何でも毛延壽を漢の宰相として、這奴が當時宮女であつた昭君に叶はぬ戀の怨恨から、とう〳〵匈奴へ追ひ遣るやうなことになり、昭君はその薄命を嘆いた餘りに、江水に投じて死んだといふような事であると聞いて居る。こんな者は、さても正史の傍證にならない。早い話が、譬へば陶晴賢の事を記するとき、材料を馬琴の美少年錄から取るやうな者さ。これは困學紀聞の注から引かれたのであろうが、何にもならない事である。序であるから、一言加へて置くが、漢宮秋は西洋に知られた支那戲曲の中の最も古いもので、その英譯は五十年も前に出來たとのことである。Notes on Chinese Literature といふ本にも、何か書いてあつたと思ふが、二三年前獨逸人の著した何だかの短い論文の中にも引いてあつた。この戲曲の原本は、元曲百種の中にはあるだろうが、何にしろ、世間に珍らしい者たることは、事實

である。

僕は昭君村の奇俗を書くことを忘れて居たが、これは氏の紀述に因て、少なからぬ利益を得たから、其儘こゝに引いて、前に書いた傳記の補遺として置かう。それはどう云ふ事かといふと、昭君村の住民が、女を生むといふと、必ず艾を灼いて、場所もあろうに、わざと顔に灸を据ゑ、折角の代物を玉なしにするといふことである。その譯は、昭君の様に、天然の姿色すぐれた御蔭で、禍に罹ることがあつてはならぬとの主意で、豫防の爲めにする事である。白樂天の詩に「至今村女面、燒灼成瘢痕」といひ、韓子蒼も亦た「寄語雙鬟負薪女、炙面謹勿輕離家」とあるのを見るも明かで、この風俗の唐宋の頃まで傳はつて居たことも從つて知れる。世の常の愚昧極まる田舎人のわざくれだと言つて笑へば、夫れ迄であるが、昭君入胡の一事が、いかばかり天下後世の同情を牽いたかは、これで愈よ分かるとも云ふべきである。この外には、最早何も云ふことはないが、僕は此に博捜旁羅の前に聊か足らなかつたのを、一言謝して置かう。（をはり）



文苑

随意荘十二勝の内

和歌

濹上櫻雲　侯爵　蜂須賀茂韶

隅田川こなたの岸にたゝずめば
　つゝみはてなき花のしら雲

同　伯爵　松浦詮

隅田川ながきつゝみの春風に
　たなびく雲はさくらなりけり

同　子爵　黒田清綱

つくばねの雲につゞきて角田川
　つゝみの花ははて無かりけり

同　男爵　千家尊福

すみだ川ながき堤にあくがれて
　いこふ木陰もさくらなりけり

殘雪　大和田建樹

咲きぬやと訪はるゝ梅の下かげに
　春はづかしく殘る雪かな

行路柳

もえ出てし春べに見れば道のべの
　朽木は去年の柳なりけり

春風（竹柏園歌會兼題）

見わたせは山はさくらに埋もれて
かすみをわたる春のあさかせ
伊藤貞子

野も山も花さきぬらしおほかたに
ふきくる風もかにゝほひけり
池田愛子

窓ちかき花にねふれるてふ〳〵の
つはさもなひく春のあさかせ
湯淺八重子

花鳥のいたらぬくまもはるかせの
ひろきこゝろは變らさりけり
中島石子

昨日けふみとりいやますむき畑に
さゝ波よするはるかせそふく
佐原貞子

中村文子

たかとのゝおはしま近く花ちりて
みやひめたてり春のゆふかせ
松浦しま子

はる風のさそはさりせはさくら花
匂はさらましちらすそ有まし
山崎とね子

櫻ちるみなみのまどの戸をあけて
衣ぬひをれははるかせそふく
伊東やす子

なつかしき花のにほひを誘ひきて
風こそはるのつかひなりけれ
加藤ひな子

なかき日を花にくらして歸りくる
たもとにかろしはるの夕かせ
菅原たま子

少女子かかすむかた野にすみれつむ
たもとゆたかに春かせそふく
荒井萬子

たなひきし霞はきえてかすかやま
いたゝきさむくはる風そふく　　清水麿子

雪をれぬやなきの糸もゆるくふく
春のかせにはうちなひきけり　　矢田英子

いまはとておのか常世にゆく雁の
つはさにさむし春のゆふかせ　　長島英子

うちなひく柳のいとにしられけり
ふくとしもなきはるの朝かせ　　設樂御幸子

さゝやきて風わたるなり花の枝に
ねふるこ蝶もゆめさますらむ　　小杉蝶子

たれこめて物思ひをれはちり方の
にはのさくらに春かせそふく　　平澤若子

小山田のはにふの小屋も春くれは
みやこにおなし春かせそふく　　伊東益子

草の上に遊ふもうれしのとかなる
春の野かせに身をまかせつゝ　　佐々木雪子

こん春もまた來む春もはるかせの
のとけき園にともにあそはむ

和文

第三竹柏會の記

石榑千亦

蔽ひわたりし夜來の雲全く晴れたり、散りがたの花の梢に朝日うるはしくにほひ出たる四月十四日、今日はわが佐々木信綱大人の竹柏園立ならす人々が、第三回親睦會開く日なり。一昨年のはじめての折、去年のふたゝびの折にも雨雲のおほひかゝりしに、今年も亦すゞろなるめをや見むと、憂ひたりし心の雲さへ名殘な

くはれて、すが〱しさいはむ方なく、自ら勇ましくなりて、正午よりの會にえも待たずて、朝とく車やるに、猶もどかしさに堪ざりけり。

今日のみは散りしながらにおけ、拂はずもがなと思へど、日本橋倶樂部と襟に白く染抜きし法被着たる男數多、池のまはりのこゝかしこに幕とりて立てり。塵の中に埋むることかと惜しみ〱庭に下りて、露けき芝山の方に出づれば、提灯臺幟竿棧敷などしつらへり。今日のこの爲かと問へば、明日この奥に鎭ります和合社の御祭なれば、其備へしつるなりといふ。さては同じくは、提灯もかけよ、旗も立てよ、幕など張るべきは張らずやなどいへば、笑ひ〱幕の手を動かすに驚きつゝ、水に浮べる水鳥の、水すり〱彼方の隅に飛び去りたる、靜なる朝のさまなり。

室の内外の淨め終りし頃、店にあてたる文字燒の女主、田樂屋澁茶の主人など來て、取々に位置を定めて、何くれと作り初めたり。馴染のしんこの翁も來りて、室の隅に、白き紅き黄なる緑なるしんこの塊を出して、是をちぎり彼をちぎりて、指少し動かすよと見れば、既く物の形の實らしく現はれ出づる、巧み似非歌人の死歌には優れりけりと見とられぬ。

葛籠三個、板數枚、柱數本、包一個の大八車は、門につきぬ。清水晴風氏は次て來れり。けふの餘興の飾物なるべしと見てあれば、つぎ〱二階に運ばれて、板と柱と組立てられ、包の中より取出られし氈をおほへば、只時のまに殿はしつらはれ、男雛女雛はさも睦ましげに思なげに打すえられて、徳川時代より今日に至るその歷史は、不言不語の中に物語るものあるが如し。

會主と夫人の君と印東君などの來られし頃なりけむ、何處にか瀏喨たる音樂の聲きこえて、面白く樂しく君たちを迎へ、君たちを祝ふもの、如し。心樂しければ物皆樂しからざるなはし。天地の樂しさをこゝに集めて、塵に穢れぬ天つ少女の雲の上に其樂に和して奏づらむ心地さへせらるゝよ。

長押の上に綱ひきて、栞かけならべたり。和書漢書洋書のとり〱なるは、五色の紐のそれに映えて、美しさ

いふ計なし。かの山水は、かの鳥は、かの草花はなど、畫のとり〴〵なるが如く、とり〴〵に思ひのぞみて、この籤の幸あれかしと祈る人多かるべし。幹事委員大かた來集ひし頃、會員も追つぎ來りて、雛の前菜の下、文字燒しんこ細工の邊、こゝにもかしこにも一團つゝつどひあひて、心々に品さだめすらんが如し。

京に在る會員はいふも更なり。遠き國よりふりはへ來られしも少なからず。或は熊野の海あらき海路をはる〳〵に渡り來ましゝ奥村夫人あり。男にてもたゞにてはえも思ひたつまじきを、ふかきあつき志ならざらましかばといとなつかし。或はみちのくの長き鄙路の車かりて、故郷の花を後にしたるもあり。或は印旛の沼のほとりより來つどはれし會員の、草靴のまゝにて、井のもとに行き、足うちすゝぎて入り來りたる、或は八十の老翁にして、杖にもよらず吉見の里よりものせられし、何れか會を思ふ眞心より來らざるものある。かくて二百數十人の會員は、上にも下にもみち〳〵ぬ。

かねて定めおきつる時到りて、開會を報ぜらるゝや、會主立ちて謝辭を述べらるゝに、我も人も心の内に萬歲を唱し、わが此會の幾十の春かけて今日の如く樂しく面白く盛に大きくなれかしと祈りぬ。次に委員の報告ありて後、大塚文學士は、衣裳の美學といふ演題のもとに、二時間に亘る講話あり。諄々として教堂に立ちて學生に教ふらんが如く、いと懇切なり。要は、衣服の色摸樣よりは其形につきて論ぜんといふより説起して、西洋服は重に着る人の躰格を示し、日本服は其運動を示す傾ありといひ、いま日本服改良論の盛なる時にあたりて、衛生上經濟上などの點よりのみ見て、審美學の點より見る事なく、古來發達し來れる日本服の美を失はむは遺憾なりと結びぬ。婦人の會員などは殊に耳傾けしなるべし。次に下田歌子君の短話あり。なほ尾崎紅葉氏の演説あるべかりしかど、時いたく移りて、庭の遊のいかならんと、そは來ん年の會に讓る事として、其事述ぶべく壇上に登られぬ。天氣のよきは何よりの事なりと、何とはなき事も面白くをかしく述られて、倦疲

れたる滿座の頤を解きぬるに、さすがなりけりと人みなめでまどふ。

兼題春朝の歌、文臺に堆く成れるに、こを悉く披講せんには時いたくうつりぬべしと、委員は立ちて會主の歌をのみ披講せり。

　夜はあけぬ春の光はひろごりぬ
　　あたらしき色あたらしき聲

宜春光みちわたりたるこの會の中に、この天籟に接することをいかばかりうれしと、鶯の初音よりもげに心にしむるもの少なからざるべし。

空を霞めし噴水はしばしとゞめられぬ。池のこなたに寫眞機すゑて、齋藤紫白氏は立てり。池の汀にも山の上にも充わたりたる袴振袖など、只一つの硝子にちゞめ入れぬめり。この美はしき色をも併せて映し出すべき機械の出來よかしと祈るは、あまりにふくつけき望なりや。

噴水は再び上がりぬ。人は彼方此方さまよひぬ。ビール店をはじめて、鮨店櫻餅店など、下戸は下戸、上戸は上戸と所々に群がりよりぬれど、量なきに亂れず、序なきに禮あり。店預かれる委員のきわめたる心盡しに、誰しの人かあつき喜びをきこえざる。殊に櫻餅の店には、歌人見立の地口繪などかけたるに、意を用ひたる跡みんと、皆人よりつどひ見上げぬ。

店のひらくると共に餘興ははじまりぬ。三宅氏の狂言、萩大名、歌あらそひ、いづれも時にふさはしく、一蝶齋の手品、平氏の薩摩琵琶、いづれもおもしろくおかしきに、コップ片手にのぞき込むもあれば、上にあがりて見聞く人もいと多かり。

とある椽側に人の垣をつくりて、右におし左におすに、何事ならんとゆきて見れば、かの得し栞短冊など、高く積みたる机によりて、苦しけに筆とれるを見れば、紅葉の君なり。あまりに數多きに、もて來し順によりて、書くべく定めたりと、頭かゝへられしなど、中々に興ありけり。

日の暮れなんとするに、櫻に竹柏會のしるしつけたる短冊結付けし花簪、圖にて得つる栞、文字燒しんこ細工

など、苞とり〳〵につゝみ、竹柏會誌の二集さへ併せもちて、思ひ〳〵に別れゆくに、會主夫妻の君は玄關に立ちて夫々におくられぬ。

かゝやきそめし電燈の下、店は大かた閉されて、竹の串櫻の葉など亂れ殘れるに、今日の圓居の盛なりし跡著し。音樂は猶絶えずきこえて、我爲に終をよくせむとするに似たり。さるにても來集ひたりし人々は、今しも家に歸りつきて、父兄子弟の間に、いかに睦しくいかに樂しく一日の快樂を物語るらむ。いでや又來ん春も今日の如く天氣もよかれ、今日にもまさりて盛なれなど會の前途を祝ぎつゝ、思出草にいさゝか記しおかん哉。

くはしき記事は委員峯百合子ぬし物すべく、又演說の筆記は雜誌心の華にのすべし。兼題の歌のうちにておもなるものを擧ぐれば、

野も霞み山もかすみて朝づく日　萬里小路通房
　ほがら〳〵とさしのぼるかな

うぐひすに夢さまされてたぐる戸を　末松謙澄
　おそしとやうつ花のひとひら

さめぬれどいまだ起出でず眼を閉ぢて　三浦守治
　しばしたのしき鳥のねをきく

窓あけて花のおもわに向ひ居れば　末松生子
　かすみににほふ春のあさかぜ

さくらさく花のやよひはおのづから　西升子
　なれし朝いもせられざりけり

子らつれてうしろの岡に今日もゆかむ　竹屋雅子
　あしたのどかに小鳥さへづる

黃色色のこてふとなりて此あした　印東昌綱
　はるの女神の野邊におりたゝす

佐々木雪子

うらやまし霞むあしたの大空を
　ひとりしめてもなく雲雀かな

山わけごろも（中）

佐々木信綱

かくて爪さきあがりの道をのぼりゆく。朝風肌へにしみて、雞の聲をちこちに聞ゆれど、家々は未だ起いでぬに、大なる籠の黒う煤けたるをおひて、四人五人打つれゆく。いづこにと問へば、こゝより二三里の山奥にいたりて、燒たる炭をはこびくるなりといふ。

奥山のみねの炭やきすみがたき
　世にあるほどのたづきなるらむ

花ある方をとて、そこはかとなくたどりゆくに、坂路と樵路と別るゝ所あり。

二かたに道わかれたりとぶ蝶の
　あとを追ひてや花をたづねむ

麓の方を下りて しばしゆくに、畝が畑に物する道のやうなりと、ともなひし大竹ぬしいふ。さは坂の上にいでむと、折曲りたる道をのぼるに、小笹まじりの菫れんげなど、朝露を帶びて咲みだれたり。のぼりはつれば此里の墓地にして、今こし道は、あはれなる家びとの袂そぼちつゝまうづる道なりけり。新らしき卒都婆も見ゆ。かたへの櫻今を盛と匂へり。花を訪はんとて、かゝる境にいたりぬるも、他生の縁ならずやはと思ふまゝに、一首をたむく。

さきみてる花の木陰の奥つきは
　千代のねぶりも安けかるらむ

もとの道を歸りて、竹林院にものす。いにし明治十二年の春、わが父の伊勢松坂にありしほど、をしへ子長坂綱矩藤村景嘉をともなひて、こゝに宿りゐし事ありき。さるを長坂ぬしまづ世を去り、父も藤村ぬしも、おくれ先だち皆なき人になりぬ。

をしみけむ花の命はながくして
　をしみし人のなきがかなしさ

そゞろに昔の春こひしうなむ。庭なる老木の糸櫻は、

枝ゆたかにたれて、見る人の心をもつなぎとむる梢なり。築山の上には例の山櫻にはあらで、赤みを帯びたるぼたん櫻なり。未だみし事あらぬ花びらの大きさなり。かの老木は世を夢と思ひさとりし世捨人の、静に大空をあふぎたらむ如く、この若櫻は、いさみはやれる丈夫の朝日をおびて軍のにはに出たつが如し。いづれをいづれとかいはむ。こゝを出て、堀ぬしの音づれよといひし喜藏院にいたる。院主は宮城宏年とて、五十路あまりにやあらむ、まめやかなる人にて、いたく喜ぼひ、奥まりたる室に導きぬ。窓のもとに花さき満ち、鶯しば〳〵鳴て、我身塵の世の外にある心地す。松浦弘ぬしの、名ある人々にあとらへて物せし書畫帖、また人々の短冊などもてきて見するに、足代翁の、千早振人を千早にふせぎけりといへるあり。菊地容齋の、吉野にてと端書せるもあり。歌は忘れにたり。我父のは、吉野山櫻がもとに袖たれて花見るけふを我世ともがな、といへるあり。この院は大峯に詣づる修業者の坊にて、院主はをとつ年の熊野の奥がけ、三十六先達のうへなどを、いとつばらに語らる。心とまるふし少なからず。又こゝかしこをさし示して語らく、維新の前までは、此方の田のくろにも、彼方の山そひにも、花いと多かりき。さるを年々に切りて、杉檜をのみむねとし侍るは口惜ききはみには侍らずやと云ふ。げにも貝原翁のかゝれしものに、既に昔より劣れりといひ、菅笠日記にそをひきて、又おとれりといひ、今はたしか少なうなりゆきては、四十年五十年の後には、いかにかあらまし。

吉野山老木のはなのしたかけに
　杉苗うゝる世にこそありけれ

藏王權現は殊に此花をしもめでさせ給ふかとや。いかにうれたみ見給ふらむ。

心あらむ人うゑつぎて更にまた
　吉野をはるのやまとなさなむ

蕨芹など、所につけたるあるじまうけ、いとねもごろなり。何くれと語らひて立出むとするに、院主のいふ。ふりはへ訪ひませるを、かゝる山中とてまゐらせむもの

なし。唯此二くさをと、取出せるをみれば、いと大なるほら貝なり。こはあまた年の山ぶみにとりならして、から紐もきれ〳〵に口もそこなはれ侍りつれど、まろらするなりといふ。今一くさは庭の花の咲そめしを、小瓶にさせるなりけり。都には大小の天狗多う侍れば、いとよきたまものなり。わがめなるは、

三吉野の山さくら花をりかざし
まつらむ人のいへづとにせむ

風なさそひそといひつゝ、河西市松をやとひて出たつ。市松は、松浦ぬしをも、金鑽神社宮司堀越ぬしをも識りて、みやびの道に志あるに似たり。殊にわがかねて一度物せむと思へる、大臺が原の案内をいとよく知れれば、道すがらの物語興ふかし。並木の櫻咲亂れ、老木の杉しみさびたてる下道をのぼり〳〵て、行幸の芝のあとに古へをしのび、雲居の櫻のあなる茶屋にいこふ。山の片そはにたてる家なれば、遙に金剛葛城の高嶺をのぞみ、近く高取の城跡、吉野川の流を見渡し、吉野の町はた、目の下にあり。やまとといへる國の名もしるく、あるは連りあるは打ひらけたる群山のさまを見むと、双眼鏡取出て打見やるに、茶店の老女いはく、昔こゝに遠めがねを置て、まれ人の慰めにし侍りしを、高取の城より、かくては城のさま一目に見えて、いかゞなりと、いとかしこういましめ給ひき。其城は今はかたゝに殘り侍らず。さても變り侍る世かなと、昔がたりくづしいづ。櫻は竹林院の庭なりしに似て、いま少し枝ひろごりたり。花はめでたきものから、かのこゝにても雲井の櫻さきにけりと、ながめさせ給ひしにはあらで、貝原翁の芳野圖に、瀧櫻とあるやこゝならむとおぼゆ。世尊寺のあとにいたり、三郎の鐘をつき試るに、千年の歲猶殘れり。又山路をのぼるに、ほじろこゝかしこになきをり。此鳥は一筆啓上仕候となくと童べのいふ鳥なり。さてもたがもとに遣る文のはし詞ならむ。女どちのふみならむには、あまりにまめだちたらずやとあやしむに、また一筆啓上仕候とやうにさへづる、いとをかし。水分神社に詣づ。白木づくりにて神さびたる御社なれど、人はこゝまでは來で、老人一人

さびしげに守りをるのみ。鈴屋の翁は、此御社の申し子とて、數多たび詣でられしかば、翁のかき給へるものありやと問へば、さるものはしり侍らずと答ふ。いと口をし。御社の傍に、杉の葉芝などをさゝげたる小さき社あり。名をとへば芝神といふ。杉の葉は三輪のたぐひにや、しれる人にとはまほし。はるかの谷を左に見て、坂路をのぼるに、金峰神社あり。お前の櫻、風にさそはれむとす。

　　大峰やなも當來の大導師　いまこの花をまもらせたまへ

義經の蹴ぬけしといふけぬけの塔を見、山路をのぼるに、平らなる所に出たり。愛善の茶屋にいこふ。風のわたりはげしければにや、屋の上におしぶちしたり。こゝより夢み川見ゆ。故郷なる伊勢の高見山も見ゆ。右に折れて四五丁ばかり下れば、かの苔清水なり。岩がねよりわきいづるをむすびわぐるに、清くつめたく、心の底にしみとほる心地す。西行庵は山の半腹にありて、山のたゞずまひ庵のさま、げにも圓位の君のすみ給ふべきところなり。近き頃植ゑたりとおぼしき櫻さきみちて、鶯の谷わたりする聲も、きゝなれぬ耳には珍らし。

　　言の葉の道のひじりの跡とへば　いまもにほへる山ざくらかな

　　しづかなる君の心にかなひけむ　ふかき谷間のうぐひすのこゑ

　　よしの山君が言葉をしをりにて　まだ見ぬ花をけふ見つるかな

　　山彦のよべばこたふる聲ならで　こたふる聲もなきいほりかな

　　よしの山雲ゐる峰をたどりきて　人のこゝろのおくも見しかな

こゝに來ししるしにとて、庵のかたへなるみ山しきみを根とじて歸りくる道に、日かげのかつらのはひまつはれるをみて、市松にとりてよといへば、此けつねのたすきを何にし給ふといふに、いとをかしうて。

　　山姫の雲のうてなにつかうとて

狐のかくるたすきなるらし

水こひ鳥なく。此鳥なけば雨ふるべしといふ。

谷にひゞく水こひ鳥の一聲に
峰のしばびとそらあふぐなり

旅の命毛（其四）

中村秋香

九日けふのさつた山こやへきに道またはるけしとてつとめてこゝをいづ、雨日韶光盡、南風暑氣微かきくらしふる雨に風さへくはゝりて道のほといとわりなし、巳の時はかりに富士川を渡り、川の名はゆかしけれど常さへことくしき流の、よべの雨こちたきにいみしう流早くおそろしきこと思ひやるべし、

ふじの根をきのふ晴間にみそめすは
けさ立道の雨やうからん

たれも同じ思ひなり、山も雲に埋み、水鳥の立ゐも見えす、からうしてうち渡りつゝ、むかひの屋の人ゝ休みて旅衣しぼりもあへず、午の時過る頃こゝちよきかせ少し吹出、雲も所々あかうなりて小さめになりぬ、四方より白きけぶりたち覆ひて、賤か蚊やりふすぶるやうなるを、何ならんとみるに、大虚より雲のおりきてはるかの山の根にをさまれるなりけり、さりや女のものしらぬこゝろには雲は大虚よりいでゝ嶺にもうちおほふと思ひしは愚なりけり、管見にて造化のはかりしるましきもさるものにて、何にまれ世のさまをこゝろえずおしはかりに思ひめくらすこそ、しれものゝわざぞかし、其品にわたり、その程をみてこそ、萬つことわりをは知らるれ、童蒙政をとるとひじりのをしへ給ひしも、司馬氏の普く山川をめぐりしも、今ぞ思ひしらるゝ、さつた山こゆるほと空はれわたり、八重雲ども いつちいにけん、更になし、雨のなごり山道なめらかにて、たかう細きを登る、いとあやふし、上萬仭山、下有千丈水蒼々雨岸問、闊狹容一葦、いまた夜ならねとも黒巌昏々として風なきにも白浪おこれり、春にもまがふ四方の氣色、ゆるらかにうちふくかぜに、浪の面はなぎわたれど、わ

か行道はおぐらくて波の音おそろしう、岸にたてる巖にくだけちるさま、雪をふりかけたるやうなるに、千丈の下を臨めはおや志らずこ志らずなど云は、こゝらなるべしとぞ思ひやらる、峠にいたりてくら澤と云に休む、名にも似ずいとすれ〴〵ときよげなる樓にて、海づらはるかに見渡さる、青山簇々として水茫々たり、ひろ〴〵とはてもなくたゝみを敷たるやうなるに、いづち行らん眞帆かけて走る船ども行かた霞に立かくれたり左には幾重もうちかさねたる山々の見ゆるこそ、きのふ越にし箱根なれと人の敎ふるを、げに故鄕は山のいくへをへたて來ぬらんと思ふもいとかなし、山のふもとにかすかに煙たつみゆるは何ならんといといぶかし元弘建武のみだれよりみちのくにたつけふり有とは聞にしを、かう志づけき御代にはこれやあまの鹽やくならんといふ、彼戀しき君よ、いかにと見あくれば、きのふのけちかき姿には似ず、いと遠くて美しうすそは八重山に隔ちつゝみかゝれ出たる、淸らにいさきよしともいへばおろかなり、こゝは海道第一の氣色とぞ昔より人もめつるなる、浪うち際に子どもあまたあそびて何やらん拾ひつゝたはふるゝに、少しおとなびたる人出來てものいひたれば、おいといそへてやがて海にいりつゝ行、なにするにかと見るほどに、十けんばかりおきのかたより、一尺はかりの丸きものを水の中よりとりいづ、人々みて神代の目なしかたまならんとわらひつゝ見るに、そが中に手をさし入てあわひふたつ三ッとうでゝもちていりぬ、めづらかなりと思ふ時もうつさず、このもの調しつゝさし出たる、いとつぎ〴〵しうをかし、皆むれゐてまうぼり食ふもいと人わろきこゝちにそある、かく萬づめなれぬ業の興あるに時もうつりぬ、人々にそゝのかされて出てゆく〳〵眺むるに、あまの手業もよくみゆ、名にたてる三保の松はら左につらなり、右は不二の根、愛鷹山、浮島原、淸見か關、薩埵、興津、田子の浦翠巒靑々として滄浪洋々たり、うちあふけは木々の若葉はうすくこくみどりして、梢にかゝる糸ゆふ下しみる孤舟かすかに漕つれたる、ゆくあり、歸るあり、秋の木の葉の散みだるともみゆめり、よし原なは

ていそき行く旅客のすかた、催馬樂の聲々、さなから書圖の中にあるかとまてうたかはれつゝ、及はぬひなのみそひともしは中々なるこゝちして、かへりては騷人墨客の心をいたましむるはしなるへし、清見寺は常に神君のたちよらせ給ひしみてらなれは、過しがたく詣つゝ先本尊ををがみ奉るものから、ましてむまや路にひきたかへて輿人境不レ接寺門向レ山開やまのをとこ出むかへてみてらのかたしけなき故をのべつゝ、神君の染させ給ふおほん筆の跡よりはじめ、草々のほうもつどもをかみたてまつる、清見關の戸ざしの木もてもやの鴨居にうちつけられたるが、白川の少將都にみつかの有し時こゝにたちよらせ給ひて、關の木一かけを乞とられしとて、ひきはなちたる跡など見ゆ、王右相の牡丹の畵もあり、けにことなる筆の行方いとめかれせす猶あまたの寶物、古代のさゝへの具、うるまの島人の繪かず〳〵多けれど、こゝろあわたゝしければまかでぬ、けふはさき〳〵かゝつらひありくに思ひの外に時うつりつゝ、鳥のねくら求る頃國府につく、國のかみよりつかひ有、所々のおくりものなどやどりいとさわがしけれど、こなたはよろつのどかなり、いづくの精舍か鐘の聲もかすかに聞ゆ、夕暮うち曇り雨催ひなる空の、さしむかひたる雲間より朧々と見えわかぬ不二の姿のあてやかなる、つく〳〵と打眺むるにも、こをだに此頃のなぐさめにはしつるものを、あすよりはまた何をかとおもふもいとかなし、始知爲客苦不及在家貧とうちずんじて寐ぬれど、おきつ浪高していもねられす、

　かへるてふ名もなつかしき波の音を　ねられぬまゝにおきつゝそきく

うち思ひ出るまゝなるべし、

十日思ひの外に空うらゝかになりて、東風緩らかにそよきいでゝ、彌生の心地ぞする、をしわけ方の馬の嘶き鈴の音、漁舟の篝火消方なるも、げに唐歌をそ思ひ出らるゝ、遙にかすむ繁山、春の色をのこさて、今一入に青みわたる、木枯の杜の梢は名のみにて、ときはの姿生かさなれり、佳侘ぬれけ木枯のもりの下露とや消はてぬべき人間の一世は只朝露に同じきをや、いつまた故

郷に立かへりつゝなつかしと思へる人〻をもみむなど、よろづ覺束なきほどを倩〻と思ひつゞく、前途程遠思ひを雁山の雲に馳せ、後會期遙なり纓を鴻臚の涙に霑ふとうちうめかれて行、此頃になれぬうるはしき國の樣にて土の色よりはしめ木立家居つき〲しう青麥は霞めるまでにうゑ渡しつゝ、きのふの雨に所得たる民ども打集ひ、荒田うつさまこと所には似ずいと清げなり、千町田になく蛙の聲かしましう、はたものゝ杼うつ音しけし、かの箱根なる山田かへしゝものとは顔のうるはしき、聲のつやある、なへて擬ふべきならず、げに國の廣狹、人の厚薄浮沈も、またこれをかれとの民のことくならん、萬つ天爵とかいふもの有て、その人一世は定めあれば、おのれが好惡もてうごかし難きわざぞかし、よろづあめの理にまかせて嘆くましとぞ思ふ、卯の時安倍川を渡る、川水もはやからず、のどかなる日影に人々かち渡りなるべし、むかひに輿をたてゝ人々わたるを見る、いと興あり、日沈紅有影風定緑色波、わたりはてゝすぐに休む、そのにきはしきこの頃海道にめなれず、この渡りのものとて丸き餅ひに豆の粉をひきてそうる、下衆とも口引たれ打喰をるいと淺まし、向ひに小高き山作りて杜鵑花いと多くうゑたり、青柳の糸長やかに打垂れて　にあたれる嬌婦の眉に、春の山の色を見せ、唇は三月の艶花を押つゝ、こゝらめなれぬ瀟洒の姿、紅粉いと濃かにて打ものいひつゝ、よしめきたるもたゝならず、かたへの旅客酒たうべて何やらん戯れなどするを、ひきそばめつゝ打笑ひたる面地、なべてこの頃の山姫にはたがひていとめやすし、手越の千壽少將などいひしはこゝらの人ときく程に、そのなごりにやといとなつかし、誰家の紅樹か先發花何處青樓か有酒沽の句まつ思ひ出らる、爰を過つゝうつの山にかゝる、蔦の細道も有といへど、かきたえかよふ跡もみえず、供なるわらは一人三人かちより行くを、輿ちかけれはやよ蔦楓ある所にぞ、心して求めよと密かにいへば、とく心得つゝはしりて見ありく、彼方こなたの山々には岩つゝじいまを盛に紅おてりまされど、楓なん一木もみへぬ、蔦はいと多しとて、青やかな

るぞ少し色有もさま〴〵とりて是をだにと云ひて、おし包みてふるさとに贈る、この蔦のかたち例にはたがへる物ぞいと多かる、夢にも人に逢ぬとは昔の程ならん、けふはことに晴わたりたれば往來いと志げし、僧の鼠衣きたるがふたりまで逢たれど志るべならねば故さとの文のつてもかきたえたり、きしかたを思ひつゞくれば世かはりて兀々都〻夢かと疑ひ、昏々として半は是愚なり、今日山中の人、明日滄浪の身、夢かと思へばうれしくてさりて故郷にあるかとすれど、さむまじければ幻ならまじといとかなし、

　ふる里を出てや夢のうつの山
　　うつゝともなくたどる山路か

下りはてゝ横倉といふに休む、晝のおものなど人々しばし時をうつすわらべの海草の白き赤きをうる姿は、みるめ海草に均しきつゝれ打着たるがいとほしくて、あれ多く求めよといへど、かゝるものを何にかとて聞もいれぬずさいとにくし、こゝは唐の蘭の葉いとうつくしきをかりそめにあまた植たる葉は、青くほそくて三尺はかりそある、關の東には是をことさらに弄びつゝ物に植、根に土かひ、風にあてじ、雨に濡さじとて打蔽ひしつゝ、母屋の廂のうちに養たつるを、かう長やかにひろこれるはげに風土ならましとぞ見る、蔦の細道の名殘しるくいときびはなる女、蘿の美しきものに入て商ふもむかし覺えて常にならずをかし、こゝを出て岡部を過ぐ、わさ田は名のみにてまだ荒田だにかへさず何にまれ古へのこと草にはみな違ひにけり、ふるきと新らしきとかう變りゆくにつけては人の心もたゞ古きをうしなひ、あたらしきにつくなど賢愚美惡よろづにうつりゆく、輕薄の流風をぞうちなげく、横打繩手いと長くてあふみが淵ときくはおそろしう青みて草生たり、まがねふく黃色たつものゝ物賣家にあまた重ねたる、何ならんと思へど例のとふ人なければたゞ過に過行く

（以下嗣出）

歸雁のかげ

鹽井福子

とぶとりのとくかへりきて櫻花
　　またながめんと云ひし君はや

おと丶しの先きつ年より戀ひ奉りし兄夫妻の君の、やう／＼都に歸りましぬ。母君も伴はれ玉ひぬ。あはれ、いつくしき父君はや。春には必ず待たれて歸へる歸雁の、うらやましき古里人に、今日たま／＼なりにたるを、悲しきは父君の歸へり玉はぬなり。あはれ、人生は如何なる露のよりにしものぞ。一昨年、都を立ち玉ふ折りは、人にすぐれて御壯健に、快活にわたらせ玉ひて、中々は去年今年の御命とは、かけても見えさせ玉はざりしが、流石に今生の別れなりけん、始終笑みつ丶おはせし御中にも、殊更に汽車の窓より見送らせ玉ひ、福子勉强しつ丶待てよとて、こぼされ玉ひし一雫。しばしの旅寢の門出に不吉の淚はかけじと、妾も忍びに忍びし淚の、いつかわき出で丶、悲しさに前後も覺えず立ち別れけるが、何には忍びけん、思へば、今生の別れ、御顔の見をさめ、御聲の聞きをさめ、思ふがま丶に泣きもすがりもすべかりしものを。今もなほ其の折りの御姿の、ありありと目に見え、御聲の耳に聞ゆれど、それぞと思へば、またおぼろなるぞ、うらめしき。あはれ、其の折り今少し心ありて見送りおかば、さだかなる御姿のあり／＼と我が目にとゞまりもすべかりしを。悔やしきよ父君、いかやうにかへらぬ旅に出で立ち玉ふと知りませば、いかに志したる書の道あればとて、から衣ひとりは立ちもとまらざりしものを。父君が生前に疾くこの腕をみがきあげ、眞實の御ほめ言葉にあづかり、花に月にその折りにこそは伴れだ丶めと思ふ心を力にて、獨りは忍びてとゞまりしものを、うらめしや父君勉强しつ丶待てよとは、いつの世をさしての御言葉ぞ。悲しき父君、なづかしき父君、慈愛深かりし父君、戀ひしき父君、いつくしき父君、數ならぬ身を、春花のやさしくせんとては、野邊に百花を尋ねさせ玉ひては畫がく我が筆の手本とせられ、とく錦を飾らせんとては、秋はぎ、花す丶き

手折り來て、我が色どる筆のしるべとせられつ。學びの友の來りて、共に書がかんとするに、紙筆にはかにほしきと云へば、人をばつかはて、自から走り玉ひ、かつて我がために飼ひし鶯、我が留守のほどに仆れしを、我れに知らせじとて、そつと飼ひかへさせ玉ひなぞせられし幾春のみめぐみ、幾秋のなさけ、露ほども報い奉らざりしくやしさ。樹靜かならんと欲すれど風やまず、妾もとより親を養ふべき身にはあらねど、とく成業して、其處の山川、父とたづさはり、彼處の月花、母とつれだゝん、そをのみ思ひ出てもなきうき世のまつ事として學びもつとめもせしものを。福子、この不老のさまを、汝が筆にものしてよと盃をとられて、ほゝ笑ませ玉ひし夕毎に、はやく成業して、げに父と母とのすこやかなるさまを、高砂の翁媼にたゞへてもうつさましと、さる事をのみうき世のなぐさにながらへ來にたるを、情なや、無常のあらし。一年をまたずして、父君はみまかり玉ひぬ。母君もまたいたくよわらせ玉ひたり。嗚呼果敢なきや、人生。

高砂の翁媼といつかんと
思ひしものをあはれゆめの世

今年も花は同じ色に咲きぬ、柳はおなじみどりによりぬ。戀ひしき父君はや、なづかしき父君はや。

誰がために今は咲かなん春花と
めぐしたゝれし人はなき世に

我が世の春は絶えにけり、あはれ、歳々年々花は咲くべし、誰とたづさはらん。我が世の春は絶えにけり、誰がために春花と咲かん。誰れに錦をよそほひて見せん、我が世の秋もまた絶えにけり。もはや筆とるもうつとうしく、たれこめて一間にのみ一年はかきくらしぬ。あづさ弓春立つと共に心を引きかへし、志したる道は向はんと、師の許へはじめて行きしかど、とかく氣すゝまず埋れはてし二月の半ば、にはかに我が古里人のかへりきますとのおとづれ、流石に飛び立ちて迎ふる新橋ステーション、勉强しつゝまてよとの玉はれしおとゝしの人はや、汽車のまどより見送らせ玉ひて、志ばしがほどぞとの玉ひたるその君はや。

學藝

燕の話

女子高等師範學校教諭　藤堂忠次郎

此の五月になれば、軒端には最早、燕が巣に居るところを見るであらう。燕は四月には見えるもので、全躰、何處から來るであらうか、南方の暖かな國から幾百里の間海も山も越して來る。そーして九月頃になれば又その南方の國へ立ち去るのである。丁度雁の去來と反對になる、その理由は雁の寒さを好むとは全く違つて燕は温暖を求めるからである。燕の身躰は實に僅の寒さをも感ずることが出來る、しかしながら極熱も亦好まないから、南方へ去るといつても無暗に遠方へは行かない、それで先づ燕の好む處は寒くもなし亦餘り暑くもなしといふことである。

燕は實に地に居るよりも、飛んで居ることが多い、それだけ彼れは翼を用ふることが多い、用うることが多いけれは、よく慣らされてそれが發達するよーになる。どうも彼れの翼は身躰不相應に大きくある、その代りにその足が小さくある。此のよーに翼が發達すれば、飛ぶことが容易で、左程には疲れない。それはかりではなく頗る速く捷く飛べる、文章の上に人が身を轉すことの速さを形容して「飛鳥の如し」といふも、講談師が刀劍の切返の早きを「燕飛の刀」といふも、皆燕の飛翔が如何に速く如何に自在であるかを表して居る。現に彼れが路の上に殆ど土に觸れんばかり飛び往くところを、誰かが惡戲に獲物を手にして、之れを打ち止めよーとしても、恐くこれを仕遂げることが出來ないではないか。又彼れが今地上低く飛んで居つたかと思ふと、瞬くの間に空天に上つて、只黑一點ともいふべく小さに見える。勿論全く地上に止まらないではない、しかも雀のよーに、時々地の上に仕事をして居る、砂などを掘ぢくつて居ることなどもある。それは何の仕事をして居るかといふに、虫を食べるのである。

彼れは虫を食べる、しかも翅のある小虫を好んで食べるのである。蚊の如き、五月蠅の如き、其の他こがねむしの如き、蜂の如きさへをも取つて食べる。實に彼れは生涯昆虫と闘つて暮して居る。彼等の人間を常に苦しめるところの害虫は、其の數の殖えることは非常なもので幸に燕等が之れを平らげてくれるから、どのよーに我等が恩惠を受けて居るか計られない。いたづらなる少年は無慈悲にも、飛びつゝある燕に銃口を向けることあるが、今それを捕つてその嘴を開いて見よ。彼れの口中には黒い團子のよーな塊が一ぱいに這入つて居ることがある。それをよく吟味して御覧、無數の蚊がウジ／＼として居るのである。それは彼れが飛びながら一つの蚊を取れば口内にとゞめて置いて、又次の一つを取るから、積もり／＼て此のよーな塊が出來るのである。そーしてこの通りにするは、つまり子供のために巣に持つて歸へるのではあるが、人間に利益を與へることは兎も角も大したものといはなければならぬ。世にはいたづらに、米麥や果物を盗み食する害鳥は隨分多いが、しかし燕のよーに害虫を平げてくれる鳥類も、亦少くはないものであるから、國の法律として無暗に之れを捕り殺さないよーに禁じてある。

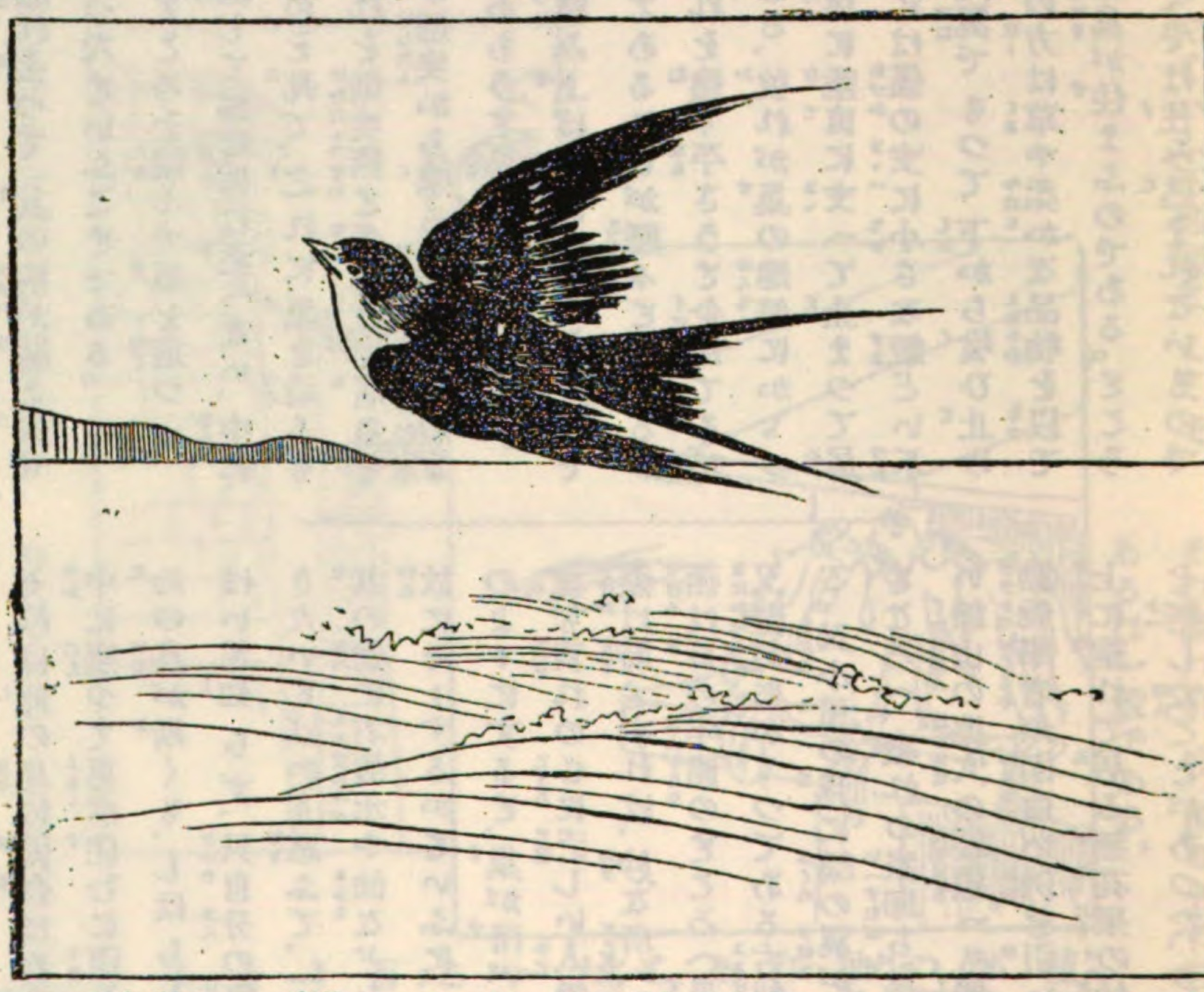
こゝに燕が昆虫を捕る中にも、面白いことが一二ある。彼れは五月蠅の今や水邊にて繭より出でゝヒヨロ／＼として居る所を狙つて、さも愉快らしく其の群りの中へ飛び込んで漁り喰ふことがある。それから又時とすると、蜂の巣の近傍へ出沒して、蜂が其の巣に出入する所を目がけて巧に之れを打ち取ることがある。不審議にも彼れは雄蜂をばかり捕つて、决して工蜂などへは喰つてかゝらない、これは自然と工蜂などには恐ろしい毒劒をもつて雄蜂には之れがないことを辨へて居るからである。

燕はこのよーに飛びながら、昆虫を取り食らうものから、その道具が實に都合よく出來て居る。それは彼れの口である、即ち彼れの口が身躰の小さいに似ずして、非常に大きく開くことが出來る。實際は其の嘴は甚だ短かくて、寧ろ濶い三角の形をして居るけれども、其の口

元が眼の下まで深く裂け入つて居るから、大きく開かれるのである。それだから飛びながら、狙違へず昆虫を飲み捕ることが出來る譯である。

誰か燕の肉を食べたものがあるか。或る人が物好にも之れを料理して試みに食べて見たが、其の味は一種いふにいはれない厭なものでそれにチヨツト甘諸のよーな香のすることもある。何せよ昆虫や他の動物などばかりを食物として居るものゝ肉は、皆此のよーに食べられないものである。

燕は子供の ときから、之れ



を飼つて置けば、慣らすことが出來るもので、殊に彼れ等の移住の時を通した後には一層其の家を戀ひ慕ふよーになる。どうしてかといふに、彼れ等の兄弟が遠く暖地を求めて立ち去るに自分は非常に苦しんでその地の寒さを堪へ忍ばなければならぬ、然るに飼主が之れを傷はるから、それを恩として服するのである。燕は寒さ暑さを感覺する力は實に精密なものであるが、コレラ病の時に於ては丘も驚ろくべき程である。現に外國の或る市にて、チヨツトコレラ病の現はれたとき

に、燕等が忽ち其の市を離れ去つて、其の病が滅え失せるまでは立ち返へらなかつたといふことである。

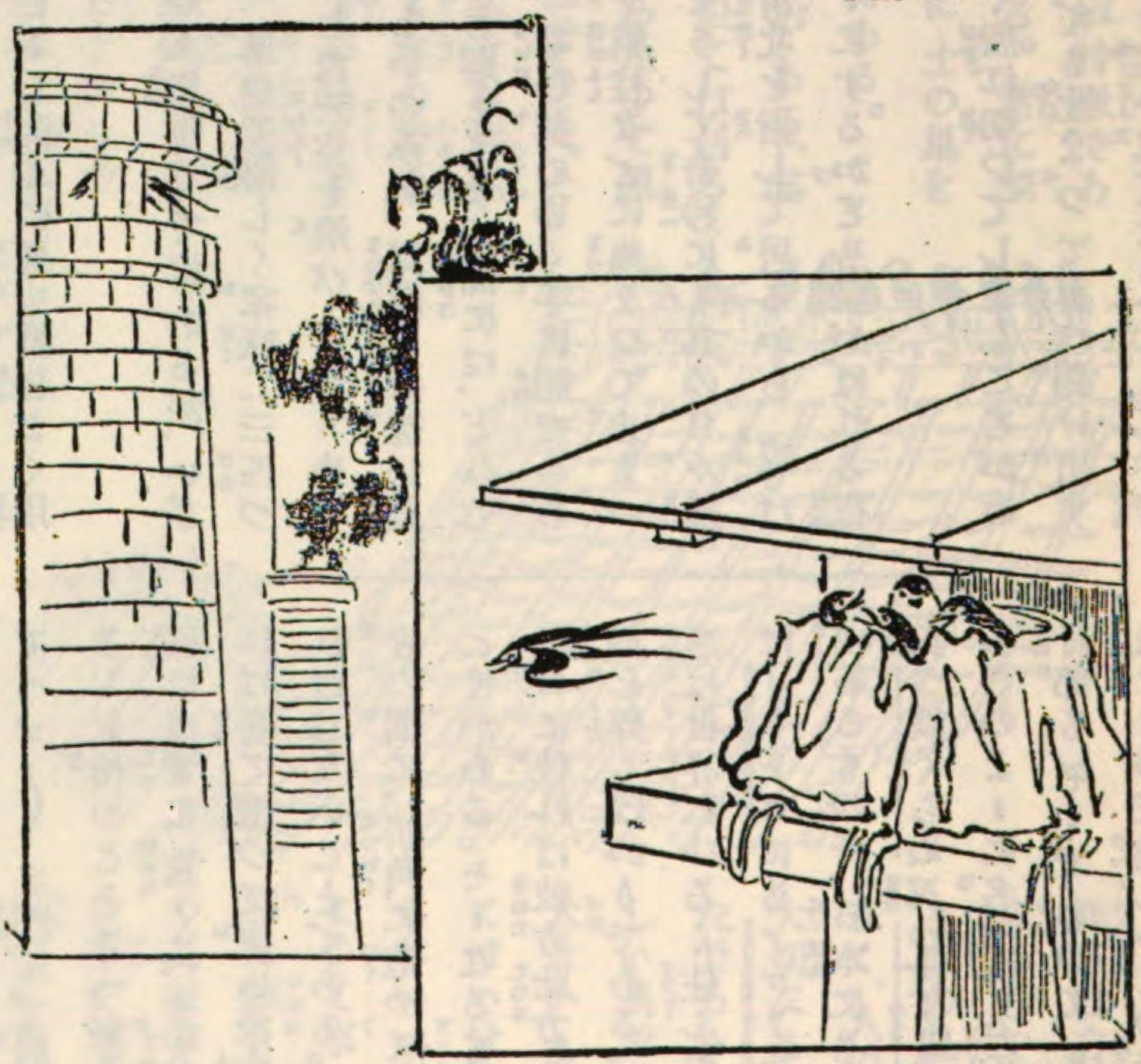
燕は風や雨を避けられるところを撰んで巣を造つて、一旦所を定めたならば、決して無暗には更へない、中には常に烟突の不用なるものを見て、之れに巣を造るものがあつて、西洋では、これを烟突燕と名づけて居るそーである。恐らくは近傍の烟突から來る温氣で、このよーに惹きよせらるゝのであらうと思はれる。

巣は外の方は泥や粘土で積み上げてあつて、その口でもつて拾つた塊の積まれてあることが歴々と見えるがしかし彼れは居るべく之れを塗り平さうと企だてるだけが亦、愛らしいものである、彼れが巣の建築にかゝつて居る間には家の壁や烟突に垂直に支へて止まつて居ることが屢ゝある。それには僅の支に小さな鋭どい爪を立てゝ、それに自分の尾翼でもつて下から喰ひ止めてするのである。巣の内の方は草や柔かな品物を以て裏づけてあつて、これに雛鳥が住まふのである。ところが一度住んだ後はそのまゝでは住み込まれないものでそれは此の鳥に似合はぬ大きな蝨のよーな虫が、此の中に殘つて再び住むに適しないからである。

此の鳥が斯くも、しほらしく巣を造ることを愛する人はいざ知らず、只自分の家の外の壁を奇麗に保つて行きたいとばかり思ふて、一向鳥には無頓着の人は、屢ゝ其の壁に石鹼水や油などを塗り付けることをする。何故にそーするかといふに、垂直になつて居る壁には、そのよーにすると、巣が滑べつて附着かないからである。でも哀れの心に乏しい人ではないか。

燕は時とすれば、妙な所へ巣をつくることがある。或る燕は戸の半開のところへ巣を造つたといふ話がある。又壁釘にかゝつてある古帽の中へ巣を造つたこともある。又小屋の戸に鵯の翼が、ひろげて懸けられてあつたところへ、彼れの家即ち巣を設けたといふ話もある。古い鑛山の掘穴の縦道へも屢ゝ之れを造るそーである。動物學者が面白い例を引いたことがある、それは池の上に垂れて居る無花果の枝の叉に巣を造つてそれに雛を孵したことがあつた、つゞひて其の巣で卵を產んだ

が、今度は何も孵へらなかつたといふ不思議なことである。燕は一年に二度も卵を産むとがある、そのときには二度目の雛はやゝともすれば親に棄てられて無殘にも飢死することがある。これは故らに親がするのではないが、其處に居れば段々寒くなつて來て、も早堪へ切れなくなるからである。時とすると、其の幼弱い雛をどーしても成長くさせよーと思つて暫らく出立を延ばすことがある。しかしそれは極めて罕なことである。そーしてその雛が充分に生ひたつて既に旅行だちをしなければならぬようになればその雛は終夜柳などの枝に立ち切りで暮らすことがあるは一般である。



籠にでも入れられて、閉ちこめられることがなければ、霜の寒さあることを知らないは彼れの常である。少しでも彼れの身に寒あるを感ずれば、そこで其の住家が適しないことになるから、温かな地方へ大引越をしなければならぬ。いよ／＼大引越をしよーとすることになれば、彼れ等は幾百幾千といふことなく、群がり集まつて、何事か熱心に囀りつゝある。多分これは長途の旅行をするものであるから、仕事の會議を開いてゐるらしくある。そのためには大寺などの屋の上が常に集

り塲にせられるものである。その棟瓦の上、四方の縁などが彼れ等の居並んで首をさし向ふに最も都合よく用ひられて居る。

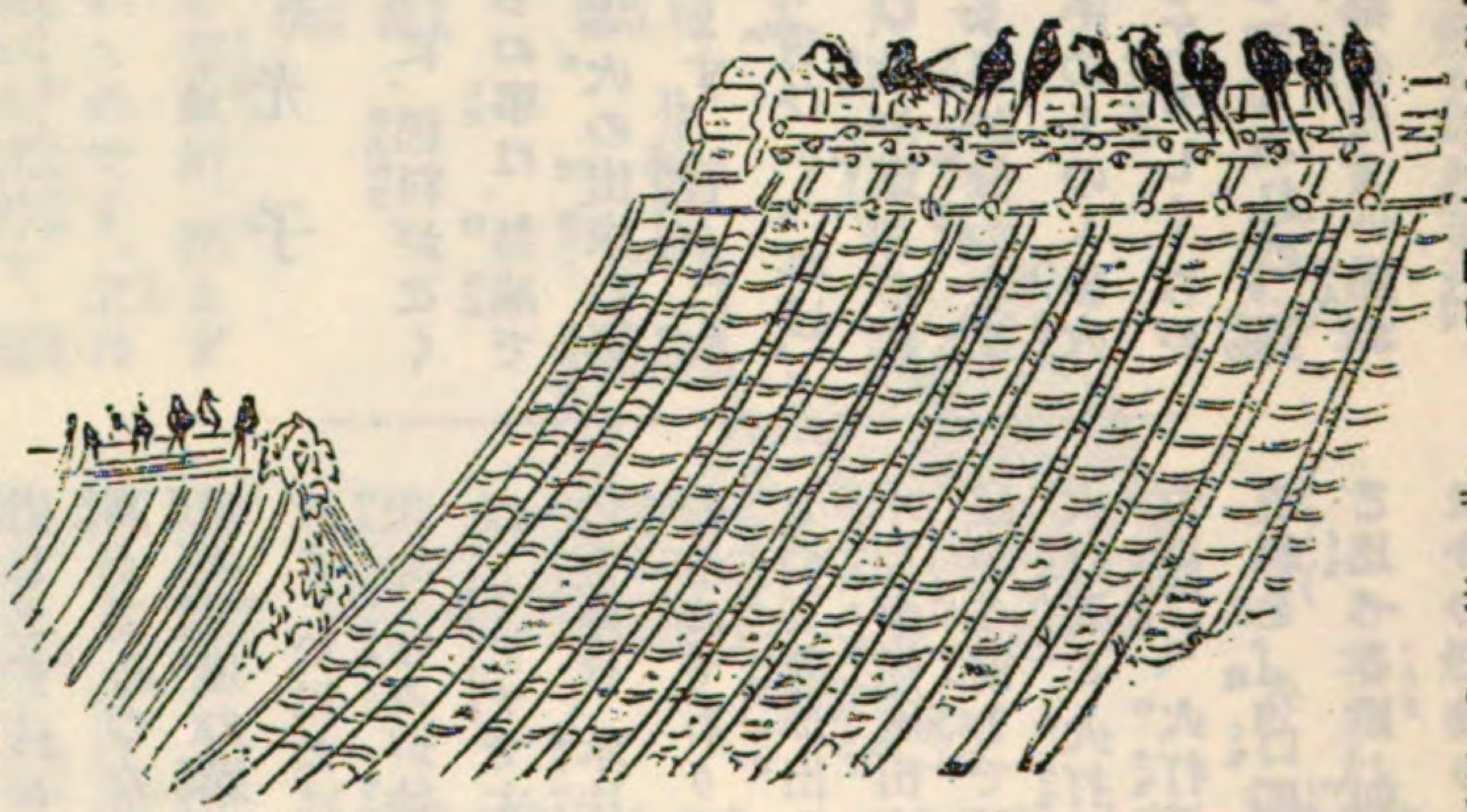
このよーに彼れ等はむらがり集まるではあるが、いざ出立といふことになれば、反つて淋しく家族二三匹づゝが相連れ起つて、茫々とした天空を飛びかけてゆくのである。こんなにも勇ましいのみか、又頗る敏捷い鳥であつても、廣い〳〵大洋を越えてゆく間には、どうしても疲れるを免がれない。幸ひ其のゆく手に船でもあるを見出さうならば、その帆柱などに集まつて止まつて休息することがある。そうして奇妙にも其の日々飛びゆく方向は殆ど正しく南北を指して居るから、或は磁石の流に從つてそのよーにするかとも疑がはれる程である。

時とすれば、彼れ等は全く疲れ切つてしまふことがある、そのときは小船の縁へでも止まつて再び翔け出すせいもない、誰れかそのとき追ひ立てようとすれば、辛うじて小船の一方から他の方へ飛びゆくのである。どうかすると、疲れの極は波の上に漂よひて、翼をひろげてへン〳〵と浮んで居つて、そーして疲勞の回復へさるゝを待つことさへがある。

彼れは實に驚くべき天性をもつて居ることがある、それは嘗て造つて置いた古巣をよくも記えて、決して忘れはしないことである。時とすれば、彼れの引越しの留守の間に、折角に造つて置いた巣が失なはれてしまふことがある。そーなると如何彼れは哀れではないか、日に日に彼れは彼方此方へ飛び廻つて古巣を尋ねるに、心を碎くばかりである。

燕は世界にひろく住んで居るもので、日本に居るものはイギリスにもアフリカにも居る。種類もずいぶん澤山あるもので、日本にも四五種はある。通常のをつばめ又つばくらめ又つばくろといつて、翅の黒いところからこのよーに名づけるのである。その黒色は又頂部も背部もそーであつて、そーして黒いところには皆青い光をもつて美しいものである。尾も黒いがそれに白い斑が少しづゝ入つて居る、胸も腹も白くて、額と喉部と

は栗色である。そーして尾羽は深く二つに分かれて居る。別にいはつばめといつて、脚には爪のもとまで白い短かい毛を被つて居ることが特徴である。尾は深く裂けないてある。常に深山の岩石にとまつて、それに土の巣を造るから、此の名があるのである。又とつくりつばめといふのがある、其の姿はよく通常のつばめに似ては居るが色はちがふ。額から背にわたつて黒く、頭の側面と腰部とは栗色である。その名のある理由は其の巣のかたちが宛も徳利のよーで、泥を以て人家の檐下にこれを造る。日本では南方の島々で之れの居るを見るけれども、北海道では未だ見たことはない。その外にすなむぐりつばめ又せうどつばめといふのがある。夏になれば見るが、しかし多くは見られない、甚だ小さな鳥で尾は殆ど裂けて居ない



ほどである。海邊又は河ばたの砂の中に横穴をあけて巣を造る性質があるものである。

我々は右の通り燕の御話をして、隨分珍らしく思はせたつもりである。しかも此の鳥は珍らしいといふばかりではなく、人の生活上にも衛生上にも中々大切なものであるといふことは分かつたであらふと考へる。小さい見すぼらしい鳥でも、其の關係する所は存外に大きいものであるから、疎忽に見すててはいけない。ましてそれが中々しほらしい所があるだけに、益々愛らしくなつて來るものである。世の無學の人等は燕を忌み嫌つて、彼れは決して捕つてはならぬ、何ぜといふに直と我々の家を燒くからであるといふて居る。何のことかサツパリ分からぬが、兎に角燕は保護鳥の中に數へられて居るから無暗に捕るこ

とは出來ないのである。

火の話

女子高等師範學校教諭　岡田光子

◎火の燃ゆる理　火が燃ゆるには、第一に、燃料がなくてはならず、それから空氣もなくてならぬ事は、無論である。しかし、この二つの條件だけでは、火の出來ぬ事は、吾々の日常の經驗で、よく知れて居ます。吾々は火を作る場合には、必ず燃料に點火する。言ひかへれば、燃料に熱を加へるのであります。されば、物が燃ゆるには、ある一定の温度が必要であると、いふ事が分かります。この物が燃ゆるに、必要な温度を、そのものゝ發火温度と申します。發火温度は、物によつて著しくちがひがある。即ち低い温度で、火を取るものもあれば、高温度を要するものもあります。使ふに都合のよい點からいへば、勿論、發火温度の低いものが よいのですが、亦さやうのものは、一方には危險の恐があります。たとへば、燐などいふものは、六十度位の温度があれば、燃え出しますから、誠に危い。さりとて、全く發火温度が、高くてめつたに火を取らないものも、困ります。だから發火温度の適當なといふ事は、燃料に大切な、一の資格だと、いはねばなりますまい。

現今、吾々が物に發火温度を與へるために、用ゐるものは、マッチです。マッチは、外箱に燐と砂とを混ぜたものを附け、木片のさきに、燃えやすい物の粉を、膠でつけたものであります。その木片を、箱にこすると、摩擦によつて熱が出る。その熱で燐がもえると、從うて、藥や木片が燃え出すので、極めて便利な物です。つひ三十年ばかり前までは、この重寶な物が我國になかつた爲に、火打石と、火打鎌と、火口との三つの物で、火を作りました。即ち、火打石と火打鎌とを打ち合して、火花を出し、それを、火口に移して火種を作つた者です。今のマッチと比べると、如何にも時を要する、不便な、携帶にも厄介なものではありませんか。

さて我々はマッチを使うて、物に發火温度を與へると

は、申しましたが、一二本のマッチを、直ぐ薪や石炭の處へもつて行つた處で、それらの物には燃えつかない。そこで、我々は鉋屑や、コッパに火をうつします。これらのものは、熱をよく導き去らないものだから、火を點けた處だけが、おきに發火温度に達して、火をとるからです。かくて、鉋屑やコッパが火を取れば、其の熱で、薪や石炭も熱せられて、發火温度に達するのであります。炭でも、堅炭は起こりにくいが、消炭はおきに起こり、大きい炭と、細かいのとでは小さいのが、おきに起こるのは、皆熱の導き方の、良不良にあるのです。



◎火を盛に燃す法　之は、前の事から推理すれば、直ぐに分ります。即ち空氣の供給を、十分にするといふ事で、新鮮なる空氣が、絶えず火のそばへ流れて行くやうにすれば、いゝのです。之は經驗上、我々のしてゐる事が多い。御爨が火吹竹で、釜の下を吹き、七輪の下を煽ぎ、我々がランプにホヤをきせ、ストーブに煙突をつけるのも、この爲であります。ホヤも煙突も火のまはりにある熱してゐる空氣（熱してゐる空氣は輕いから、昇る性がある）を、導いて早く上昇せしめ、從うて新しいのを下から來させるやうにするものであります。だから、ランプにホヤをかけると、燃燒が十分に起こつて、光明の度が増し、煙が出なくなるのです。其他、炭をつぐ時に、間をすかせるのも、ランプの心の扁平に出來てゐるのも、亦空氣の觸れる面を、多くする爲であります。火勢を弱くするには、前と反對に、空氣の流通を少なくすればよい。ストーブや七輪の下の口を閉ぢたり、炭火に灰をかける等は、この理窟にあうてゐるのです。炭火に灰をかけると、空氣は灰の氣孔から、徐々に通ひますから、火は消える事なく、永く保存せられます。

◎火を消す法　之には、いくらも方法があります。炭火を火消壺に入れる。燈火を吹き消す。石油に火が移つた

時に、蒲團などを被せる。薪に水をかける。等で、何れもそれ〳〵理由があります。

第一第二のは、空氣の流通を、止めるといふ方法です。第三のは、發火溫度以下にするのです。風を送るのが、火を盛に燃すのに、大切だといふても、冷たい風が急にいつて火を發火溫度以下に下げるやうではいけません。第四のは、一部分では發火溫度以下にし、一部分では水蒸氣を以て火を圍んでしまふ方法です。

こんな事は、つまらぬ事のやうですが、心得てゐると居らぬとでは事のあつた塲合に大して損得があります。ある處で、誤つて火を失した處が、其處に居た一人の婦人は、周章狼狽して、にわかに窓や戸を押し開いて、如何にもして、早く逃げやうとしました、その爲に、火勢頓に加はり、猛火炎々凄じい有樣になつて、あはれ、その婦人は、逃げ路を失うて、大困難を致しました。然るに、今一人の婦人は、其の塲合にあたつて、急いで窓の戸は勿論室の戸々固く閉さして、空氣の流通を路を塞いで、さて徐ろに繩を以て、まづ下女を下ろし、其上で二人の子供を下ろして、下女に渡し、その後、自分も其處を出て危難を助かつたといふ話があります。

◎火の効用　火の効用、いかにといへば、第一に指を屈するのは、その光を與へる事であります。我々が光源として、火に負う處頗る多う御座います。光明赫々たる太陽も、夜はその姿をかくして、咫尺も辨ぜしめぬ時にその代理をしてくれるものは、燈火ではありませんか。光がなくては、何物も見ることが出來ない我々は、もし燈火が無かつたならば、如何ばかり、あの永い夜を空しく過ごすでせう。又いかばかり不自由な事でせう。次には、それが熱を與へる事であります。我々が火を用ゐて、種々の食品を食ふに、適するものにかへる事を、うるのも、寒冷なる水を、溫湯にかへる事を得るのも、その他、室を暖め、器械を運轉させる事を、得るのも、皆火が熱を與へるからではありませんか。即ち熱がそれらの作用をするので、その用も亦ひろいといはねばなりません。

熱について、我々の注意すべき事は、火を用ゐる塲合に

なるべく熱を徒費しないやうに、といふ事です。薪の火でいふて見れば、一番熱度の高い處は、炎の外焰であるから、薪焚きすべきものには、そこがよく觸れるやうにせねばならないのです。然るに、我國で古くから、用ゐてゐる竈は如何ですか。肝心な炎の先は、竈の外に出る事が多い。如何ばかり、熱が無益に出るでせうか。之だけでも、かの竈は不都合であるのに、その上に、煙出しも風を入れる口もありませんから、十分の燃燒が起らないで、炭素が燃えずに煙になつてたつ事が多いのです。之は一方には不經濟であり、一方には煙が空氣に交つて、目にも、呼吸にも、甚しく害を及ぼします。ですから竈の改良といふ事が、極めて必要なのである。現今では、いろ〳〵學理を應用した竈が出來て、以上の弊を救ふ事ができるのは、喜ばしい次第であります。

一軒の家でも、高價な薪を使はないで、比較的低價の石炭やコークスを、使ふことの出來る、改良竈を用ゐたならば、一年の中には、隨分費用を省くことが出來ませう。それが、一軒のみならず一國中の家が、皆使ふやうになつたらば、國の經濟の上にも、大きな、ちがひが出來やうと思ひます。



◎火と衛生上の注意　火は、光と熱とを與へる、大切なものであるが、亦之について、多少衛生上、注意せねばならぬ事があります。即ち、燃燒の成績物たる炭酸、その他のものについてゝある。あの炭酸は、實際、火のある處には必ず出來るものだのに、目に見えないものですから、知らぬ間に、密閉した室内などには、多くたまります。これ自身が、有害の物といふのではないが、之が多くなれば、空氣がそれだけ、混り物が多くなるのだから、我々が呼吸するには適當でなくなります。まして、人も空氣中の酸素を吸ひ、炭酸を吐き出すものであれば、人が多く、火の多

い、室内の空氣の不潔さは、どれほどでせう。こゝに於て、換氣法といふ事の必要が出て來ます。日本作りの家であつて見れば、窓のすき間や障子の紙から、空氣は自由に交通しますから、密閉してあつても、大した害もないやうなものゝ、やはり時々窓戸を開いて、空氣を交換させなければいけません。夜などは、永い間、閉めきつておくのですから、燈火を點じ、火を起こしばなしにして、寢るのはよくない。殊に西洋作りの家に於ては、尙更であります。

室内に空氣をよく流通させるには、それの出口と、入口とを作るのがよろしい。窓の左右、又は上下をあけて、一方から空氣が入れば、他の一方から不潔なのが出るといふ工合にする方が一方ばかり開けるよりも、よろしい。丁度ガラスのフラスコの中で、蠟燭を燃すにそのまゝでおくと、火は消えるが、フラスコの口を仕切つて、二つにすると、火が續いて燃えるのと、同理であります。

炭火などがよく起こつてゐる時に、青紫色の焔が立つ事がありませう。あれは一酸化炭素とて、やはり酸素と炭素と結びついたものですが、炭酸とはちがふものです。あれは激毒のもので、その毒に當ると、治療が出來にくいさうであります。ですから、火の起こつてゐる處に、顔などをかざしてゐるのはよくありません。

◎物質不滅の理　此の稿の始にかゝげた、「燃えたものは消滅したのか」といふ問について、一言して終へませう。薪や、蠟燭や、油は燃えて、目に見えるものとては、少許の灰を殘したのみですが、あれらのものは、天地間に消滅したのではない。たゞ形をかへて他のものになつたのである事は、之まで述べた事でも分つてゐます。實際にも、化學者がいろ〳〵の方法で試驗をして、天地間の物質は、消滅するものでないといふ事をたしかめました。之を物質不滅の理と申します。

それならば、あの燃料から出た、炭酸や水等は如何なるかといふと、あの水は多分空氣と共に高處に上つて、寒冷の氣に觸れて、雲となり、雨となつて、いつかは降つてくるのでせう。あの炭酸も、植物の葉に吸はれて、分

解せられ、炭素はその養分となり、酸素は空氣に戻つていつかはまた火の燃ゆるに使用せらるゝのでせう。かういふ工合に、天地間のものは、形をかへて循環してゐるので、昔から一分子たりとも、物質の増減した事はないのです。

これらの事を考へて見ると、轉た造化の作用の靈妙なのに、驚く外はないではありませんか。（完）

日本名蹟雜話

文學士　喜田貞吉

◎京名所、下　（山城の名蹟のつゞき）

前回述べたる所で、ほゞ加茂川以西の市中の名蹟は盡きたれば、今回は東山名所を巡覽すべし、東山名所は、南は伏見の稻荷神社に始まり、北は銀閣寺、吉田、賀茂に終るまで、其數甚多く、殆んど順々に引き續いて居る程なり、先づ一番南が伏見の

○○○稻荷神社　之は第二號にも一寸述べて置いた通り、稻荷停車場にすぐ並べり、之を伏見の稻荷とは云へど、伏見の市街は、今は之より二十町ばかりも南にあり、繁華の次第に南方に赴けるを見るなり、稻荷神社は早く書物にも見えて、由緒正しく、淳和帝の御代に從五位下を授けられてより、位も次第に進みて、朱雀帝の時には從一位に迄進みしこと、ものに見ゆ、其後も天下の大社に位各一階を進むなど云ふ事もあれば、何時の時よりか知らねど、所謂正一位稻荷大明神とは成れるなり、一體神に位を授けると云ふは、妙な事なれども、むかしは五位以上の位には、位田位祿など云つて、其位相當に、種々の給與ありたれば、一番眞先に、宇佐の八幡宮に位を授けて、それ相當の位田を寄附せしが始にて、どの神にも位を授ける事が起り、朝廷尊崇の度を現はす事と成るに至れり、されば人一代の間とはちがひ、久しい間には、種々の靈驗によりて、多く昇位の典がありて、どの神も割合に高い位を有する事に成れり、されど伏見の稻荷神社が正一位なりとて、屋敷の隅のわけのわからぬ稻荷迄が正一位を猥りに稱するは不都合なり、世間

には多く狐を崇めて、太郎稻荷の、穴守稻荷のと騷ぐもあれど、之は淫祠にて伏見の稻荷と同しきものにはあらず、勿論正一位でも何でもなし、混同すべからず、稻荷より北十町、

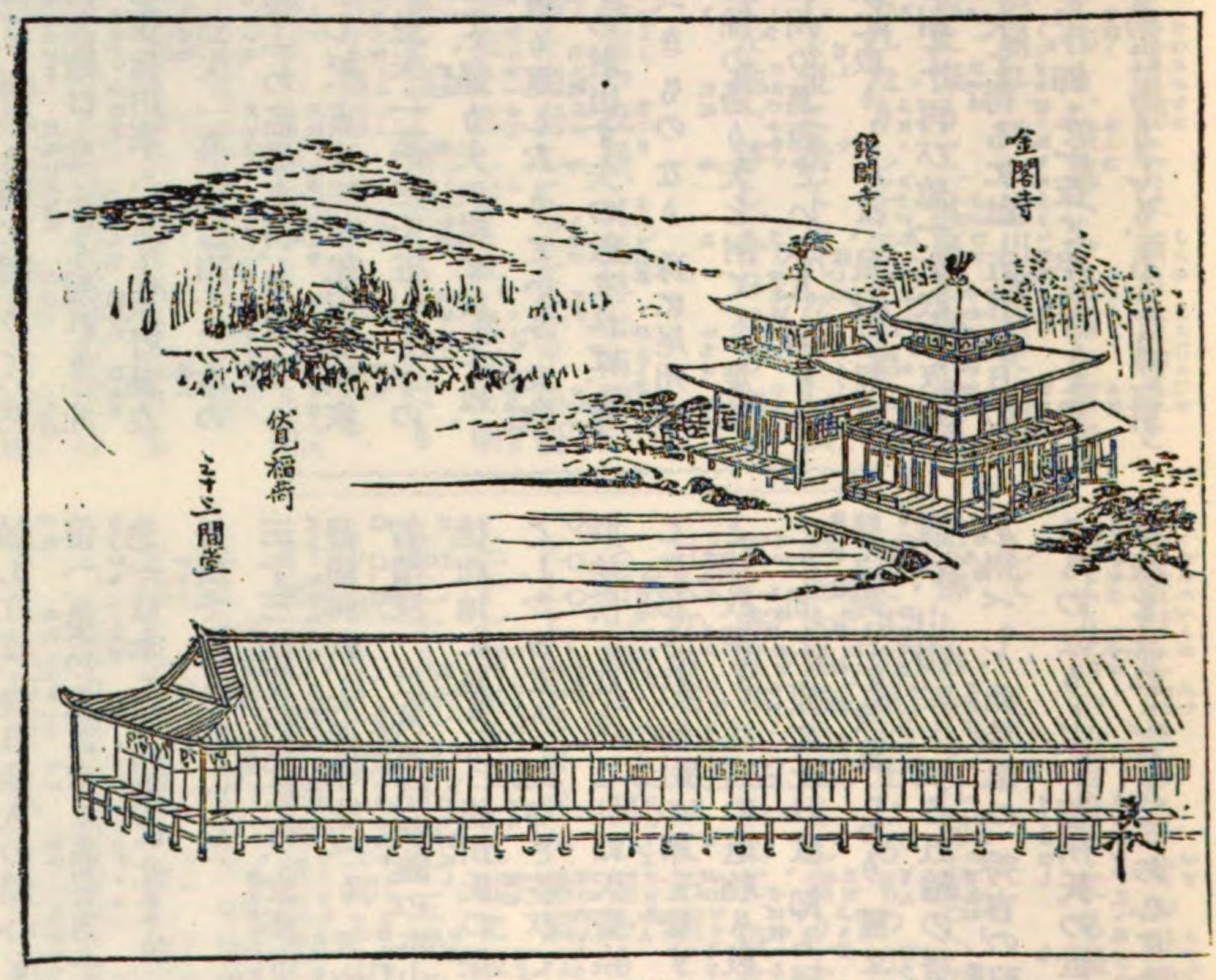
●●●東福寺あり、臨濟宗東福寺派の本山にして、藤原道家が寛元年中の創建にかゝり、入宋の僧圓爾を開山とす、圓爾は即ち聖一國師なり、寺は禪宗京都五山の一なる事前已に述べしが、明治十四年火災に遇ひてより、今尙再建に至らず、凡そ京都の五山、何れも應仁亂の火災にあひて、皆其後の新築なるに、ひとり此寺のみ古のまゝに殘りしを、玆に至りて燒亡す、最も惜むべし、境內塔頭多く、さきに五山の一たりし萬壽寺また今は其中に列す、塔頭とは大なる寺の境內にあつて、之に屬する小なる寺を云ふ、寺と云はずして院といふものは、多くは塔頭か、然らずばもと塔頭より起りしものなり、貴人死すれば寺の境內に石塔を立て、塔の頭に小さき家を建て、僧を置いて其死者の爲に經を讀ましむ、之れ塔頭の院の起りなり、

東福寺の境內は甚廣く、むかしは十二萬坪と云ひしが、今も向六萬坪に近く、景勝の地に富む、寺の後には、紅葉に名高い

○○○通天橋あり、深き谷の上にかゝりて、橋に屋根あり、廊下となりて對岸の建築物に通ずべし、橋に立つて見下せば、谷の兩岸楓樹を以て充たさるゝを見る、此谷の少し上流に、月輪の瀧あり、月輪關白の廟所も其ほとりにあり、東福寺より東北に當つて

○○○泉涌寺あり、泉涌寺は眞言宗の本山にて、後堀河帝の時勅願寺となり、帝の山陵この境內にあり、次で四條帝以後多く此寺に葬る事となり、近くは孝明天皇、英照皇太后の御陵も亦こゝにあり、從つて朝廷の御尊崇も厚く、中興の僧俊芿は、明治十六年に、月輪大師の謚號を賜はり、寺へは毎年千八百圓宛の年金下賜ありといふ、泉涌寺の次が、所謂大佛で、こゝには、古くは三十三間堂次では豐臣秀吉關係の古蹟、近くは京都帝國博物館などあつて、一時大佛前と云へば、乞食か掏摸の巢窟の樣に思はれて居た所も、今では大層高尙な場所となれり、

●三十三間堂●　は本名を蓮華王院と云ふ、長さ六十間餘の大建築物にて、之を三十三間に柱を立てたれば、三十三間堂とは呼ぶなり、俗に、京の三十三間堂に佛の數が三萬三千三百三十三躰あると云ふ、それは咄が大きに過ぐれども、六十間の間に五段に並びて、一千躰の金色の觀音像を安置し、中央にはまた別に觀音の大像ありて、甚見事なり、此寺はもと後白河法皇の御願として建立し給ひし所にして、後には、妙法院に屬する事と成れり、維新前には、諸國大名の藩士等、此長き堂



の後の椽に財術を試み、三十三間堂の通り矢と稱して、極めて有名なる競技ありき、●通り矢●とは、六十間の椽側に弓を引き、此方の端より、彼方の端まで達したものを云ふ、僅かに六十間の所なれば、先方まで屆く事、敢て珍しからぬ様なれど、實は頗る六かしきものなり、何となればあまり、高く狙へば、矢は庇の垂木にあたり、狙ひ低きに過ぐれば、矢は椽板の上を走ると云ふ様に成つて、中々先方へは屆かず、百本射た中に、七八十本の通り矢を得るは餘程弓勢の强き人ならでは

出來ずと云ふ、其通り矢の數は、何れも額に認めて、三十三間堂の庇に掲げ、今も尙其額は甚多く殘れり、此通り矢の中に、寛文九年に尾張德川家の藩士星野勘左衞門といふ人の射たるもの、惣矢一萬五百四十二本の中に、通り矢八千本ありて、第一の名譽を得、其後暫らく、其上を越す程の人なかりしが、貞享三年紀伊德川家の藩士和佐大八郎といふ人、惣矢一萬三千五十二本の中、八千百三十三本を射通して、通り矢の數に於ては、惣一の名譽を紀州家の方へ取り返したりといふ、此惣矢何本といふは、一晝夜の中の射出す矢の數なれば、何れにしても其腕の力は驚くべきものなり、殊に尾州の星野は、寛文二年に六千六百餘の通り矢を射て、一度惣一となりしに、寛文八年に紀州の葛西といふ人、通り矢七千餘を得て、惣一を紀州家に取りしかば、星野は翌寛文九年に、更に右の八千本を射て、再び惣一を取り返せしものにて、其八千本の通り矢を得るには、五月朔日の暮前より、翌二日の正午前まで、即ち一夜と半日とを費したるだけにて、尙射出す餘勢はありしも、あまりに射越しなば、後日他人の熱心を挫くべしとて、止めたりと傳へ、後の世に永く名譽第一として殘れり、之より後、惣一は永く紀州家に止まり、星野、和佐の上を越すものも出でざりしといふ、

三十三間堂の北には、京都帝室博物館、智積院、妙法院、豐國神社、大佛等並べり、其中にも、

智積院は眞言宗新義の本山にて、根來山滅亡の後、學徒此地に集まり、德川氏の保護によりて、大に敎風を起こしたるなり、此寺と並びて

妙法院なり、これは天臺宗にて、豐國神社建立の時ここに移され、神社の事を管す、かゝれば、此寺は豐臣氏と緣故深く、秀吉の遺物も數多あり、此妙法院と智積院との間を、東に上れば、即ち阿彌陀峰にて、其頂上に、

豐臣秀吉の墳墓あり、麓より頂まで、花崗石の階段を設け、山頂に大なる五輪の塔を建つ、遠方より望み見るを得べし、此墳墓は、秀吉の歿後、極めて見事に出來たるものなりしに、德川氏の世となりて、世人に秀吉の大事業を忘れしめんとの心にや、之が修繕を許さず、掃除

をもせず打ち捨てしめ、殊に其道筋には、新日吉神社を移して、新に壯麗なる社殿を作り、墳墓への通路を塞ぎしかば、墳墓もいつの間にか崩れ、殊に德川時代に出來たる地誌などには、多く幕府に憚りて、其事を書かざるが故に、殆んど世人に忘れられたりしに、近年此地に豐公三百年祭を執行して、久しく世に捨てられたりし墳墓をも再興し、日吉神社はまた他へ移し、今日見る如き立派なる有樣となれり、

○○○○豐國神社　は其西にあり、秀吉の歿後、其屍躰は阿彌陀峰の頂上に葬り、其麓に社殿を造營して之を祀る、後陽成天皇は、殊に秀吉の勳功の程を思し召され、豐國大明神の神號を給はり、特に宸筆を以て勅額をさへ賜はりたる程なれば、諸大名も爭うて社殿の造營に力を致し、妙法院宮は法親王の御身を以て、之が祭事を掌れる位にて、極めて盛なるものなりしに、之も大阪落城の後、德川家より之を毀たしめ、墳墓と共に、永く世に忘れらるゝに至れり、之より二百七八十年、明治維新の後、はじめて再建の命あり、漸く今の地に社殿を建立し、別格官幣社に列せらる、今の社殿立派ならざるに非ざるも、固より古への百分一にも及ばざるなり、豐國神社と接して

●●大佛　あり、之れ即ち古への大佛殿方廣寺の、僅かに今日に其名殘を止むるものなり、はじめ天正十四年、秀吉が此大佛殿を築くに當りては、其工事の大袈裟なる事、實に非常なるものにて、役に與かる諸大名二十一ヶ國、巨大なる石を運びて石垣となす、此石今尚存す、石の大さ各一間より二間の徑あり、大佛の高さ十六丈の坐像にして、之を容るゝ佛殿は、其地盤の高さ一間半、東西三十七間南北五十五間に及び、棟の高さは二十五間、東西二十八間、南北四十五間にも及べり、正面に二王門あり、高さ十一間、二王即ち力士の高さ二丈六尺、壯麗目を驚かし、實に當時豐臣氏の威勢の盛なるを示せり、然るに此大佛殿慶長元年地震の爲に破壞し、豐臣秀頼銅を以て之を再建す、蓋し德川氏の慫慂によれるものにて、家康の意は大阪の財を失はしめんとするにありしなり、銅像高さ六丈三尺、別に大鐘を鑄る、高さ一丈四

尺、徑り九尺二寸、此鐘今尚あり、大佛殿成りて、盛に落慶式を行はんとせしに、偶〻此鐘銘に不吉の文字ありとの口實を以て、家康は其法會を中止せしめ、遂に大阪二度の戰役となりて豊臣氏を滅ぼしたるは、よく人の知る所なり、かくて後、右已に述べたる如く、秀吉の墳墓も、豊國神社も共に廢し、此大佛殿の南に、僅かに秀吉の爲に五輪の石塔を作りしばかりにて、豊臣氏全盛の紀念は、たゞ此大佛殿にのみ殘りしに、寛文二年に至り、再び地震ありて、此銅像破損せしかば、德川幕府は更に之を機として、此大佛を鑄潰し、代ふるに木像を以てす、かくて鑄潰したる銅は、錢となして世に行ふ、背面に「文」の字ある寛永通寶即ち之れなり、されば、我等は彼の「文錢」を見る毎に、之が彼の大佛の一片なるを思ひ、うたゝ懷舊の情に堪えざるものあり、然るに、此木像の大佛も、寛政十年に燒失して、廻廊二王門に至るまで其跡を止めず、今豊國神社の後方に、其遺址は草原となりて存し、僅かに其礎の石あるを見るのみと成れり、玆に至りて豊臣氏の殘せる大工事は、僅かに石垣の巨大なる石と、大阪を滅ぼすの口實を與へたる巨大なる梵鐘の外は、遂に見るもの無きに至れり、其後天保年中、大佛の半身像を作る、今あるもの之なり、而も舊觀の萬一を示すに足らざるなり、

大佛の前に、街道を夾んで○○耳塚あり、秀吉朝鮮征伐の時、諸將の切り取りて送りたる鼻を埋む、蓋し遠路首級を送る能はざるが故に、其敵を打ち取りたる數の證として、鼻をそぎて送りしものなり、されど其實鼻塚なり、耳塚といふ、却て其實を失ふ、

此大佛の邊を中心として、北は五條の邊(今の松原通)より、南は七條の邊に至るの地一帶は、古へ○○○六波羅と稱せし地にして、平清盛の六波羅第のありし所なり、鎌倉時代には、六波羅南北の三第を置いて、幕府の出張所となし、以て京都を監督せし事は、周ねく世の知る所なり、

大佛の遺址を東北に出づれば、○○○西大谷より、眞宗の開祖親鸞上人の廟所にして、西本

願寺の祀る所なり、此邊の地をすべて**鳥部山**といふ、古へより有名なる墓地にて、徒然草に、「あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山の煙立ち去らでのみ住みはつる世なりせば」などある所之なり、むかしは藤原氏の墓地も此地ありしを、後に宇治の木幡に移せるなりと云へど、今尋ぬべきなし、蓋し足利時代、殊に應仁の亂の時の如き十年の間も京都は戰場となり、其後引續いて戰國といふ程の代となりたれば、すべての遺蹟は皆廢れ、世に忘れらるゝ樣に成りしものにて、京都の町も、此時に最も多く舊觀を失ふ樣になりしものと思はるゝなり、されば秀吉の志を得るや、命じて京都の復舊工事を成さしめしも、もとより其舊觀を成すに至らねば、まして古蹟保存の事などには、中々手の屆く暇も無かりしなり、されど墓地としての鳥部山は、今も存し、西大谷より、清水寺への間、すべて石塔石碑を以て埋めらる、淨瑠璃に名高き、お俊傳兵衛の墓といふもこゝにあり、墓地を過ぐれば、有名なる

清水寺あり、田村將軍歸依の觀音の像を安置す、本堂の前面は、懸崖に臨みて、所謂舞臺を成し、眺望甚よく、舞臺は即ち繪馬堂にて、古來著名なる額甚多し、舞臺の下には櫻樹多く、清水の櫻とて其名高し、こゝに音羽の瀧あり、之も其名は高けれども、水の落つる事は極めて低く、且つ其量も少なし、こゝを過ぐれば、

歌の中山にて、

清閑寺あり、此北には、

高倉天皇陵及び天皇の御寵愛ありし

小督局の墓あり、尚光孝天皇の御母藤原氏の**中尾陵**および、其父藤原綱繼の墓もまた此邊にある筈なり、

清水寺を西に向つて下る阪、

清水阪となす、陶器清水燒を賣る店多し、此阪は直ちに松原通に通ず、此松原通は古への五條大路なりしを、後の世に誤まりしなり、今日五條通りと稱するものは、其實古への五條坊門の街路なり、蓋し其稱を誤れるものなるべし

清水阪を下れば、北に

八阪塔あり、もと法觀寺といふ有名なる寺ありて、八

阪の塔の事も、巳に古書に見ゆる所なるも、寺は早く廢して、たゞ五重の高塔一基を存せるのみ、今の塔は永享年間足利義教の命によりて建築せるもの、寺は臨濟宗にして建仁寺に屬す、

建仁寺　は塔よりも西南の方にある巨刹にして、臨濟宗五山の一にして建仁寺派の寺山なり、建仁年間源賴家、榮西禪師を開山として創建す、京都禪刹の最も古きものなり、然れども今の寺は、天正年間に安國寺惠瓊が本國安藝の安國寺より方丈を移し、また東福寺より佛殿を移して再興せるものなりといふ、凡そ禪宗五山の寺、近年多く火災にかゝり、天龍寺燒け、東福寺燒け、南禪寺また燒く、今あるものにては此寺最も古し、（相國寺は慶長年間秀賴の再建なり）

建仁寺の東方、山腹に

高臺寺　あり、秀吉の夫人淺野氏の建立にして、寺に秀吉夫妻の廟あり、佛殿は明治十八年に燒亡したれども、幸にして此廟所は殘れり、東臺寺の上方は即ち靈山にして、

梁川星巖の墓、梅田雲濱の墓、近くは木戸公の墓　等あり、其他維新の比、國事に死せるものゝ墳墓多し、之より北、

東大谷　あり、西大谷に對して、東本願寺の祖廟あり、御廟所の北に

長樂寺　あり、此寺天台宗の開祖傳敎大師の開きし有名なる古刹にして、殊に風景勝ぐれ、眺望よきが故に、古來其名文人の間に最も高きも、寺は僅に存ずるのみ、山上に

賴山陽の墓　あり、長樂寺のある所、即ち

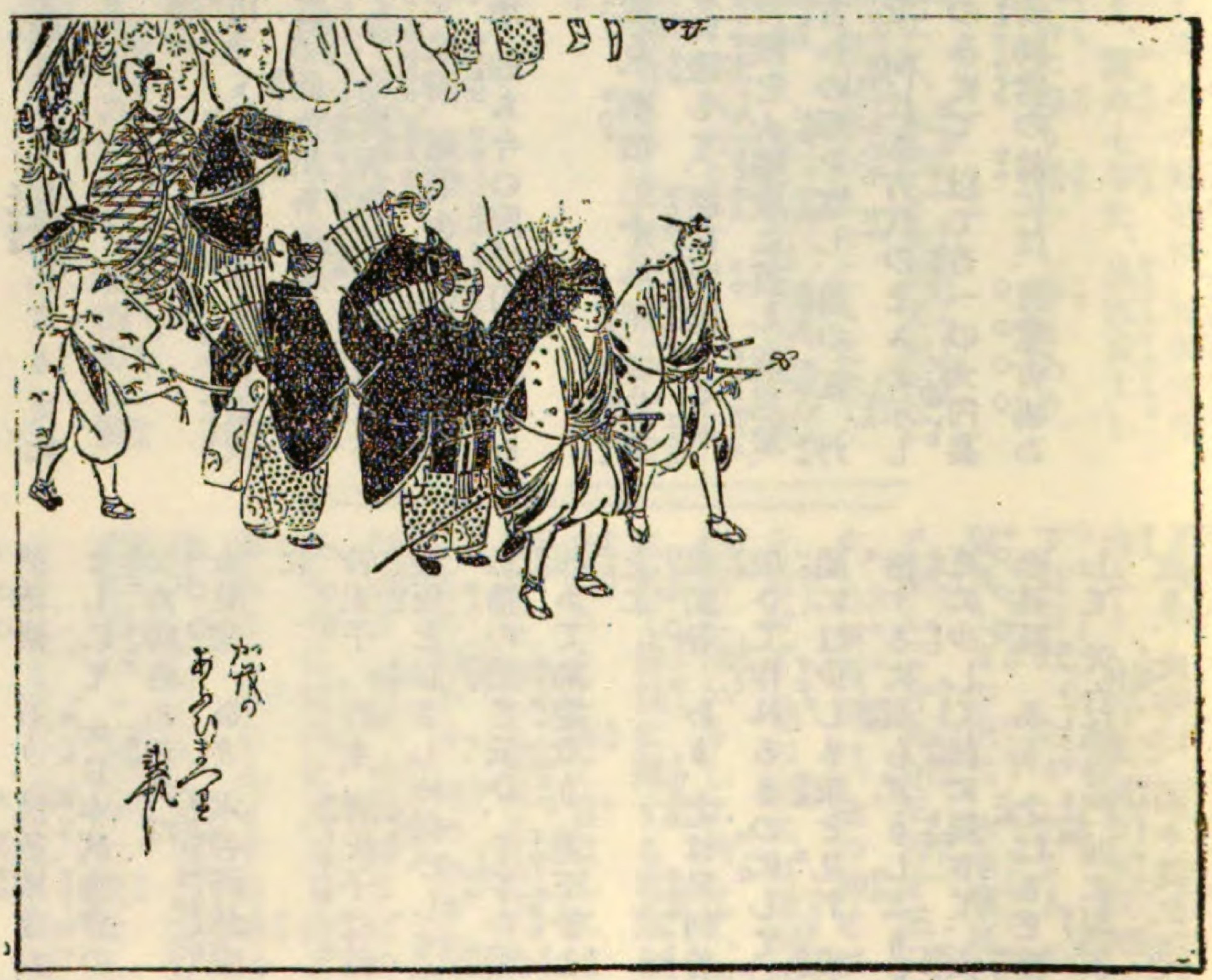
圓山公園　にして、也阿彌樓を始め、大なる旅館あり、其也阿彌樓は先年火災にあひてより、今尚再築に至らず、圓山公園の西は即ち

八阪神社　にして、俗に祇園と稱す、歷史に、叡山の山法師が、祇園の神輿を奉じて、しばしば朝廷に嗷訴すとあるは、此神なり、境內、老櫻樹あり、夜中篝火を燃きて老幼群集す、祇園の夜櫻とて名高し、其祭禮は祇園祭と稱し、毎年七月十七日と廿四日とに行ふ、數多の山車

を引き出して最も見事なり、公園の北に、

○○○知恩院あり、淨土宗の總本山にして、本堂最も壯大、東本願寺を置きて他に其類を見ず、こは寛永年間火災の後、德川家光の建立する所、知恩院は之より極めて盛大なるものとなれり、寺に大なる梵鐘あり、大さ方廣寺大佛のに讓らず、

知恩院の北に續きて、○○○青蓮院あり、天台宗の巨刹にして、延暦寺に屬す、寺に植髮堂あり、親鸞上人植髮の像を安置す、本堂は明治二十六年燒亡せしが、其後再建せり、



青蓮院の北に、禪宗五山の上なる

○○○南禪寺あり、龜山上皇の勅願にして、普門、祖圓の兩禪師を開山とす、其後度々火災あり、僧崇傳大に德川家康の知遇を得るに及びて後陽成天皇は清涼殿を給はり、家康は秀吉の桃山城中の殿宇を寄附し、之より次第に再建して、ほゞ舊觀に復せしに、明治廿八年、本堂また燒けて未だ建たず、寺の境内に○○○○○龜山天皇の御陵あり、御陵の前に

○○○○○○○琵琶湖疏水運河の渠あり煉瓦を以て疊み、高く空にかゝる、此運河は本誌第一號

山科の條に記したるものゝ續きにて、隧道によりて此所に口を開けるなり、

南禪寺の西方に小流あり、**白川** といふ、白河村より出でゝ賀茂川に入る、古賀茂川以東の地を白河と稱せしは、此白川あるによるなり、此白川の北方を北白河といふ、白河天皇の**白河の離宮**、其他、法勝、尊勝、最勝、圓勝、成勝、延勝の六勝寺、等の遺蹟は、何れも此北白河の地、即ち今の岡崎町の邊にあるなり、岡崎町に

平安神宮あり、桓武天皇を祀る、明治二十八年、平安奠都千百年紀念祭を執行するに際して、新に勸請する所、門は古の應天門に擬し、拜殿を大極殿に摸し、龍尾壇、蒼龍樓、白虎樓まで何れも古への形を寫し、碧の瓦、丹き楹、金色の鴟尾に至るまで、何れも古代のまゝを示したれば、たゞ其形の小なるのみにて、以て古への大內裏の一斑を想像すべし。 平安神宮の前には、**博覽會場**あり、東に

美術館 あり、西に

武德殿 あり、武德殿また古制に傚ひて作れるものゝよしにて、大日本武德會の建つる所、

又南禪寺の北には

永觀堂 あり、本名禪林寺といふ、楓樹に名高し、其北に

若王子 あり、若王子は後白河法皇が、紀伊熊野の三所權現を移さしめ給ひしものにて、山中三つの瀧あり、如意輪の瀧と云ひ、千手の瀧と云ひ、十一面の瀧といふ、極めて幽邃なり、若王子より北、數多の寺院ありて、最北に

銀閣寺 あり、之は足利義政が、義滿の北山の金閣寺に傚ひて作れるものにして、泉水は極めて有名なり、但し閣には少しも銀を見ず、或は云ふ、經費不足にして銀を塗するに至らざりしなりと、

更に少しく後に戻りて、大極殿の北に出づれば

聖護院 あり、之はもと聖護院宮の住職し給ひし、所にして、天台宗寺門派に屬す、寺門派とは近江三井寺の派なり、此寺は、前々號に述べたる醍醐の三寳院と共に、

天下の山伏を統轄せし所にして、今の建物は、延寶年中にこゝに移し建てしものなり、嘉永七年に、皇宮炎上したる時には、孝明天皇一時此寺に移り給ひし事もありしなり、聖護院の東方に、
○○○新黒谷　あり、淨宗土の本山にて、本名を金戒光明寺といふ、淨土宗の開祖源空上人、叡山黒谷よりこゝに移りし故に此名あり、寺に熊谷堂あり、蓮生法師熊谷直實の來り棲みし舊蹟なりといふ、黒谷の北に
○○○眞如堂　あり、本名を眞正極樂寺といふ、天台宗にして延暦寺に屬す、其前方の丘を
○○○神樂丘　といふ、丘の南腹に、
○○○○吉田神社　あり、春日の神を祀る、此神社の神官は、吉田氏と稱し、古來神道に於て最も勢力あり、日本全國大小の神祇をこゝに勸請し、全國の神官を總領したりしなり、吉田神社の西に、
○○○○○○京都帝國大學　あり、大學の前に、
○○○○○○第三高等學校　あり、中學校も其南にありて、吉田町は關西學問の中心と成れり、大學の北に

○○○百萬遍　あり、本名知恩寺と稱し、これまた淨土宗の本山なり、此百萬遍より西地、高野川と賀茂川と合ふ所に
○○○下賀茂社　あり、之より、北一里弱に上賀茂社あり、此賀茂上下の社は、古來朝廷の尊信厚く、其祭禮は葵祭と稱して今毎年五月十五日に行ひ、今尙頗る古式を存す、此賀茂神は、他の神とは異にして、古來少しも佛法を近けず、他の神には通例神宮寺あり、社僧ありて之が祭儀に預かりしに拘らず、此神は特に佛法を忌み、神社に於て佛法に關する言葉をさへ口にするを禁じ、若し必要ありて强て言はんには、忌詞と云ふを用ひたり、忌詞とは、僧を髮長と云ひ、寺を瓦葺といひ、經を染紙と云ふの類あり、斯の如きを以て、維新前までは、僧徒は固より、醫師、俳諧師などの類にても、苟も頭を丸めたるものは境內に入るを許さず、故に此等の人が、若し要事ありて入らんとする時は、豫て用意せる髷を頭につけて、始めて入る事を默許せられしといふ、
右にてほゞ京名所の荒ましを終れり、京都の名所もとより、之を以て盡きず、あまり長くなりて、讀者の倦き

給はん事を恐れ、斯く大概に止め、其由來の如きも多くは省略せり、次には京都西北地方の名蹟を巡廻して、後南方に出づべし、（京名所終）

蝴蝶の話

木村小舟

◎多くの昆蟲類は、總じて神經質の深き婦女子には、餘まり好かれません、芋蟲の青き腸、毛蟲のむく〳〵した毛之等は、慥に女子が嫌いな物の内に數へらるゝ一種でせう。けれども彼の春晴の日和に、花に戯るゝ蝴蝶のみは、少なくとも好きな物だらうと思はれます、其姿樣の何處ともなく、嫋々かしく、その色彩の何となく優しく華美なのは、殆ど花顏柳腰の美人が、彼のうつくしき衣羽を振りかざして、霓裳羽衣の舞曲をする樣です、さればにや此蟲の姿、やがて金屬性の襟止となつては、願はくは蝴蝶となり君が襟邊に到らんと謠はれ、簪の花の附物となつては、他の生きたる蝴蝶さへも迷ふて來んばかり、どうしても此蟲は昆蟲類での幅きゝもの、チト御轉婆かもしれません。さても時は花咲ひ鳥謡ふの好時節、お花見の件となり遊山の道しるべする、此胡蝶のお話を致しますのも、又一興だらうと思ひます。

◎蝶には四枚のうつくしき羽翅があります、夫も種類に依て少し宛の差異はありますが、普通の粉蝶などは後翅の尖端が丸くなつて居ますが、鳳子蝶などは夫が燕尾樣に出來て居ります



第一圖

《圖參照》、これは風切りのいい爲でせう。さて此羽翅も一寸見ましては、さ迄も珍らしく見へませんが、一度其彩粉の一片を採つて、顯微鏡下に映じさせて見ますると、實に其構造の巧妙なるに驚くばかりで有ります、あの彩粉の一片は丸で團扇の樣になつて居て、その柄の處が透明さながら硝子の樣な、あの蝶の翅に規率正しく、魚屬の鱗の樣に植へられて彩色されて居ます、殊にその色澤の美と其並列の妙とに至つては、遙に魚屬の鱗片の及

ぶ處ではありません、されば蝶の類をば之を鱗翅類と云ふのであります。

◎既に私等は、蝶の翅が極めて美妙なる彩粉の集合躰であることをば學びました、いでや次には其他の部分の研究に移りませう、先づ翅に次いでよく目に止まるものは、其二本の長い〳〵鞭みた様なものでせう、之は多くの節々から成立つた物で、其節の先端には感覺孔と申す穴があります、云はゞ私共の鼻の代用をするので、蝶のあの花にあゝして集つて來ますのも、つまり此の感覺孔で花の薫りを嗅ぎつけて來るのです、又もし私等が試みに靜かに止まつて居る蝶に向つて、髮の毛程の物で此鞭に觸れましても、蝶はさも物に驚いた風をして、直に飛び去るを見ましても、如何にこの感覺孔の鋭敏な事が解りませう、之を學問上で觸角と申します。

◎觸角の傍にあるのは、碧黄色(穴勝さうとも限りませんが)の二個の眼で、やさしさ何に例へませう、併し之は私等の様な眼とは、丸きり其搆造が違つて居るので云はゞ、澤山の小さな眼が集合して、更に大きい一個の眼を造つた様です、成程さう云へばこの體にしては、チト眼の玉が大きすぎる様で、この蟲にしては相應しからぬ様にも思はれますが、こゝが又造化精妙の手の拔からぬ處で、つまり胡蝶の様な弱々しい物が、大敵をふせぐ第一の利器となつて居ますので、この大きな眼は遙かの遠方まで其眼力が達します、遠方のみか前後左右も…… 此蟲にとつては大切なものであるのも、無理のない處でせう、この大した眼これは學問上複眼と申す、又蟲の内には複眼に對する單眼と云ふて、これが私共と同じ様な効用の有る眼を備へて居るものもあるのです(其例は蟬蜂の類に就いて見れば、其額上に小さな赤黒い球が、三角形に列んで居ます)

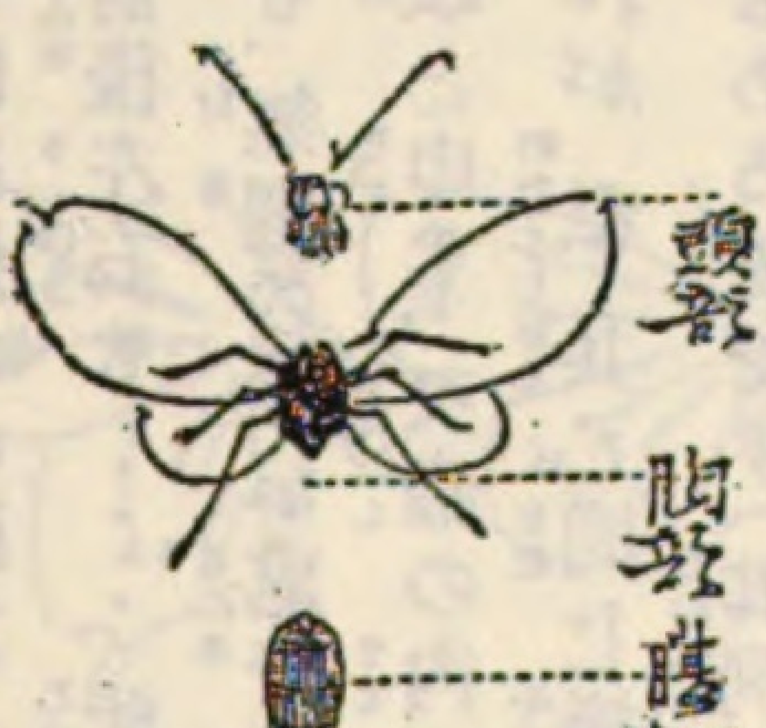
◎蝶が花に集まりますと、其口から長い〳〵糸みた様なものを出しまするが、之が其舌なのであります。一躰蝶などの口は、之を吸收口と申しまして、つまり液體を吸ふ爲に出來て居るので、蝶の一ばん好物が花の蜜です、で先づ其花蜜のある處をば例の觸角で嗅ぎつ

けて、そして其長い舌で實に巧に蜜を吸ひとるものです。

◎蝶の脚は六本ありまして、總べて其胸部に對生して居ります、その名稱なども、基節、轉節、腿節、脛節、跗節とこう五部に分れて居ります、又中には四節を有して居るもの、五節の外に瓜樣の物を備へて居るものも有るのです、又蟲の中でも、彼のきり〴〵すなどは、前脚の脛節の處に、小さな孔を有して、こゝで他の蟲の鳴聲をきゝ付ける言はゞ耳の用をするものです。

◎で一羽の蝶を、まづ外面から伺ひまするど、明かに頭と胸と腹との、三部が互に集り合ひまして、出來て居ることが分ります．そして又其頭部には、口、目、觸角などが有り、胸部には二對の翅と三對の脚とがあり、そして腹部には別に外面から見ゆるものもありません(圖參照)、此の樣に頭胸腹の三部が、判然と分れて見ゆるものは、蝶の類即ち昆蟲の特有で、他の動物には見る事の出來ない處であります。

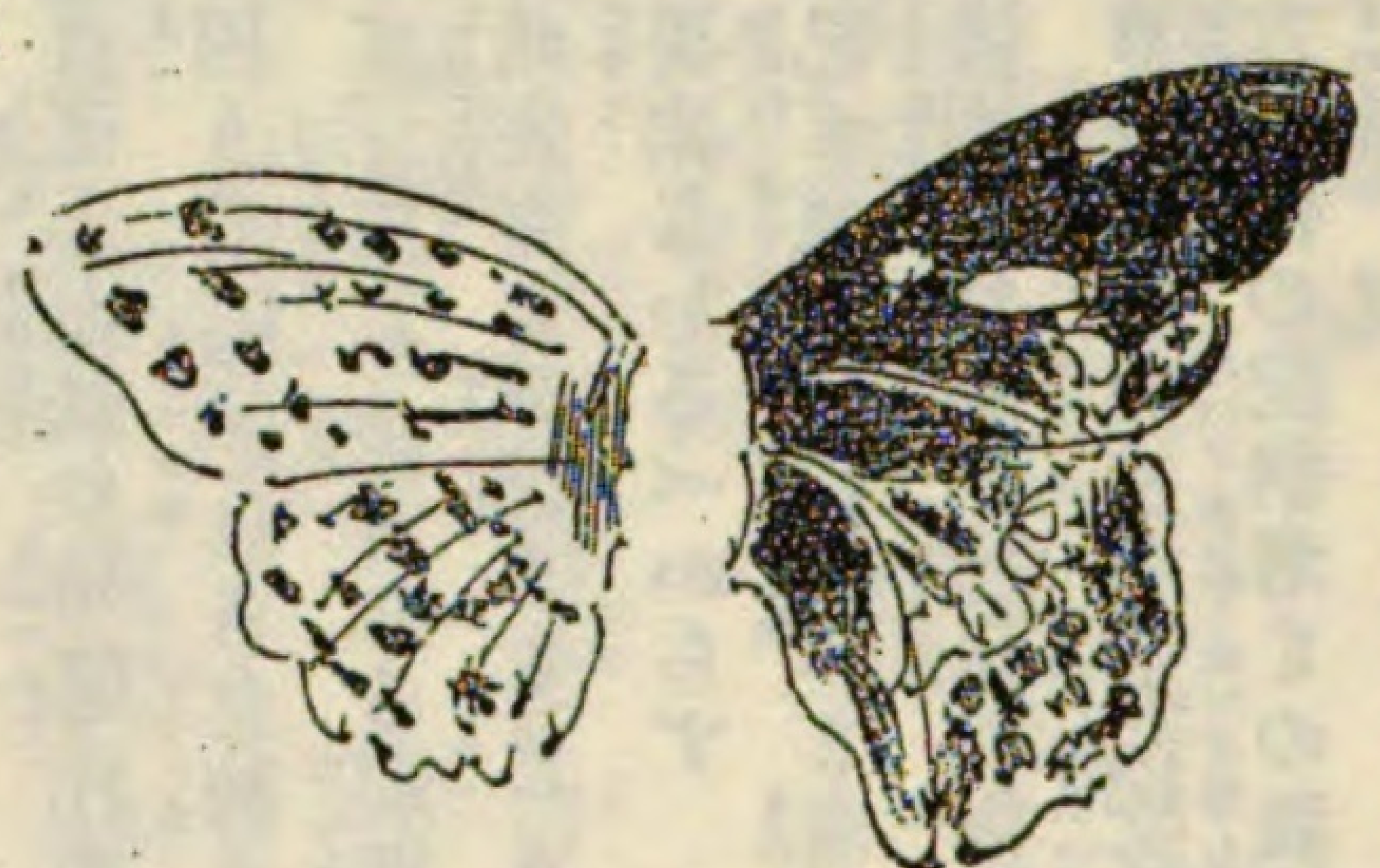
◎さて之で外部丈のお話は、ざつと致しましたから、今度は其内部の搆造を述べるのが順序ですけれども、私はわざと之丈は書きますまい、夫は他でもありませんが、チト專門的に流れて一般のお方には、却つてお分り悪い樣な事では、折角貴重な紙面を埋むる丈の功も無からうと、云はゞ私の心配からです。そこで此の蝶類は、私共の社會に如何樣な功用を與へるであらうかと申しますと、先づ植物の花を助けて、全き實を結ばせると云ふ點丈に止まりませう、これも蝶は單に花の蜜を貰ひ受けやうと仕るのを、其目的と致して居ますけれども、此の間に花粉の輪送が相濟むからです、蝶は此の外には、何一つの功用もありませんので、却つて其仔蟲で居る間は植物類の葉根をば、非常に蠶食致しますから、氣の毒ながら先づ害蟲と見做さなければなりますまい。



第二圖

◎こゝに又蝶の類には、自然淘汰と申しまして、敵の

目を免がれ樣とする爲に、成るべく他の物に似寄つた處の、色合や性質を備へて居る物が非常に澤山です、白蝶が大根の白い花を喜びますのも、黄蝶が黄色な菜の花を好きますのも、又ひをどし蝶の內翅が、特と美しいのに引き替へて、其外翅が頗る見苦しいのも、皆此の自然淘汰の結果でせう、私等は諸君と共に、蝶の翅の摸樣を觀るのを殊に好みます、蓋し總べての蝶は皆此の自然淘汰に依つて、生存競爭しつゝあることが、よく了解致されます。



第三圖

◎次に又雌雄淘汰と云ひますのは、雌と雄とが其形狀や色澤を大に異にして居ますので、之は總べての動物にも皆固有の特性ですが、殊に蝶の類は夫が一層劇しい樣に思はれます、第三圖の翅はへうもん蝶の雌雄(♀は雌にして♂は雄の符號なのです)の、色澤を顯したものですへうもん蝶の翅は、その雌蝶は黑色に水色の樣な紋が一列になつて居ますのに引替へて、その雄蝶は赤に小さな斑點が有りますので、初めの程は多くの學者も其雌雄だとは思ひも付きませんで、全く異種だと申して居たさうです。

◎之を要するに、こう云ふ事を研究して見まするのは余程興味のあることですから、どうか私が切に願ふのです、毛蟲は嫌いだ、芋蟲は恐ろしいなど思はなくて、よく研究して下さい、毛蟲芋蟲、みな美しき蝶類の仔蟲なのです、紙面に限りあると、私が病躰なのとで長く書くことが出來ません、後は題を改めて又後日を約しませう。

ゆく春を送りてゆかんすべもなし
月のみ船よ我を乘せなん

法律談

法學士 桐生政次

親族の範圍

親族とは己と血統の相連れるもの、及び婚姻又は養子緣組に因りて、相連れる血統と等しき關係を有するものにして、法律が認めたる範圍内にあるものをいふ、されば今此定義を分析するときは、法律上の親族には左の三の要素なかるべからず

(一)己と血統の相連れる者、例えば親子兄弟の如し

(二)婚姻又は養子緣組に因りて、相連れる血統と等しき關係を有する者、例之ば配偶者又は配偶者の一方と他の配偶者との親族の關係、養子と養親との關係の如し、

(三)法律が認めたる範圍内に在る者、例之ば父と私生子、若くは法律上婚姻せざる男女の如き、一は血統相連り、一は實際上親族として取扱ふべきものにしあれど、倶に法律が認めたる者にあらざれば、之を稱して親族と稱すること能はず、

さて今民法の親族編(第七百二十九條)に從ひ、少しく詳細に親族の範圍を決定せんに、先づ之を三の點より觀察せざるべからず、曰く血族、曰く配偶者、曰く姻族是なり

一 血族

血族とは、共同始祖より出でゝ血統の相連れるものをいふ、然はあれど、法律上の血族は決して事實上の血族と、必ずしも其範圍を一にせず、例之ば私生子の如し、父又は母が之を認知するにあらざれば、決して親族關係を生ぜず、之れ法律上の血族が事實上の血族よりも、其範圍を狹しとする一例なり、又例之ば養親と養子、繼父母と繼子、嫡母と庶子との關係の如し、彼等は事實上決して其血統を連ぬる者にあらず、而かも法律は此を以て一の親族關係とは見做しつゝ、之れ法律上の血族が事實上の血族よりも、其範圍を廣しとする一例なり、之に由りて觀れは、法律の公認したる血族に二種ありといはざるべからず、

（甲）自然血族

自然血族とは、事實上血統の相連れる者をいふ、而して此自然血族を生ずるに三の原因あり、

（い） 婚 姻
（ろ） 分 娩
（は） 認 知

是なり、婚姻に因りて正出又は嫡出關係の親族を生じ、分娩に因りて私出關係の親族を生じ、認知に因りて庶出關係の親族を生ず

（乙）法定血族

法定血族とは、法律の規定に因り、血統の連らざるものを血統の關係あるものとし又は一種の血統關係あるものを他種の血統關係あるものとする者をいふ、而して此法定血族を生ずるに亦二の原因あり

（い） 養子縁組
（ろ） 父母の婚姻

是なり、養子縁組によりて、養父母と養子との間に眞實なる親子と異ならざる關係を生じ、引て其養子と養親の血族とにも血族間に於けると同一の親族關係をば生じつ、例之は養子と養親の父母とは、祖父母と孫との關係を生じ、養親の兄弟とは、伯叔父母と甥姪との關係を生ずるが如し、然れども養子の實家に於ける親族と、養父母其他養家に於ける親族との間には、毫も親族關係を生ぜず、例之ば養子の實父母又は兄弟と養親との間の如し、次に父母の婚姻に因りて、自己と父母の配偶者との間に、又更に一の親族關係を生ず、此法定血族は之を二の方面より觀察するを可とす、

（一）繼父母と繼子との關係

此關係は親族の範圍を定むるに付きて、最困難なる問題の一なり、今其主なる場合の一二を擧くれば、例之ば寡婦が後夫を迎え若くは鰥夫が後妻を迎えたる場合、前夫又は前妻の子を自家に引取り更に後夫又は後妻を迎えたる場合、私生子が女家に入りたる後、入夫又は婿養子を爲したる場合の如し其他連子は如何、婚姻の當時他家に在る者は入婚者の繼子なるや否や、養父母の後妻又は養母の後夫と養子との關係は如何、繼母の迎

へたる後夫又は繼父の迎へたる後妻は之を繼父又は繼母と稱すべきか否か、庶子と嫡母の後夫との關係、庶子と父の後妻との關係等は、專門の士と雖も、動もすれば倘解し難きところ多きを以ていはず、

（二）嫡母と庶子との關係

私生子が父に因りて認知せられたるときは、之を庶子といひ、其庶子が父の正妻を呼むで嫡母といふ、此嫡母と庶子との間には、亦一の親族關係を生ずるものとす、此處に一の附言すべきは、自然血族にして、親族の範圍に入るものを六親等內に限ることとなり、

親等の計算法は我が親族法に在りては、直系親に付きては單に親族間の世數を算して之を定め、傍系親に付きては、其一人又は其配偶者より、同始祖に遡り、其始祖より他の一人に下るまでの世數を算して之を定む、されば直系親に在りては父母及又子は一等親、祖父母及び孫は二等親、曾祖父母及び曾孫は三等親なり、他は之に準ず、又傍系親に在りては、兄弟姉妹及び自己との共同始祖は父又は母なれば、自己より父母に遡りて一等を算し、父母より兄弟姉妹に下りて又一等を算するが故に、兄弟姉妹は二等なり、伯叔父母の始祖は、祖父母なるが故に、自己より祖父母に遡りて二等を算し、祖父母より伯叔父母に下りて一等を算し、合せて三等親なり、他は之に準ず、配偶者に付ては、夫は己を妻の地位に置き、妻は亦己を夫の地位に置き、而して傍系親に於けると同一の計算法を取るべし、されば妻の父母は一等親、又其伯叔父母は三等親なり

二　配偶者

夫婦の一方より他の一方を指して、之を配偶者といふ、夫婦はもと血統の相連れるものにあらず、而かも之を以て親族となす理由如何は、余輩が今玆に喋々の辯を費すまでもなく、夙に人の知るところならむ、故に配偶者たる親族は、民法其他の法令に於て夫婦間の關係上生ずべき特別の權利義務の外、一般親族法上の支配を受くべきなり、

三　姻族

婚姻に因りて夫婦の一方と、其配偶者の血族との間に生ずる關係を姻族關係と稱し、自己に對して此關係を有する者を姻族といふ

姻族は亦一の親族なり、然れども總ての姻族悉く之を親族と稱すること能はず、我が民法は姻族たる親族の範圍は之を三親等內に限りたり、されば夫と妻の父母、祖父母、曾祖父母、伯叔父母等は、孰も三親等內の姻族な

れば、之を親族といふべく、妻の高曾祖父母、從兄弟姉妹は四親等内の姻族なれば、彼等と夫との關係は親族關係にあらざるなり、

又姻族關係は夫婦の一方と他の配偶者の血族との間に生ずものなれば、夫の血族と妻の血族との間には、何等の親族關係を生せず、例令は夫の血族と妻の血族との關係の如し、

割烹原理

女子職業學校講師　高橋章臣述

(一八)　魚　類（△點を附するものは魚にあらず）

(イナ)　初生をオボコと云ひ、二歳をイナと云ひ、三歳をスバシリと云ひ、四歳以上をボラと云ふ、煮食すべきもの。

(イワシ)　ホシカ、油を製す、秋のもの上品なり、色シラケ或は黑點あるは下品なり、青く黑色なるを上とす、イワシの小なるをゴマメと云ふのです。

(イシモチ)　頭中に二石あり故に此名あるので、肉脆く脂少し、味は佳なり、大なるものをニベと云ふ、其ウキブクロを以てニカハを製するのです。

(イサキ)　夏秋に最も多し其形セイゴに似、脂は多くあります。

△(イタヤガヒ)　杓子貝とも云、北海道西海道に多し、殼を以て杓子を作り又皿となす、肉柱は美味なものです。

△(イカ)　マイカ最も上品なり、スルメイカはスルメを作る、古より祝儀に用ふるものです。

(ハゼ)　味宜ろしと雖も少し腥し、ダボハゼは下品なり。

(ハモ)　ウナギに似たもので東京近海には少し、上等のカマボコを作る、カバヤキにすれば美味なり、京阪地方にて珍しとす、燒きて乾したるもあります。

△(ハマグリ)　舊暦三月三日より八月十五日までは毒ありと云ひます、是は卵を產む期です。

(ニシン)　カドとも云ふ、北海道の產なり、其子をカス

ノコと云ふ、ニシンは肉脆くして脂少し、其脊肉のみを乾したるものを俗にニシンと稱し、少し澁味がります。カズノコはキワダ色なるを新鮮にして上とす、トビ色となれるは古くして下品です。

（ホウボウ）カナガシラの大なるものと云ふは間違なり、味美なり、冬月を上とします。

（ドヂヤウ）煮るにトウシン草少し入れて煮るときは骨も柔かになります。

△（トリガヒ）冬春の候に生食す、又乾して貯ふ、肉柱はカマボコとなします。

△（トコブシ）アワビに似て小なり、殼に孔多し、アワビの子ではありません。

（カツチ）七八月の頃多く取る肉粘るをモチカツチと云ひ脊に黒白線三四條あるをスヂガツチと云ひます。カツチを四ツに縦に割りてカツチブシを製す、土佐薩摩の產上品なり、肥大にして堅く外は黒膩内は淡紅なるを新にして上とし、瘠せて外は乾枯し内は微赤なるを舊にして下と致します。ナマリブシは少し火にかけて水氣を去りたるものです。

（カマス）イワシに似たり、大なるもの五六寸、燒食すべし、又乾物とすること多し。

（カレイ）右側に眼あるはカレイにして左側に眼あるはヒラメなり、食すれば氣力を增すものです。

（カナガシラ）毒なくして病人にも食して可なるものです。

△（カキ）石上に棲む、又コロビカキあり、煮食すれば寢汗を止む、生食すれば酒後の渇を止む、殼は燒きて石灰と致します。

（タイ）四時あれども殊に櫻花の開く頃美味なり、海魚の第一とす、冠婚饗應の贈物となしまする。

（タカノハタイ）躰に七筋の黒斜線を有す、

（イトヨリタイ）脊に黄線三つあり、

（アマダイ）冬多くあり美味なりオキツタイとも云ふ

（クロダイ）黒灰色なり妊婦は食ふべからず、

（テングダイ）多く刺味となす、

（タラ）北海道に多し、鹽藏せるをシチダラと云ひ、腸

を開きて乾したるを乾ダラ、開かすして腸のみを去り乾したるをボウダラと云ひ、年末の贈物とす、姙婦は五ケ月までは忌みまする。

寒中には子を有す之を鹽藏して酒の下物とす、肝臓よりは薬用の肝油を製す、是れは滋養の効があります。

△(タコ) 此れは消化が宜くありません。

△(タヒラギ) 肉は食すべからざるも、肉柱は美味です。

△(タニシ) ツブとも云ふ貧人の食に供するもの。

(ナマヅ) 流水に産ずるは青白色にして美味なり、タマリ水に産するは黄色を帯ひて味も劣ります。

△(ナマコ) 黒色なるを上品とす、黄色なるは下品なり、生食すべきものです、煠き乾したるをイリコと云ひ腸の鹽藏したるをコノワタと云ひます。

(ムツ) 春多し、脂多くして下品なものです。

(ウナギ) 河海の間に産ずるを上品とす、カバ焼とするが味尤も佳なり、西瓜、梅、ソバなどゝ共に食してはよくない。

します。

△(ウニ) 肉と腸とを鹽藏してウニと云ふ、酒毒を消

△(クヂラ) 大獣なり、油は燈油とす、肉は美味なり、鯨の鬚は編物ハケ等と致します。

(マグロ) 大なるものはシビと申します。

(マス) 油多きもので、サクよりは美味なり、鹽藏せるものを鹽マスと云ふ、東北地方に多く産ずるものです。

(フグ) 長州雲州等にて食す、痲酔毒があります。

(フナ) 金魚はフナより變りたるもの。

(コチ) アライとして食すれば美味なもの。

(コイ) 食すれば乳汁を多く出します。

(コノシロ) 初年をコハダと云ひ二年をコノシロと云ふ、コハダは壽司に用ひます。

(アンコウ) 骨まで食ひすま。

(アカヂ) タイに似たもので、全身赤色なり、冬月最も佳、美味なもの。

(アイナメ) アユに似たれども美味ではない。

(アユ) 鹽燒とす、腸と子とを鹽藏したものをウルカ

と云ひ酒の下物とします る。
(アヂ)　春秋の間に多し、冬は食するに堪へず、モロアヂは乾物とします る。
(アナゴ)　ウナギに似たり、脇に小白星一條あり、炙食するときはウナギに劣らず。
△(アワビ)　貝類の長なり、五六月を盛とす、生食、煮食、ソバ粉に和すること二時間餘、之を能く洗ひて煮れば柔かになる、肉を薄く切り乾したるを熨斗と云ひます。
△(アサリ)　春の末に多きもの。
(サメ)　煮食又はカマボコと致します る。
(サンマ)　鹽藏又は乾物とします る。
(サバ)　春の末より秋の末までを盛とす、鹽藏にするもの。
(サハラ)　春に多し脂多し美味なり、眼病の人食すべからず、其子を以てカラスミを作る。
(サケ)　北海道に多し、煮食、燒食す、鹽藏せるを鹽引と云ふ、其子をハラヽゴ又はスヂコと云ひます。

(サヨリ)　春に多し、脂少くして味淡泊なるもの。
△(サヾエ)　壺燒とすれども消化は惡し丶。
(ギス)　病人にも宜ろし。
(シラウヲ)　白色の小魚にして煮食するもの。
△(シヾミ)　寢汗を止めます。
△(正覺坊)　肉を食す、美味なり、甲はタイマイの代りとなす、之を和ベツカウと云ひます。
△(シヤコ)　鹽水にてユデてテンプラとすること多くあります。
△(エビ)　伊勢エビは秋冬に多し、芝エビは佃煮としまする。
(スヾキ)　小なるをセイゴと云ふ、美味なるもの。
△(スツポン)　美味なり元氣を增します。

(七)　鳥獸

良肉は滋養の効あるものです。
(ソツプ)　肉骨等を煮て作る汁なり、佳香ありて心身を興奮せしむれども滋養物ではありません。

卵 生卵も半熟も消化し易く滋養に富む、併し固く煮たるものは消化悪しく、能く咀嚼して食しなければなりません。

牛、羊、豚、兎、猪、鹿、肉は滋養の効あり、殊に牛肉は羊豚より多くの香汁ありて味最も佳なり、豚肉は脂多くして蛋白質少し、體を温むるに宜しきもの。

肉類は總て能く調理して食すべし、然らざれば寄生蟲の病に罹ること多くあります。

乳汁 良食品なり、併し能く煮て飲むべし、腐敗しかけたるものは飲むではなりませむ。

(八) 副食品

風味を助け又滋養となるものがあります。

(鹽) 消化器を勵げまし、又滋養となる、併し胃弱の人は鹽多きものを食つてはなりません。

(醬油) 過量に食すれば害となる。

(味淋) 程よく消化器を勵げまし滋養の効あり、但し過量に食すれば留飲を患ふることがあります。

(砂糖) 必要のものなれども過量に食すれば害あるべし。

(酢) 精神を爽快にし消化を進め渇を止む、但し過用すれば貧血症を發することあるもの。

嗜好品

是れは滋養とはならず只刺激するもの。

(酒) 少しづゝ飲めば害とならず。

(茶) 適度に用ふれば害なし、コーヒー、チョコレート等は茶に同じ、過用すれば睡眠を妨ぐることがあります。

香辛料

適度に用ふれば消化を助くれども過ぐれば害あるものです。

サンセウ、トウガラシ、ワサビ、カラシ、シヤウガ、コセウ等なり。

●、●、編者曰、高橋章臣先生には、本誌の為めに割烹談を細々寄せらるゝ積りなりしも、今般博物學研究の為め獨國留學を命ぜられたるに付き、本稿は今

回にて完結せしめ次號よりは職業學校割烹主任の筆に成る各種料理の實地談を掲げんとす、學理と相俟て有益なるものなり。

裁縫科

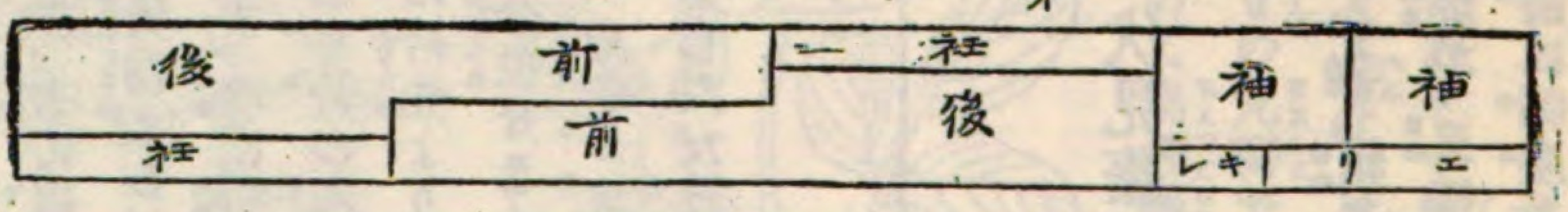
女子職業學校教員　金子銅子述

次は三ッ身で裁ち方は第十七圖に就て御承知下さいまし、積り方は袖丈の四倍に身の丈の三倍を加へますれば總尺を得られます、それ故用布の丈を知れば袖なり身頃なり積るともできます、大概三つ身の寸法は袖丈一尺四寸内外、巾が七寸五分位でございます、身の丈二尺六寸内外、前巾四寸五分、後巾六寸三分内外でございます、片面物になりますと、第十八圖の通でございまして、其積り方は十七圖の分とちがひはありません、しかし此裁ち方は一尺か若しくは一尺二寸位の巾のものでございませんければ、身巾がせまくなりますから用ゐられません、印の付け方は袖をとりまして一ッ身の通りに置きまして山、袖付、袖口、袖丈、とを付けまして身頃と衽とは一ッ身の通りにいたしますのでございます縫方は先づ袖をとりまして男物の袖の樣に縫ひます、たゞ小供物でございますから袂が角で人形でありませんのが男物とちがうのでございます、次は衽をとりまして二枚とも立褄を絎け置きます、次に身頃をとりまして背を袋縫ひ(袋縫ひは表を見て一度縫ひまして、又裏にかへして縫ひますのでございます)にいたし、後巾をあたり脇をぬひまして、衽を袋縫ひにしてつけまして、衿をつけ衿先を縫ひて袖を付けヤックチを絎けます。

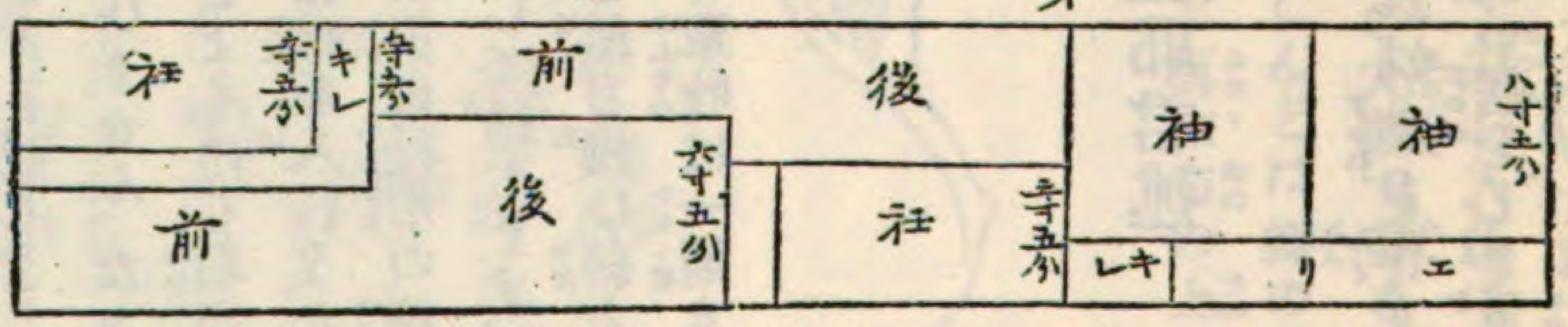
次は四ッ身これも裁方は第十九圖の通りでございます積り方は袖丈と身頃の四倍とを加へますれば用布の丈を得られます、それ故三ッ身と同じ樣に袖なり身頃なりかた〳〵の寸法さへわかりますれば、一方の寸法を定めるとができるのでございます、袖及身頃其他の寸法は大概三ッ身とちがひはありません、只巾が廣くなるばかりでございます、印のつけたか袖は前中上まし

た三ッ身と同様でございます、身頃は少々こみいりますから第二十圖に就て御承知を願ます、扨て縫ひ方は先づ袖をとりまして、男物の通りに縫ひまして袖巾を當りて置きます、身頃は背を袋縫にいたしまして、衽巾をあたりまして衽を縫ひ、立褄を絎けまして前巾をあたり脇縫ひを致します、次に裾ガクを致しまして衿をつけて、衿を絎け袖をつけまして、身のヤッを絎けます先づこれで小供物が終りました、縫込を絎る所と衿先の縫ひか

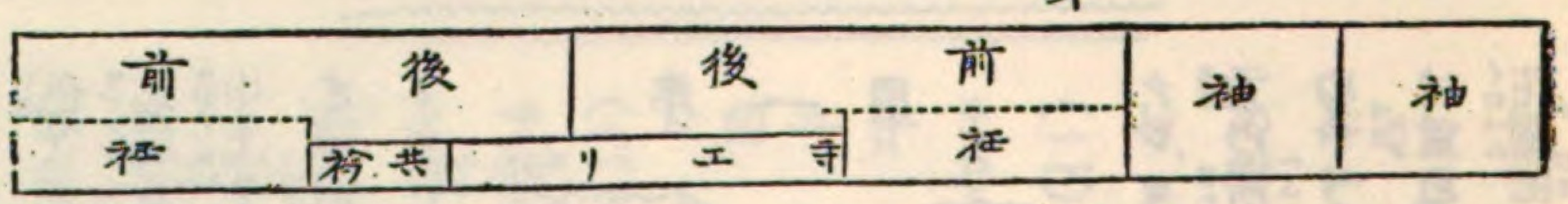
第十七図



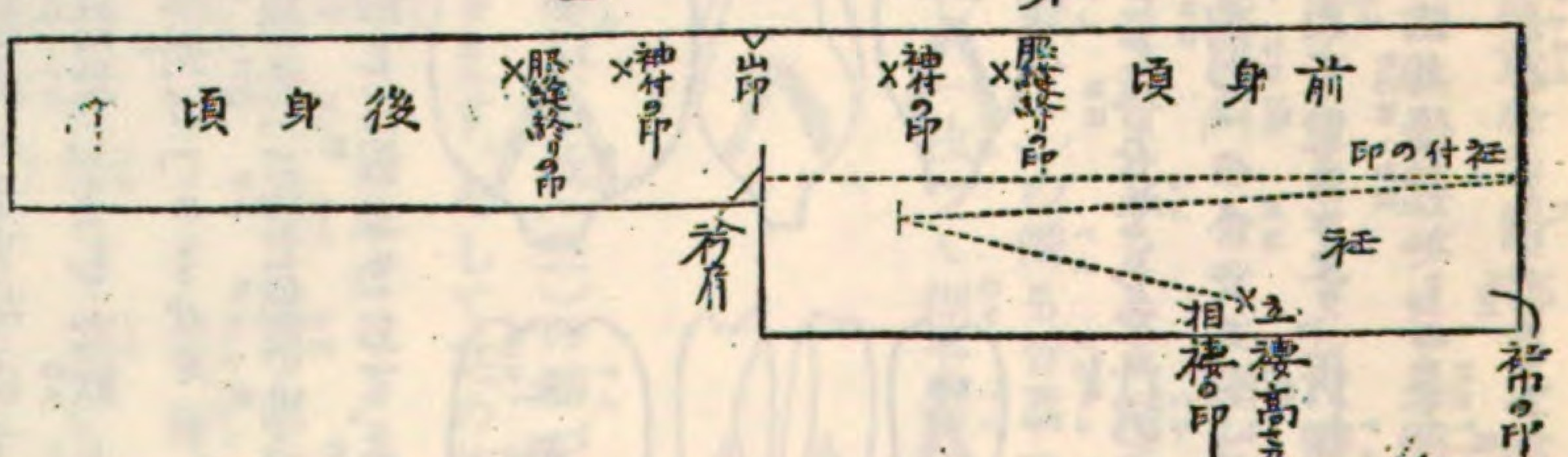
第十八図



第十九図



第二十図



た脇縫ひのかへしかたは皆同様で前に申しました通りでございますから、一々には申上ません、此次には女物の單衣につきまして御話しいたしますが、前と同様の所は皆略しますから左様御承知下さいまし、女服を裁ちますには、只寸法がちがふばかりで積り方も同様でございます、印の付方も亦略同様で男物とちがふ所だけを申せば、寸法と、、、アゲのないのとでございます、それゆへ別に申上ません、縫ひ方は袖は男物と同様に縫ひまして袖

巾を當りて置ます、次に衽の立褄を絎け身頃をとりまして、背脇をぬひ衽をつけます、次に裾かゞを致しまして衿を付けます、こゝまでは男物とちがひません、たゞアクをしないだけであります、次に衿をよくのし縫込の切もシアを伸しまして、三ッ衿の所に切を入れまして衿先を縫ひまして、裏衿は衿先より次第に褄形の様に折りまして、表の衿より一分位せまくして綴ぢます、次に袖をつけましてコヤツ、身のヤツを綴ぢ縫ひ終るのでございます、以上申上ましただけで單物は一通りすみましたのでございます。

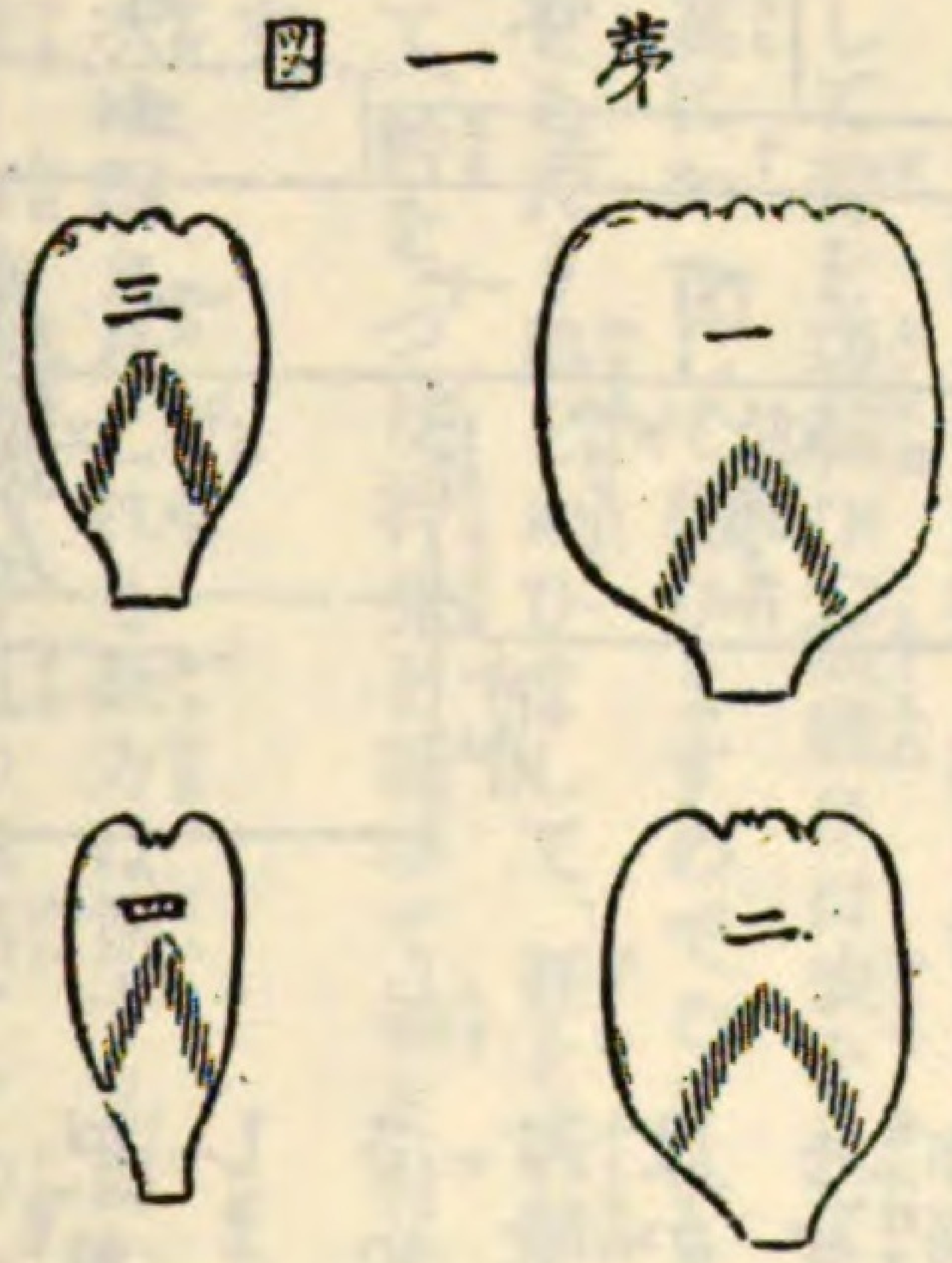
造花科

女子職業學校教員　伏見藤三郎君述

丸薔薇の作り方

丸薔薇は絹又は寒冷紗で作ります、絹なれば菫を作りました時と同じやうに、淡い糊か、又は淡い膠をしき置き、寒冷紗なれば其儘で第一圖に御座ります通り、四通りの形をきり、一々夫れを染めます。色は白、桃色、白茶色などが御座りますが、白や白茶色に染めますのは、是迄時々御話致しました故、此度は桃色に染めますのを申上ます、先づ「ローダミン」五分と「フロクシン」五分その割合で此二品を熱い湯で合せ置き、別に又「チウラミン」を解して置きまして、夫れから前に切りました花瓣を三四枚つゝ取り、初め水に浸し、一寸指先で水をきり、瓣の先から下の方凡三分の二位の所まで、前の「ローダミン」と「フロクシン」とを合せました汁の中へ入れてぼかします、又元の所は前の「チウラミン」で薄黄色に染め、乾きませぬやう重ねて置きます、併し一番小さき瓣即ち(四)の分は重ねずに其儘乾かします。

第一圖



花瓣に緩をあてます事をお話致しますが、(三)の瓣を

とりまして、重ねました布の上にのせ、六分の丸鏝で、瓣の先の方凡一分位を殘し、あとへ強く力を入れておし丸みをつけ、又次に(二)の瓣は七分の丸鏝で前と同し樣にあて、(一)の瓣は一寸の丸瓣でこんどは瓣の先を殘さず、初めに先の方へあて鳥渡離し、再び布の上に

薔薇の花



置いて、下の方を强くおし丸みをつけます、又小の瓣即ち(四)の瓣は二枚つゝ重ね布の上にのせ、筋鏝で先から元へ強く引き、二つに折りまして、又其上を筋鏝の先で壓し縮らし、後、夫れを開いて中頃から筋を引きますかく致しましたものを三ッ即ち都合六枚を、、、かま糸で、鐵のはりがね一本を折りよくよじりましたものへ堅く結び付け、次に(三)の瓣も矢張二枚重ねて圖のやうに、裏から兩端へ細く巻き返しましたのを二ッと、又別に二枚つゝ重ねましたまゝ片かわ計りへあてました瓣を二ッ向ひ合せに付け(二)の瓣も矢張向ひ合せに鏝をあてましたのを二つ結び付け、そこでかま糸をきり糊でとめおきます、次にあとの(二)の瓣(一)の瓣も皆裏へ兩端から細く圖のやうにまき返し、一枚つゝ糊で瓣の重なり合ひませぬやう付けます、夫故都合開きの花には一つに付き(一)の瓣が十二枚(二)の瓣が十枚(三)の瓣が八枚(四)の瓣が六枚入るので御座ります、そして花の外側になります程、瓣の返しを深く致さなければなりませぬ。半開は大な瓣を省き他は皆前と同じ樣に致しまして、只餘り開きませぬやう丸い形に作ります、蕾、萼、葉の作り方は庚申ばらの時と同じやうに致して宜しう御座ります、其まとめ方などは實物を手本といたしまして適宜に作るので御座います。

第二圖



書法指南

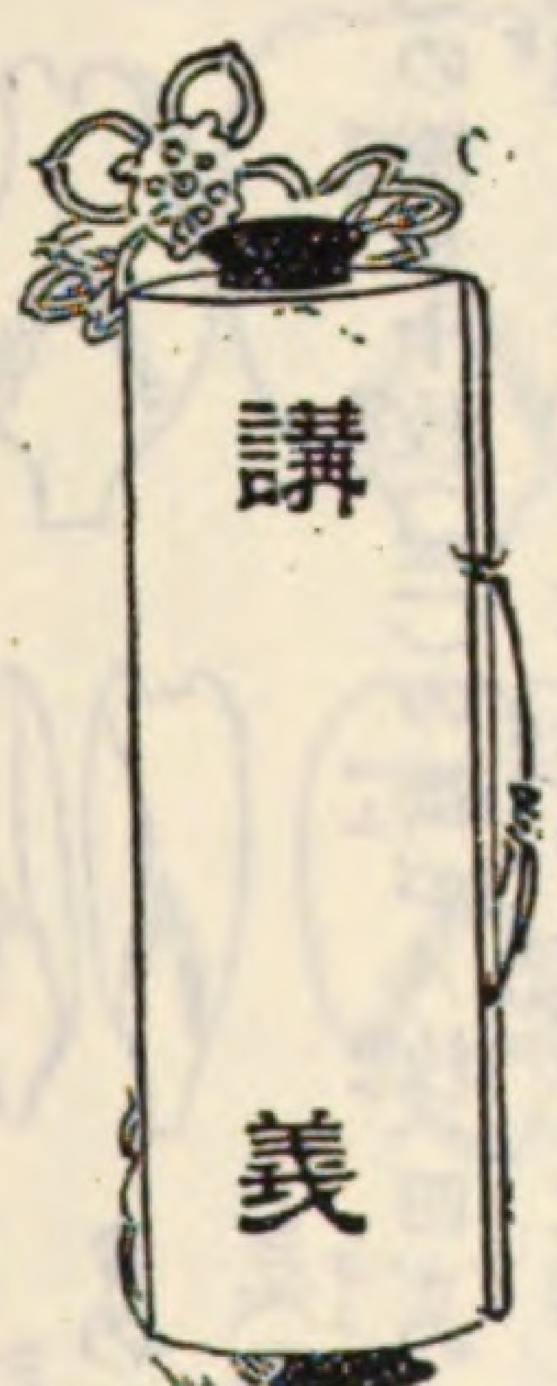
野口小蘋

寫し出す柳は春の柳にあらず初夏の柳なり嫩柳の和風に梳るさまとは異なれとも柳を畫くには嫋々の態を失はさるやう注意して畫くへしゑかきかた先つ條よりはしめ葉を作る柳はしなやかに見ゆるやう作ることをつとむへし

牡丹は花種々ありて一重、八重、千重あり色また種々あり花の異なるに隨ひ葉も自ら些し異あれはほそきありひろきあり畫きかた元よりさま〳〵あれと此圖は初心の人にゑかきやすく且つわかりやすきを專らとして寫し出せしなり畫きかた先つ花よりはしめ後枝葉を作る花は餘り濃からす薄からぬ墨を用ひて畫くへし葉すしは少しかわきかけたる時を待ちて畫くかたよろし

百合は花より畫きはしめ枝を畫き葉を作る花を畫くには淡墨を用ひ葉は宜しく濃淡を分ちて表裏相わかるやう畫くへし葉すしは濃墨を以て乾きかけたる時作るかたよろし

獅子花くちなしと稱するものなり畫きかたはやはり花よりはしめ濃からぬ墨を用ひて作るへし花全く成りて後枝葉及蕾を畫くへし葉すしはかわき加減を待ちて作る方よろし總て花卉の畫きかた第一卷第二號第三號にもあらかしめしるし置たれは此號には省きぬ



百人一首講義（五）

文學士 大町桂月

二十一、素性法師

今來むといひしばかりに、長月のありあけの月をまち出つるかな。

○長月は九月の事也。この頃は、夜が最も長く感ぜら

る〻故、長月とは云ふ也。而してこゝにわざ〳〵長月と云ふは、同じく人を待つにも、明け易き夏の夜よりは、長き夜の方がつらきこと、固より言ふまでもなきことなれば、待つ戀の心を切にせむとてなり。徒らに九月を用ゐたるにあらず。

○有明の月は、舊暦二十日以後の月を云ふ。夜半過に出でゝ明方まで殘る故に、有明月とは云ふなり。

○「待ちいでつるかな」は、「待ちて居る中に月が出でたワイ」といふことを短くつゞめて言ひたる也。「待ち出づるかな」とは訓むべからず。

○一首の意は、今すぐに來るから、待ちて居給へと云つたばかりで、さッぱり來ない。「ばかり」は來らざるにかゝる。「口ばかり」と云へば、行の之に添はざるを云ふ也。「來ると云つたばかり」と云へば、實際は來らざるを云ふ也。あれほどまで堅く約束しておいたに、何故來ぬであらうか。虫の音鳴き止むに、それかと聞耳を立て、秋風の戸を叩くに、もしやと出でゝ見れど待つ人の影、更に見えず、一刻又一刻、胸たゞどきつくのみにて、讀む書物も心にしまず、さても待つ身のつらさ、逢へば一日も一時の如く思はるゝに引きかへ、待てば一時千年も啻ならず、而かもこの九月、この夜の最も長き長月の夜、今か今かと待ちわびて、出づるは待たぬ一痕の有明月、待つ人は更に來らずと也。

○待ち戀の切なる心をよめる歌也。「今來むと云ひしばかり」の語に對するに、長月を以てし、有明の月を以てし、夜長きに、益待ちくたびれる意、自からこもれり。そのつらさ、じれッたさ、あらはに言はずして、思ひやるに餘りあり、而して待つ人來らずして有明の月出づるに、情景更に思ひやられて、あはれ深し。人丸の「獨りかもねむ」の歌の如く露骨ならず、卑俗ならず、而かも奇巧を求めずして、すらすらと讀みこなしたる中に、無量の情味あり。洵に戀歌の上乘なるもの、風清く月白き夕、試みに之を一誦せば、坐ろに腸を斷つの思あるべし。

二十二、文屋康秀

吹くからに、秋の草木の萎るれば、むべ、山

風をあらしと云ふらむ。

○「むべ」は「宜なる哉」「尤もの事」、なり更に俗語にて言へば、「成程」の意也。

○秋深くなりて、山風吹けば、その爲めに草も木も萎れてしまひ、山風が野山をあらして仕舞ふ故、山風の事を暴風といふのも、尤もである。暴風を荒しにこじつけたる歌也。

○元來詩歌は諷詠すべきものにして、ことわるべきものに非ず。この歌の如きは、平凡淺薄たる理路に陷りて、何等の感興もなく、趣味もなし。歌と云ふべきものに非ず。かゝる歌を百人一首の中に入れたる撰者の眼識なきは、憫れむべきのみ。

二十三、大江千里

月見れば、ちゞに物こそかなしけれ、我身
ひとつの秋にはあらねど。

○千ぢの「ち」は、「一つ」「ふたつ」「三つ」「四つ」などの「つ」と同じく、また「二十ち」「三十ち」「四十ぢ」などの「ち」或は「ぢ」と同じ。唯添へたるばかりにて、別に意味あるに非ず。千々の意に解すべからず。而して「ちゞ」と云ひたるは、物の數の多きをあらはせるにて、必ずしも千と限りたるにあらず。

○「我身ひとつの秋にはあらねど、月見れば、ちゞに物こそ悲しけれ」と、下よりかへして訓む格也。「ひとつ」は「ちゞ」に對應する言葉のあや也。天下一般の秋にて、この身ばかりの秋にはあらざるに、わが身は、秋になりて月を見ると、色々に悲しき思を催して堪へられず。「人はまさか斯うではあるまいに、隨分人は月見の宴など開きて樂しむのに」との意也。

○日光は、あまり明かすぎるものなれば、人の感興をひかざれども、月色は蒼々として、人をして一種の美にうたれしむると共に、また何となく感に耐へざらしむるものなり。月色媒をなして、或は過去をおもひ、未來をおもひ、その他くさ〴〵の事を思ひ、或はそれぞと思ふものなきも、何となき愁思胸に起るは、多感の人の常なるべし。この歌はやがてこの急處を捉

へたるものにして、いと面白し。多情多感の才人、月下にこの歌を誦せば、この歌の切なるを感ぜざるを得ざるべし。

二十四、菅家

このたびは、幣もとりあへず、手向山、紅葉の錦神のまに〳〵。

○「ぬさ」は、神に奉るものゝ總稱也。むかし旅行するに、峠を越ゆる時は、神に手向くるとて、赤や白の帛をまきちらすが常也。

○「手向山」は、むかし奈良に往復する者の必ず通りし處にて、こゝの峠には旅人幣を手向けし故、手向山と云へる也。

○「神のまに〳〵」は、「神の御心のまゝに」との意也。即ち神の御心にまかせまつる、御心のまゝに、この紅葉の錦に似たるを、わが奉る幣と見そなはせとの意也。

○この旅は、宇多上皇の御伴をして來た旅にて、普通の旅にあらねば、この手向山を通りても、手向くべき幣を持ち合はせず、幸に時は秋の暮、錦とまがふ紅葉の、風にちりしくは、赤き幣をまきちらせるに似たれば、願くはせめてそれを神の御心のまゝにわが奉る幣とも思しめせと也。

○紅葉の散るを、赤き幣に見立てたる旅の即興の歌としては、多少の風情なしとせざれども、何となく滑稽めき、且つ輕佻の意も見え、菅公の如き眞面目なる人には相應しからぬ歌也。すべて歌よむには、誠意なかるべからざれども、神祇に關する歌、殊に然りとす。紅葉を幣と見そなはせとは、一寸面白きやうなれども、毫も誠意なし。われ取らざる也。

二十五、三條右大臣

名にし負はゞ、逢阪山のさねかづら、人にしられで來るよしもがな。

○「名にし負はゞ」に「名に負はゞ」にて、「し」は唯強く言はむために添へたる言葉也。「名に負はゞ」は、名

前に持つて居るなら也。下の名にかゝる言ひ方にて、こゝにては、逢阪山とて、逢ふといふことを名に持つて居るなら也。

○「さねかづら」は、一種の蔓草也。非常に長く延るものにて、人之をたぐりよせるものなれば、「繰る」を「來る」に言ひかけたり。「來る」は、今日では先方よりこちらへ來るとなれど、むかしは此方より行くことをも云へり。こゝの「來る」は「行く」と也。

○「知られで」は、「知られずして」也。

○「由もがな」の「もがな」は希求の詞也。

○この歌、上の句は、例の序詞にて、「來る」と言はむ爲め也。あの人がよく繰る逢阪山に生へて居るさねかづら、その山も逢阪の逢といふことを名に持つて居るが、われも思ふ人に逢ひたい、而かも人に見付けられては自由に逢ふことが出來ぬから、人に知られずして、行いて逢ひたきものかな。

○忍ぶ戀路のまゝならぬを歎つ切なる情は見えざるにあらねど、「逢ふ」「來る」などの言葉について、あまり細工しすぎて、眞情反て失せたり、感心すべき歌にはあらず。

二十六、貞信公

小倉山みねのもみぢ葉心あらば、今ひとたびの御幸またなん。

○「待たなむ」の「なむ」は、願望の詞也。待つてほしいものだ位の意也。この「なむ」は連用言につゞけば、未來の想像をあらはす。例へば、「花咲きなむ」と云へば、「咲き」と云ふ連用言につゞきたるにて、「花が咲くだらう」との意也。「花咲かなむ」と云へば、「咲か」といふ將然言につゞきたるにて、この場合には、「花が咲いて貰ひたい」との意となる。すべて「なむ」の語は、將然言につゞきたる時に、願望の意をあらはすものと知るべし。

○貞信公、宇多上皇の御伴して、大井河に赴きけるに、上皇小倉山の紅葉を御覽して、美なる哉、この紅葉の景、天皇にも見せたいものであると宣ひければ、貞信

公その御心を汲み、且つ自からの心をも添へて詠みたる歌也。一首の意は、小倉山の峯のもみぢ葉よ、もし心があるならば、今一度天皇が行幸になるまで、散らずに、このまゝに綺麗で居てくれよと也。

○少しも飾らず、また巧を求めず、ありのまゝに歌ひ出せる中に、忠厚の意自からあらはる。且つ美しい景色を見ても、一人にては面白からず、親しき人と共に賞玩して一層の趣味を感ずるが人の常也。是非天皇にも御覧に入れたいと言へば、小倉山の紅葉の美なるは、言外に明か也。この歌一誦して、小倉山の紅葉の美なることも思ひやられ、兼ねて詩人忠厚の意を見る。一代の名歌と云ふべし。

二十七、中納言兼輔

みかの原涌きて流るゝいづみ川、何時見きとてか戀しかるらむ。

○上の句は、「いつみ」を言はむ爲めの序詞也。上の句の「いづみ川」と同じ音の「何時見」と言ひつゞけたり之を文字鎖と云ふ。一種の修辭法也。

○この歌、未逢戀の意をうたへる也。何時見たと言つて、こんなに戀しいであらうか。一向見たこともない人であるに、どうしてまあ、このやうに戀しいであらうか、我れながらわからず、さても戀は、くせものなる哉。これ一篇の意也。

○たゞ未逢戀といふことを説明したるのみにて、さまで感興をひかぬ歌也。

二十八、源宗于朝臣

山里は冬ぞさびしさまさりける。人目も草も枯れぬと思へば。

○「人目枯る」とは、人見えが枯るにて、人の疎遠になりゆくこと也。

○山里は、いつもさびしきものであるが、冬は又格別にて、草木もかれはてゝ仕舞ひ、この身も亦世に忘られて仕舞ひ、絶えて訪ふ人もないとかと思ふと實に山里の冬は心細くも寂しいと也。

○世に捨てられてわび住ひする人の、冬の述懷、げにさこそと思はれて、あはれなる歌也。

二十九、凡河内躬恒

心あてに折らばや折らむ、初霜の置きまどはせる白菊の花。

○「心あて」は、「あてずゐりやう」也。

○「折らばや折らむ」は、「折つたら折られるだらうか」也。

○白菊の花に、霜降りて、いづれか花、いづれか霜なるか、見わけがつかず。たゞ當推量に折て見たなら、白菊の花が折れるとが出來やうか。これ一篇の意也。

○初冬の曉の景色を捉へ得て、面白からぬにあらねど、細工の跡見へ。上乘の歌には非ず。

かぞふれば春の日數も糸遊の
あるかなきかになりにける哉

漢文評釋

文學士　久保天隨

◉節婦（其二）

磐溪大槻清崇

●作者小傳　大槻清崇、字は士廣、通稱は平次、磐溪と號す、陸前仙臺の人なり。その家系の大略は、松崎慊堂が送大槻士廣西遊序の起旨に記せし者に就いて見るべし。曰く、大槻氏舊爲奧中庶族、自玄澤先生以洋學通明、奉朝請大府、而族子清臣、以磐井村循吏顯、其弟士繩以經行修飾、陞仙臺府督學、於是今則爲一方名門、先生之季子士廣、又能蹈厲鼓舞、似文藻稱於昌平國庠、と。磐溪西遊の次、頼山陽を訪ふ。山陽之を水西莊に延き、其文を賞し、後世望ありといひしが、後、果してその鑑識に違はず。維新以後、一代の通儒を以て世に名あり。明治十一年歿す、年七十八。著書頗る多し、今の文學博士大槻文彦氏は、その第二子なりといふ。

大野九郎兵衛之女某、嫁ニ備藩梶浦兵七ニ、生ニ

子三人、伉儷殊篤、既而兵七新築一室於屋後、如爲菟裘之計者、妻諫曰、夫君春秋方富、而家道不優、今而休退非計也、兵七曰、吾自有處分、

これは、梶浦夫妻の互に義を以て分れし話なり。前文と相聯關して、不忠の人にも、なほ絶代節義の女ありしを知るべく、均しく大野氏の出にして、行爲は異なるも、精神は同じきを以ての故に、並稱して節婦二とは題せるなり。播磨の赤穗侯淺野長矩の家老たりし大野九郎兵衞の娘何子と呼べるは、隣國備前岡山の藩士梶浦兵七といふ者に嫁ぎけるが、子三人までも生みけり。伉儷殊篤とは、夫婦中殊に善く、琴瑟和諧するをいふなり。一家の中風波もなくて過ぎけるが、兎角する中に、兵七は一間を家の後に建て増して、隱居所の設を爲すやうなり。菟裘は左傳隱公十一年に使營菟裘、吾將老焉とあるに本づき、元と魯の邑、泰山梁父縣の地名なりしが、一轉して隱居の義とはなれるなり。之を見て、妻は諫めて、我が夫は年も若く、その上、家の暮向も十分といふではなし、今からして役を退け、樂々と隱居などせらるゝは、唯だ得策に非ずといひけれども、否々、それは心配するに及ばず、吾には聊か目圖見ありといひて、いかな聞き入れざりき。

これは梶浦が、前以て萬一の場合あらむを慮り、後日の計を爲せし者にして、事を未然に察する明、自ら常人に超ゆるものあり。讀者は其妻と同じく、何の意たるを悟らず、やがてそうかと思ひ當る所あるべきなり。

居無何、關東喧傳、赤穗遺臣大石等四十七人、同盟以復故君之讎、有錄其姓名以賣於市者、遂傳至山陽、兵七初謂、舅氏之逃跡、或別有深謀、及閲其錄、無有大野某之名也、妻亦聞之、心竊不樂、鬱鬱擁被而臥、

かくてある中、未だ幾ならず、青天の霹靂、忽ち一報を傳へしものあり。江戸の方にては、赤穗の遺臣、大石

良雄等四十七人、同盟して怨かさなる亡君の敵、吉良上野介を討ち取りたりといふ古今無雙の大快事の噂のみ、到る處にやかましく、義士の名前を書き列ねたるを摺り物にして、讀賣商人の聲いさましく、辻々に呼はるものありけるが、いつしかぱつと四方に廣まり、其頃は電報なども無き不便の世なりしかども、かゝる事の傳はり行くはさまで遲からず、遂に山陽道の國々まで取沙汰さるゝことゝなれり。兵七、その初竊かに思へるやう、舅の九郎兵衛、城渡しの時より、その處置よろづに就けて、評判甚だ面白からず、やがて烟の如く、跡をかき消して立ち去りけるが、苟も武士たるもの、のめ／＼と、露の命を貪り居る譯にもあらず、必ず深き謀あればならむとて、やゝひいき目に思ひ居たりしが、かの名前の摺物を買うて見れば、明けて悔しき玉手箱のそれにも似て、繰り返し／＼、幾度見ても、遂に大野なにがしといへる名もなく、兼ねて期せしところは仇となりて、萬一の用意の役に立つべき時は來りぬ。かくて人に爪彈さるゝまで、不名譽なる親の行爲、子の身になりて見れば、殊更につらくかくと聞きける妻は、心の中自から面白からず、鬱々として氣分もあしく、飛んでもない親を持ちしが因果と、今さら其身の不幸を悼みつ、悔みつ、どこが惡るしとにもあらねど、搔卷かぶりて臥し居たり。自ら惡を爲せしに非ず、その骨肉の爲に累せられて、世に顏出しもならずなりぬる妻女の身の上、誰か之を哀れと思はざらむ。世にはかゝる例頗る多きことなるが、之を處せむには、愈よ己が身を愼み、せめては一廉の善行をなし、以て所親の積惡を乘除して洗滌すべきなり。孝經に「立身行道、揚名於後世、以顯父母、孝之終也」といふは、誰しも同じ事なるが、惡虐の名を得し者の末々たる者に取りては、一際のことなり。されど、折角の志ありても、その場合のなきは、誠に其人の爲に不幸の極といふべきに非ずや。細川忠興の夫人は、逆臣明智光秀の女なりけるが、大阪城の一死、義烈の名を爲して、後世に稱せられたり。されどこの梶浦の妻の如きは、昇平の日に生れ合せたれば、さばかり

目ざましき事を爲さむ場合もなくて、志のみは儼然存ぜしならむも、碌々人にさへ稱せられず。さばれ、日月照臨して上に在り、自ら心に愧つる無くんば、區々の褒貶、亦た何かあらむ。かくて梶浦が如何にその妻を處置せしかは、次の段を見れば明かなるべく、一篇の眼目、また實に此に在り。

於是兵七使婢召致妻、命之曰、自汝之歸吾、中饋之職亦勞矣、雖然我義不與汝爲夫婦、顧舅氏身爲國老、受厚祿其主、而背恩忘義、不與復讎之盟、此則不忠之人耳、不忠人之女、決不許爲吾妻、今日與汝離婚、然非有罪於汝也、吾豫慮汝之無所歸、以設別室也、宜就以終焉、我則不復見汝矣、遂使其三子與一婢從之、身獨居室、委家事於一老媼、終身不復置婢妾、

九郎兵衛、節義を逃れ生を偸みしこと、固より明かにして、犬畜生に劣りし細豎佞人なり。梶浦氏、その女を妻として、共棲するを得ず、恩愛の契淺からず、三人の子までなしたる中を割く、其心苦なりといふべし。こゝに於て、下婢をして其妻を招き寄せしめ、懇々其命を傳へて曰く、其方が我家に嫁ぎしより、こゝに幾年、十分にもならぬ家政の遣繰をなし、食事の世話を主として、隨分世帶には苦勞を致し呉れたり。按ずるに中饋は易の字面なり、家人の六二に曰く、无攸遂在中饋貞吉と、正義に曰く、六二履中居位、以陰應陽、盡婦人之義也、婦人之道、巽順爲常、无所必遂其所職、主在於家中饋食供祭而已、得婦人之正吉、故曰无攸遂、在中饋貞吉也、と。即ち大賢孟子の母が、「婦人の禮、五飯を精にし、酒漿を羃す」といひしと同じ。さて汝はかほどまで、我が爲に骨を惜まず、いろ／＼遣て呉たれど、悲しいかな、自分は武士の義理として、今や其方と夫婦となり居る譯に行かず。その故如何といふまでもなく、舅たりし九郎兵衛殿は、名門の末に生れ、其身は苟くも淺野侯の家老として、一藩の尊敬を受け、多くの祿を主人より受け、眞逆の時には一番先き

に身を投げ出すべき重臣にてありながら、相傳の主君の恩を屁とも思はず、君臣の大義を忘れて、此度仇討の同盟の中にも加らず、誠に氣の毒の至なれども、不忠の人と謂はねばならず。かゝる不忠の人の娘は、之を如何にするも、吾が妻とする譯に行かず。そは現在の世間の手前のみならずして、先祖に對しても濟まぬ次第なればなり。故に甚だ薄情と思ふかも知らねど、今日より其方と離縁する外あらず、夫と呼ぶな、妻とも言はじ。されど此事は全く汝の不幸にして、決して汝自ら其罪ありといふにも非ず、舅は何處に行きしや、有處も知れぬに、歸ることとも出來ぬなるべく、其故に吾は萬一の變を慮りて、別室を建てしなるが、今より其方に赴きて、一生を終るべし。一つ家にありて、互に惡くしとも思はぬなれど、吾は今後決して汝と相見ることとなからむ」といひて、別をなし、その生みたる三人の子と一人の下婢とを付けて、萬事の世話を命じ、かの一間に籠らしめ、其身はひとり本宅に居り、家事を一人の老婦に委ね、一生涯また下婢も妾も置かず、妻に義理を立てゝ、幾十年の月日を送りけり。讀者は是に到りて、初めて梶浦の本志を領會し、義を守る外に一の心なきを知れるなるべし。結末の三子一婢は第一段の三子と末段の初にある婢とに反映し大體の上に於て針線の跡を留めたり。また初段に吾自有處分といへるは、次の二段、梶浦の心中に思索せしところを包括して、全篇の意を籠罩するもの。筆致疎密を極むる妙は、此に見るべし。

寧靜子曰、余嘗録殉死條、論一死之俠可及不死之義不可及也、及録此條、則益知不死之義難爲也、夫梶浦氏夫婦、身離居處咫尺之間、而終身不敢動心、各守孤節、以全其義、此則異樣節婦、異樣義士、世間有一無二者、嗚呼何可及乎、

「殉死の條を錄し」云々といふは、この書、即ち近古史談卷二の戶川肥後と題せる項の論贊に、「殉死の陋習たるや、今古一揆、浩嘆に堪ふべけむや、世の忠臣義士

と許すもの、遺孤を翼けて、以て先君の業を張大にする能はずして、徒に以て、その愛する所の君に殉す、夫の匹夫匹婦の諒を爲すものと、相去る幾何ぞ」(もと漢文なれど、今、假名交に書き改む)といへるを指し、これを總括して、不死の義の一死の俠より難しとは言へるなり。むかし趙朔の殺さるゝや、遺兒あり、其客二人、必ず之を復せむと欲す。程嬰すなはち公孫杵臼に謂て曰く、孤を立つると、死すると、孰れが難き。程嬰曰く、死は易くして、孤を立つるは難し。公孫杵臼曰く、趙氏の先君、子を遇すること厚し、子彊めてその難き者を爲せ。吾はその易き者を爲し、請ふ先つて死なむ、と。二人相謀り、他人の兒を取りて、山中に匿れ、程嬰ひとり出で、謬て諸將軍に謂て曰く、能く吾に千金を與へなば、趙氏の兒の處を告げむと。遂に之を誘ひ、杵臼と孤兒とを殺し、以て敵の心を安せしめ、趙子の眞の孤を養育し、十五年にして趙氏を復したり。此等の事によりて見るも、一死の義は、さばかりの難事に非ず。今夫れ非常の事に臨むときは、

平生は意氣地なき者も、屹度心に思ひ定め、首を差し延ばし、笑つて刀を受くる者、古今その例に乏しからず。死に對して、思ひ切の善きは、野蠻人ほど上手なりといへるに非ずや。然れども、一旦の恥を忍び、紛擾忽卒の間に於て、後年の事を規畫し、必ず之を成し遂ぐべき目當をこしらへて、艱難辛苦して、之を果たす如きは、胸中綽然として餘裕あり、毅然として自ら持し、智謀膽略兼ね備ふる者に非ざれば能はず。こはすべての場合に然ることにして、世に烈女といはるゝ者多くして、賢婦などいふ者の比較的に少きも、亦た此故のみ。烈女たるは易く、賢婦たるは難し、たとへば、猶ほ淸時に英雄を見ざる類のみ。英雄なきに非ず、事の以て英雄たらしむ無ければ、英雄の英雄たるを見ずして止むが爲めたり。烈といへるは、寧ろ權の變にして、賢といへるは道の經なり。情激する所ありて事成り、烈輙ち見はるること、前にも言へる如し。而して太平無事、春風駘蕩、和氣家に滿ち、而かも賢名の傳はるものありたらむには、必ず中に蓄ふる所無く

むばあらず。磐渓が「益す不死の義の爲し難きを見る」といひし者、中れり。誠に梶浦夫妻の如き、つい其處といふべき目と鼻との近き間に離れ居て、一生涯、再び夫婦とならむ心をも動かさず、夫も、妻も、各離れ〴〵の操を守りて、其義を全うしたるは、一寸出來そうで、中々に出來ぬとなり。これがもそつと大した出來事の爲ならむには、妻たるもの、生死の間に花々しき事をも仕出かすべけれど、根が梶浦がいへる如く、己に罪なくして父が不名譽な事爲せりといふのみ、之を處するや、實に難きなり。されど、善く之を自覺して、世に顔出しのならぬ身を侘びつゝ、可惜一生を埋れ木の花咲く事なくて、朽ちはつるを辭せず、これも元は夫に義理を立て、武士の名を折らしめざる心一つの爲なりと知らば、哀れさいよ〳〵増さるに非ずや。梶浦も亦た春秋に富める身を以て、妻と義絶して後は、之に義理を立てゝ、女狂ひは愚か、婢妾も置かずといふに至りては、誠に見上げたる心ばへなり。夫が夫なれば、妻も妻にして、異様の義士、異様の節婦

を以て之を推稱せしもの、誰か之を不可なりと言はむ。まことに、世間に一ありて二とは無かるべきもの、到底眞似のならぬ事なり。以上の事實、これを今時の語にていへば、社會の制裁の爲に、戀愛を犧牲に供したる者にして、その確固たる意志を以て、感情を壓服し得たるは蓋し東洋流道德の精粹なり。往古徳川時代の道德は、全くかくの如き者にして、所謂武士道の極致は、大義名分に在りしなり。維新以後、西洋の思潮非常の勢を以て入り來りし後は、舊慣すべて廢し、新風未だ起らず、社會の秩序は今に紊亂して、容易に整頓せず。制裁なども甚だ勢力なき如く、一般の民風、日に輕佻浮薄に流れ、朝日ににほふ山櫻に似たる床しき大和心は、全く跡をも留めずなりぬ。上には太平の宰相色を好むあり、下には「焦がる何としよう」を歌ふて得々たる懶惰の國民あり。日々に刊行さるゝ新聞紙に就いて、破德非倫の記事を除きなば、剩すところ幾許かあるべき。殊に女子の道德に至りても、その觀念大に變じ來り、女學生の氣風は、誰に言はして

も、生意氣との評語は變らず、この手合が二十世紀の新日本、中流社會、家庭の主婦となることかと思へば聊か寒心すべき節なきにも非ず。吾等は飽まで、東洋固有の美風を存し、其上に足らざる處だけを、他より採りて補はむと欲するもの、節義禮讓などいふことに至りては、古の儘にて差支なかるべし。筆の序に、聊か平生懷抱の一端を發洩し、敢て將來の賢婦たるべき人たちの清覽に供せしもの、亦た是れ一片の婆心のみ。

土佐日記講義（五）

文學士　鹽井雨江

此の歌を、たれかれあはれがれども、一人も返へしせず。しつべき人もまじれども、これをのみいたがり、ものをのみ食ひて夜更けぬ。此の歌主、まだまからずといひて立ち去りぬ。

○これかれ。これかれの人にて、船中にある幾人かの人をさしたるなり。○あはれがれども。面白い面白いと、此の歌をほむれどもといふ意なり。○返しせず。其のゆくさきの歌に對して、誰れも返歌をせざるなり。○しつべき人もまじれど。此の返歌を爲し能ふ人も、船中にはあれどもといふことなり。○これをのみいたがり。この行くさきの歌は下手なる故に、返歌するも反て氣の毒なれば、唯、この歌をのみ、面白い誠い面白いと口に譽むるやうにして、實は心の中に笑ひて、誰れも返歌もせずとなり。○物をのみ食ひて云々。返歌はせず、唯、物ばかり頻りと食ふのみにてつひに夜もふけたりとなり。○此の歌主云々。此のゆくさきの歌をよみたる人は、まだ我が家へ歸へり行くにはあらずといひて、席を立ち去りたりといふ事。一寸小便にでも行く氣にて、未だ歸へるにはあらずといひて、一寸席を出でたるなり。○此の段のはなしは、つまり、まづい歌なれば、誰れも〳〵唯面白い〳〵と口にはほむれど、心には嘲り笑て、此人の歌に

は返歌せんとはせず。唯、此の人の持ち來たれる物ばかり食ひて居りていつしか深夜になりたりとなり。

ある人の子の、わらはなる、密かにいふ。まろ、此の歌の返へしせんといふ。驚きて、いとをかしきことかな、詠みてんやは、詠みつべくは、早やいへかしといふに、まからずといひて立ちぬる人を待ちて詠まんとてもとめけるを、夜ふけぬとにやあらむ、やがていにけり。

○ある人。貫之なり。○わらはなる。此の句の下に、がといふ助詞を畧したるなり。わらはとは童子なり。まだ稚き子をいふ。○密にいふ。ナイシヨウにて父、に語りたるなり。○まろ。我れ、己れといふ如く、自身の名の代りに呼ぶ詞なり。○驚きて。稚き子が返歌せんといひたる故に、貫之は驚きたるなり。○いとをかしき事かな。ソレは甚だ面白い事だワイといふ事。○詠みてんやは。詠まれんか詠まれはせまじといふ事にて、稚きお前の如き者が、歌など詠まれはせまじとの心なり。○よみつべくは早やいへかし。詠み能ふならば、早く詠めかしといふ事にて、お前の如き子供が、歌などは詠み能はざらむ、ソレトモ詠み能ふならば、早く詠めと促したるなり。○まからずといひてたちぬる人を待ちてよまん。其の子供の答へなり。彼のまだ歸るにあらずといひて一寸席を立ち去りたる人の再び此の席に來たるを待ちて、その時によまむといへるなり。○もとめけるを。たづねたるにといふ事にて、彼の一寸とて席を立ち去りたる人は何處に居るか、疾く此の席に伴れ歸へらむと思ひて其處らを尋ねさがしたるなり。○夜ふけぬとにやあらん云々。夜が既に更けたりとの故であらうか、その歌主は、一寸とて席を立ち去りたるまゝ、直に、その家へと歸へり去りて、そこらには居らざりとなり。○やがてとは直にといふ意なり。○此の段のはなしは、誰れも返歌する人はなく、その歌よみなる人は、まだ歸へるにあらずとて、其の席を出で去りたるが、その後

にて、貫之の子供の未だ稚きが、私が此の返歌をよまむと密に言ひたる故に、貫之は驚きて、お前の如き子供が、さる歌などよみ得べき事かは、詠まんなどいひたりとて、詠めはせまじ、ソレトモ、詠めるならば、面白い事だ、詠んで見ろといひたれば、子供は、あの歌主の來たるを待ちてよまんとて、そこらをたづねたれど、既に夜が更けたりとて、其の人は、席を立ちてより直に家へ歸へり去りて最早そこらには居らざりきといふ事なり。

そも〳〵いかゞ詠みたるといぶかしがりて問ふ。此の童子、さすがに恥ぢて言はず。強ひて問へば、いへる歌。

　行く人もとまるも袖の涙川
　　みぎはのみこそ濡れまさりけり

となんよめる。

○そも〳〵云々。一躰全躰何んと詠みたるにやと、不審に思うて、其の子供に問ひたりとなり。○此の童子云々。此の子供が、童子ながらも、もの恥かしくして、その歌を語らずと也。○強ひて問ふ。恥ぢて語らぬを、是非語れとて、無理に問ひたるなり。○歌の意は、別れて行く人も、後に殘りとゞまる人も、共に別れを惜みて泣く涙に、袖は共に同じやうに濡れまさるといふ事にて、前の人の歌に、「あとに殘りて泣く我が方がまさる」といひたる故に、此の童子は「否とよ、殘る人の涙ばかりが餘計にもあらず。行く人のこぼす涙も、同じやうに餘計なり。どちらも、袖は、共に優劣なく濡れまさるよといひたるなり。○涙川といへるは、別に川の名にはあらず。唯、涙のことを、かくいへるなり。さて、みぎはといへるも、涙を涙川といひたるより、その川の緣によりて、袖のぬるゝ事を、みぎはが濡るといひたるなり。子供の歌なれば、もとより難ずべきものにはあらねど、別に面白き歌にもあらず。殊にみぎはといへる詞、いとむづかしき用ひさまなり。

かくはいふものか、うつくしければにやあ

らん、いと思はずなり、童言にては何かはせん、嫗翁にをしつべし。惡しくもあれ、いかにもあれ、便あらば遣んとておかれぬめり。

○かくはいふものか。かやうに上手には詠みたるものかなと、子供の歌よみたるを賞嘆たるなり。此の句の次きに、「されど、さやうに、上手に詠みたりと、我が心に思はるゝも」といふ如き詞を足して見るべし、○うつくしければにやあらむ。我が子を可愛く思ふ故にやあらむといふ事にて、即ち、この歌の上手に思はるゝも、我が子を愛する心より、さやうに上手に面白く思はるゝにやあらむと、我が子の歌をほめたるにつけての申譯なり。○いと思はずなり。とにかくに未だ年ゆかぬ子供が、かゝる返歌をよまむとは、誠に思ひがけなく案外の事なりと、不思議に思ひたるなり。○童言にては、云々。どうして童子の詞とはすべからず。○嫗翁にをしつべし。翁嫗の歌にゝ爲し得んといふ事にて、をは語調を助くるまでの詞にて、別に意なし。即ち、童子のこの歌の面白きをほめて、嫗翁の歌にしてもよし、耻かしからずとほめたるなり。嫗とは老いたる女をいふ。少女はをみなと書くなり。老いたる女はおみなと書く。○惡しくもあれ、云々。よしや拙くとも、どうありとも(イ)、子供がかゝる返歌したりとすれば、面白く興あるものなれば、よきついであらば、彼の「行くさきに立つ白波の」とよみたる人の許に、此の子供の歌を送りやらむとて、此の童子の親なる人は、其の歌をすてずに、しまつておかれたやうに見えたとなり。めりは「の如く見ゆる」といふ推量の詞なり。實は、貫之が、我子の歌を、大切にしまひ置きたるなれど、それを、しまひおくやうに見えたと書きたるは、これは、土佐より歸へるある國司に伴れ立ちたる女が書きたる日記のやうにして書きたるなれば、かくいひたるなり。

小説

磯の清水

江見水蔭

上

一網に打冠せ得べき程の小さな家。此所が昔の鎌倉街道であつた頃から立つて居て、義貞が片瀬腰越に火を放つたといふ、其時にも燒殘つたかと思はれる大時代の古さで、つひ後の鎧掛松を、一寸でも枝打すると祟りがあると云つて恐れて居るやうに、此古家の手入を爲ると、神の罰でもあるものか、少しも繕つた形跡が見えぬ。軒は傾くまゝ、柱は曲るまゝ、それは〳〵荒れに荒れて、風は吹拔き、雨は漏通し、それであるべきを、幸ひな事には、椿の林が四面を圍んで、自然の風避け。例の鎧掛松が屋の上を覆ふて居るので、天然の雨防ぎ。これで漸く人間の住家とは爲し得られて、此所に細々と烟を上げるのは、島詣での客を宛の車夫紋十郎の一家族。居るわ〳〵夫婦の仲に子供が五人、十三が頭で、末は當歳の乳吞子、順に其名を呼ぶ事は、親でも一寸まごつく位だ。姉が十三で、お町。次の弟が九歳で、藤吉。七歳の子が、光助。四歳の娘が、お文。乳吞子は女でお榮。母親の名はお北といふのだ。

夏は一層賑ふ海岸の村里、避暑水浴の客が多く入込み、宿屋も素人家も貸別莊も、皆隅までふさがつて了つて、此一村に落る金子は、鯨が百本取れたより大きいのである。停車場に客待をして居ると、面白い程乗手があるので、どんなよぼ〳〵車でも、日に三圓や四圓稼ぐのは譯はない。紋十郎なども若い方ではないが、先づ收入の多い方で、五圓以上は毎日握つて來るので、それで、年中の生活を立て行くのであるが、夏三月、若し此三月を稼ぎ害ふと、後の九月は目も當てられぬので、島行の

客を目的では、札番で六日も七日も空を絞る。仕事に出た處で十四五錢が關の山、覺束なさは此上も無いのだ。

然るに其肝腎かなめの夏場、不幸にして紋十郎は脚氣を踏出した。車夫が脚氣に罹つた位、みじめなものは有るまい。

如何にも斯うにも仕樣が無い。家が廣かつたら貸間をしても好いのだが、例の通り古い小さな汚い家。

お北は心配で苦勞で泣くにも泣かれぬ。病人の良人の他に、子供が五人。せめて内職に避暑の客の洗濯物でも引受ければ、隨分と仕事もあるので、鹹水に濡れた水泳衣だけでも、中々數は少くない。

しかし、紋十郎の家には井戸を持たぬのである。海邊の砂地、掘つても好い水は出ぬので、此邊では手を着けぬ。五六町ある共同井戸まで行くか、然うでなくば、つひ傍の小泉臺の河內何某の別莊、其構內の掘拔井戸、此所へ貰ひ水に行くの他は無いのである。

しかし、此所へ水を貰ひに行くには、裏門を恐る〳〵這入つて、可怖い犬に吠えられて、邪險な下女に一應斷はつて、厭な顏を爲れながら、びく〳〵もので汲むのである。

此所の井戸は『辨慶の隱れの井戸』の名殘だとも云はれて居るだけに、實に名水である。少しも汐氣などは含まぬ。如何なる旱天でも底の見えたといふ事は無い程で、星月夜の井にも劣らぬのである。

それを又如何したものか、別莊の家では惜しんであまり好い顏は爲ぬ、けれども他に水を得るのは、餘りに遠いので、遠慮しながらも紋十郎の一家は、手桶を下げて其所に行くのである。

今宵も土瓶に一杯の水を得る爲に、長男の藤吉が出掛けて行つたが、暫らくして歸つて來た。しかし、土瓶は空で、水を入れる處が、涙をそれに滿たさうとして居た。

『如何したのだい、藤吉‥‥又、犬でも吠えたかい‥‥‥』

とお北は云つた。

『なアに、此頃ァ犬は、おいらに馴ッ了つて、吠える處か、尾を掉つて傍へ來る……』
『そんなら如何して水を汲んで來ないのだい。阿父さんが冷めたい水が飲みたいと云つて居るのに……早く何故行つて來ないのだえ』
『だッてね、今……つひね、汲まうと思つて、おいら釣瓶を落しちやッたのだ』
『それは惡い事をしたね。で、如何したえ』
『おいら、一生懸命に爲つて引上げたのは上げたのだが……いけないッて……』
『何がいけないッて……』
『最う水を汲ませないッて』
『誰が汲ませないッて』
『女中が……』
『それは如何も困つたね。何も水をそんなに惜しまなくッても好いだらうが……釣瓶を落したのは此方が惡いのだが、それを引上げたら最う好いだらうに……金持といふものは何んでも物惜しみを爲るものだね。まア好いよ、妾が翌日にでも爲つたら、斷つて來やう。然うすれば又汲まして呉れやうが、何も水を惜しむッて、餘り馬鹿々々しい……』
お北は無念の涙に暮れて居た。
冷めたい水を呑みたいといふ病人に、水を呑ませる事が出來ない。藥も滿足には與へられぬ良人に、水も充分には給されぬとは、何んたる悲しい事であらうか。
仕まじきものは貧であると、胸を痛めて途方に暮れて居ると、姉娘のお町は、見るに見兼ねて。
『ぢやァ妾が共同井戸まで行つて來やう。遠いのさへ我慢すれば、なァーに頭を下げて貰ひに行かなくッても好いのだから』
お町は藤吉の手から土瓶を取つて走り出した。

中

明くる朝、お北は別莊へ行つて、又水を汲まして貰へる樣に賴まうと、出かけやうとして居る處へ、向ふから來

たのは此村の大地主で、後藤宅兵衛といふ老爺だ。

『おい〳〵好い處で會つた。お前に是非談じなければはならねえ事があつて來たのだが‥‥』

『左樣ですか、それは何事で‥‥』

『何事ぢやァねえ、お前の處では毎度河内さんの別莊へ、水を汲みに行くさうだね』

『はい‥‥參りますが‥‥』

『それがいけないのだよ。如何も好くない事だ。元來河内さんの別莊の地面は、私の所有であつたのだが、河内さんが別莊を建てるに就て、讓つて上げたのだ。それも彼の水が好いといふので、向ふから望まれたので‥‥家を建てる折から、庭を造るまで、すべて私が指圖して上げたのだが、東京の本邸に歸つて居さッしやる間は、私が何から何まで監督して居るので、今のやうに來て居なさッても皆、何事も私の世話だ。處が、聽けば、お前の處では、無遠慮に別莊へ水を汲みに行くさうだが、けしからねえ事だ。今河内さんへ行つて初めて私は知つたのだが、これからは決して水を汲みに這入らねえやうにして貰ひませう』

『それは大きに惡ふ御座いましたが‥‥何も無遠慮に參つた事は有りません。參るたびに一々頭を下げて‥‥』

『それがさ、何も頭を下げたからッて、お向ふには何んの德にもならねえのだ。第一釣瓶だッて其度に破損のだ。や、昨夜は其釣瓶を落したといふ事だ。そんな事をしては仕樣が無い。それに第一、お前達見たやうな穢い扮裝をした者が、彼の別莊に出入をしては見ッともなくッて仕樣が無い。だからの、最う此後はどんな事があつても、水貰ひには行かねえやうに、キッパリと斷はりましたぞ。好いかえ、馬鹿々々しい、下らない事で世話を燒かせる。ちよッ、つまらねえ』

斯う云つて、ぶつぶつ憤りながら去つて了つた。

お北は又も涙である。水！自然に湧いて井を滿たして居る水！ それを惜しむ別莊の主人も非道だが、それを取次いで喧しく云ふ宅兵衛も無情だ。

これは、しかし、斯う厳しく云ふ譯で、宅兵衛は紋十郎一家には、日頃から快く無いのである。
最初未だ此村が開けぬ内から、宅兵衛は手の届くだけ手を擴げて、地所を大概買締めて、自分の所有と爲して了つた。紋十郎の家附の地面、極僅かな狹い所ではあるが、海



岸の勝地として誰の眼にも着くので、此所をも買入れやうと思つたが、紋十郎は先祖の代から傳はつて居るのだから、自分が之を賣るのは、或る大きな罪惡を爲すやうに思はれて、如何に宅兵衛が甘言を以てしても、斷じてそれに從はなかつた。

されば宅兵衛は、何處までも之を根に持つて、儲けそこなつたのを殘念に思つて、何につけても紋十郎一家には好く當らぬといふ始末である。此宅兵衛の爲には、幾人つらい目に遭はされて居るか知れぬのであるが、紋十郎一家ほど酷い目に遭ふのは、又多く無いのである。

お北は殘念で無念で、口惜しくッて耐えられぬのである。嗚呼、何事も金の世の中、金が有つたら這んなつらい事もあるまい。が、今は金よりも水が貴いのである。水！ 水！

その水を、見れば別莊では惜し氣もなく庭へ撒いたり、植木に掛けたり、どん／＼と湯殿に汲入れて、風呂も立てられて居る樣子。その水を土瓶に一杯惠んで呉れたからとて、何程の事があらうもの。情を知らぬ人々よと、茫然とするまでに考込んで立つて居たが、思はず知らず聲を發して。

『あゝ、井戸が欲しい、眞水の井戸が家に欲しい！』

下

椿が自然の垣を作して居る其外側の、だら／＼と坂を降りた處に、一段平になつて居る一坪計りの地面がある。此所には雜草が一面に繁つて居て、石佛の首の取れたのや、道標の古い朽たのやが捨てある。

此處へ九歲の藤吉、七歲の光助、四歲のお文、それだけが集つて何かこそ／＼と相談を始め出した。然うして光助は、お文の袖を結んで遣り、藤吉は光助の袂をか[illegible]げて遣り、自分も兩方の袖を結んで、其中に首を入れ、斯うして三人で雜草を拔き、石佛を取去つて、其跡を棒切を以て掘始めた。

藤吉は後には標道の杭で掘る。光助とお文とは貝殼で

土を掻出す。三人共汗と砂とに塗れて眞黑である。姉娘のお町は乳呑子を背に負うて、何心なく此所へ來て吃驚した。

『お前達は何をして居るのッ』

藤吉は頗る熱心なる態度で以て。

『姉さん、好い事して居るの』

『好い事と云つて、まァ、そんなに衣服を汚して、何んてまァ惡い事をして遊ぶのだらう』

『惡い事ぢやァないよ』

光助が叫んだ。

『遊んぢやァ仕ないよ』

お文が呼はつた。

『本統に好い事をして居るのだよ』

と藤吉が再び云つた。

『好い事ッて、何?』

『えッ井戸を掘つてるの』

『えッ井戸!』

『井戸が欲しいッて、阿母が然う云つた。俺等だッて口惜しいよ。水が貰へないんだもの。俺等が早く大きく爲つて、あんな別莊なんか、いくつも〳〵建てるやうになれば好いのだけれど、未だ子供だから仕樣が無い。だからね、今ね、俺等に出來る事仕て見やうと思つてるのだ。光助も、お文も、大きくさへなれ[illegible]澤山お金子をこしらえて、阿父さんや阿母さんに[illegible]心させるのだが、ねえ、姉さん、今は、何も出來ないァ。だから、仕方がねえから、井戸だけでも掘らうてんだ。姉さんも手傳はないか』

と藤吉はさも〳〵口惜しさうに斯く云つた。

『まァ、感心だわ。本統に三人とも感心だわ。本統にそれは好い事だが、此所に井戸を掘つたッて何んで眞水が出るものかね。海が近いのだもの…』

『だッて…何んだか好い水が出るやうに思はれるのだもの』

『好い水が出るまでに、如何してお前達の腕で掘れるものかね』

『だッて、出るかも知れない』

『本統に出るかも知れないよ』
光助もお文も藤吉の言に應じて云つた。
『まァ他の事して遊ぶよか好いから、掘るなら掘つて御覧だが、衣服を餘りお穢しでないよ』
お町は斯う云つて母屋の方へ去つて了つた。
『出なくッて、水！　屹度好い水が出るよ』
『本統に然うだよ。でね、阿父さんに冷めたい水を呑ませるのだねえ』
『阿父さん、病氣、快くなるねえ』
三人は前にも増して熱心に穴を掘る。一尺から二尺、三尺計りに爲つた時には、三人の小さな腕は抜けるやうに痛く爲つて、泥の様に草臥たれけれど、それでも清水を掘當てたい一心、三人代り〳〵穴の中に入つて土砂を掻出したが、如何に軟かな砂地でも、子供三人の力では、六尺の穴の深さを造るのは、容易な事でない。彼是して居る内に日が暮れたので、三人は家へ歸つた。
姉娘が注進したので、紋十郎もお北も、子供達の井戸を掘るといふ事を知つて居たので、其志のしほらしいので涙をこぼして喜んで、其苦心を稱したが、いくら三人が骨を折つても、到底清水は出ないから、止した方が好からうと云つた。けれども三人は決して之に服さない。翌日は早くから又掘り掛けると云つて、睡に就いたが、三人揃ひも揃つて寐言に。
『井戸‥‥井戸‥‥ヤッ、水が出たッ！』

＊　＊　＊　＊　＊　＊

明くる朝、蟬の未だ鳴かぬ頃から三人は裏に出て、引續き井戸掘に熱中して居た。正午過ぎに突然悲鳴の聲を發したので、お町はお榮を背負つた儘、走つて見ると這は如何に、砂地を掘るのに口を狹くして、底の方を廣くして、其中に藤吉が入つて居たので、上の砂土が崩れて、中の藤吉を生埋にして了つた。
光助とお文とが叫んだのである。お町は吃驚したが、打捨てゝおかれぬ。夢中に爲つて上の砂を掻退けたが、幸ひにして餘り深くなかつたので、無事に藤吉を掘出す事が出來た。藤吉は泣いて居る。お文も涙含んで。

『最うお止しよ。這んな騒ぎが出來るのだから‥‥
お前達の内で、誰が怪我をしてもいけないから‥‥』
『だッて、水が欲しいのだもの』
『水が欲しいたッて、此所から如何して眞水が出るものかね。止した方が好いよ‥‥なァお前、如何したのだね、水天宮様の御守が無くなつてるぢやアないか』
『穴の中へ落したんだらう』
『埋めて了つては勿體ないから‥‥』
お北は背の子を光助に渡して、砂を搔分けて、穴中を探つた。
お守を掘出す爲に、知らず〳〵深く土を搔出す内、出た!!! 水が‥‥。
水が出たッ!!! 一度は喜んだが、それが果して清水やら如何やら分らぬ。無論汐の含んで居る鹹水たるに相違ない。
でも、藤吉も光助もお文までが喜んで。
『水が出た〳〵』
『でも、清水ぢやアないよ』
『如何だか分らない、もつと掘つて見やう』
水が出かゝつたので、勢ひづいて、今度は釣込れてお町までが手傳つて、代り〳〵掘ると水は益々出て來る。滾々として吹井の如し。後には溢れるかと思ふ計り。
が、未だ、それが清水だか鹹水だか分らぬので、濁の澄むのを待つて味うて見ると、殘念、それは、鹽辛い、充分に汐の氣を含んで居る。大失望で、子供五人は、すごすごと引上げた。

* * * * * *

明くる日に爲つて、未練を殘して居る藤吉が、彼の新泉の下に行つて水を味うて見ると、這は如何に、甘露の如き名水!!!
思はず知らず叫んだ。
『水!!! 水!!!』

* * * * * *

孝子の一心は天に通じ地に貫いて湧出でた清水、これが相摸第一の『磯の清水』である。

不思議な事には此所に水が湧出すと同時に、別莊の河内の井戸は非常に水量を減じた。水脈を此方に呼んだのでもあらう。

別莊から後には水を貰ひに來るやうに爲つた。けれども、紋十郎の一家は決して拒絶しなかつた。

孝子の一念で『水』の缺乏を滿足せしめる『井』を造つた。此心で進んだら『金』の缺乏を滿足せしめる『富』それを造るのは遠からぬ事であらう。

お伽噺

蕎麥と柳

井上啞々

むかし／＼、ある野原に一本の大きな柳の木がありました、大分年を老つて居りまして、幹には、がちんと胴穴が出來て、いろんな蔓や蘿がからまつて居りますが、背はすらりつと高く、長い／＼緑色の髮の毛を地面に垂らして居りました、

その周圍に、稻が生えて居りました、穗ができますと、宛然、カナリヤの一群が棲まつて居る樣に見えます、穗が實れば實るに伴れて、いよ／＼謙遜て、その頭を下げてまゐります、仲々威張つた風などは、微塵もありません、

それで、その實を干して、舂いて、炊いでたべますと、大層、身體の養ひになるので、人間から、可愛がられて居りました、

恰度また、柳の木から近くに、蕎麥畑がありました、この蕎麥は、稻の樣に頭を下げる所でなく、如何にも自慢らしくそり返つて立つて居りました、

ある日のこと、蕎麥が、柳の木に向つて、言ひますには、

『己は、稻の樣に役にも立つし、そして、見掛は一段上だ、それに花でも咲けば、林檎の花の樣に綺麗だし、何んと、世界に己より偉いものは、またと有るまい、』

柳は、その長い髪を、右左に振りながら、

『ゐるとも〳〵、』

と、静に言つて、相手に爲ないで居りました、

蕎麥は、せゝら笑つて、

『老耄奴、何知るものか、自分の身體に、草が生えて居る樣じや、最早駄目だよ、』

と惡口吐いて居りますと、恰度その時、恐ろしい暴風雨が起つてまゐりました、

野原の草花は、身體を縮め、小さい頭を俯けて、暴風雨の止むのを、ヂッと待つて居りますと、蕎麥ばかりは、何恁な事でと、いふ風で、威張り切つて、突立つて居りました、

草花等は、小さな聲で、

『オイ〳〵、其樣な風をして居ると、危險よ、己だちの樣に頭を下げて御在で、』

と、親切に言てやりますと、蕎麥は、

『御前だちの樣な弱蟲とは違うんだ』

と言つて、納きませむ、

そこでまた、稲は

『オイ〳〵、頭を下げて居ないか、暴風雨といふ奴はね、雲の上から、地面へ屆ぐ樣な羽根を持つて居て、一度それで拂はれると、謝罪たつて、如何したつて、追付きやしないよ、』

と言ひましたが、蕎麥は

『なに、其樣な事が恐いもんか、』

と言つて、甚麼しても、承知しませむ、

そこで、柳の木は、極く優しく、

『電光は、決して、見ては不可ませんよ、電光の中から、神樣の御住居が見えると言つて、人間ですら、目が潰るを恐がつて居ります、まして、それより卑しい身分のものが、見ようもんなら、甚麼な罰があたるか知れませんよ、』

と言聽かせました、

すると、蕎麥は

『そいつは、面白い、神樣の御住居が見えるとは有難い、』

などと言ひながら、いよ／＼威張つて、突立つて居りました、

暫くすると、電光がぴかりとして、雷がごろ／＼と鳴り轟きまして、天地が一時に破壊れて了うかと思ふ程でした、

この恐ろしい暴風雨が歇みまして、草花や稲は、露を帶びて、一層美しくなり、にこ／＼として來ました、が、見ると、蕎麥は、金糞の様に、眞黒に焼けて終つて居りました、

柳の木は、そよふく風に、緑色の髪の毛をふりながら、ぱた／＼と涙を垂らして居りますと、そこへ一疋の雀が飛むで來まして、柳の木に、

『何故、こんな嬉しい時に泣いて居ますか、草花や、稲が、にこ／＼して居るじやありませんか』

と尋ねますと、柳の木は

『蕎麥が、皆の言ふことを聽かずに、威張つたもんだから、到頭神様の罰が當つて、那様に眞黒に爲つて、死むで了つた、自慢するものに、終りを善くしたことのないのは、蕎麥を見ても、直ぐに分明ります、』

と言つて、いろ／＼雀に、御話を爲ましたとさ、



雑録

夜半の埋火

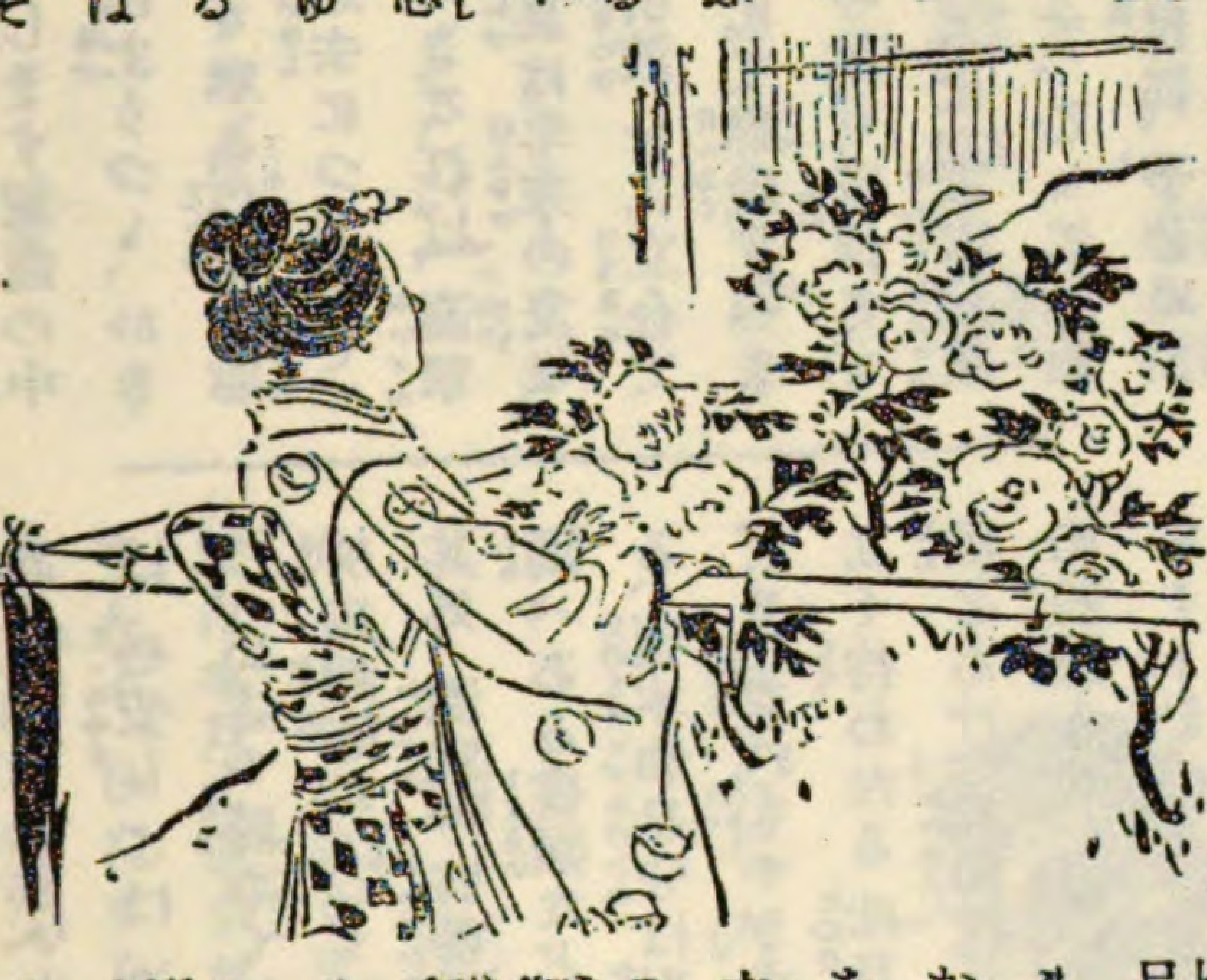
三宅花圃

四　荒ぶ山小田（下）

かゝる中に早くも四月の十一日となりぬ、此日は前將軍は水戸に退去せらるべき日取なり、予は生たる心地もなく、ひたすら胸のせみまり、お退去あるべき日こそ、世はたえぬべきさまにおもひなしつゝ、今は望みなければ此御出立の日見送りをおはりなば、身の暇を賜はりたしとは、兼てより大久保一翁まで聞えおきたる事ながら、其前夜より上野に至り、重役の輩と共に、涙

ながらに夜を明かし、其日の朝、御駕籠にめさせられ、かへり見がちなる東の空をあとにして、つきしたがへる者も多からず、御見立申上るものだに、數少き山下の道を、しづ〳〵とゆられゆられて、おはします駕籠の中には、なほ夢心地にやおぼすらんとのび上りつゝ、かきくらす朝霞の立おほふを心なしと見送り奉る心のうちも、またはれやらぬほどながらこの御退去につゞきて、江戸城引わたし、又海陸軍をも引渡すべきなれば、海軍總裁、矢田堀讃岐守は、姻戚の間なり、且は年來の友なれば、今しばし目付の役を其まゝに此引渡しに立合てよと請わるゝに、もだしかたく、この場にて辭職すべき心積なりしを、また思ひかへて、さらばその事はてゝ後、と山下なるわが家へ、一ト先立歸りたるに、軍事總裁勝安房守(安芳)も、矢田堀と共に來りて、こゝに朝飯を食しながら、勝は人の氣を覗ふごとき目に、予をぬすみ見て、人の噂によれば、榎本はどうか他に考へもあるやうなれど、兼て別懇の間なれば、足下のしりておはさぬ事はあらじ、と且責め且問はるれど、もとより事實はよくもしらず、ことには前將軍の諭旨を躰し、人の心をなだむるおのれなれば、よし親しき中なりとて、かたらひぬべくはあらず、さりながら引渡しを肯んぜずしてあらがはんとはおもひもかけずといへば、勝はさあらば、心安しとはいへど、なほおちゐかたき風情もみえつ、いさや時おくれぬほどにともに行んとて築地海軍所に趣きぬ、こゝには肥田濱五郎、塚本恒輔、伴鐵太郎、其外、海軍の將校等、つどひ來りゐて、兼て引渡しの爲、調べある書類など取まとめ居たるも、肝心の副總裁たる、榎本和泉守は影だに見えず、いかにせしやと尋ぬれども、たれもやうす知りたるものもなくたゞおぼつかなく待わたる此日は風吹き浪あれて、陸上は一面に砂烟をあげ、海面はもや立こもりて、咫尺をも辨ぜず、沖に船懸りせし軍艦の姿は見えわかず殊に此シケにてはボートを出さんにもいかゞとかたらふほどに、矢矧某といへる士官、身の內かひ〳〵しくとりなして、馳來たり、そこにある人々には目もかけず、直に水夫部屋に赴き、ボートを出せと呼はりつゝ、目先も見えぬ大浪の上

を、かひあやつりて、立出んとする、あとより引つゞきたる少壯の士官達、我おくれじとひしめきて、沖の方へとこき出しぬ、さては何事か示し合せし事あるなれ、といふほどに榎本は海軍引渡しの事を拒みて、今はあらゆる軍艦を引て、何地へか落行き、品川の沖には一艘も見えずと注進もありしかば、勝はヂレにヂレて有あふ手槍の鞘をはらひ、何といふ目的もなく柱をつき立などして物くるはしう氣をいらちたり榎本等の所業、理非の論はさて置、男々しき武士の志なりとはわりあふ人々もさすかに心ゆき思ひながらも、目前にさしせまれる引渡しはいかにすべき、實物なくてはおさまるまじ、かくのごとき風浪こそ幸なれ、沖の軍艦の方にはめても行がたきさまなるは誰しも見ることとなれば、今日の所はこれを口實として先調整をし船目録將佐士官水人夫名簿、据付の兵器、



員數書などのみを引渡して、眼前の處をすまし、又其後の事はいかにともなりのまゝに任かせなむ、一寸のひればといふ諺もあれば、と大原主賢の官軍總督として、品川東海寺にある許に、矢田堀もろとも赴きぬ、暫く待つべし、こなたへと導かれたるに、東海寺本堂の脇手、地上にあら莚を敷たる所なり、暦は四月に入たれども、ことしは閏ありてまた寒さの退ざるに、大風吹あれてさえさゆる御殿山颪、麻上下の袖袂に泌とほり、地氣の莚を通してしん／＼と足腰冷ゆるも心の中にはいかで、かゝる事におもひ及ぶべき、もしも風やみ空晴れた、品川沖のなぎなんには、一葉うかべしいさり船だにかげなくして、見わたしひろき海原のいづくる軍艦ありぞ、いざもろともに行むといざなはれなはいひときぬべき言葉もなみ、こゝに果なん身の契りなるべし、と矢田堀と目を見合せつゝ

待ほどいと長し午飯過してのち、乗切て、築地よりこゝに來つるも、いまだに取次べき人も出來ず、やゝかたむける日影を心細げにあふぎながら、たゞ風いやたけく吹よかしと心にいのるのみ、めてもかくても、いまとなり逭れん術はあらじかし腰にさしはさめる兩刀に、文弱の身なりとも腹切すべは、心得たり、たゞきたなびれず、あらむ、と兩人とも、口にこそいはぬ、互に心にきたえつゝ、端坐して待ほどに、うすくらき燭は持運ばれたれど、そよやと人の出くべき衣の音なひもなし、こは軍艦の有無を見とゞけん爲、人などやりて、その立歸らむを待なるべし、彌我身の上なりと息をつめて待ちにまつほどに、いつしか四ッ時過午後十時となりし頃、シィといふ聲あるかたを見あぐれば今ぞ軍營の御逢あるべしとて菊の御紋の幕しぼりあげて椽の上に顯はれしは、濱口とか濱田とかいへる佐賀藩の參謀なり、こなたはこゝぞと氣は上づりたり、かなたは紀州ポット出のクヤ〳〵言葉さながらことさえぐから人のさえづり、うるまの島のしま人のことゝふ聲に似たるのみ、彼方のいふことわきかぬれば、こなたはかけ引ある應對なり、何と答へて然るべきや、とあきれたるは此方のみならず、彼方もそれと見て、呼よせしは奥青助といふ藩士なり、この人は江戸に居たりし事のあるにや、やゝ辭の筋など分り、とひつ答へつする程に、島團右衞門といふ人出來りぬ、こは曾て、矢田堀の塾に在り、海軍の術を學びし人なりければ、互に心もとけ合て、風浪の爲に實地の引渡しは出來兼ぬれども、期日の事なれば先不取敢目錄にて御引渡し申すべしとの意味もより理解せられ、猶此方より沙汰あるを待べしとてかへることをゆるされぬ、全く官軍の方にては軍艦の脱走せしをしらぬさまなるに、はじめて心落居て、こゝを立出れば、昨日の風は吹やみて、日影ほの〳〵とさし出る頃なりけり、直に大久保一翁の家（今三番町井伊邸の前）に行きて、ありしことゞも報告し、引渡の手數丈けは、かたのごとくすましたる旨をも復命しつ、こゝに予は憐なる乞暇の願書をさし出して致仕の申次きを頼み、先事終れりと思ふと同時に、俄に空腹をおぼえそめぬ、まこと

咋日の午飯を海軍所にて食して後、夜一夜、茶一杯も飲まず、烟草一服、くゆらさず、氣をもみ心を勞せしなれば空腹も一しほなり、取あへず矢田堀と共に糀町の鰻店丹波やへかけつけ朝飯を食しぬ今もあるかの四丁目の丹波屋黄表紙のお俊傳兵衞の内にもしるされたる老舗にて麹町の名物なれども、かくまでうましと食せし人はあらざらむとて舌つゝみうちつゝ呵々と笑ひ給ふこの物語りのかなしいおそろしさ胸ときめきてうちきゝつゝつひにおとため息と共に筆なげすてさてこそおいしくおはしけめとてはじめてこゝに腹をよりてわらひつ。

朝鮮婦人

木村睡虎

九　體格

朝鮮人の體格は日本人に比し男女とも概して能く整ひ居り、殊に婦人の如きは日本婦人に多く見る所の臀部の奇形なるものなく、又纖弱病人の如きものなく中流以下に至ては一層體格の宜しきを見る、其骨格殆んど男子に類し頗る强健なり、足は成る可く細きを貴ぶと雖ども支那婦人の如く甚だしからず、彼等は夜寐るにも足袋を脱せずして常に先を締め居るが故に指は互に密着して指先上に逆り恰も其靴の形に似たり、日本人の足の指が一つ々々に離れて指先左右に開き居るを見て彼等は常に笑ふなり、如何なる下等婦人と雖ども決して足袋を脱して徒跣となることなし、殊に吾人が常に奇異に感ずるは七十八十の老婆にして一人も腰の彎曲したる者なき事是れなり、是れ其衣服の制の宜しきを得たるが爲めなるべく、又總て其體格の整備せるも是れが爲めなるべし、且つ其手腕及び脚部とも日本婦人に比して割合に長きが如きも日本服の如く自然の發達を妨げざるが爲めなるべき歟、左れば彼等の起居動作は極めて活潑にして、常に室内籠居の人間に似ず、木登り坏爲すこと平氣にして決して恐ろしがることとなし、余は常に思へり彼等をして若し日本の體術撃劍等を學ばしめたらんには隨分妙手達人となるべく殊に薙

刀の如きは最も妙なるべく寧ろ今の朝鮮兵士の意氣地なきに勝ること萬々なるべしと、蓋し衣服の制の宜しきを得ると否なとは大に平素の運動上に關し運動の自由なると否とは大に體格の發達に關し、體質の健否は大に其氣質に關せざるを得ざるなり、

十　其性質

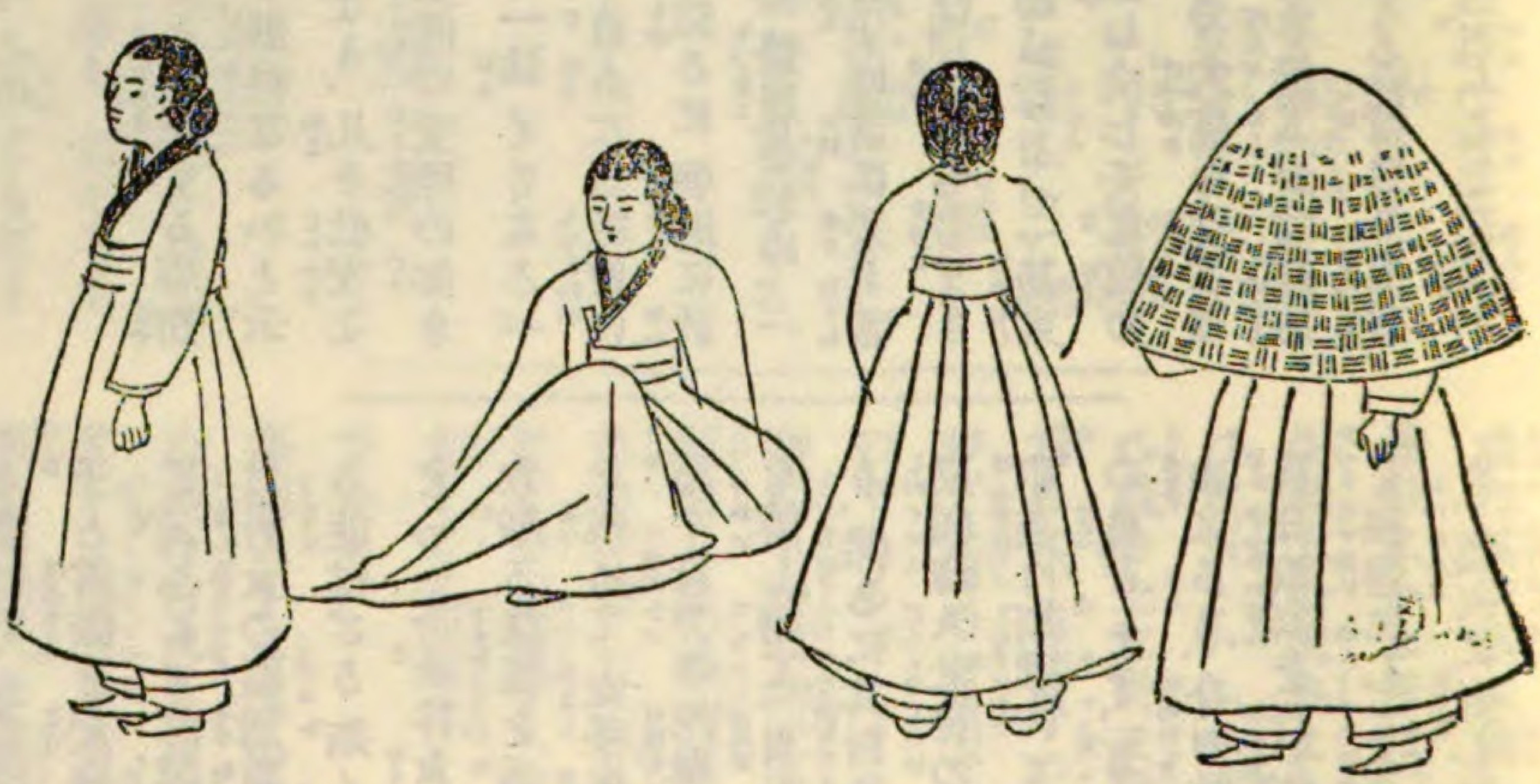
體格の强健、動作の活潑斯くの如し、從て其氣質の快活なるは自然の順序なり、此體格を有し此氣質を有する婦人を强て束縛し、之を一室内の小天地に跼蹐せしむ、焉ぞ隙を求めて漏れ出る所なくして止むべけんや、彼等は全く人權を剝奪せられ、究屈不自由なる境遇に押籠められたる結果として剛情となり、頑固となり、隱險となれり、剛情となりしは快活の氣質を曲げたるの結果なり、頑固となりしは見聞を狹隘ならしめたるの結果なり、隱險となりしは、嫉妬猜疑に煩悶せしめたるの結果なり、彼等は其夫に對しては一の權理なるものを有せず、然れども彼等は其夫を己れの尻の下に敷くの權力を有す、此權力こそは彼の剛情、頑固、隱險の結晶したるものにして即ち彼等の生命なれ、彼等は平素毫も其夫に屈せず、彼等の腕力と勇氣と辯舌と氣慨は柔弱にして意氣地なき朝鮮男兒を威壓するに足るの能力を有せり、此故に男子は表面上に於てこそ妻に對して無限の專制君主なりと雖ども、實際に於ては細君の奴隷たるなり、故に男子は概して其妻を以て恐るべき山の神と爲し成るべく敬して之を遠け其崇りに觸れざらんことを勉めり、余が最初朝鮮婦人を娶らんとするに當り、或る朝鮮人は諌めて曰く、貴國の婦人は温順にして謙讓且つ貞節なりと雖ども、朝鮮婦人は剛情傲慢にして甚だ御し難し、如かず貴國の婦人を娶らんにはと、然れども余は窃かに以爲、是れ朝鮮男子が意氣地なきが爲めのみ、日本男子を以て之れに當る、豈に御し難き事あらん



やと、既にして自から實驗するに至りて其言の虚ならざるを悟れり、日本男子の力を以てすると雖ども彼等を御すること容易ならず余は殆んど之れを持て餘し遂に失敗の恥辱を取るに至れり、兎に角朝鮮婦人は思ひの外の悍馬なり、然れども能く充分に之を仕込むに於ては化して千里の駿馬となるの資質を有す、彼等は頑固にして剛情なりと雖ども其性質は怜悧なり、器用なり、勤勉なり、而して能く外交的資質を有す、先年殺害の難に遇ひたる王妃閔氏こそは有繋に國母たる丈けありて眞に朝鮮婦人の代表者たるなり、當時閔氏が如何に頑固剛情にして怜悧なりしか機智ありて外交的に長じ其權力國王を凌ぎしかは世人の既に熟知する所なり、而して彼等が器用なることは其裁縫の技術の巧みなるを見ても知るべし、彼等は極めて短く且つ細き針を以て衣類を縫ふ其緻密なることミシンを縫に異ならず、又朝鮮紬の如きは彼等の技術の一にして其品質頗る見るべきものあり、之れを要するに朝鮮婦人の實質は大に發達すべき良能を有すと雖ども惜い哉之を發達せしむべき敎育なるものなく、且つ不完全なる社會の奇怪なる制裁を以て之を壓伏し、却て益々ねぢけたる方面に伸長せしむ、亦た慨すべき次第ならずや、余は常に以爲朝鮮男子にして其勇氣あり膽力あり氣慨あること其婦人の如くならしめば、朝鮮國の獨立は遠き昔しに於て全ふしたるならんと、蓋し朝鮮婦人が男子に勝るの氣慨を有するは敢て今日に始まりしにあらざるが如し、平壤城内に妓生桂月香と云へるものを祭れる祠あり、烈女祠と稱して今も上下之を尊崇せり、口碑の傳ふる所によれば、曾て壬辰の役小西行長の部將小西某(其人物詳かならず)なる者平壤城攻陷の後大に平壤の妓生を招きて盛宴を練光亭(今も大同門の傍に在りて巍々たる樓閣なり)に開き、醉て妓生桂月香の膝を枕にして睡る、桂月香其熟睡せるを見て窃かに自國の武士を招きて之を刺さしむ、而して自から免るべからざるを察し請ふて其刄下に伏せりと、今や朝鮮十三道五百萬の男兒中復た一の桂月香あるなし、其今日の衰頽を極むる亦た怪むに足らざるなり、

十一　婦人の愛情

朝鮮婦人は素より無教育なるが故に夫に對する貞節の何ものたるを解し得るの道理なし、而かも彼等とて木石にあらず、豈に人間普通の愛情を解せざらんや、只だ彼等の愛情なるものは高尚なる精神的愛情にあらずして露骨なる動物的愛情のみ、勿論朝鮮男子が其妻を見る素より百年の友とするにあらずして、只だ子孫を繁殖せしむべき一の器械と信ぜるのみ、已に夫の器械視せらる、夫に向て焉ぞ精神的愛情あらんや、此故に彼等か夫を擇ふ敢て容貌の醜美を問はず又其才の如何を論ぜず、獨り其地位身代の如何を顧るのみ、父兄亦た其女を嫁せしむる只だ身の代金の多きを貪り其聟の人物如何を問ふの暇



あらざるなり、特に吾人が奇とするは、儒教の所謂男女七歳にして席を同ふせずの言を墨守して男女間言語すら相交へざる程の國風なるに獨り貞女二夫に見へずの誡丈けは忘却せると見へ、彼等は幾人の夫に見ゆるも決して耻とせざる事是れなり、此點丈けは印度邊に比すれば婦人に取りて餘程寛大なりと云はんか、然れども彼等が其夫を亡ふや叫喚して悲泣し、或は指を切りて其棺に入るゝものあり、或は夫と別離の哀しみに堪へず所謂焦れ死するものあり、只だ情死と云ふ事は此國に於て未だ聞かざるが如し、要するに彼等が愛情に於ける、決して作りも飾りもなきムキ出しのものにして、心情の發するまゝ無遠慮に露出し、所謂天眞爛

嫚の風ありとでも許せんか、

十二　其品行

朝鮮の國風として男女間の嚴重なること前記するが如くなれば、婦人の品行の如き亦た頗る嚴格なるかと云ふに、此點に至ては全く表面の大反對なり、凡そ社交なるものは人間の天性にして、殊に男女間の交際の如きは、其互ひに動的慾情を緩和するの一法ともなるべきものなるが故に、男女相見ることの自由なる社會に於ては此較的其品行亂れざるが如し、然るに朝鮮に於ては殊更に婦人をして社會より遠けて蟄居せしめ、一切他の男子と相接せしめず、而して男子は常に妾を蓄へ花柳に戯れ、妻をして孤衾を擁せしむ、只さへ男まさりの快活れる婦人にして焉ぞ其反動なからんや、其束縛の嚴重なる丈け是れ丈け反動亦た激しくして危險の恐れは多きなり、彼等が夫の眼を盜んで穴隙を切るは決して珍らしからざるなり、彼等は日本婦人が廿歳前後までも未婚者にてあるの理由を解する能はず、又其年輩まで情夫なくして婦徳を全せると云ふことを信ずる能はず、又年若き細君連や未婚者が自由に外出し、男子と言語を交ゆるを憚らずして能く其品行を保ち居ると云ふことを信ずる能はず、彼等自から以爲、自國にては男女の區別斯くの如く嚴重にしてすら品行を全ふする能はざる斯くの如し、況んや自由放任の日本に於てをやと、是れ女子のみならず朝鮮に於ける一般男子亦た斯る想像を爲せるなり、曾て或るとき此國の青年等を集めて女子外出自由の可否を對論せしむ、彼等は稍や世界の形勢に通ずるものにして文明の何ものたるを解し得て、自から開化的有志を以て誇るものどもなり、然るに其討論の結果は大多數を以て否決せり、以て期國婦人社會の品行一斑を推するに足らんか、然るに犯姦は斯國にて重罪の一つにして、以前に於ては姦婦の鼻をそぎ、耳を切ると云ふが如き慘酷の刑を行ひし由なるも、今日にては夫程にはあらず、而して大概夫の自分裁判を行ふを常とす、即ち民間に於ては、姦婦は之を裸體にして夫が思ふ存分に毆打して半死半生たらしめ、姦夫に對しては朋友どもを語らひて其家に至り、滅

茶々に其住宅を破毀するなり、犯姦の罪は啻に本妻に對してのみならず、妾と雖ども同じ罰を加ゆるなり、余が住みし近隣の婦人にて他人と私通せる事本夫の知る所となり、例の自分裁判を行ひて妻を放逐せしが既にして本夫忽ち未練を起し、去りたる妻に向て百方復歸を勸むるも今度は妻の方にて威張り出し頑として應せず、因て本夫は更に若干の身の代金を出して其去りたる妻を買戻したりとて近所にては物笑の種となりたることあり、其罪は惡むべきも更らに他より買受くるよりは廉價なりしが爲めなるべし呵々。

結婚雜談

淺田空花

四　夫の氣質

◉氣質といふ言葉は固と漠然たる言葉で、一般にいふ所のものは、場合に依つて種々の意味を有し、時としては人の特色を指す事ともなり其嗜好をいふ事ともなり或は其奇術に對していふ事もある。

◉玆にいふ所は、是等と多少趣きを異にして居る、全く生理上の現象より見たる人の形體、心性上の氣質で、或は性質といふか穩當かも知れぬ、兎も角、其形體若くは心性の上に於て殊に秀でなる、特徴を有し、この特徴の爲めに、他部分の存在を蔽はれ、若くは支配されて居るが、人間の普通で、この特徴の差異、即はち氣質となるのである。

◉即ち神經銳敏で、性急で、物事に感激し易い者を神經質若くは、線病質の人といひ、强健で、元氣で、而して血色の赤走した者を多血質若くは血性質の人といひ、瘦ぎすで、色黑く、而して緘默勝の人を膽液質、體軀肥え太りて、顏面青く、其性質遲鈍なる人を粘液質といふのである。

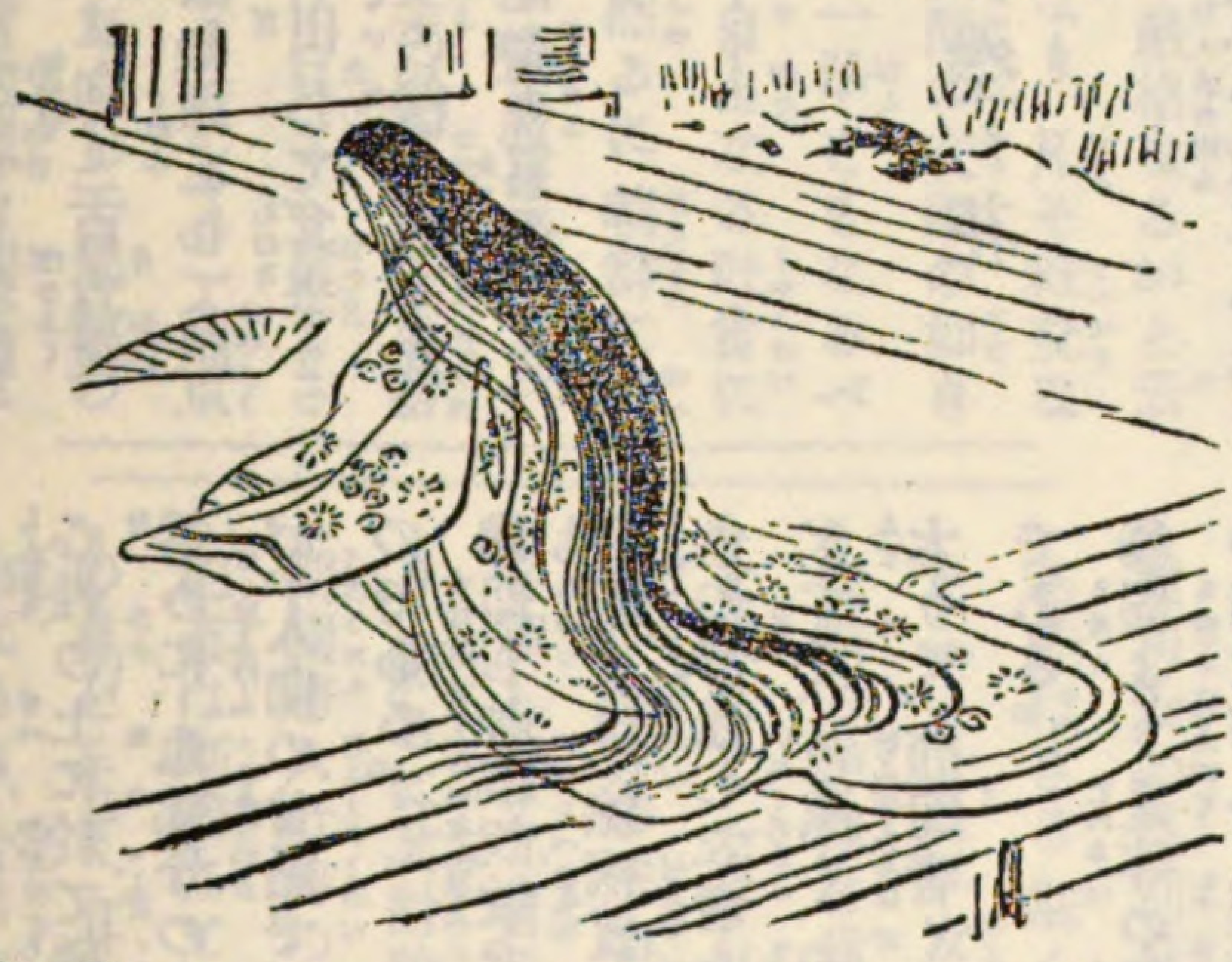
◉固より是等の區別は大體より云つたもので、粘液質の者は何人も遲鈍で、神系質の者は何人も性急であると一々極言する譯けにゆかないが、この特徵によつて概して其人の體軀、心性の一斑を知ることが出來るの

である、故に女子が夫を撰ぶに當り、この邊の區別を辨して置くと却々便利が多い、殊に殆むど其外見のみに依て夫を撰擇せねばならぬ日本の婦人に取て尠からぬ便利があると思ふ。

◎自然は不釣合を嫌ふが併し複雜を愛する、自然の森羅萬象千差萬別千狀萬態であるが、而も能其差別の現象、反動事物を調和融合し整然として亂る所がない。

◎結婚に於る男女の嗜好も亦同樣で、多くの男子、多の女子は殆むど言ひ合したかの如く、自分と反對の氣質を有するものを愛して居る、殆むど全く自分と反對のものと結婚して居るのである。

◎佛蘭西の名畫、セント、ベルナーヂンは所謂天啓的にこの奇なる現象の動すべからざることを信じ、偶然其信念を確かめた事がある。



◎或時彼れは數年來會はざりし一友人を訪ふべく、初めて或る村に其家庭を見舞ふた、恰かも其友人の妹に妙齡なる一美人あるを發見した、色は飽くまで白く、丈高く涼かなる、碧の瞳、ふさ〳〵したる黄金色の髮、云ふばかりなく美はしく、而して其言語、應對は何處までも温籍である。

◎偶然會見したこの初對面の婦人に對して、ベルナーヂンは戲談半分に斯ういふた、貴孃の樣な御容姿の立派の方には定めて澤山の崇敬者があるでせう、其中で貴孃の意中の人を、拙僧が試みに當てゝ見ませう。

◎婦人は面白き事と直ちに承知した、彼は即はち言葉を更めて、左樣、貴孃の意中の人は先づ言つて見れば、丈け低く色黑く、毛髮瞳亦何れも黑味勝で、華奢作りで、其擧止の機敏で、活潑なる方の外はあるまいと思ふが何うでせう、と遠慮

なく言放つた。

◉默して聞て居た婦人の容色は一句〱に紅を潮して來て、僧正の言葉の終るを待兼ね、怒の顔付凄ましく兄を一睨した儘、僧正に向ては一言の返事も吳れず、泣かむばかりにして其席を退いた、僧正の言が一々自分の意中に適合して居たので逸早く兄が自分の秘密を洩したものと一時思ひこむだのである。

◉併し乍ら無論、僧正は其妹子の身上平生に付ては是迄寸毫も聞く所はないので、全く其智識に依て人心の機微を洞察したのに過ぎなかつた。

◉この能力は心理學上の頗る單純なる原理から割出されたので、人間は固と圓滿完全の發達を欲するも、萬人が萬人まで過不及があつて、一方に秀るものあれば他方に缺る所が必ずある、故に其缺乏する所の者に對しては自然自己の心の映ずる印象も深く、注意も深く、敬愛、追慕の念も深くなるのである。

◉即ち神經質の女子は多く粘液質の男子を求め、多血質のものは膽液質の者を思ふのは自然の道理で、其間に出來た子女は兩者の美質を受けて、頗る美くしく健全なる發達を遂ぐることが出來る。

◉世の中に琴瑟和合、和氣靄々たる家庭の父たり、母たるものを見るに、自然にこの法則を供て居る、夫が大男なれば妻は大抵小女で、妻が多辯なれば夫は槪して緘默の質である。

親子と夫婦

上村左川

嫁姑の間と云へば、一般に和合せざるもの丶標本のやうになつて、兩者の衝突の爲めには家庭の平和に往々にして波瀾を起すことになつて居る。中には嫁の方から姑を虐遇する例もあるが、先づ境遇上嫁が虐遇せらる丶側に立つ方が多いやうである、さて兩者間に立てゝある從來の敎へでは、矢張り忠孝を基礎とした東洋流の倫理の標準から割出して、普通は飽く迄も嫁たるもの丶服從を說き、畢竟嫁の事へ方が惡いからだと云ひ、猶一歩進んだ所では姑も嫁も双方の心得方が

惡いのだとして、互ひに慰め合うて和熟して行けば好いといふやうに敎へ、諄々と說き悃々と諭すにも拘らず著しく効果が見えない、兩者の反目は依然として續いて居る、之は何故であらう、元來昔の支那の倫理家は『女子と小人は養ひ難し』など丶云つて女と云ふものは根本から心の下劣な癖んだもの丶やうに見おとしてしまつて居るから、嫁姑の關係の如きも自然此見解の範圍に在る譯で、高が根性の癖んだ女同士の小ぜりあひであると輕侮して、互ひに中好くして行けば可いではないか、女といふものは仕方がないものだ位に見て置くから、敎へ方も誠に簡單である、けれども如何に敎へても兩者の間は、其他の女同士の關係とは違つて一般に調和しないといふのは、双方が惡いとは云ふものゝ、何分人情の上に其處にさうなる理由があるに相違ない、倫理といふものはもと／＼人間の私で造つた標準である、好い加減に規律を作つて、之が人間の道であるから從がへと云つた所が、人情に背いて居ることは到底實地に行はれるものではない、イヤ强いて行はした所が、それで人間が幸福たり得べきものでない。

姑と嫁の不調和は何故であるか、姑は昔の嫁であつて嫁は後の姑である、嫁と云ひ、姑と云ひ勿論唯境遇上のことで、何人も始めから姑たるものもなければ又末迄嫁で行くものもない、伊國の諺に『姑は曾て嫁たりしことを忘る』といふのがある、曾ては姑のつらきを啣ちた嫁は、姑となると嫁につらくあたるやうになる、ところで姑嫁といふものは其境遇上一應は最親睦しさうな筈のやうに考へられる、一方から云へば我子の侶伴で一方から云へば我夫の親である、果然始めは嫁を貰つて喜ばぬ姑も無ければ前から姑を恨んで嫁ぐ嫁もない、いつの間にか兩者の間が(多くは姑の方から)冷になつて、終には前生からの仇敵でもあるかのやうに嫉視することになる、双方偶然に氣質が合はないが爲めに斯うなるといふは或特殊の場合とあつて、多くはそれとは別に境遇上自然相和熟しないやうになる原因がある、それは親子間の愛と夫婦間の愛と

の衝突である、嫁の來ない間は先づ親子間の愛が專らに行はれて居るが、一朝嫁なるものが這入つて來ると、子の愛は自然嫁の方へも向ふやうになる、子が親に對する愛が薄くなる筈はないにしても、其處に別に新しく愛するものが出來、親よりの愛を喜ばぬやうになる筈はなけれど、別に新婦よりの愛を喜こぶやうになる、此場合に於て姑（種々の事情から舅よりも殊に姑の方）は、眼前斯の如き傾向を聞睹すると、人情自然の勢で、何となく多少不幸福の感が生ずる、此不幸福の感が常に心中に在から瑣末な落度でもあらば批難したくなる、子が親に對する愛を嫁が奪つたやうに思ふから嫁を敵視するやうになる、又新婚夫婦は青春妙齢で新婚の幸福を享受しやうと云ふ望に心の大半を滿たされて、殆んど其他の事に思ひ到る遑がない、舅姑なる者は左樣な境遇は遠い昔に通り越して、殆んど忘れてしまひ、あらゆる世故に慣れ經驗に熟して、今は新婚の境遇に同情するには餘りに乾燥な心になつて居る、前者は情熱より世を見後者は理性より世を見る、そこに已に全たく違つ

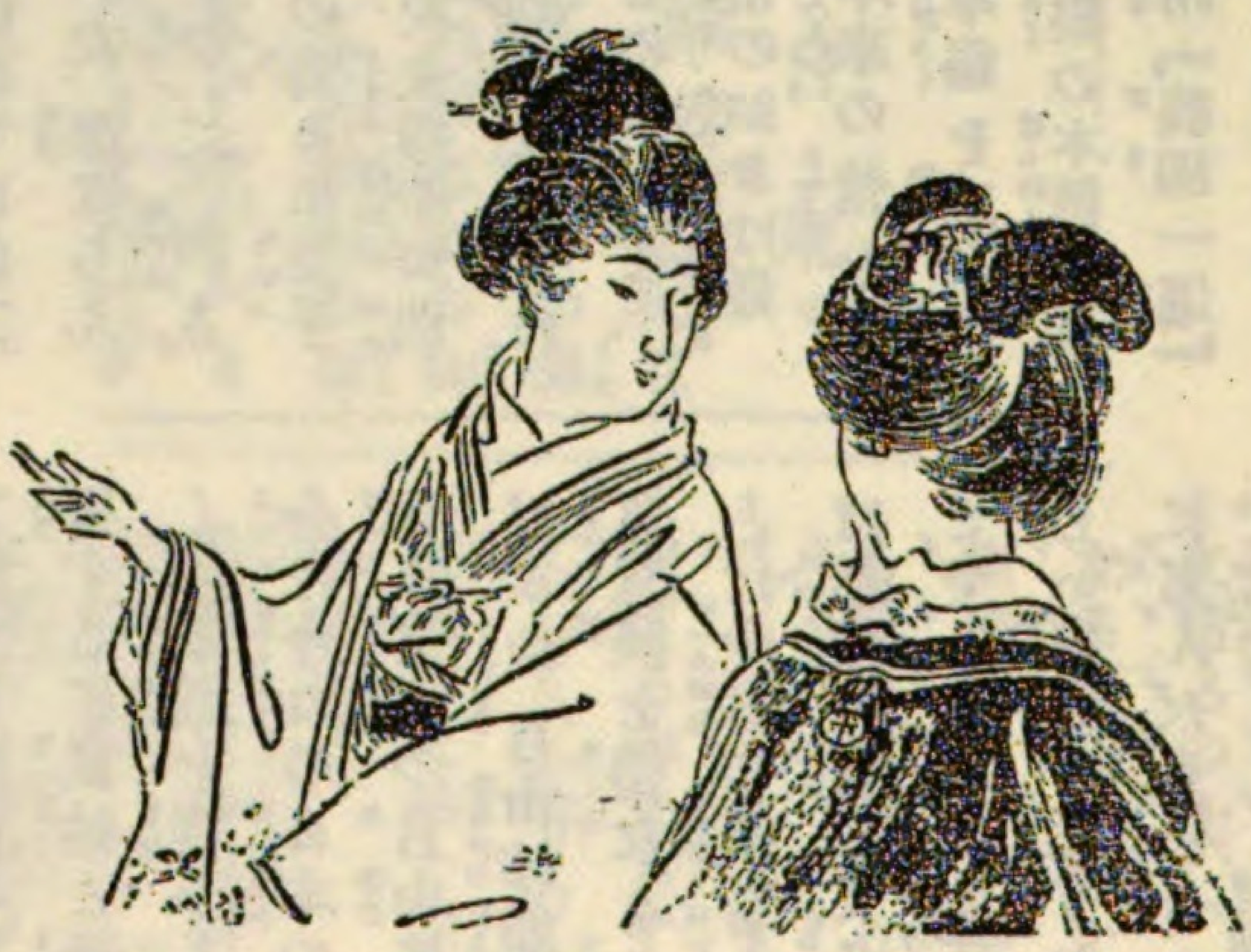


た傾向がある、殊に世故に慣れない嫁の動作が馬鹿氣て見えるので、此點からも多少疏むやうになる、其位なら始めから子に嫁の來るのを不快としさうにも思はるゝけれども、人情は決してそんなものでなく、子に嫁が無かつたなら親も決して幸福でなく、又子が嫁を疏んじて新夫婦の中が不十分であるやうならば、姑は却つて嫁の方へ同情して其和合を願ふやうなものであるが、新夫婦の中は圓滿に行き他に何も不滿の點がなくなると、人情は不思議なもので、所謂『ありのすさび』で往々『嫁いぢり』といふやうな事に流れたがるのである、此場

合に子たるものが親の肩を持つて行けば夫婦間の和合が不十分な譯で、往々にして嫁の方へ同情するやうになる、又往々姑の方に無理のある場合が多く、冷やかな心で理非によつて判斷しても、嫁にひいきをするやうに聞える、尤中には反對に嫁が夫に讒訴して罪なき姑を苦しめるといふのもある、何の道兩者の反目が盛になつて終に種々の不幸が起ることになる、世には此衝突の爲めに新夫婦若しくは舅姑の自殺した例さへある。

斯く云つて見れば、嫁姑の不熟和は其罪は孰れに在るのか、兩者の衝突といへば境遇上から嫁に同情するが多いが、必らずしも嫁ばかりが同情すべきでなく、嫁が好人物であるのを姑が冷遇する場合でも、人情の自然に照して深く考へて見ると、却つて姑の方にも同情すべき點がないと限らない、殊に嫁が惡性の者であつて好人物の姑を冷遇して其不興を買ふ場合が多々あるやうである、されどこれは孰れの罪を責めたところが、到底改めさすとは容易でない、論じつめれば家庭の組織其者が不十分なのである、今日のやうな家庭の狀態では非常の自制力ある人ならば、ともかく先づ人情の上で勢ひ斯ういふ衝突を起し易いので、嫁姑の調和を圖るよりも寧ろ家庭の組織をかへるのが捷徑である、第一子婦と舅姑と別居するに如くはない、親子といふものと夫婦といふものとは殆んど關係が別のものだといふことを明らかにするに如くはない、今日の日本の家庭は多くは子婦と舅姑と同居するといふやうになつて、兩者の關係があまり混同し過ぎた傾向がある、又結婚といふとの意味が多少誤解せられて居るやうである、男女が結婚して一家を作るといふでなく、婦なるものは夫に嫁すといふよりは寧ろ家に嫁するやうな關係になつて居る、緣組には親同士の考へが、殆んど第一に立つ、婦が嫁つて行つて我配偶者とは意氣が合つても舅姑の氣に合ふか否かといふとが結婚を遂ぐべき大切の條件で、舅姑への仕へ方を第一に心配せねばならない、實際嫁入は他の家へ奉公に行くよりは精神上の苦痛は一層甚だしい、又舅姑の側より云つても嫁取りは

往々に不愉快の結果を生ずる、結婚は人間の幸福を享受するが爲めにするといふよりも、寧ろ人間の義務の爲めにするやうになつて居る、人間一生の中の最幸福なるべき新婚の境遇は、舅姑其他に對する心配に奪はれてしまふやうになる、舅姑たる者も嫁を貰ふに、我に孝養を盡す爲めの帮助者を貰つたといふとを第一に心得るのが間違ひである、勿論一面から見れば孝養を盡す爲めの帮助者には違ひはないが、それかと云つて親子の關係と夫婦の關係とには自づから別な所があるから、孝養といふとのみを責めて夫婦の幸福を蹂躙してはならない、又親がまだ獨立の出來ない子に嫁を迎へさすとか、子たるものが親がゝりで居ながら結婚するといふとが間違つて居る、畢竟獨立が出來ないで家を形造らうといふのが無理であるから斯くの如くして樂しき家庭の幸福を得らるべき筈がない。



凡そ人間は何人も始めは人の子で中ごろ夫婦を形造り末は人の親になる、子たる間は親の家庭の彩どりとなつて之を幸福ならしめ、夫婦を形造つた時は最早親の家庭を離れて自身に別の家庭の主となつたので家を別にするの必要がある、家を別にするといふのは、親には多少疏くなるやうに見えるけれども、同居して双方不幸福の種を作るよりは斯くする方が双方の利益であつて舅姑子婦間の親睦を破らない方便である、尤唯居宅を別にし、出來得べくは生計を別にするといふだけで親子の日常の關係は同一であるべきは無論のこと、又別居と云つても、一人兒の場合に親の許を離るゝことをすべきやうなく、否らざるも家の生計向きの都合や、又親が扶助を要する等で別居し難い場合がある、必らずしも邸宅を別にせずとも可い

が、成るべく日常の居室を別にして、親子と云ふ者と夫婦といふものとの關係があまり混同し過ぎないやうにする必要がある。

忠孝と云ふことを第一義とした支那流の倫理では此二つの爲めには他の萬事が犧牲に供せられた、忠ならんが爲めに子を殺し、孝ならんが爲めに妻を殺した例さへある、是等は極端なものであるが、主君の爲めに愛子を苦境に陷れたとか、親の爲めに和熟した夫婦中が別れたとか云ふことは普通の事であつた、斯樣なことは人心の悲慘なる苦鬪で情を犧牲にしたものであつて、忍び難いことである、殊に相愛の男女の情の如きは最深きもので、所謂世間の義理の爲めに此本來の情を犧牲にしたところが、それでは人間の心中幸福を感じ得べきものでない、幸福心は平和、温情、悅樂の本源である、幸福ならぬ心より出でたる盡力は所謂『義理一遍』なるもので、到底他者を幸福に感ぜしめ得べきものでない、夫婦間が幸福であつたならば、之が親たるものも靄々たる和氣の餘波を受けて幸福に、若し又夫婦間が不幸であつたならば、親たる者も自然幸福の餘波を受け難くなる、世には舅姑が其子の配偶者と衝突して和熟せる夫婦中を割いたるが爲めに、其結果が往々にして四方八面に不幸を撒き散らした例が多い。

要するに舅姑と子婦の別居と云ふことは相互の上に多くの幸福を齎らし得べき方術である、尤も斯く云つても余は今日の日本の社會に就て云はゞ、結婚を始めから青年男女の自由に任せて親は更にかまひつけなとは云はない、自由結婚は最清純に行はるゝ場合は男女間の眞意義を得たものであらうが、絕對的自由結婚といふとは今日の社會ではいかゞであらう、殊に日本の如きは結婚に對して久しい間嚴しい拘束の行はれて居たことであるから、卒然と之を放任してしまつては一時凄い害毒を釀すかもしれない、兎に角親は子より經驗に富んだものであるから、子の結婚の上には或度迄保護監督をする責任は有る、唯子の意思よりも自分の意思を先にし强壓的に結婚を强うるは惡い、言ひ換ふれば從來よりは比較的自由の結婚を許し又之を保護する

上にも、家の爲め財政の爲めなどといふよりも、寧ろ子の結婚の幸福といふことに重きを置かねばならぬ、幸福ならぬ夫婦の親は、自然幸福を受け得らるゝものではない。

教育の目的

苫米地　日東

國の文野は、教育の如何に由りて岐るゝ也、教育盛んなれば、その國の文明は進歩し、教育振はざれば、その國の文明は退歩す、教育の事業は、他の功利的事業の如く、赫々たる効績を眼前に顯はさゞるも、その効果の及ぶ範圍たるや、廣大にして且つ永遠なりといふべし、されば、教育は社會の文明と密接なる關係ありと言はざるべからず。

教育の必要なるや言ふまでもなく、その文明を補育するの効大なるや論するまでもなし、されど、凡そ何事にもあれ、事業を爲さんと欲せば、必ずや確正なる目的あるを要す、儻し其目的可ならざらんか、折角に希圖せる事業も、多くは失敗に歸するを免かれざる也、教育に於けるも亦然り、その目的にして不可ならんか、育英の任に當るの士、いかに諄々たる教訓を爲すも、いかに孜々たる薰陶を施すも、其苦心經營は空しく徒勞に歸して、到底教育の完全なる成功を見る能はざる也、されば、苟も教育に志ある者は、教育の目的如何の問題に對し、宜しく論究の功を積み、以て完全なる教育の目的を確定せざるべからず、何んとなれば、是れ教育上重要の用意にして、天下の教育家が鞭を執て子弟を教ゆるに當り、其腦中に於て第一に解決し置かざるべからざる問題なれば也。

教育の目的如何につきては、古今東西種々の學説あり、甲論乙駁、その孰れが是なるやは遽かに判定し難し、是れ幾多の學者が、各其見地に據りて論を立てたるものにして、諸説皆一理あり一概に棄つべからざるものあれば也、されど、其各學説を詳密に觀察すれば、或は時代の思潮に動かされ、或は多少政治團體の政策に牽制

せられ、然らずんば、自家の特別なる學識に偏倚す、一得あれば一失あるを免かれざる也、而して此等多くの學說中、何れが精確にして且つ現世の敎育に適用すべきか、是れ世の學者及敎育家たるものが、講究すべき義務あるものにあらずや、夫れ敎育を以て任ずるの士は、古今東西の敎育學說を審究し、而して時世に適合すべき敎育主義を建てざるべからず、されど、敎育の學說たるや深く且博し、是れを一々講究するは固より容易の業にあらず、故に予が今此に述べんとするは、古今の敎育主義を概括的に論じ、且つ少しく自己の之れに對する見地を吐露するのみ。

古今東西の敎育史を見るに、諸家の敎育學說多々なると共に、敎育の目的に對する見解も多々也、而して敎育の目的なる觀念は、時の敎育主義に左右せられたるは蔽ふ可らざる事實也、然らば敎育主義の變遷は如何、已往歷史の潮流に於て千變萬化したるを見る、從て之れを一々擧ぐるの遑あらずと雖とも、古來の敎育主義之れを大別すれば、概ね三種と爲すことを得、何ぞや、曰く個人開發敎育主義、曰く國家社會敎育主義、曰く倫理道德敎育主義即ち是れ也、而してこれ固より諸家の學說を包括して、抽象的區分法を以て三大主義と爲したるに外ならざれど、以て古代グリークより現代文明に至るまでの、千百の學說を包含すべく、また以て其重要なる敎育主義の比較研究を爲すことを得べし、乞ふ少しく此三大敎育主義につきて語らんに、個人開發敎育主義とは、即ち個人の天性能力を發達して、各個人の調和的進步を計るといふに外ならず、彼のペスタローゼ其他學者の主張したる主義也、國家社會主義とは、個人の智能を發達せしむるは、國家社會の爲めに須要の材たらしむるに在りとし、換言すれば、個人を國家社會を經營維持すべき原動力と見做し、敎育の中心點を國家社會の上に置ける敎育主義といふ、こは古く希臘の學者プレトー、アリストートル等の哲學者も唱へたれど、十七世紀以後此主義に關する有力の學說現る、ロック、スペンサー等之れなり、而してロックの說頗る明晰なり、曰く敎育の目的は、正當に人生に處し得る底の人物

を造るに在り、善良なる習慣と美德と、聰明なる智慧を附與し、以て實際社會に立ちて、完全に自己の義務を盡し、社會又は國家の一員として、十分に世道人心を裨益する如き堅實なる人物を作るは、敎育家の要務なりと、而して近時社會的敎育主義は、獨逸を中心として盛んに歐洲に行はるゝを見るに至れり、倫理敎育主義とは何ぞ、即ち彼のヘルバルト、リンドテル等の學者は、此主義の代表者と見做すことを得べく、要するに敎育の目的は、人間の道德的品性を高むるに在りといふに外ならず、此主義に對する有力の説は、ヘルバルト學派に於て之を見る、其一派の唱ふる要旨に曰く、人の生活の最も高くして、且つ他のあらゆる事を支配する目的は倫理生活なり、是れ敎育の最高目的とする所、而して倫理生活とは、理性に依りて物を處理し、理性と一致して行爲を爲すをいふと、



右は三大敎育主義の要領を陳述したるのみ、尙ほ細かに諸家の思想を分析せば幾多の小派に分岐せらるゝならんも、此等の紛々たる諸敎育説は、之れが歸結を求むれば、以上三大敎育主義の中に包含せらるゝものたるに過ぎず。

而して此三大敎育主義に付きて比較研究せんか、三主義共に一方に偏せる極端的學説たるを免がれず、何んとなれば、現代の進歩したる學理上より見れば、三主義何れも極端なる敎育主義也といふの外なければなり、その理由如何といふに、ヘルバルト一派の倫理的精神的敎育主義の如きは、人間の品格を高尙にし、道義的修養を爲すを以て唯一の目的とするもの、然れども此意義の主張は、敎育上重要の着眼點たるべしといへば、單に此等道德的敎育のみに依賴し過ぎて、其他即ち人間の生存に必要準備たるべき、心意及身體の敎育を忽

諸に附せば如何　吾人は此點に於て、彼のモンテーン氏の言へけむ、敎育は一個具體的の人を敎育する也、精神的體育的に偏傾するは不可也との至言たるに服す、また國家社會主義は如何といふに、敎育の中心を國家社會の上に置き、言はゞ敎育するは國家の爲めなり、社會の爲めなりと言ふ意味を有し、此意味を以て國家社會の爲めに個人を養成するを主たる目的とするものなれば、その國家社會を發達せしめ、維持せしむるには利益なる敎育主義ならんも、是れ或る意味に於ては、國家社會の爲めに、個人を一種の犧牲に供するが如き弊なきにあらず、是れ學理上偏狹の思想と認めらるゝ、所謂國家萬能主義に類似するものたるなからんや、二主義已に不可也、然らば啓發的個人主義は可なるやといふに、之れ亦前二主義と等しく頗る缺點あるを認む、何んとなれば此主義は、個人自らの爲めに個人智能の發達を計り、又た各個人の間に調和的平等的敎育を施すを以て主要なる目的とするものなれば、敎育は殆んど個人的生存の方便たるに過ぎざるが如き弊を生じ、協同的生存の意義を入れざるものとなり、社會上に於ける共通精神即ち社會精神、及び共通生活即ち精神的生活の原則を沒却せるものにあらずや、社會の一員としての資格は、公共の幸福を計るべき義務あるを忘失したるものにあらずや、此の如く論じ來れば、三大敎育主義なるものは、その長所も自ら認めらると雖とも、其缺點も亦歷々として認めらる、さりながら、こは余が怱忙の筆に成れる批評說に過ぎざれば、固より賢明なる敎育家諸士の眼に觸れなば、こは粗笨なる論文なりと誇らるゝならんも、三主義に對する批判の大意をば畧ぼ述べ盡せり、要するに以上の三大敎育主義は、何れも極端に走れる學理主義にして、絕對的に其一を採用するは、穩當ならざるものといふべし、さらば、如何なる敎育主義をか採るべき、現今の時代に於ては、敎育の目的を如何なる標準に由りて定むべき乎、是れ大いに講究を要する敎育上の先決的大問題にあらずや。

敎育を爲さんと欲せば、先づ以て敎育主義を確立せざるべからず、敎育主義にして確立せば、敎育の目的は自

ら定まらんのみ、然らば、現今の時代は如何なる教育主義をか採用すべきや、吾人の見る所を以てすれば、人類共同生存を目的とする教育主義は可なるべしと雖、是れ所謂合理的國家に進化したる曉には、兎も角、未だ之れを今日の時代に適用すべきものにあらず、否實行し得べき主義に非ざる也、見よ宇内各國間の政治的状態を、正義の標榜は假裝の面貌に過ぎずして、恐るべき弱肉强食の悪勢力を逞うしつゝあるにあらずや、故に今の時世界的博愛を口にするは、學者の理想のみ、宗教家の空想のみ、是れ欲して得る能はざるが如き類而已、抑も人間を教育する要義は、完全なる人を造るに在り、而して完全なる人とは何ぞ、個人としての資格を完成するのみならず、社會的の人たる資格をも完成するの意義ありと解釋すべし、即ち人間は個人としての幸福を充實するのみを目的とすべきにあらず、進んでは社會公共の幸福を計るの義務あり、而して個人の幸福は社會公共の幸福と相伴ふものにして、社會を離れて個人の幸福を完ふせらるべきものにあらざる也、故に吾人は國家社會を中心とせる主義に、個人主義を加味したるが如き一種の教育主義を以て、現今の時代に適合せる教育主義なりと信ずる也、されば、此主義より割出したる教育の目的は、即ち國家社會に於ける自我(Ego)を完成するを以て、唯一の目的と爲さゞるべからざる也、而して此目的を以て人間を教養せんか、個人として完全なる資格を造り得べきのみならず、國家社會の一員として完全なる資格を造り得べく、以て國家社會てふ團體に於ける共同生存を全うし得るの効益あり、是れ固より教育上の大主眼のみ、若し夫れ教育の方法手段に至りては種々あるべしと雖、此等の方法手段は皆此教育主義の下に包括せらるものゝ也、方法手段は如何なる術を執るも可なれど、主義は一ならさるべからず、主義一ならされば教育の結果は散漫に歸せんのみ、主義已に確立し、此に適當なる教育の目的を確定せば、一世の教育を擧げて此の目的に向つて進まさるべからず、而して後始めて完全なる教育の効果を見るべき也、予は黄吻の一書生のみ、限りある時間と、限りある紙面

を以て、此大問題を論じ、固より粗雜の非難を免かれさるべきも、こは自ら豫想して避けざる所、只予の老婆心たるや、世の敎育の任に當る者、無主義無定見にして徒らに學術の注入のみを努めず、思ひを此に致して、十分に敎育學說を審究したる結果、敎育の眞目的の何處に在るやを了知し、而して以て敎育の大任を盡さんことを欲するに在る而已。

社交

會話の心得

學問を勉强する人は澤山にあり、身體健康の發達に心がくる人は澤山にあり、遊藝を修業する人は又澤山にあれども、會話の上手にならん事を心掛くる人は眞に稀れなり。

されども會話の上手なる人は、その人の一生を社會に愛せられ、社會に善を盡すを得る一の道具なり、人の智識の中の十中八九は會話によりて得し所なりと、古賢の云ひけるは如何に會話の大切なるかを示せる名言なるぞ、我等が知らざる人に始めて對面せんに、未だその人の性質も知らず、人物も知らずと雖も何とも云へざる一種の引力を以て人を引着くるが如き感じありて其人の傍らを去るに忍びざるが如き感を起さしむるは會話の力なり、人を敎育し、若しくは人より敎育を受くる唯一の手段は會話なり、實に會話の巧拙によりては益すべき問題を以て人を害し、又己れをも害するとあるに至るべし。

如何にせば會話に巧なるべきやといふに譬へば、若し友人に對して忠告せんと欲する事ある場合ならば、先づ先方の地位と其の希望と、性質と、及び先方より言ひ返すべき口實とを考へ次に此方より言ふべき順序を引きくらべて後友人の許に行き、柔しき言葉を以て己がこゝろを打明かし、親切を以て靜かに忠言を始むべし、人の心を動かし得べき談話はかくして出來得べきな

り、其他はすべて之れに準ずるものと知るべし。元來談話は唯樂しみとのみおもふべからず、之れは人に取りては一の稽古にして又品格を作る一の器具なれば注意して巧者になるを心掛ざるべからざるなり。

談話は實に有益なり されど會話を重ずる人の爲めに二つの危ふき事あり、第一は心にもなき親切、心にもなき世辭をのべて、人を瞞着せんとおもふ人あり、かゝる人は人を瞞着せんとして反て己れを瞞着するなり、己れを瞞着するとは己れより出でし僞善が己れが天性を作るに至るを云ふ。

第二は會話により間違ひたる智識を得るとあり。書物にさえ時に想像の記事ありて信ずべからざる事あるを、まして會話に依りてのみ智識を得んとする人には、間違ひたる事實を誠しやかに覺込むとは珍らしきとにあらず かゝる人と雖も勿論多くの談話の材料を有し、面白ろく語るの能力を有し、何時にても語り得るの用意はあれども時々間違ひたる事を話すが故に、之を聞くもの信ずる能はざるに至る。

◎集會に就ての心得

多くの人と相集りたる處ろにては、自分獨り呑込みたるつまらぬ事を話して、心を飽かしめざるは勿論、他人がつまらぬ事を話すにより、面白くなくして一座のしらけたる時は氣を利かして集會中にて談話に巧みなりとおもふ人の前に行きて其人の口を開かしむる爲め、種々の問題を提出すべし、つまらぬ人が話の專賣をなして一座を亂すは然るべき人が話さゝるがゆゑに、上手なる人の話す時は下手なる人は止むべし。恰も太陽の光線の出でざる前に、月や星が威張るがごときものなればなり、特に集會の中にて話す時は人々が大切なる時間を拂ひて聞く丈けの價値ある談を爲すべし。又た所謂蔭口とて、その人の居らざる所にて、その人の事を話す事を忌むべし。

◎諂　諛

隣家へ一尾の魚を贈りて、隣家よりその返禮をなさゞりしにて、その隣人を惡むが如き人あらば衆之を卑しむべき人と謂はん。諂諛を他に呈する人は魚の返禮を

望む人に異ならず、諂諛する者は其の諂諛がその本人に達せざる處ろにては之れを曰はず、多くは公會の席が、若しくは其友人が、本人に電信の傳はる處にて之を語る、意はその送りたる言に對して報酬を得んとするにあり、望む處の報酬に別こそあれ、或者は高地位を得んと欲し、或者は金錢の惠を得んと欲し、或者は一杯の酒、一塊の寶を得んと欲し、若しくは己れの評判を好くせんと欲し、各々報酬を望まざるはなし、かりに其の卑劣にして人を害する事は問はずとするも、己れの品格をおとし、己れの性質を下げて、おのれの不利益となる事尠からず、人に諛ぶるといふ事は恰も人より諛を求むる看板を出すと同じく醜事にして一方よりいへば一種の賄賂なり、その醜るしき賄賂は覺へず知らざる間におのれの言語に出す習慣となりて世人の笑となるは厭ふべき事なり、さりながら失望したる友人を慰め勵ましむるために、必要なる讃辭は聊か諛へに似たれども是れは一種の方便にして普通の諂諛と同じからざるなり。

◎話柄

世には一種の人あり、人は笑はざるに自からは面白さうに長談を爲す人、若しくは人のうるさくして困るにも拘らず、いつも〳〵同じ樣なる談話を得意になりて語る者あり、其の人は談話を好み、談話をなさずしては居られざれども其人に忌まるゝの原因は識見の狹くしておのれの知りたる事、面白しとおもふ事が、人の知りたる丈け高尚ならず、發達せざるによるなり、如何にせば人に好かれ、己も望みを滿足せしむるを得べきやといふに實に讀書にあるなり、マタムタール女史が讀書は全き人を作り、談話は用意ある人を作るといひしは味ひ深き言葉なり、多く讀みて先づおのれの腦を滿たしおき、さて談話する時は、人の輕しむるが如き談話は出でず、又古るくさき話しは自分より恥ぢて語らざるものなり。

◎自己の事を語る

次に謹むべきは、己れの事を話しの問題とし、若しくは話しの中に挾まざるを可とす、世の中の人は大凡はお

のれを信ずること分に過ぐるものにして謙遜せりといふ人にても、その謙遜を一種の誇りとして鼻を高くするものなれば、己が事を得意になりて語る時は聞く人は猶其よりも上手の人なるが故に、心の中に不愉快を抱くべし、幸に其人謙遜にして、心中に不愉快を感ぜずとするも、己れの事を語るは失禮の事なり、己れの事は通常のことを語るさへも失禮なるにさして己れをえらきもの丶如く談ずべからず、己れの賢を言ふ人はそのいふ處ろの賢き分子を除ぞけば後は愚なりと廣告するがことし、ワシントン大統領を止めて家に歸るや、多の人は群がり集どひて、種々の事を問ひ掛けしが彼は己れの爲せし事に就ては一言をせざりしといふ。

流行のしほり

◉女の髪飾

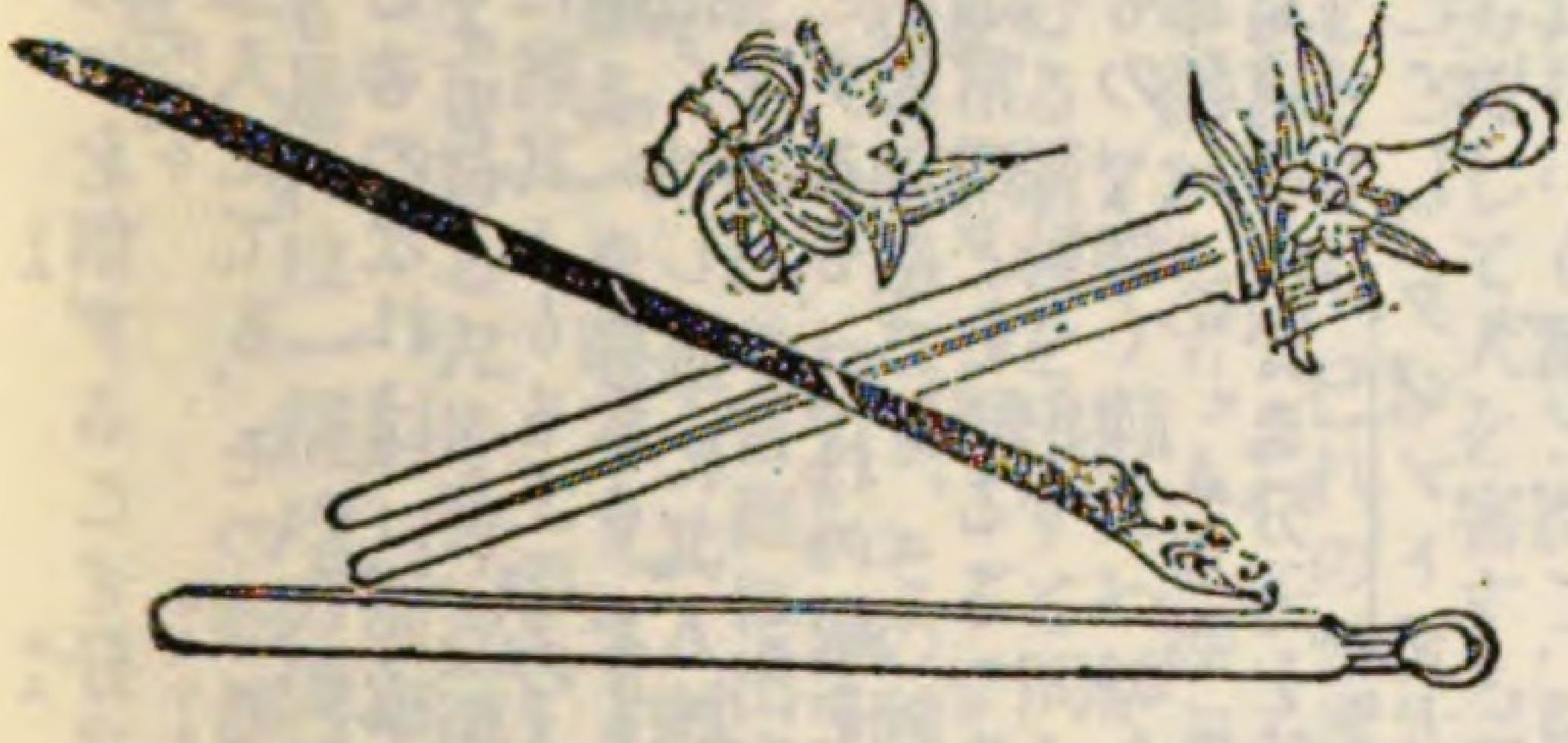
十七八歳の令孃の島田髷に、最も映りよき櫛は月妻形、新月形（山一寸四分長二寸二分位）等の金地高蒔繪にして、前差には鼈甲製、象牙製、銀製等の花物（花の大さ一寸より一寸五分位）又は寶石入を好むものあり、根掛は幅六分より七八分位の彫刻附、寶石入等にして後差は鼈甲又は銀製松葉形の脚へ、五六分位の銀臺鍍金、芝山の生込み堆朱風象牙の彫珠を附けたるものか、或は銀製鼈甲製などの蒔繪、彫刻の平打簪（大さ一寸乃至一寸二分丸）が一般の流行なり。

銀杏返しには、櫛前差さも前に變りなく根掛は珊瑚、瑪瑙、唐木、象牙等の刻彫珠大さ四分五厘より五分までのもの八粒、九粒を一連としたるもの、又金銀製幅三分より三分五厘位の彫刻附根廻しなど相變らずの全盛なり。

◉價格

蒔繪櫛	本鼈甲製	五圓より十五圓
	四方張製	一圓より五圓
前差	本鼈甲製	三圓より十五圓
	四方張製	壹圓より參圓
	金製	拾圓より參拾圓
	銀製	貳圓より七圓
	洋銀、アルミ	貳拾錢より貳圓
後差	本甲脚珠附	參圓より拾五圓
	四方張珠附	七拾錢より貳圓
	銀臺滅金玉附	貳圓より六圓
	本甲平打	參圓半より拾五圓
	黒甲蒔繪平打	壹圓半より五圓

根掛		
	銀臺平打	壹圓より五圓
	アルミ玉附平打	貳拾錢より八拾錢
	古渡珊瑚	百圓より參百圓
	土州珊瑚	拾五圓より五拾圓
	人造珊瑚	九拾錢より貳圓半
	本瑪瑙	參圓より八圓
	擬瑪瑙	貳拾錢より八拾錢
	銀製根廻し	貳圓より五圓
	アルミ製	參拾錢より壹圓半



◉丸髷用後差

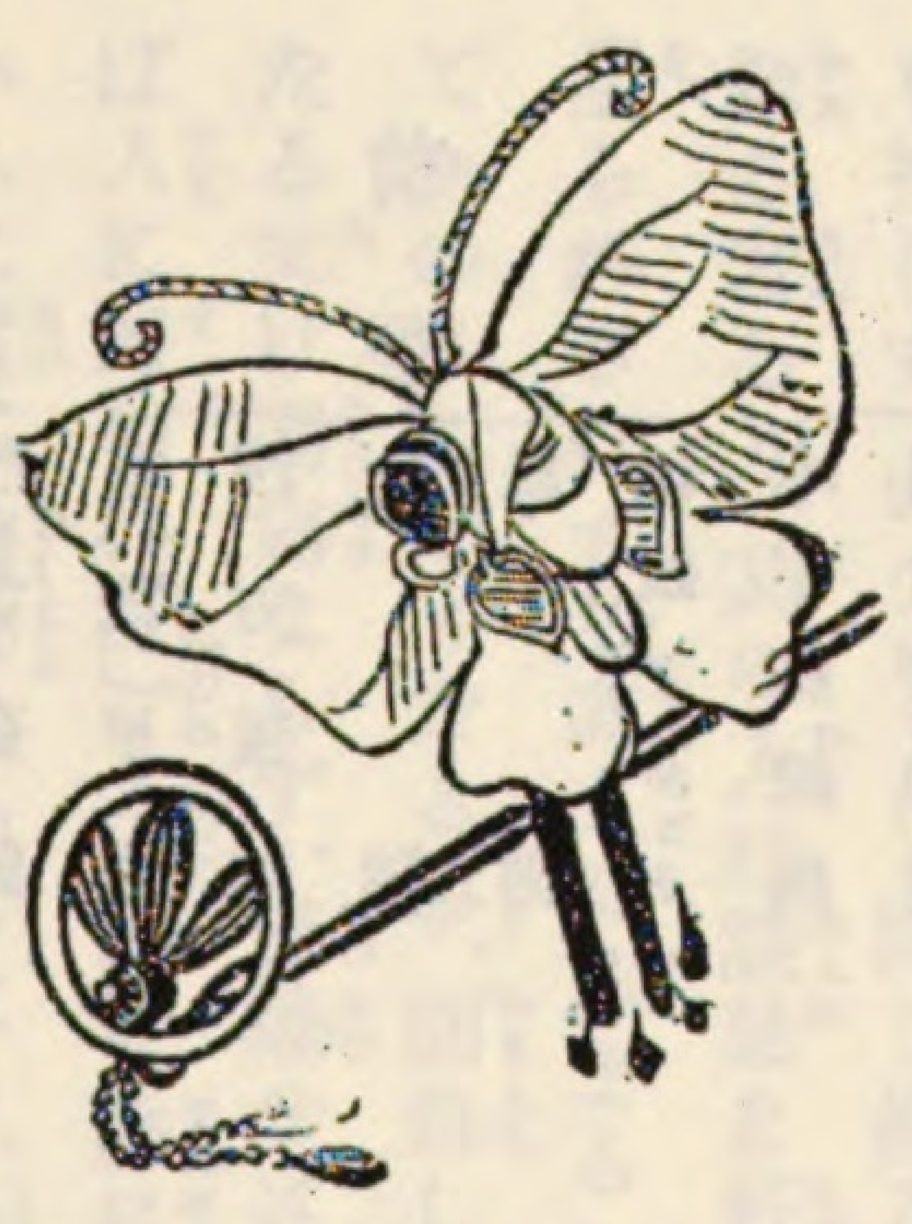
（一）差込の後差しは無地甲製にして、菊、牡丹、水仙などの花物を差込みとなしたるにて花の取外し自由なれば、珠簪の代りとして好手多し（代價本甲參圓半より十圓位）

（二）一本脚の後差しは、是れまた無地鼈甲製にして珠簪や差込みも如何との年増向は、何より似合の品なり。

（三）ばらふのあま龍形は元結留めて前差との兩用を兼ね意氣者の氣請よろし（代價七八十錢より一圓五十錢位）

◉縮緬細工の前差

摘み、生花、モールなどの花簪は俗に草物とて四季折り〳〵の花物を形取る事とて、之れ程移り變りの早きはなく、ツイ此中までは松の葉、水仙、梅花、花桃などの盛りなりしが、今は早や櫻花の世界とはなりて奈良の櫻や樺櫻、淺葱櫻の八重一重時を得顏に咲き揃ひぬ、而して此草物にて摘みとモールは最早廢れたる方にて爰一般の流行は生花と竹紙製なるが取分け此程新製のお下げ用簪は



蝶、牡丹櫻、菊水等縮緬の疊み込みにて濃淡の彩色おもしろく稚兒髷、桃割れにも兼用さるれば頗る好手多し、代價は鼈甲脚モールの卷金軸にて三十五六錢より五十錢位なり、（以上流行雜誌）

婦人向流行袷衣

（三井吳服店）

◉十七八歲

▲風通御召の二枚襲　地色は小豆色、藤色、紅かけ鼠にて柄合籬に菊、高爐峯の簪、霞に櫻、雪持の竹、其下着は友禪縮緬、又は紋羽二重

にて白茶に栗梅さ利久茶の陸松に飛鶴模様さか、薄料丹色の山路暈し(やまみちぼかし)に彩色の蝶模様など裾廻しには縮緬の紅鳶色か、薄櫻鼠（此仕立上り代價五拾圓位）、又、

△芳野御召の二枚襲　色合は櫻鼠、薄藤色にて、裾の處に熨斗目の給柄な色糸にて織出したるもの、但し白糸の縫紋三つ、下着は海老色大格子の芳野糸織、裾廻しは縮緬の薄紫根、鼠がちの鶯茶なるべし、（此仕立上り代價四拾五圓位）

◎二十五六歳

▲小紋縮緬の無垢二枚襲　五ッ紋附、小紋の形は珊瑚崩し、綾波、薇立枠、木理(もくめ)、数松葉などにて、色合は素鼠、梅鼠、利久茶に若竹或は若蘆、百合花などの白上げ江戸褄模様にするか又は模様をぬきの變り裾又織色御召の縫紋附二枚がされ、三紋附、色合は錆葡萄、薄栗梅、裾廻しは御納戸の羽二重、（此仕立上り代四拾圓位）

◎三十歳前後

▲縞御召の二枚襲　地色は藍皮色、鐵御納戸のよろけ崩し、障子格子の横子持、其下着には縮緬えんじ入の古代更紗か、又は色糸色の吉野御召裾廻しは空色絹か中花色絹（此仕立上り代價三十圓より三十五圓迄）、又

△大島紬二枚襲　柄合は亀甲崩し又は猫足裾廻しは空色絹、羽織に縮緬、又は絽縮緬の無双、黒五ッ紋又は三ッ紋、（此仕立上り代價四拾圓位）

紗子織婦人廣帯春模様（柳に雲）



京都西陣伊達虎一氏製織

◎男子向流行袷衣

▲鹽の諸糸織二枚襲　素鼠の片葉代名、微塵表さ裾廻しは空色絹か中色絹、（仕立上り參拾七圓位）▲平御召二枚襲　素鼠或は藍鼠の亂立、金通し刷目縞、裏と裾廻しは前さ同じ、（仕立上代價參拾五圓位）▲縞御召の二枚襲　柄合は茶微塵、裏、裾廻しは前さ同じ（仕立代價四拾圓位）▲大島紬の一枚裾（代價貳拾圓）▲結城紬の一枚裾　（代價拾五圓位）▲節糸織又は銘仙　綴裏、絹、裾廻しはキヤラコ（仕立上り代價拾圓位）

◎婦人丸帯地　（同上）

▲繻珍織　白茶地、鼠の松魚縞、金通し光琳水（四拾貳圓）、白錆茶地、青海波に紅葉散し金糸入（參拾五圓）

▲あんぺら織　こげ茶地、古代の丸模様、笹蔓波に千鳥（貳拾八圓）

▲琥珀織　漢東模様（貳拾貳圓）

▲繻珍織　白茶地遠州形（貳拾七圓）

▲吾妻織　白茶地讃に唐草の段模樣（參拾五圓）

▲厚板織　御納戸地寧樂朝模樣（三拾五圓）、鹽瀬の友禪染（三拾圓位）

◉男子帶

綴織（拾七圓より參拾圓）、風通（七圓前後）、綿入風通（參圓五拾錢位）、博多織（七八圓）、繻珍（拾圓前後）、和蘭織（八圓前後）

◉縞御召の流行

近年まで小紋御召の流行に押されて餘り見受けざりし縞御召が昨年來ぼつ〳〵流行の兆を現はし、隨て其の柄合も是まで有來りの赤茶の代名縞位に止まらずして白の大代名又は胡麻柄縞、障子格子などの中へ赤糸を織出したるものなど、嗜好に投じたる柄合、續々出で來りたる樣なり、又流行につれて、織物に映り好き博多の嗜好を引き起すに至り、從來の繻珍一點張りの風は稍々廢り氣味なるが、其の柄合は縮物よりも紋模樣或は一本獨鈷などの新規珍柄を撰ぶ樣なり、

流行の衣服

（神田鍋町松屋吳服店）

御照會相成候流行衣裳及新柄模樣の大略左に申上候、直段は凡て昨年の當時とは殆ど二三割方の下落に有之候得共、追々美術思想の發達に伴ひ、模樣染の如きは御客樣方の御好も隨分六ヶ敷、從て染代の數十金を費すも敢て意とせざる風に相見へ候までに立至り候は美術界の爲め賀すべき事とぞんじ候。

▲婦人向袷小袖としては不相變風通御召、縞御召等に候得共、取り分け此の頃は御召の格子縞（十一圓より十三圓まで）流行を初め候、下着及羽織地には御召の吉野織（十一二圓）至極優美のものに御座候、模樣物に至りては地質は縮緬紋羽二重にて、葡萄鼠色のボカシ模樣又は光琳風の上品なる模樣及小紋江戶褄模樣等に候。

▲男子向きは總てヂミなる風を好み候ゆえ、從て流行不流行も婦人向き程際立ち不申候得共、方今は陽樂織（十圓前後）、京糸織（十二三圓）、及鷹貴織（十五六圓）等最も御好に適し、裏は薄花色及褐色など流行に御座候、御紋付羽織には鹽瀬及羽二重之無双羽織（三十圓より四十圓迄）等に候。

單衣地に至りては未だ季節柄賣行初め不申候得共弊店の用意せる處によれば▲婦人向きには矢張縞御召なれど壁透谷も不相變賣れ行よろしかるべし、殊に昨年とは非常の下落にて凡六圓前後に御座候、御紋服には絹縮の小紋形（十二三圓より十四五圓まで）流行を來すべく、絽縮緬入掛付及小紋入掛付は江戶櫻流行にして色は藍返しに七草模樣などよろし、又透模樣には明石縮が上着は空色又は水色等の薄色となし下着は透谷地、波に千鳥などの模樣置き候得ば上着へ透きて寫つる趣高尙にして見ながら涼しそうに候、右は此の頃の意匠にて本年は一入流行を來すべくと存候。

▲男物には結城縮（十二三圓）は新機にして好評あり、韓糸織（十二三圓）

又は縞絽(十二三圓)等不相變流行せらるべし、羽織は絽又は透谷紗の單兩面染にて表は黑の紋付裏は雲龍か波に朧月或は秋草等好に應じて染上げ凡二十圓より二十五圓位までに御座候。

▲女帶には朱子珍、博多、朱雀、鹽瀨共變らざれども夏(一重)單帶地としては實織(十九圓位)、綵羅織(二十二三圓より三十圓迄)など嶄新のものにて淸涼織(十八圓五十錢以上)は昨年來の流行物なり。

▲男帶地は不相變朱子珍(八九圓より十五圓位)、博多(三圓以上十圓迄)絽博多(五圓以上十圓)、綴織(二十圓以上三十圓)、朱雀織(十二三圓)の類に御座候。

總て色合は令孃向は櫻鼠、葡萄鼠、婦人向に御召茶或は素鼠など最も流行に御座候。

猶いづれ來月實出しいたす心得に候間其節は又改めて可申上候。

阪地の流行

(大阪中流社會婦人の風俗)

◉十七八歲の令孃

▲頭のもの　櫛は矢張黑鼈甲の月形にて花鳥の蒔繪せしもの(價八圓)◉向ざしは無地本鼈甲の花もの(價六圓九十錢)◉根ざしは純銀の平打一寸位にて精巧なる彫刻をせしもの(價十圓)◉根かけは純金の無地もの(價三十五圓)以上は(越後屋鼈甲店調製)◉花簪はつぼみ櫻を生花の如く寫せしもの(南地花宗製價五十錢)▲着類　本藍色地の吉野御召にて惣横段の熨斗目縞、八掛けは藤葡萄の縮緬のひとつ紹入(價二十九圓)◉帶は和蘭織の丸帶にて澁茶地に摸樣は檜垣に有職の亂菊(價四十圓)◉長襦袢は霞に立鶴の摸樣を染出したる紅ざしの友禪縮緬この半衿は高貴色の縮緬に平金の糊こし縫(價三十五圓)◉帶揚げは白地の縮緬に紅にて大竹の摸樣(價三圓五十錢)、また袷の二枚襲れの分は▲着類　新製の吉野御召、薄栗皮の袖下裾摸樣、白絲にて横霞を織出し上下着とも對の色、裾廻しは紅掛けの無地縮緬(價八十圓)◉帶は西陣の京綺織にて地色と共絲にて一面に干網を縫出し摸樣は平金にて陰陽の磯千鳥(價八十圓)◉長襦袢は濵縮緬にて光線染に花の丸を數々あらはし一見油畫の如く見ゆるもの、花は縫散しこの裏は紅羽二重(價五十圓)以上は(飯田吳服店調製)▲衿は紅鳩羽色の縮緬に色絲と金絲を交ぜたる草花の縫摸樣(ゑり德製價四圓三十錢)◉帶留は純金の金具にて牡丹を精巧に彫刻せしもの(平野町丹金製價二十五圓)◉指輪は廿二金平打にて白金象眼入り(天賞堂調製價三十八圓)◉履物はまさ下駄の木地臺にて表は永皮、鼻緒は摸樣入綴織(丸竹製價一圓九十八錢)◉蝙蝠傘は緋色絹地にて廿二吋、柄の手元はゴム(上中支店製價三圓五十錢)この分をざつと積つて見ると二百三十五圓餘と三百四十二圓餘になります。

◉二十五六歲の夫人

▲頭のもの　◉櫛笄にこれまた流行の元祿形、笄は矢張黑鼈甲に蒔繪せしもの(價十八圓)◉向ざしは本鼈甲の簪(價五圓)◉根さしは薄色珊瑚珠の銀足附(價廿三圓)◉根がけは翡翠の八玉(價五十圓)以上は(越後屋鼈甲店製)▲着類　華紋御召にて鐵地に薄茶の井桁崩しの紋織柄、裾廻しは燻茶の縮緬の一ッ紹入(價二十八圓)◉帶は織物にて灰鼠地に銀モール

織込みの一重夜櫻の模樣（價三十五圓）◉帶揚げは白縮緬の平金縫（金四圓五十錢）◉長襦袢は友禪縮緬にて紅無し薄柹竹茶地に寫生にて大輪の白牡丹、裾と袖裏は白縮緬（價三十三圓）以上は（三井吳服店調製）また二枚袷の分は▲着類　比翼御召の唐棧縞上下とも對にて裾廻し生壁色の縮緬（價八十圓）◉帶は佛國里昂製モアー織にて櫻樹色の杢目模樣（價八十圓）◉長襦袢は利久鼠の紋縮緬に春霞を白ぼかし、背中は本匹田にて設衛櫻の大摸樣、裾は遠景の山盡し、裏は白縮緬（價七十五圓）以上は（飯田吳服店調製）▲衿は古代納戶の縮緬に色絲の縫にて藤の摸樣（價三圓八十錢）◉帶揚げは梅鼠と白との染分縮緬にて古代摸樣の友禪（價三圓七十五錢）以上は（心齋橋筋ゑり德製）◉帶留は純金の金具にて亂菊を彫刻せしもの（丹金製價二十圓）◉指輪は廿二金なま、形高彫（天賞堂製價四十圓）◉履物は吾妻爽研の白木地尤も柾目もの、表は南部、鼻緒は西陣織の本天にて色は錆鐵（丸竹製二圓四十五錢）◉蝙蝠傘は紋織出しの黑地廿三吋形、柄は木柄（上中製價三圓八十錢）この分の總計は三百三十五圓餘と四百〇四圓餘になります。（大阪每日新聞）

最新流行の洋服

最近の刊行に係る倫敦月刊の裁縫雜誌に依りて彼地本年流行の男子用春夏服を紹介し流行を趁ふ人々の參考に供すべし、人も知れる如く男子の服は先づ倫敦の形を以て最も正しく最も男らしく上品なるを以て世界の推す處となれるなり

フロツクコート　とゝへば日本にては必ず二行釦（ダアブルブレスト）の一點張りにて着る時はボタンをきちんと掛けるに定りたれど、倫敦にては上流社會より一般の紳士に至るまで近頃大抵一行ボタンのフロツクコートを着し且つ其ボタンも前に二個あるのみ、何時も外せしまゝの着流しなり、偖襟の折返しには矢張り琥珀などの奥床しき絹を付け（額取りでなく惣一面に端まで）チヨツキは折襟二行釦、チヨツキ地として特別に織りし紋絨を用う、併し一方には依然として二行ボタンのフロツクコートを用うる人もあり（即ち前部にボタン三個宛二行に並び袖先きにも三つのボタンあり）これは無論上衣を各種の黑絨とし襟の折返しは額取りにて黑絹を付け、此の上衣に取り合せのチヨツキは輕くしなやかなる白又は銀鼠の紋絨を用ゐヅボンは鼠、藍鼠、御納戶の薄絨、カシミヤなどの鮮明せし淸楚なるものを用う、尙一行釦二行釦の二種あれ共地質に厚薄の相違はあれどいづれも春夏兩用の形なり、

總じてフロツクコートは追々丈の長くなる傾きありスラリと細長き形を賞美し前年の如く身幅の廣く丈の短き仕立は最早流行せず、また目下流行の地質は上衣を黑の無地綾（サテンウオーステツド）、朱子目綾（ヴエ子シヤン）、細一本綾（シユランクコークスリユー）、絹綾（シルククローズ）等、短衣ヅボンは前に記せし各種の色替を用う但し喪の時は勿論三つ共黑なり、

フロツクコートとモーニングコートにシルクハツトは附きものなるが襟飾は必ずしも黑の横結びの眞面目なるもののみを要せず、却て薄色の蝶結、細形の結び下げ、さては新形「又」の字なりの浮き紋あるものなど優美なり、偖カラーはよし高襟のそしりはありとも矢張り立襟又は總折れ返しの幅の廣き程姿勢の整ふものなり、

モーニングコート　これも丈の長きが流行し上衣の前裾は昨年頃流行せ

しもの丶やうに鋭く急に曲げず殆んど四角にボンヤリと丸るみを附けしもの流行す、ヅボンは細目の方なれど一時流行せし獨逸風の股引的の卑しき形にあらず上を太くし裾先に下るに從つて漸次細くなるもの流行すチヨツキは一行ボタンにて要するに全躰の形をば輕快敏捷の風に見えさせるを主として仕立上げるなり。

脊廣服　の中にて特に散歩用脊廣(Lounge Jacket)と名くるもの非常に流行す、これは名の如く重に野外散策の節に用うるを目的としたるものなれどつまり通例の脊廣の事と見て差支へなし、脊廣は日本にても西洋にても室內の執務及外出の時など最も多く著用さる丶輕便實用の日常服なれは最近流行の形を詳しく記すべし、

脊廣の着方に三種の取合せあり、第一上衣チヨツキ、ヅボン三ツ共同じ地質にて仕立てるもの、これは九分通りまで縞ものとして、其の流行の色合は春ならば白茶、濃茶、鶯茶、藍鼠、鼠等の霜降地へ共格子、朧格子又は赤、茶などの色糸の格子を織りたるもの、地質は薄肉縞絨（フハンシーヲオーステンド）上等薄スコツチ(フハンシートウイード)等を用ゐ、第二は上衣とヅボンを揃ひとしチヨツキのみ異りし地質を用う、これは上衣ヅボンを黑としチヨツキを白或は異り色の紋織絨とすれば能く引き立ちて粹なものとなる、また上衣ヅボンを縞ものとするもよし、第三は上衣とチヨツキとを黑としヅボンのみを立縞の鮮明したるヅボン地絨を用うるもの、これは至極高尙にて穩當なり、この塲合の黑の上衣は無地綾(サテンウオーステツド)斜綾(トイル)又は綾目の荒き毛の立ちたるサージ即ち(シエビオツト)メルトン等なり、

さてこれを着して散歩する時微寒を感じ或は雜踏して砂塵起るべき虞ある時は春外套即ちスプリング、オヴアーコートか半外套即ちボツクス、オヴアーコートを輕く羽折るなり、スプリング、オヴアーコートの方は稍長目にて膝の下まで垂れ襟の折返しには共色の絹を付け地質は濃鼠、鉄、茶などの霜降繻子目綾か柔きメルトンの類を用う、またボツクス、オヴアーコート(又はライト、オヴアーコート)の方はずつと短く殆んど脊廣と同じ位の丈けにてこれは焦茶、赤茶又は淡茶などの無地のビーバー絨最も適當なり、この二種のオヴアーコートはいづれも共に前は隱しボタンにてボツケツーは蓋付なり

これより又前に戻りまして脊廣の形の事を記さんに、上衣前裾の四角なるもの又は僅に丸みを附けしもの流行し前年の如く角を削ぎし樣にくり落せしものは最早流行せず襟の開きも亦前年の如く無暗に開き過ぎず寧ろ狹き方なれどさりとてきちんと首を締める樣に窮屈なるものにあらず狹き中にゆるやかなる處あり、又胸の處にある手巾を入れるボツケツトはすべて取り除けとし、全躰の見えの如何にもさつぱりとしたるを貴美す、總べて近頃は何種の服に限らず胸のところのボツケツトは無き方を好み名刺を入れる小さきボツケツトさへ上衣の裏へ付ける傾きあり又脊廣の後は脊に縫ひ目なく、且つ上衣の身躰にクツ附きし樣になるを好まずフワリと寛やかに垂る丶を良しとす、チヨツキは二行ボタンにてヅボンは矢張り裾先に下るに從ひ漸次細くなるを喜ぶ、

最後に短艇、遊船、海岸散歩等に用うる服即ちボーチングコスチユーム(Boating Costume)について記さんに、上流は單へ一行ボタンの着流し形にて重に黃色地に黑と樺の荒き縱棒縞を用ゐ、キヤツプ(鳥打帽子形)も上衣と同じ地にて作りこれに白無地フランチルのヅボンを着しゴム底の赤牛靴にてヅボン釣を用ゐず華美なる縞柄の胴締を用ゐ同じく白無地フランチルの折襟襯衣に淺黃或は花色などの襟飾を結び下げしまゝ垂れさせ、今一種は單へ角前二行ボタンのジヤツケツトにてヅボン上衣共揃ひの縞とこれは常に上着のボタンを掛け置く故襯衣チツクタイの撰擇

に及ばず、上衣ヅボン共フランチルにて極く濃き花色又は御納戸、鼠等の地色に白の大名縞が能く引立ち、帽子は鳥打形を用ゐず菱編などの縁の堅き麥藁の夏帽最も適當なり、（讀賣新聞）

時論一斑

婦人服裝の改良

寺田文部書記官の談

◉婦人服裝の改良と云ふことは余の熱心に主張する處で教育事業中目下の急務は何であるかと言へば第一は婦人服裝の改良と第二には實業教育の普及振興の二問題であると思ふ

◉世間には追々此改良論者の出で來りしは喜こばしき現象である然るに世には改良々々と言つて理でも非でも現在の形式を打壞はして新規なる形式さへ具ふれば改良だと思ふものがある成程袴を穿つ樣になつたのは改良の一進歩と見ても差支えはないが中には不思議なる衣服を作りて試みに着用さする學校もある余は此試みと言ふとや何でも宜いからやつて見樣と云ふ主義には賛成し能はぬ

◉服裝の改良と言へば何の造作もないことだが決して左樣なものでない第一には風俗習慣に關係するから日本現在の生活情況より考へればならぬ第二には經濟上の點は如何であるかを顧みればならぬ第三には衛生上より考へ第四には平生の服裝は如何にすべき乎冠婚葬祭の衣服は如何にすべき乎を思はればならぬ且つ上着は如何にし下着は如何にすべき等の問題までも研究したる上でなくては容易に改良の斷案を下すことは出來ない斯く考へ來れば實に重大なる問題である一朝一夕に成就しやうと云ふのは誤りも甚しい

◉袴を穿つは宜しいが禮式の教課を受くるときには袴を脫して廣き帶を締ると云ふ樣な事のあるのは往々聞く處であるが是等は日本の今の禮式と衣服との相適せざる一例である日本の今日の習慣若くは生活上より考究したるならば斯の如き衝突の有るのは少なからぬことゝ思ふ是れでは改良して却つて混雜を惹き起す基である

◉過日橫濱の外人に逢ひたる節余は婦人の服裝を改良せんとして熱心に考究して居るが君の方の教育界でも此問題を何とすると問ふて見た之が答には橫濱にては已に決議して一般洋服にすることにしたと言ふから余は其決議の餘りに輕卒なるに驚ろき君等は實に無謀も甚しい日本婦人の服裝を洋服にしてどうする積りか洋服は今の日本の習慣坐作に適して居ると思ふか若し洋服とするならば先づ家屋の構造を改めればならない朝夕の炊事をも改めればならない椅子に凭りて仕事をするならば洋服もよからう西洋人の如き食事を爲し臺所を有するならば洋服もよからう併し日本の生活現狀は決して西洋服には適せぬ今後とても中々それまでに成るには永いことである然るに是等の點を考へずに洋服にするなんぞは輕卒も甚しい左樣なる改良には斷然反對だと言つて遣つた

◎婦人服裝の改良事業は此の如き大問題で之を成功するには隨分困難である併し是非とも改良せればならぬとであるから大に研究せんではならぬ扨此事業を成功するには如何なる方法と手段を採る可き乎今日の如く學校の教育者にのみ一任し置きては到底目的を遂げ得ることは出來ない

◎余の考案を言へば婦人服裝改良會と云ふものを設立するのである其會員たる人々には貴婦人は勿論醫家學者を網羅し各方面より調査して餘蘊

なき様にし生活上にも衛生上にも差支のなき快活なる衣服を製作するのである勿論時日は五年で成功するか十年で成功するかは豫期することが出來ないが斯くの如くになされば到底完全に目的を達することは六ヶ敷のである故に余は一日も早く此會の有志によりて組織されんことを希望するのである

女子教育に關する意見

成女學校長　吉村寅太郎君談

我日本國も四十餘年以前に國を開きましてから此の方、西洋文明の風の吹廻しにて日に月に開化に赴きつゝありますのは、誠に喜ばしき事でありますが、併し此の文明開化と申すものも、主として形以下の事即ち蒸汽とか電氣とかの工藝又は政事上に於る色々の組織、法令、規則などの文字にて現はし得るものでありまして、形以上の事、即ち精神を鍛錬するとか、道徳を修養するとか、社會人心の品位を高尚にする點に至つては、未だ其進歩の大に觀るべきものは無いやうであります。さて社會人心の品位を高尚にせんと思ひますれば、學問教育を盛んならしめ、以て人々の心の中に道義心と云ふ者を鍛錬修養しなければならぬと云ふことは、固より言ふまでもないことでありますが、亦一方に於きましては、一般の風俗習慣を改善して外部よりも大に之を助くることが必要であらうと思ひます。此の風俗習慣を改善すると云ふ事に於きましては、種々様々の趣向方便を用ゐなければなりますまいと思ひますが、私の考へます所では、我國の家庭組織法を根柢より改革することが最も有功であると信ずるのであります。家庭組織法を根柢より改革すると云ふのは、第一に婚姻法を改めて歐米文明國の風に倣ひ、男女とも眞正なる愛情に基いて結婚しまする事と、第二に男子たる者が獨立して生活し得べき年齢に達しました時は、各々別に一家を立てゝ父母と同居せざる事との二個條が主要なるものであります。一とたび家族組織を右の如くに改革しましたならば、子女たる者は謂はゆる獨立自敬他に依賴することなくして、自ら此世に立たんとする所の精神を大に發揮することが出來ますし、亦父母たるものは、古來我國の悪習俗たる五六十歳にして隱居を爲し、衣食を其子に仰ぐやうなことも跡を絶つやうになるでありましようし、又因て其子女の教育法も大に其趣を異にするやうになるでありましよう。さて又家族組織を右申したやうに改革しようと致しますれば、必ず一般の教育法に多少改革を要するものがありますが、殊に女子の教育法に於ては大に改革しなければならぬものがあります。

女子の教育法を改革する上に於て、私の主眼としまする所は我國中等以上の女子の從來の柔弱遊惰の風俗を打破り、大に智徳を增進し其品位を高め、男子と同等並行させたいと思ふのであります。今其改革法の大體を一と口に云ひますれば、男子と女子との教育を及ぶべきだけ互に相接近せしむるのであります。辭を換へて申せば、男女とも其精神と身體との發達の上に妨害のなき限りは、同一の教育を施したいと思ふのであります。尤も男子と女子とは素より身體の構造も違ひますし、其精心性質も同じでありませず、亦處世の職分も異なりて居りますからして、下小學校より上大學に至るまで徹頭徹尾同一の教育を施こそうと申すのではありませぬ。唯同一にして差支なきだけ同一にし、近寄らせ得べきだけ近寄らせたいと思ふのであります。例へて申しますれば初等教育の如きは、成るべく同一の校舍に於て、同一の教員の管理の下に之を施し、中等教育の如きも、同一に教授して差支なき科目は之を一處に授け、男女に依て分つべきものだけを別々に授くることゝし、寄宿舍の設けあれば、

其棟は之を異にするも同一敷地内に之を置き、適當なる教員の嚴重にして且秩序ある監督の下に之を管理し、學校生活日常の事に於て剛柔相制し、强弱相助くるの慣習を養ひ、又時々男女一同を講堂に集めて講話會唱歌會を催し、運動場に於て運動遊戲、會食堂に於て茶話會を共にせしめ、高尙優美なる感情を以て互に相交際せしむるときは、男女兩性とも最も貴ぶべき心情よりして、互に相敬し、互に相助くるの慣習を養成することを得ますのみならず、又男子の雄壯膽力ある性質に依て、女子も知らず識らずに健活となり、女子の溫良和順の性質に依て男子も覺えず溫厚となるが如く、互に長短相補ひて兩性とも大に其品位を高むるやうに爲ることゝ思ひます。

米國に於きましてはコーエヂュケーションと申しまして、男子と女子とを混合して同一の教育を施す仕組のありますことは、誰しも承知のことであらうと思ひますが、此のコーエヂュケーションと申しまするのは、男女同じ學校に於て同じ規則の下に、同じ學科を同じ方法で授ける仕組でありまして、此教育法に就きましては、有力なる教育家の中に反對の說を唱ふる人も少なからぬ事でありますが、今日に於てはだんだん盛んに行はれる樣になりしまて、其結果もだん／＼と善い樣子であります。

我國に於きましては、一般文明の程度が尙ほ卑いですから、米國の眞似は迚も望む事は出來ませぬけれども、從來の女子の卑屈の弊風を破り、男子の驕慢の惡習を抑へ、男女共々に力を合せて此の社會を改善維持して行かうと云ふには、女子の教育法を自然の發達のみに任せて置く譯には參らぬと思ひます。夫故に少し突飛のやうで、世間の攻擊も多いではありましようが、幾分かコーエヂュケーションの教育法を採用して、思切て女子の教育を男子の教育に近附けて、大に活氣のあるものに仕度いと思ふのであります。

又右申述べました所の教育法は、獨り學校教育にのみ依賴すべきでなく、社會教育の上にも大に注意せなければなりません。此社會教育に於きまして第一番に改善すべきものは、親類又は朋友間の往復交際であります。

現在行はれて居ります所の交際法は如何でありましようか。男子は男子同志、女子は女子同志と云ふ風でありまして、男女打混じて、與に歡樂愉快を共にすると云ふとは甚だ稀れであります。今此風を一變しまして親類や朋友の訪問に於きましては、相互に男女同伴して訪問する事といたし、訪問を受けたる家に於きましては、翁さんも媼さんも男の兒も女の兒も家内一統が打揃ふて客間に出で、應接待遇をすることにしまして互に愉快歡樂を共にすることに致したいのであります、又何處の家にても、一年の内に三四回は親類や朋友を招いで饗應することがありましようと思ひますけれども、男女を混合すると云ふ事は滅多に無いことでありまして、偶ま一處に招くことがありましても、饗應の坐敷を異にしますか、又は中には坐敷を同じくしましても、男子は一方の隅に塊まり、女子は亦他の一隅に集まると云ふ風に爲るものが多いやうであります。私は此等の風俗も之を一洗しまして、成るべく男女を同日に招き、同席に打混じ飮食を共にし、談笑を共にし、又諸種の遊戲も共にしたいと思ひます。

序でに一言して置きますが、客を饗應する御馳走の仕方も亦大に之を變更しまして、成るべく之を手輕にし、成るべく之を度々にしたいと思ふのであります。我國從來の風俗に於きましては、女子が客に招かれますと、唯美服を着て御馳走を見物に往くと云ふ風でありまして、大に悅で主人と食事を共にするでもなく、亦大に樂しく談笑を共にするでも無く只おとなしく行儀よく御馳走を觀て、否御馳走を携へて家に歸ると云ふ風であります。亦主人の方に於きましても、食らはれもせぬ餘計の物を每々と並べたて、客が歸る時之を折に詰めて御土產と爲るのであります。

右の如くに致しませねば主客共に滿足しませんからして、客を招くと云ふことは非常に面倒の事になりまして、知らず識らず疎遠に流るゝやうになります。故に今饗應の方法を改めまして、極めて手輕のものと致しますれば、之を屢々することが出來まして、之を屢々しますれば親類なり朋友なりの間柄が極めて親密と爲りまして、隨て相互の歡樂愉快も增し、相互に輔け合ふ事が多くなりまして、人間の生涯を愉快に且安樂に送ることが出來るやうになると思ひます。右申しました所のものは、私が常々考へて居りますところの女子教育法改革案の大略であります。此改革案には、今日に於きましては世間未だ贊成を表する人は少くありましようし、恐らくは大概は反對であろうと思ひます。而して其反對の重なる點は、多分男女殊に少年の男女を近けますことは、互に風俗が紊ると云ふことであろうと思ひますが、私は是と全く反對の意見を持つて居るので、即ち嚴格なる父母又は教師の監督のもとに、男女ッチ〳〵相近きます時は、互に相敬し互に相愛するの美風を養成しますのは疑はざるところでありまして、風俗壞亂の如き憂は斷じてないと思ひます。

現に我國に於きましても、風儀の正しい家庭に於きまして、少年の男女を數多集めまして常々食事を共にし、遊戲を共に致しまして、決して風儀を紊りたることのないのを以ても證據立てることが出來ます。私は思ひますのに、男女間の風儀の紊れ易いと云ふことは、主として教育の足らんのに基きましようけれども、また一には男女を離隔して互に交際させぬのに基くのも、決して少くないと思ひます。諺に臭いものは見たいと云ふことがありますが、世の中に近かづかれんものほど近づきたいものはなく、見られぬものほど見たいものはありません。今日墮落書生が奇妙奇態の風をして女生徒の後をつけまするのは、其精神の墮落したのには異りないが、近かれぬものに近きたい念慮から出たも決して少くないと思ひます。

私はもし資本の出所がありましたら、一の大きい學校を建まして試に小學と中學との生徒を混同して教育して見たいと思ひます。まだ經驗のない事でありますから確言することは出來ませんが、私が自ら監督管理の任に當りましたなら、立派なる善男善女を養成することは必ず出來ることゝ思ひます。一昨年以來女子の學校を建てまして、常に女子の性質と學課の適否とを研究して居ることでありますが、何分にも資本なしでことを始めました故、萬事意の如くなりませんで、その段は誠に殘念でありますが、また大に得ましたところもありまして、今日では少年の男女に出來得るだけ、及ぶべきだけ同一の教育を授け、又出來得るだけ及ぶべきだけ、近づけたいと思ふて居ります。

また今日我國の風俗習慣に於きまして、尤も嘆息すべきことは婚姻法であります。從來の婚姻法は、所謂神聖無垢の愛情に基いたものは至つて稀でありまして、大抵は父母たるものが是を取極め、其撰擇法と申ますれは大概は家柄とか、血統とか、富貴とか又は麗顏美貌によるのでありまして、其人物の如何に至りましては實に圖を引くのと同じ樣であります。是は誠に嘆はしいことでありますけれど、從來の教育法や交際法の行はれて居ります間は、是等の事情に基いて婚姻を定むるの外、他によい方法はないのであります。右やうの次第でありますから、婚姻の後二三年を經ますと、互に嫌ひ互に相厭ふやうな念を生じ易くありまして、終には一家内の和樂を缺き、夫は外を以て家となし、妻は孤燈の下に常に怨恨に沈みつゝあると云ふ有樣は、決して珍らしいとではありませぬ。また子女を儲けましても、其父と母とが同心協力してこれを養育し、教育し、共々に神聖なる家族團欒の快樂を生じ出すことが出來ませぬ。甚しきに至りますと、夫は妾を蓄へ、同夫異母の子女を產み出しまして、

折角の家庭もあはれ豚小屋さ變ずるのこさもないではありません。これは必竟神聖なる婚姻法の行はれて居らぬのによるさ思ひます。

これ等の惡風俗は、獨り日本ばかりではありませぬ。いさゝか歷史上のことを御話しして見ましうが、東洋諸國に於きましては、古來女子を敎育する學校を設けたものはありません。支那に於きましては、女子が齡七歲に至りますれば、男女席を同くするこさを許しませず、十歲に至りますれば戶外に出るこさを禁じまして、謙遜禮讓溫和等消極的の道德のみ敎へまして、其智德を大に開發し、男子の事業を補佐したり、また進んでは病院の建設、貧民の救助など、社會全般を益する積極的の道義を啓發したこさはありません。昔スパルタの國に於きましては、女子敎育法が大に進んで居りましたが、此國に於きましては、家族の品位さ云ふこさを大に重んじまして、妻たり母たるものを以て、家庭の本幹さ致して居りましたが、從つて夫たるものは妻を貴びまして、妻の夫を制する力が甚だ大なるものでありました。かく婦人が社會の上に保てる位置が右樣に貴くありましたからして、自然是をして男子さ同等の敎育を受させればならん樣になました。スパルタ人は母たるものが身體が健康であつて容貌が美麗でありまして、猶ほ其上に精神が高上であります時には、必ず高上なる人物を生じ出すものさ考へましたからして、女子にも男子さ同樣にスパルタ特有の敎育を授けまして、公私の德義心と愛國心さを男女共に等しく發達させたのであります。同國に於きしては、有力で且つ經驗に富んで居ります婦人は社を結んで女子の敎育を圖りまして、唱歌や、吟詩や、踏舞を以て女子を練習するの道具さ致して居りました。また女子の爲メニ、殊更に設置した體操場がありまして、體優溫雅なる躰操、踏舞の演習をなさしめました。祭日などに於きましては、衆人の前に於きまして、唱歌つ踏舞を致しまして、此演戲中には男子も加はりましたし、また男子が此の演戲を爲すこさがありますれば、婦人も亦是に加はつたさ云ふこさであります。そこからして男子と女子との間に自然に競走が起りまして、敎育上に裨益したこさが少くありません。此敎育法の結果さしまして、スパルタの女子は身體が强壯で、態度が美麗でありして、豪邁の氣象を顯しまして、常に外國人の賞讃を博するこさゝなつたのであります。

昔の歷史談はしばらく置きまして、歐米文明國に於ける近時の敎育法を見ますのに、男子と女子と多少其趣はちがつて居りますけれども、我日本國に於ける樣に甚しく相違かつて居るものはありません。特に米國の如きに於きましては、小學校は申すもでもなく、中學大學に至るまで男女殆ど同一の敎育を施して居る樣であります。其一般の交際法の如きも、我日本國さは雲泥の差異でありまして、男女互に相交通して談笑を共にし、遊戲を共にし、食事を共にし、親密和合して無上に快樂なる月日を送つて居るやうに見へます。そして男女間の風俗の上に、いまはしき弊害があるかさ尋づれて見ますれば、敢て絕無とは云へますまいが、是を我日本國に比ぶれば決して同日に論ずるこさは出來ませずして、遙に上等に位して居るやうに思ひます。

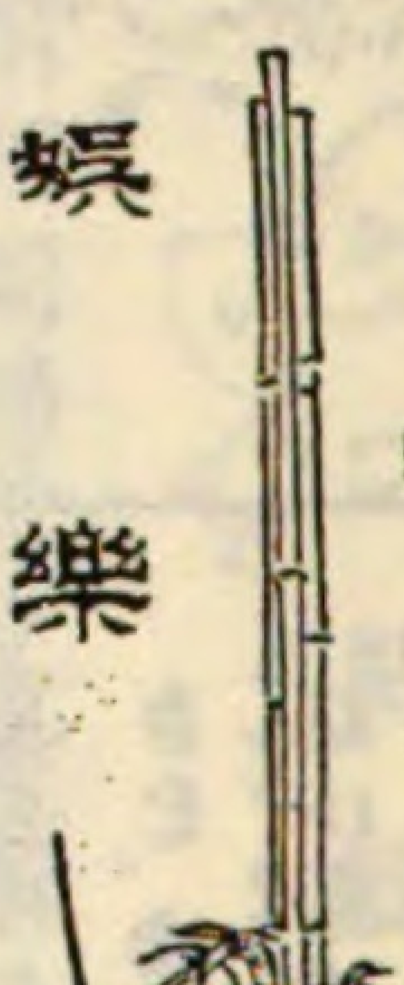
或は歐米の女子は活潑であつて、敢爲の氣象に富んでは居りますが、日本の女子のやうに溫良柔順で且つ優美なるものはありませんから、日本の女子には決して日本固有の溫順優美の德を失はせてはなりませぬ。だから決して歐米を學んで其風俗に浸染させてはならぬさ云ふ者がありますが、然しながら終日室內に蟄居して容色を作るばかりを事さし、ナヨ〱ベタ〱さして、男子の機嫌を取るのを以て優美さなし、社會のとなどは一切女子の關するさころにあらずさして、男子の命に唯だ是盲從するのみを從順さ申しますれば夫ぎりでありますが、女子たるものゝ本

務は、決してその様なものではないと思ひます。苟にも女子の本分を盡さうと思ひますれば、活潑でなくてはいけません。また敢爲でなくてはなりません。活潑敢爲なればと申して、決して温順優美を失ふものではないと思ひます。我國從來の女子教育法は、單に温和從順と云ふことを旨としまして、たゞ抑壓する一方にかたむいて居ますから、活潑敢爲なごと云ふことは夢にも見ることは出來ません。温和は優柔となり、從順は卑屈となり、妻となりても自ら一家のことを主宰することも出來ませず、母となつても其子女を教育することも出來ませず、終身單に夫の指圖に從つて日用の事を辨ずると、衣服飲食の世話を燒くばかりであります、一家内のことでさへ此通りでありますから、公共慈善などの事業のことに至りましては、決して思ひもよらぬことであります。

人の妻として一家のことを主宰し、母として子女の教育を擔任し、夫をして毫も内顧の憂を抱かしめず、眞個の一家團欒の樂を作り出し、また親族朋友間の交際を圓滿にしまして、愉快なる生活を遂げさせ、また社會公共のことに注目し、慈善の業に盡力して世の文明を進むる上に、裨補するところあらしめやうとすれば、今日のところ主として女子に活潑敢爲の氣風を養成することを急務とせなければならぬと思ひます、活潑敢爲の氣風は從來の教育法に於きましては、到底養成し得べきところでありませんから、私は學校教育と社會教育との上に大なる改革を施し得べきたけ男女をして互に相接近させ、是をして剛柔相制せしめ、長短相補はしむることが尤も肝要のことゝ信ずることであります。右のやうにしまして品格高く活潑敢爲の氣性に富める女子が續々輩出するやうに至りますれば、自ら家庭組織を改革することが出來まして、初めて社會一般の道德を高め其の品位を高尚の地に進め得ることの出來るのを信じます。

大方の識者、私の見るところに誤あれば示教を吝まざらんことを願います。（教育學術界所載）

娯樂

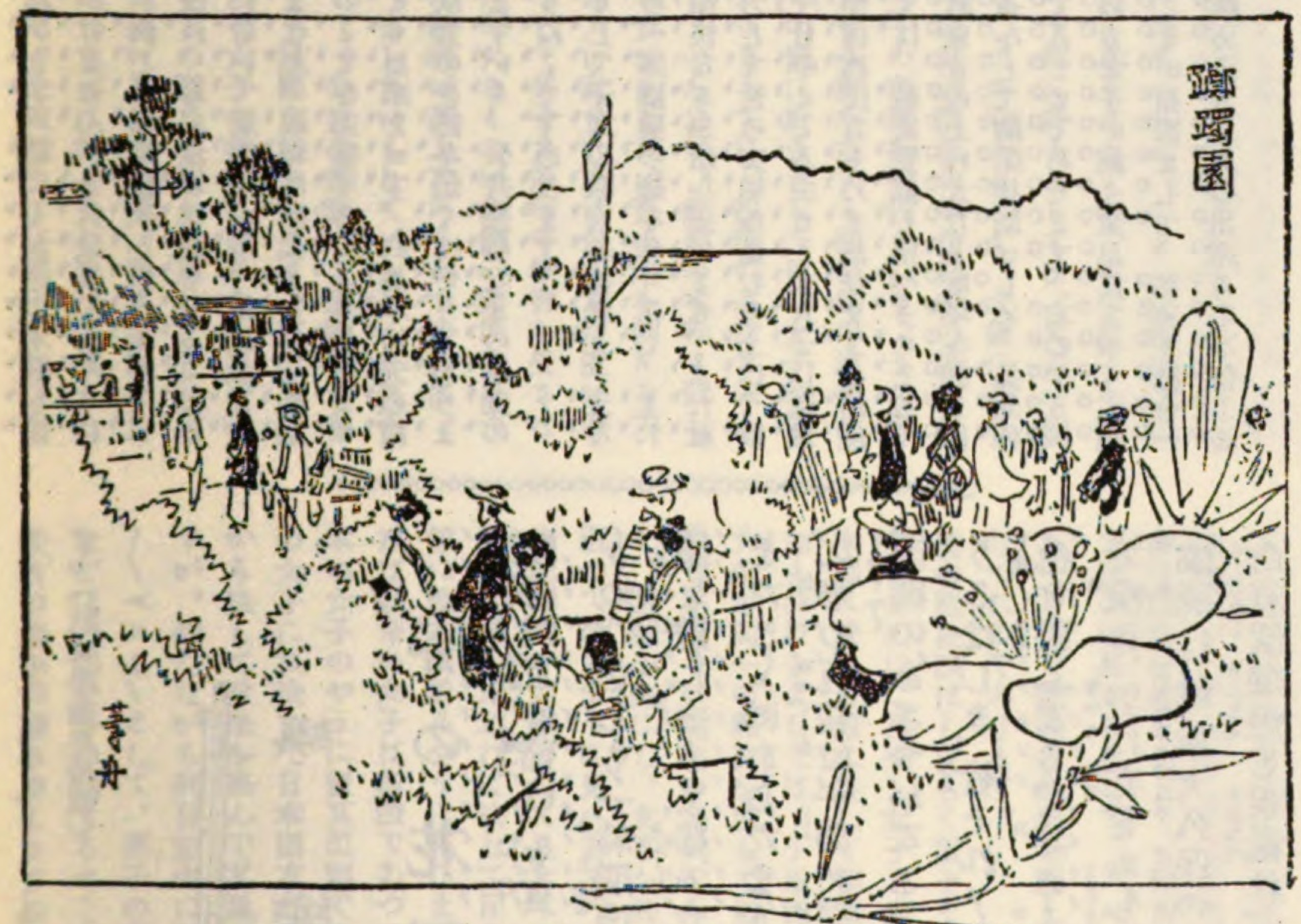


春の花園

陰暦四月の節は、立夏の日（上旬）より夏の季節とはなりぬ。さしも一時爛熳のさかりを競ひし櫻花もはや梢頭を辭し去りて紛々たる香雪地に布けば、天地の粧いまたこゝにあらたまりて、新緑の蔭こまやかなり、此間に春の百花は一時に研をきそひ、艶をたゝかはし、牡丹芍藥のあざやかなる、藤のしなくたる、山吹つゝじのうるはしき、皆それ〳〵のおもむきをそなへて春の景色を粧ふなる。見る人々に暇なきが多く花は客を待たで咲き、客は花をおしみつゝゆくめり。

躑躅は城南大久保の里に著明なり、南北二園ありて紅白黄紫爛熳と咲亂れ、卿雲燦たりともいふべく、只いろ

〳〵の錦を敷つらねたるがごとし、世に珍らしき老樹も多くありて中には二百餘年を經たるものもあり、その種類もまた三百に餘れりといふ、汽車より行かん便りもあり、歩行よりゆくも田舍道の閑靜なるありて、一日の保養には十分なるべし、山杜鵑の名のる處咲きいづれば、支那には、この花を杜鵑花ともいへり、羊躑躅といふは花に毒ありて、羊これを食へば躑躅して死するを以ての名なるよし三才圖會に記せり、大久保の外に日暮里花見寺、音羽護國寺、清水谷、染井等なり。


躑躅園

野あそび

よひの程より降りしきりし雨の、名殘なく晴れわたりたる、朝の空い景色、常よりもいといたう霞こめて花の色鳥の聲、そこはかとなく長閑にめづらしう見ゆ、まして片岡のわたり萠え出でたる小草、うら若き葉ごとに白露の玉をむすびよそひて一しほ綠の色を深めたれば、おのづから人の心もうかれいでゝ、いぶせき庵の中にはなか〳〵籠り居難きを、ゆくりなく隔なき友の訪ひ來りて、近きわたりまで、いざ〳〵とそゝのかされて心あやしも嬉しく打つれだちて

出て行けば、廣々たる野邊に麥生の青みたる、菜花の黄金色なる、飛び交ふ蝶の二つ三つ、舞ひたはぶるゝなどいづれか眺めのうちならざる、里はづれには憂ごと知らぬ童等の紙鳶飛ばしつゝあくこと知らず遊びたわふるゝ様いと樂しげなり、名も知らぬ木草の花のおのがいろ〳〵こきまぜて、春の錦を織なしたる、すみれの床をあくがれし、雲雀の雲井がくれに聲のみ聞ゆる、妻こふ雉子の彼方こなたになきしきりたる名も知らぬ百鳥のおのがさま〳〵にうたひ囀づりあふなど、いひ知らず哀れなるに、ましてもの珍らしき少女子の袖ふりはへて小籠さゝげ茅花つく〳〵しなど摘みはやしつゝ春の日もなほ短かしとおもへる様、いはん方なく、すべて老ひたる若きによらず樂しきものは春の遊びにぞある



才媛詞藻

第四回懸賞文披露

和歌

佐々木信綱先生選評

（天）月前時鳥　下總國印旛郡四街道澤本方　相磯ふみ

泣きて寢ぬ乳兒を抱きて門にたてはかたふく月に時鳥啼く

（地）同　名古屋市橘町一、中平方　堀場はま

時鳥なく音ほのかにきこゆなりふるき都の有明の月

（人）同　東京市芝公園十四號九、　大柳錦子

ほのかにも雲井に名のる郭公つきの桂にやとやかるらむ

（地）展覽會　鳥取市立川町四丁目　尾崎なみ子

をさな子のまはらぬ口にゑみつゝも展覽會の物がたりする

（入）同　東京小石川江戸川町一　古谷東世子

人の手に神のやとりてかくはかり
くしく妙なるわさやみすらむ

評　會の意はたしかならす

（入）同　神田鎌倉町　世喜也君子

人皆の心の花をあつめつゝ
治まる御代は埋木もなし

◎月前時鳥　武藏　萩原かや子
かきならす琴の手やめて雲間もる月見上れば郭公なく

◎仝　岩代　遠藤雪子
ほとゝきすおもひもかけぬ一聲に仰けはたかしかたはれの月

◎仝　尾張　内田とく子
眞夜中にはせ行く汽車の音やみて傾く月にほとゝきす鳴く

◎仝　山梨　渡邊とみ子
たびまくらねられぬ夜半の月かけにうらなつかしくほとゝきすなく

◎仝　磐城　内山ふさ子
城山の名殘の松に月すみて二の丸あたり時鳥なく

◎仝　名古屋　石川はつ代
さつくにのわが夫忍ぶ夜もすからかたはれ月にほとゝきすなく

◎仝　群馬　生方賢子
月に語る時鳥もし情あらは母の墓邊に音つれはせよ

◎仝　牛込　櫻井伊豆子
足引の山ほとゝきす一聲をなのれは落つる有明の月

◎仝　神戸　木原のふ子
園の戸の月もる夜半にゆめさめてふるさと還しほとゝきすなく

◎仝　信州　加納富士子
有明の光うするゝ月影をなゝめによぎて鳴くほとゝきす

◎仝　信州　一條さだ子
おぼろ／＼並木の松もほの見えてさやけき月に啼く子規

◎仝　麴町　岩井きよ子
一聲を月にのこして郭公たかまつ里へいそきゆくらん

◎仝　山口　草賀はな子
ほとゝきすなく音なかれてみなかみの伏屋にのこるありあけの月

◎仝　大阪　田中俊子
ほこの端に記して見はやこのなかめ月清くすみてほとゝきすなく

◎仝　芝區　吉水孝子
ほとゝきす鳴きにし空の雲はれて名殘さひしき月のかけかな

◎仝　芝區　吉水眞子
時しもあれ月はかくるゝむら雲の絶えまになのるほとゝきす哉

◎仝　大阪　井村春子
ほとゝきすかゝるさやけの有明の月をみすてゝいつち行らん

◎仝　芝區　金山雪枝
月白きうぶすなの森に郭公血に泣く聲も肌さむき哉

◎仝　伊豫　土谷咲子
一聲を雲井になのるほとゝきす月に鳴くれもすみ渡るかな

◎仝　山口　山名よし
みやしろの杉の小立ちに三日月の落ちんとすれは郭公なく

◎仝　秋田　小林おかつ

月踏みて亡き母君の墓問へは青葉がくれにほとゝきす鳴く

⊙仝　茨城　鵜飼たけ子

照る月はこそ見しまゝにかはられとみゝあたらしき郭公かな

⊙仝　大阪　長野悦子

なきすてゝ雲に入りにし郭公宿は何處さ月にさはゝや

⊙仝　愛知　淺井文子

夜をこめて驛路ゆけは鉾杉の葉越の月に時鳥なく

⊙仝　伊勢　市川古登子

雨はれてあふち落ちる此夕さしいつる月になく郭公

⊙仝　近江　三井須磨子

夜もすがら病むたらちれをみとりすれは月かたむきて時鳥なく

⊙仝　栃木　岡部まつ子

夕月夜かげもをくらき山のはをなのりていつる時鳥かな

⊙仝　東京　矢内富子

ほとゝきす月になく音の悲しきはなきわが友のあれはなりけり

⊙展覽會　佐賀　田中千枝子

かくてこそたからの世にもあらはるれいまそ何にかくしたりけむ

⊙仝　長洲　梶間ひさ子

おしなべて其水上のたかゝらんなかれすゞしき筆の道かな

⊙仝　山梨　神奈なみ子

たくみなる心のあやをさり〳〵に織り出したるけふの錦よ

⊙仝　磐城　内山ふさ子

古の熊襲が射けん矢じりをも今日の集ひに見るぞ樂しき

⊙仝　大阪　花園蓮子

よしあしのはちめはあれどこと〳〵にこゝろこもらぬもののなかりけり

⊙仝　赤阪　中はる子

たくみらがくしき筆あさ集ふこゝに龍雲をよひ花みたれさく

⊙仝　神戸　青木京子

畫工が生ふしたてたる筆草の花そさま〳〵咲きみちにける

⊙仝　東京　内藤慶子

はれやかにかされるしなもまこゝろをこめしものにはまさらざりけり

⊙仝　遠州　磯部仲子

月をへて進む園生の百千草いつれのいろを人のめつらん

⊙仝　信州　紀波流子

こゝろなき人もまじりてよしあしの光なさてめするもの丶花園

⊙仝　栃木　齋藤けん子

埋木のうもれもやらす賤が屋に織りなす錦世に出でにけり

⊙仝　千葉　須藤加德子

山のさち海のさち男か取えたるたまも寶もかゝれなき世や

⊙仝　羽後　佐藤みどり

綸島潟色さる波につゝまれて千鳥の跡の多くもある哉

⊙仝　群馬　生方賢子

おのがじし學ひの庭に咲く花を見る親ごゝろ樂しかるらん

⊙仝　肥前　皆元芳子

おほし立てし親のこゝろやいかならんほまれえし子の面影をみて

竹柏漫言

佐々木信綱

題がらによりて歌は詠みよきさ、清少納言がいひしは、實にさる事なり。すぐれたる手腕もたる人は、いかなる題をも新らしく詠みこなしうべけ

れど、大方は題の撰びかたあしくては、よき歌の出でくべきものならず。こたびの題、月前時鳥と云へる、月と時鳥の配合は、詩にも歌にもかきふりいひふりて、昔より樣々に詠み來りしものなれば、此題にして新らしき歌を得んとするは、いとかたれわざなり。又展覽會といへる題も、極めて詩趣に乏しき題なれば、こたびの募集の歌に、宜しきみとむるものゝ少なかりしは、強ち諸孃をのみ咎むべきにはあらざるべし。

この頃の歌に、種々の弊あり。中には只管古語を連れ、古躰をのみ眞似るものあり。古語古躰必ずしも惡しといふにはあらざれど、新らしき詞新らしき調もある明治の今日、殊更に古躰にのみ拘泥して、却つて拮屈なる姿に陷るは賞むべき事にはあらず。又詩趣の範圍を脫して、一種厭味多き戀愛をうたへるものもあり。元來詩歌は心の聲心の花なり。又人心を高尚に優美に赴かしむるものなれば、斯かる躰の如きは、殊に女子の歌としては厭ふべき限なるを、諸孃にさるあとの見えざるは、いとも喜ばしき限なりけり。

何の藝術にても、其修養にあまたの年月を要するはいふまでもなき事なるが、歌は他の學科の如く、二年もしくは三年の課程を終ふれば、それにてよしといふものにはあらず。生涯研究すべきものなれは、一時の流行を追はず、眞面目に熱心に研究せられん事を望む。

一葉の端書に、一首もしくは二首を限り明瞭に認められん事は、かれて記しおきたれど、猶細字に十數首を認めおこさるゝ人あり。是等は多數の歌を送るに當り、頗る困難なれば、以來は必數を限り、文字のあと定かに記されむ事を。

新體詩

牧童

（甲賞）

伊勢しうせい

草のしされにおりゐつゝ
若き羊にかこまれて
牧場のわらは春の野に
草笛たかく吹きすさぶ

若き羊はたのしげに
にほふ菫をふみしだき
ふく笛の音にさそはれて
踊りめくれり野あけで

いゝさ小川のせゝらぎも
そがひの峯の松風も
ゆかしくこゝに通ひきて
自然のしらべあはせけり

心もそらにかすみつゝ
童はいつかまどろみぬ
清けきまみの匂ひなば

神も惜しさや思ふらむ
牧場の童ゆめやなに
なよやかにふく春風の
そよさ面をはらふさき
罪なきゑみぞ浮ぶなる

評、平和の趣ことばにもけしきにもよくあらはれて、こゝには人の世の罪さいふもの絶えて知らぬさまなり（蝶二）

（乙賞）

明星

名古屋市橋詰町一番戸堀場方　堀場はま

雁かれ遠きおばしまに　簾かゝげて眺むるは
空行雲に人の世の　はかなき運命（さため）泣くさてか
眺めは廣き伊勢の海に　むら立雲を望みつゝ
きのふ此世にみし人の　あゝ行雲さかこつらん
伽羅の香高きふり袖に　おほへる顔のあさみれば
やさしや君が紅の　頰は涙にうろほへり
夕暮空の雲を見て　歎くをやめよ少女子よ
其定めなき雲にこそ　優しき星は宿るなれ

評、さてもやさしき志らべかな、はかなきさだめのその中にも一點の光りあるを見よさいひけむ君が心こそ志のばるれ（蝶二）

（丙賞）

友を懐ふ（秋の夕）

東京　齋藤保子

君がこゝろの暖かき、
情の袖にいだかれて、
春の蝴蝶の夢のごさ、
樂しき日をば送りしが。」
君さ別れてわが袖の、
やがて露けくなりにけり、
ひさの心の冷たさに、
君の情のしのばれて。」
共に遊びし樹の下は、
共に歌ひし川のべは、
秋の姿をうつせごも、
たゝずむ影は我一人。」
雲井にたかき月影よ、
松が枝さそふ夕風よ、
我爲め寫せ友のかげ、
わが爲め語れ友の樣。」

評、友愛の情よくあらはれて、ゆかしさもゆかし（蝶二）

(秀逸)

辞錦琴

東京　亞鈴子

雄鷲の羽風あそびつゝ
滿洲の原野分して
黑龍の水はらからが
血潮にたきろその末は
國をひたさむ束のまに
醒めよ四億の國民よ
君西安におらたまひ
あだ境上にかけりさぶ

五千餘年の歷史をば
葬りすてゝ亡國の
民さなるべき日はちかし
立てや四億の國民よ
よしや乙女のかよはくも
よしやいくさの辛くさも
男のよろひわれはきて
陣頭旗をふりかざし
寇なす鷲を狩りさらむ
　續け四億の國民よ

評、巾幗の身を以て、隣國のために寇をほろぼさんとの義憤感すべし
これまさに當年のジヤンヌが再來か(蝶二)

(秀逸)

泣涕

小石川　荆月女史

花爛熳の春の月、
月朦朧の花の影、
雲よ掩へよこの月を、
風よ拂へよこの花を、

花よいましがをもかげは、
不孝に泣きしその年に、
黑田川邊にあひみてし、
去年のいましにかはられば、

月よいましがそのかげは、
桂の枝を手折りえで、
羞を忍びて詠めてし、
去年のいましにかはられば、

花を眺めて吾は泣き、
月を詠めて吾は涕く、
やよさは姫よ去ねよかし、
やがて桂もしげらんに、

評、心も言葉もふるめかしきやうなり、今少し新しき趣きをうたひたまへ(蝶二)

（秀逸）

すみれ

和歌山　藤田いさを

あした春の野さまよひて、
我れは問ひけり『やよすみれ、
いとなつかしき我が妹を、
かくしやしつる汝が床に。』

涙の露はいとしげく、
しほれし面わふり上げて、
答ふさ見れば花すみれ、
朝風重く首ふりぬ。

教へがほなる蝶一つ、
美妙のこゑに『やよ人よ、
かはる現世は心なき、
花もさきては散る習ひ、

紅顔ひさり幾年ぞ、
やすけく逝きし汝が妹は、
幸あるものさ知れよかし。』

評、この世に活ける人幸ひなるか、はた逝ける人幸ひなるか、まことに人生は疑問なり（蝶二）

小　説

（甲賞）

迷へる親

麹町區飯田町三丁目
二三番地前田氏方　河村君子

争はれぬは親子の情。如何で生れ落ちしより人手もて養育せらるゝとも親を慕はぬ子やはある。如何で見捨てし子とはいへ子を思はぬ親やはある。血を別けし縁の糸に結ばれて切れども切れず、斷てども斷てず。不滅なるを親子の愛。一時の熱情に促がさるゝ男女の愛の如何で誠の戀とや言はるべき。實にや親子の愛こそ戀の誠としも言ふべけれ。親思ふ思ひにまさる親心。親思ふ心、子を慕ふ心、いづれか弱き、いづれか強き。言はずして知らん。思ひの淵に沈み易きは老の常、子を生まぬ人ぞ親にして親に非ず。人にして人に非ず。家庭の圓滿を知らず。家庭の趣味を知らず。假の世に假の身を處して假に人生を送らんのみ。露の命とは知りつゝ未來を樂しみ永劫を喜ぶも、子故の闇に迷ふ親心の愚かなる希望なるよ。

大路小路に人跡絶えて夜や痛く更けぬらし。毎夜十二時頃に聞ゆる、鮓賣る老爺のお稻荷さんの聲も早や二三回は我が門をすぎぬ。仄に見ゆる燈火の影は未た臥床に就かぬ人もあるらん。八疊の間に年格好四十の坂を一つ二つ過ぎたらん女の石油の盡くるをも知らず、薄暗きランプの光にて針仕事をなしつゝ何事か余念なげに考へ居る風情なりけり。

あゝ芳雄は今頃如何にしつらんか。下宿屋の二階にて暖かき故郷の夢を見つらん。いや先つ日の書面によれば十日よりは試驗なりとありし

かば下稽古などなし居るらん。されど我が故郷より遊學に行きしものゝ多くは滿足卒業して歸郷するものは少なし。皆中途にて身を持ちくずして女郎藝妓に學資を貢ぐよしなるが。もしや恐しき友達に誘はれてかゝる仲間入にはあらざるか。よもや芳雄に限りてはかゝる事はあるまじ。伯父樣伯母樣に二三年の間母親宜敷御世話下され、私は一生懸命勉强して吃さ耻しからぬものによつて歸へりますからさ誓つて行きし由なるか何時迄も其の心得のあればこそよけれ。病氣にてもあらざるか。病氣ならんには從弟の文造より音信やあるらん。心配するさて音信のなきにや。思へば彼の子ほど不幸なるものはあらじ。生れし折は岩田の叔父樣の放蕩して借金の淵となりし爲めに、親戚の叛あるが中に一番金持ちとの事にて、我が家まで財產に封印の就きて皆人手に渡り、昨日まで下女よ下男よと何不足なく暮しゝ身の俄かに一升の米にさへ難義するまでの零落の仕方。今まで旦那育ちでありし父は是れを苦に病みて三十五才を一期さして、芳雄の七才の時亡くなり給ひぬ。あさに殘されしは妾さ芳雄さ芳雄の弟の文雄のみ。夫の此の世にありし時さへ食物に不自由なしたるに、いかで女の手して二人の男の子を養育さすことを得ん。其の頃は未だ浮世の波にさらされしより日數へぬ事にしあれば、妾さて今の樣なる思慮分別もなし、人まかせのまゝなるるが、夫の死しゝより初七日をも經ぬうち里の母より用事なりさて手紙の來りしかば、如何なる用にか急ぎ里に歸へるに、家をば賣りて芳雄と文雄の養育金になし、妾に他へ嫁けとの御さとし、如何で乳呑兒を持ちたる妾の再び嫁に行かるべき。あゝ實の母上ありせば斯る歎きのあらましを、なさぬ繼母さはいへ、子を持ぬ人の譬さは言へ、腹だゝし、腹だゝし、如何にせましか、此の諭を聞かさらば妾は汀にたゞよふ捨小舟、繼母のまゝに從はんか。子を見捨つるに忍びず。繼母の諭にさからはんか、親子三人は明日より俄に泣んのみ。さればさて人情も知らぬ人の諭の如何でまもらるべき。倒いて而して後已まんのみ。思ひあまりし末、妾はたゞ再び嫁するさへ物憂きに、いかで〳〵乳呑兒を捨てゝさる事のなさるべき、斯る事是れよりはつゆ聞かせ給ふな、さ思はず悲しさにまかせて答へしに、繼母の御立腹、側にゐし乳呑兒も泣き出でんばかりなりけり。かゝる時こそ兼れて亡き母の呉々も生前に諭し給ひし教をこそまもれ。女なりとて何條我が子を育つる事のかなはでやは。見捨てば見捨てよ。力のあらん限り。志のつゞかん極み働きて後運命の神にまかせん。如何に零落ぜりさも夫のありし頃は、しげくはあらぬ親戚の往來もありしかど、亡くなりて後より、はたゞ絶え誰おさづれん人もなし。春は花賣に身をやつし、冬は辻占賣に姿をかへ、昔あけて計りし辻占の何の因果にや、今は人に占へさの始末、淡路島通ふ千鳥さ云ふさへ胸ぐるをしきに、如何で戀の辻占と呼びあるかるべき。日毎〳〵に慣れ行くにつれ耻しかりし昔の面影うせて、親も子も元來の職さ思へるもうかりしが、子供の成長するにつれて花賣の子よ、辻占賣の子よさ言はるゝ口惜しさに、針仕事に身を委ねて、後家育ちは三文安しの譏、父なし子の僻なしとの嘲を受けし言はれじさ、ならぬ中より學校に通はせしが、見捨つる神あれば救くる神ありの諺にもれで、妾が幼かりし頃近隣にすまへりし、ヘンリー孃の國に歸り給ふ時、我が兄君の十二歳なりしを强ひて彼の地に連れ行かんさの願ひに、母上は外國人などにさこばみしが、父上の知らぬ旅路も子供の爲めならんさてヘンリー孃さ共に外國に送りしが三年前郷里に歸りて善き地位を得給ふたるに、妾の杖さも柱さもなりしが、兄上は芳雄も人なみすぐれて物事何彼さかしければ都に出して物學びさせんさ云ひ呉るゝに、芳雄はあまりの嬉しさに、後先きの考

へもなく出でゆきしが、今頃は故郷のことのみ思ひつゞけて泣き居りはせましか、空飛ぶ鳥のそれならで羽根でもありせば行きて見ましを。あゝ子を生まぬ人程氣樂なるものはあらじ。かゝる心配は夢にも知らざらん。夫の亡くなりし時は芳雄も學校にでも通ふやうになりなんには如何に喜しからんと思ひつゞけたりしが、年たつまゝにまさる思ひのはかなさ、子を持つ親ほど愚なるものはあらじ。いでや一日にても月日の早く過ぎ去れかし。芳雄の業成りて歸へらん曉はまた樂しき事もありなん。

彼を思ひ此を考へて居たりし彼や、眠氣の催うせりけん、時の過ぎたるを知りけん、力なげに針仕事なし終へて寢仕度の用意やなせりし、ランプの火は見えずなりぬ。

＊　＊　＊　＊　＊

後は寂として道樂書生の不夜城の歸路なるらん、闇をつんざく歌かすかなり。

書生さん好きで尺八吹くのでないが、
　親には勘當うけ、學校落第す、

評　此篇の趣向は、一人の老ひたる母親が、夜更くる頃、燈火の下に針仕事をしながら、已往の事、未來の事、むら〳〵と胸に湧き來たり、夫の亡せし以來の辛酸を思ひ出だしては、人生の無情を嘆き、修學のため上京せしめたる子のことを想ふては、いろ〳〵の苦悶を爲すのみ、兎角子を有てる親ほど、心を安んずる時なきの風相を、心理的觀察を以て描寫せるもの也、修辭上より云へば、文詞稍々稚氣を脫せれど、小說の價値といふ側より見れば教訓の意義に適合する品よき小說といふべし(記者)

（乙賞）

女小說家

芝三田小山町二五　津田千代子

小說といふもの如何で妾もものして試むと偶と昨夜より筆執り初めて覺束なくも先斯く綴りては試たれど猶此後を如何にせむ斯くしては餘り自然に遠からむか此處は如何にも管々しきやうなりさりとて削るも惜し亦此一節は何となくあきたらぬ樣覺ゆ考へ直さでは成るまじ此處の對話は少しも趣味なくて面白からず後段の趣向は餘り古めかし何とか善き工夫は無きものにや

斯る事ども意中に辿りながら中庭に向へる六疊の間の丸窓に添ひたる机に凭りて頰杖つき鉛筆執りて頻りに想に耽る處女あり年齡は二十位とおぼしく面長の色稍黑けれど目鼻だち正しく美はしといふにあらねど何處にか品位あるが嬉し黑く濃き髮を夜會結びにして櫻鼠色のリボンを飾れり身には中柄の都銘仙に更紗模樣の下着を重ね襟は白茶地へ流れに落花と都鳥とを染めぬきたるを掛け晝夜帶の片側海老色繻子の方を見せ紬薄鼠色無地の羽織に藤色の紐附けたるを纏へり是は此家の長女松山花子とて去年第一高等女學校に業を了へたるが目今は自宅にありて好める文學を究めつゝあるなり「島渡姉樣此れ何うしたら善いでせうね」と問ひかけたるは傍へに美はしき友禪の切地を擴げ雛形尺度を執りて人形の衣裳を裁ち居る須磨子といへる妹なり年齡は十五六と見ゆるが丸顏の肉附き豐かなる處姉とは全く趣を異にすれど何處やらんに似たる所あるは爭はれぬものなり形ち善き唐人髷に西洋草花の簪を挿し姉と對の縮入に紫打紐の飾りつけたる更紗の被布をはふりたるがあどけなき風采見えて愛らし「ねえ姉樣」と呼べど答なきに少しぢれて「ちやあ尋くッてよ」といへば

なあに須磨ちやん」と漸く口を開きたるにフ……さ笑ひながら「あら
いやな姉樣だわ今時分返事なんかして……ホ……此牡丹の花の處を
れ裾の方に致たいんだけれども左樣すると寸法の都合が惡るくなるのよ
何うしたら善いでせうね」さ尺度を手まさぐりながら姉の方を見返へる
庭の松の下蔭に二三株かたまりて咲ける菫に眼を止めながらしろき齒に
鉛筆の先を嚙み居たる姉の花子は始めて此方に眼を移しつ「左樣ねそれ
は斯う致たら善いでせうどら鳥渡貸して御覽」さ切さ尺度さを受取り「え
ゝと斯うすれば善いわ一尺八寸の袖なの　それぢやあ斯う兩端から袖を
さてつ仕舞て更で斯うやつて身頃にすれば善いでせうねそら」と妹の手
に渡しつ「あゝほんさに樣ねえ」と頷づく樣を打まもりながら復頰杖つ
きて須磨ちやんさ呼ひかけ「あの淸水於きよさんね御生國は慥か信州だ
ッたわねそれからあの於きよさんの阿母さんが御死去なすつたのは秋だ
ッたやうね』『えゝ左樣よ松本で生れたんですッて阿母さんの御死去なす
ッたのは何でも十月の下旬時分よほんさに彼の方の事を考へると可愛そ
うに成ッて來るわあの姉樣は解ッた淸水さんの事を小說に書くんでせう
屹度左樣よ昨夜から淸水さんのいろんな事を妾に聞いちやあ書いて居ら
ッしやるのね何んな事を書いて居らつしやるの鳥渡拜見な」といひつゝ
近寄りて覗かんさす「あゝいけない後で見せてよ」と袖もて隱すを「あ
ら善いぢやありませんか見せたッて」と原稿を奪はむさす「まあ御待ちな
さいッてば出來てから見せるさいふのに』『今見せたッて善いぢやありま
せんか」さ須磨子は聞かず爭ひは果しなし

折柄入口の格子戶勢ひよく開きて「御無沙汰しました」さ聲かけ入り來れ
るは日頃親しく出入せる藤田政市さて年齡廿六七中肉の恰好善く鼠色縞
スコッチの洋服着て淺黑く活氣ある面貌に黑く艷やかなる八字髭を貯へ
余綠眼鏡をかけ見るから快活らしき男子なり嘗て早稻田の學校に文學を
修め目今は東洋新聞の記者なり天稟の文才を備へて論文に小說にはた散
文にも能く筆を染むる多才多能の壯佼なるが就中小說は最巧みにて著書
多き中に釉に先進作家を凌ぐもの少からず實に靑年作家中後來望みある
人なりさか藤田は茶の間に人なきを見て花子さ須磨子さが爭ひ居る居間
の襖を開きて鳥渡會釋し「いや何うも御賑やかですな今日は阿母さんは
御留守」姉妹は極まり惡るげに等しく顏を紅め容ちを正しながら袖もて
口を掩ひホ……さ笑ひを洩らしつ花子は原稿を手速く本箱の後に押入
れ「今日は父も母も親類に招ばれて行きまして留守ですの今二人でふさ
けて居たもんですからちつさも入らしつたのを知らないで失禮しまし
た』『餘りこちらの方が御賑やかですから多分御父樣も阿母樣も御留守だ
らうさ思つたですハ……」花子は須磨子さも見合せホ……さ再び笑
を洩らしながら蓐を持ち來りて床の間の前に据へぬ「さあどうぞ此方へ」
遠慮氣なき藤田は「ぢやあ失敬します」さ直に其上に座をしむれば花子は
「善くいらつしやいました」さ挨拶しつ「其後は鳥渡も御顏を御見せに成
らないもんですから何うかなすつか知らさ御噂さして居たんですよ御加
減でも御わるかつたんではありませんか』『いや左樣いふ譯では無いです
實は社の方の用務で閉ぢ籠つて居たもんですからそれが爲非常の御無沙
汰を致たですよ御一同御變はりも無いでせうな』『はあみんな壯健で居ま
す」藤田はポッケットより卷莨を取出し須磨子の運び來る莨盆の火を遷
しさ待ち受け一服吸ひて指に挾みたる儘其手をつきて鳥渡須磨子に會釋
を返し片寄せたる窓際の切をば眺め「須磨子さん何か奇麗な物が出來ま
すな先刻は姉さんと何して居たですか」さ須磨子の顏を見て打笑む無邪
氣なる須磨子は姉の方を鳥渡見やりてホゝさ打笑ひながら「あの－姉さ
んがねえ今度女學世界に投書・るつて小說を作つたんです』『何小說そ
れはえらいですな」藤田は莨の灰を彈きて又煙を吹きぬ「それを鳥渡見

せて頂戴といふのに意地惡るして見せないんですもの」「須磨ちやんそんな餘計な事いはないでも善くつてよ」と花子は妹をにらむ「そらあ不可んですな、ぢやあ僕がかはりに拜見しませう」「あらいけませんよ貴郎が御覽なすては」「何故僕が見ると不可んですか何か僕の事でも諷してありますか」と眞面目なる顏付す「あら左樣ぢやありませんよ」「では善いでせう須磨子さん鳥渡御見せなさい」と立ちて行く須磨子を顧る須磨子は少し首を傾けながら抵音に「善くつて姉さん」といひながら本箱の蔭より原稿を取りいだして渡す「いやあよ須磨ちやんはまあ困るわ」と立ちかゝる花子を「まあ善いですよ」と藤田は左手もて押隔て右手に原稿を高くさしあげながら無言にて讀み初めぬ「はゝあ飛鳥川といふんですな松華女史著ですか成程」花子も今は詮方なく紅めたる顏を双手もて掩ひつゝ笑ひ居るむーむー成程と藤田は讀みもて行きつ「あゝ此れからまだ此後があるんですないやもう着想といひ用語といひ中々巧いですよ思ふに此れは事實を材料としてあるらしいですな」と須磨子の運びたる茶碗を取りて呑み干しぬ須磨子は例のまた無邪氣に「左樣ですよ妾の朋友の事を書かいているんですよ惡るいわ姉さんは」「兎に角巧いですよ此一節なとは」と小指もてさし示しつ「一葉女史跣足といふ處ですな」「藤田さん御冷評なさい」「全くですよ敬服しました何うです此頃淋しくなつた閨秀文壇に打て出で一旗幟上げては」

半ヶ月程を經て書肆日昇堂より「小說著はれたり、題號は女小說家、著者は藤田流水なり、花子は購ひ來て取敢へず開き見るに、口繪は此頃有名の畫伯玉舟子の筆にして、束髮の一佳人書齋に籠りて、紙を延べ筆を執り頻りに想を凝らす樣を畫けり、花子の眉は見る〳〵打ひそむ樣なりしが、讀みて二三頁に至りし頃、忽ち讀みさしの書をはたと叩き「あらまあいやだ、何う致ませう、藤田さんは悉皆妾の事を書いてるわ、ほんとにいやに成つてしまうわ」然して女學世界に飛鳥川といへる小說遂に見えず、松華女史花子の失意想ふべし。（完）

評　此編は文章も思想も、共に修練の足らぬ憾みあれど、結構の斬新なるためか、人をして覺えず卒讀せしむるの價値は確かに具えて居る（記者）

普通文

（甲賞）

羊飼

德島　濱美耶子

われは何日も曉の星をふんで、この廣い〳〵小さい若草の一面に生えた牧場へ多くの小羊を追うて、これを守りつゝ平和に其日を送る羊飼である。

無邪氣な小羊は樂しく溫和しく遊んでゐるから、われは其間に手にせる詩集を、芝生に寢ころびながら朗讀する、上からは暖かい熔ろけたやうな太陽が、さも可愛ゆそうにわれをほい〳〵心地よく抱いてくれるに、詩集を置いて仰向になると、只もう譯もなく、うつとりと身體が、綿のやうに無心になつて―それでも眼は幽かに開けてゐる。

奇麗な青空に何やらの白鳥が、暢び〳〵と重く長閑に下へ沈んでは、羽擊きしながら上へ登つて舞ふてゐる、少し首を横にすると急に眩ゆく眸に映じたのは、あの高い銅像で―、われは衝と起きて詩集を疊んで懷ろにしながら歩み出した、此處からは一丁程離つてゐる紀念銅像のある方へ目がけて行くので……

後に木樹のこんもりと茂つた、廻りは黒ペンキ塗りの鐵垣を結び繞らした、中に紀念銅像は高く聳えて太陽の熀々と反射てゐる樣は高尙いものである、其前に立つてわれは眤と視上ると、何んとも謂へない奇しき心が躍つて、暫く視詰めるともうふは〳〵身體が登つて行くやうで、あの一番高い銅像の上へ立つたやうな氣持がする、そして堅く手をくんで其儘眼を閉ぢて了ふのである。

あちらの木樹にけたゝましい羽擊きがしたから、眤と眼を閉いてキットト其方を視てそろ〳〵歩み出した、

この邊りは紅白紫などの草花が笑ましう靜に咲き亂れて、優かしい薫りはそゞろに人を醉はしむるのである、奥の方にさゝやかな音が聞こえるわれは陶ろ〳〵花の間を歩みながら、銅像の後へ廻つて奥深くも木の茂つた方へ行くと、さすが此處は冷々と一種の凉氣が襲ふてくる。

前の音は次第に近くなつたと想ふと、其處には極めて淺るやかな淸い小川が一、上には樹が蔽い冠さつてゐるので、日影は見えぬのであるが、背い沿ふた苔に映えてちら〳〵激灔閃めきつゝ流れてゐるので、この不斷の音は寂しい靜かな裡に、止みなく秘密の私語を洩らしてゐる。

廻ふは小高い丘で暖かさうな綠りの草や紅い草花や斑になつて、毛氈を敷いたやう．眩ゆいばかりで．われは小さな橋を渡つて首を傾げて、自然の音を後にしながら其丘の方へ登つた、先づ牧場の方を眺めると、白い小羊が彼方這方群れて動いてゐる、其光景畵中のものである。

此時一しほ凄い羽擊がして、同時に怪ふな聲がするから、木樹の方に眼を注ぐと、前に空に舞うてゐた、白鳥が駭く程大きいのが悠るやらに木樹を離れて今銅像の上を越えて彼方へ渡つた。

こゝに暫し遊んでゐたが、日も大分傾いたからわれは元來し道へ退き返した、そして無邪氣な神の子と戯れつゝ木の切株へ腰を下しては、恍惚と麗しく移りゆく空を眺めてゐる。

遠い廻ふの茂つた森の上には、オレンヂ色の雲が一塊になつて漂ふてゐると、此那邊の紀念銅像の上には紫や瑠璃色のぼかされたのが一刷二刷段になつて長く泛んでゐる、恰ど曠い〳〵大空の白幔の上を、有ゆる麗はしい繪具で彩色どられたやう、もう自然の美妙さは心ゆくばかりである。

濃きオレンヂや紫や碧りの雲は次第に薄すれて、其れが失されて了ふと遙ふの方が只一面にぼうと淡紅かい、今迄眩ゆく照り輝いてゐた銅像は此時光りを修めた、彼方の森から黒ずんで、夜の垂幔は悠々とこの乾坤に息を與へるべく蔽ふて來た、

われはもう小羊に遮れて、これから家路に向ふので、細い畔道を鮮やかなチリン〳〵と鳴る鈴の音が、夢のやうな薄暗い寂しい夕暮を破りつゝ餘韻をうたせて歸つて行くのである、

遠方這方の農家の燈はちら〳〵と瞎き出した、

空には疎らに黃金の花が現はれて、半輪の月はうす白う登つてゐる、天界の惠みの光りは、下界のこの神の子に美はしう垂れて、長く續いてゐる其背は、遠く〳〵一筋に光つてゐる。

評　春のうらゝかなる日、一群の小羊を追ふて牧場に徃還する狀を描き、人をして遊牧生活の詩的風趣の津々たるを羨望せしむ、作者先きに『女憂』と題する小說を以て才藻を揮はれたるが、いま又た此の好箇の紀行文を寄せらる、作者は實に投書家の錚々たるものといふべし、されど、文中に誤字及び修辭上の瑕瑾少からざるを憾む、作者文辭に熱心ならば、乞ふ少しく注意せられよ（記者）

（乙賞）

あはれ散る花

和歌山市北田邊町三十九番地西村方　藤田いさを

夢より淡きうすがすみは、かつぎの如く大空を、うち掩ひ、もれ出づる月はおぼろに、柳の糸にかゝれり、夜風にゝほふ花の香をしるべに、庭の若草ふみしだき、まどかに眠れる蝴蝶のゆめ驚かしつゝ、今をさかりとさきそろひたる、一本の老木のさくらの花影にたゝずみぬ、あはれ此の花よ、なつかしき我妹は今いづこ、

春は昔の春ならねど、花も月も同じき今宵の如き夜なりき、十あまり三つの糸の上に、ましろき指を走らせて、妹がいなでしつま琴の、琴柱のほとり、袖のあたりに、散りしく花をさぶらはせつゝ、共に歌ひ、共に笑ひ、憂世の憂さを思ひ忘れしたのしさも、見はてぬ夢と消えうせて、今はたゞ、妹が調べし歌ごえは、月影のごとくおぼろに、我が耳そこ深くのこりて、徒らに涙の種となるぞうたてかりける。

春の歌謡しつゝ、妹と手をとりて、緑りなす野邊をさまよひ、柔らかにかすめる日光を、暖かに二人のそびらにうけつ、蝶を逐ひ、すみれをつみ、終日たのしく遊びて歸りし夕より、妹は重き病の床につきぬ、日ふるまゝに病ひいよ／＼つのり、玉のかいなは日毎にほそり、ゆたかなりし頬の色は日毎にあせゆくのみなり、名あるくすしのみたても、其の甲斐なく、誠をこめし我心づかひも、あだにして、東の窓に風さはぐ夕ぐれ、梢はなれし二ひら三ひらの櫻花、妹の寢れたる枕を音づれしとき、母の御手に抱かれて、ほゝえみつ靜かに逝きぬ、彼れの摘みたりしすみれは、紫の色あせて、莖もいたく萎れたれど、妹の形見として、永く我が手にのこりぬ。

あはれ、花の一たび散りし其の時は、浮世をよそに、歌ひぬ、笑ひぬ、二たび散りし其の時は、我妹も共に散りて此の世を去りぬ、憂ひの海のそこ深く我れは沈みぬ、三たび散らん其のときは、そもや、我身は如何ならん、見よ。

世にある人はおのがじゝ、たのしみ遊ぶ今宵の花、今宵の月なるに、それにはひきかへ、我れは昔をしのび今を佗び、あかぬなげきに沈める身の、あはや何時、底の藻屑ときへなんもしれざる身を。

あはれ、花よいましをかへらぬ妹のかたみとし、我がとこしへの友とせん、昔の夢を語れかし。あはれ、月よいましは流れ／＼て落ちゆく西の都に、なつかしき我妹あらば、我れに代りてなぐさめよ。

あなせきあへぬ涙たゝへて、よしなしごとゞも、思ひ出づれば、いつしか空もくもりはて、春雨さつと降り出でぬ。軒に雀のこゑかしましく、朝日の影もうるはしゝ、ゆうべのなごり如何ならんとて、降りたちて庭のさくらを打見れば、あなあはれ此の花よ、友とたのみし甲斐もなう、ちりうせて、雨を帶びたる花びらは、雪かとばかりうづ高し。あはれ、散る花、あはれ

評　春將に盡きんとして、落花繚亂たるの時、誰か之れを傷むの情を起さゞるべき、まして心に悲みのある人は、一入その感想も深かるべき也、作者は此のあはれなる景を借りて、亡き妹を追想するの情を述ぶ、眞率の情、流麗の筆と相俟つて、眞に見るべきの文といふべし（記者）

（丙賞）

時事

神田錦町三丁目三輪田內　友近里子

世の中に移り變り行くことは、昔も今も外ッ國も我國も同じき事なり、昔し兼好法師も、此世の中をばよどみにうかぶ水泡に例へられたり、古へより有しものゝ今は絕へて跡だになく、あるは、昔世に無かりしものも今の世にいとさはなり、此頃世の有樣の日々に移り變るにしたがひて、もろ〳〵の進み行くはいとありがたき事なり、學びの道も亦時によりての習慣ありて、今は西洋の學び業いと盛にして、此事にのみ心をつくす人あり、かくて遂に其方にのみかたむかば、尊くも千五百年の昔しよりつたはりし、我國ふりの言の葉を辨へしる人さへ無くなりて、己が國のさふさきをさへ、知らぬ人もやいで來なん、心うき事にこそ、さるに今世の姬たちの內には、彼の國風をのみしたひて、我國の優美なるをしらず、いやしみて衣服調度など凡て西洋の風にならふ人の多きは、そもいかなる心にや、いでやこゝに心づきたる人にのぞむは、まげて外國風にならひ玉ふなといふにあらず、彼國我國のよきところをとりて、いづれき其末にのみ走らぬやうあらまほしき事なり。

評　思想新らしきにあらず、文章も妙なるにあらず、されど、我が國風に私淑するのあまり、妄りに外國風を模するの不可を論ず、僅少の文字中に無量の慨氣を含むは多とすべし（記者）

國文

（甲賞）

わたましすとて

神戶市中山手通五丁目　青木京子

さるべきよしのありて年頃住みなれたるこの家をすてゝ二日三日のほどにわたましすとてこれかれ其いそぎするにしづ心なし何となき家にてだに明暮たちならしたるをすみすてむには名殘をしまるゝをましてふるめかしけれど心ある人のたてけむとおぼしくそこゝゝなつかしきさまにつくりなされたればうつろべき所はこれよりもひろらかにすが〳〵しと人はいへどなほあたらしいでやてりもせず曇りもはてぬ春の夜は咲きこぼれたる花に匂ひあひたる月をめで土さへさくる夏の日はやり水をふきこす風の凉しさに暑を忘れすみ渡る秋の夜はふくるも知らずはしゐしてさやけき月をもてはやしつらゝゐる冬の朝は埋火かきおこしつゝふりつもりたる雪を見はやして身のほどにつけをり〳〵のをかしかりしこともありしことの忍ばるゝくさ〳〵なれるものも多かるまゝに見捨てゝいなむことのいとゞ心くるしければたれかれにたゞ暫し思ひとゞまりて今年の花の盛を見てよとあながちにかごとがましく云へど今はたいかにかすべきやう〳〵もえそめしはひりの柳のその糸よかにかくといそぎする人の心をひきとゞめてよしやちるまでならずともさきにほひたるを見てだに別れましをあはれ

評　槇の柱よわれを忘るなといひけむ昔とはやうかはりたれと住なれし家を移りかはる折の心たれもかくあるべしかきざまはいまたしきふしもあれども詩趣に富めり

（乙賞）

硯銘

麴町區飯田町三丁目二十三番地前田氏方　河村君子

海あり。陸あり。おのづから小世界をなす。その海は深からねども、底にはたふとき玉もあるべく、その陸は廣からねども、千々の言の葉も出づべきものは硯なり。この石や、山の奥よりもさり出で、川の底よりも

うがち出づ。筆の性の直きも何かはせん。墨の心の色あるも何かはせん。硯の命の長きに、たとへつべくもあらず。櫻の朝、筆さしひたしては、花の香にも匂ひ、月の夕、墨すりては、たなびける村雲をもたゞよはし、げに月花のあした夕はさらなり。うれしき折、悲しき折につけて、心ひさつにあまる思ひを紙に殘すは、この石のいさをにこそありけめ。あはれ硯よ。さる教を誰にうけ、さる道を何にまなびてしかるや。我はこれよりひれもす硯の小世界にのぞみ、海をあさりて、たふとき玉を拾ひ、陸を耕して、千々の言の葉をつまん。

評　この小世界より大文章の出む折こそ望ましけれ

(丙賞)

山吹の花を贈る詞

塚本在　和多田文子

あやなく咲くそこいはんもかひなしや
君こずて花は咲きけり山吹の口なしいろを如何にかもせんあはれ此花の
露にきほひ雨に惱めるさまし妹ににるさいひけんもうべなりげにをる人
の多きもうしろめたく心なき雨風にうつろはんくろしきにけさよりふり
そゝぎて玉をぬきとめたるがいみじうあはれなればうつろはぬまに一枝
たをらばやさてぬれつゝも志ひてをりつる心つくしいはで思ふ花のいろ
たれにか見せ侍らんあなかしこ

評　巧に過たるあさはあれど

(秀逸)

行く春

下野國河内郡宮屋村
鄉區上篠井常次樣方　伊澤いつ子

日々のいさなみに追はれて、日の暮るゝだに知らぬ身の、早くも散りにし花のたよりをきくこそくやしけれ。讀本のおさらひに餘念なかりし妹の、何思ひけん入り來りて、さも嬉しげに、破布の紐わけなく解きつ結びつ、のう姉上、兼ての約束なるに、など野邊にはつれ給はざる、遲櫻さへ散りぬさきくものを、かくては蒲公英を如何にせんなど、我が袖をらへてきゝ入れざるに、いひさくべき言葉もいでず。せめては春の行方を追ひて、霞の眞袖引きさらへんにはと、妹が引く手のまに〳〵、立ち出づる廣野には、麥色づきて、堤の遲櫻僅に散り殘りたる、柳の糸長う茂りて、渡舟さへ打ちかくろひたる、何れか春の名殘ならざらん。妹は花なき術をつぶやきつゝ、蒲公英のいと稀なるに、與さめけん、いざかへらんさいふ。空しく春を送りし姉の心は知らずして、螢狩りを此次になど、すゝむるもあどなしや。蝶はやつれし羽のおぼつかなく、一夜の夢のさめしが如く、はかなし顏に、何處ともなくとび去りしも亦哀れなり。折柄畠中の伏屋の横手に、夕日を受けて、色いみじううるはしき苗代田の、風に鳴子の音も知らず顏に、軒より柿の下枝にうち渡したる物干竿に、數も知らず並び居て、チヽさ計りにしば〳〵羽ばたきする子燕あり。今かへりくる牧童が、「春行け春行け。菫たんぽゝ何のその、小川につゞく廣野原、足の立場もあらぬ迄、生ひこそ茂れうまし草、ことひの牛を肥してん。」「春行け春行け。桃も櫻も何のその、木立はつゞく土手八丁、樂しく休む影にさて、天津日影も見えぬ迄、若葉よ茂れいざ茂れ。」さ歌ひし聲に、いかに小さき胸をさとろかしけむ、かの子燕はさび去りぬ。

評　今一しほさおぼゆ

消息文

（甲賞）

友に花を贈る

伊豫西宇和郡宮内村　浦尾やすを子

母君の御いたつきいさゝかは怠らせ給ふにや先づ承らまほしうてなむけふは殊の外閑けく家の内にも居たまらずと思へるを同窓の友垣みたりおとづれ給ひけふのひと日をうかれくらさむとこゝ迄歩み來れりいざ野遊なさと勸めらるゝもうれしければ直に八つの袖打連れて喜須來野わたりに至り霞を吸ひつゝ摘草をなしゝは興多かりしもこの群に親しき對の居まさゞりしはいと物足らぬ心地して憾み深かりきかへるさには某の別莊に立寄りしが今や半開の櫻花くれなゐのとばり張りたらむが如くいみじくをかしかりければ主に乞ひて一枝を得てなむ御許に參らするよあはれ病みませる母君と共にあけくれ眺め給はらばうれしき事になむけふは殊の外疲れぬれば筆の運びも心に任せずゆるさせ給ひてよあな賢

（乙賞）

春のくれつ方木花咲耶姫に奉る文

しつのめ

佐保姫の惠みのもすそうす紫に天地をおゝひ初めしより野邊の若草思ひ〳〵に萌え出て緑の席をしきぬ東風吹き渡る朝より閭のべの梅匂やかにゑみこぼれて例の初音を待ち顏なる其頃君は何のけはひもなう冬の儘なる梢の有樣それだに春さしいへはうちまもられてなむいつか雲雀の空となりて少子子が遊ぶべく蒲公英などとり〳〵に匂へるに梅の花笠はやもうつろひて鶯の頻に啼きて惜しむ頃やう〳〵君てふゝみたまへるあはれいつしかも君が艷にうるはしき御姿見參らせんとて今日やいかに明日や咲かむとひたすらにまちこがれぬるを折ふしけぶる青柳の糸より長き君が御心すこし待つ身をも思ひやらせ給へかし木の芽はる雨晴れたるあした二つ三つほゝゑみぬとみる程に咲き初めてはいと早く梢々にさかりの御粧年々にかはらぬ御姿ながら待たされし恨も忘れていともいともなつかしうあてやかに見奉るかな

紅の霞花やかなる朝日をむかへ香をる白雲朧なる夕月を送ること二日三日憂世忘れてながめしも時のまや夕風そよふく入相のかねにひとひら二片あかぬ別れの惜しまれしをうき事のはしめにて夜半の雨にうち悩まされ朝の嵐に吹雪とまがふなるつらしともつらしあたらしともあたらしき極にこそもとより風雨も憎けれど散ればそ誘ふとかや君にもあまりにうつろひやすく在します哉とゝ恨まれつゝ思ひかへせはいにしへ遠き頃よりものゝふの最後にたとへられて敷島の大和心ともてはやされしも花々しくいさぎよき散際なればこそなれ泣くも笑をつくるてふ遠近人の心ひきし色よ姿よ似るもののなきさくや姫のみこといつか櫻の梢をはなれて八重くもの霞の外に立ちかへりけむゆめなりけりと仰き見ればむなしき枝に若葉のみとり茂りゆくのみ

春の心はのどけからまじとまて人々をなぐさめ給ひしうれしさのあまりあはせて我等が君故の心つくしの程をおほけなくもきこえまつるになむさし〳〵にかはらぬ花の色香にこそかへて定め常なき人の身をあはれみたまへやあなかしこ

（丙賞）

書信上の交際を求めておこせたる返し

東京本郷區丸山新町
二番地竹内せき方　木村貞子

うるはしき御玉章うれしう拜しまゐらせ候おほせの如く未だたいめ給はらず候へどもまづ〳〵平かに渡らせられ候御事と遙かにことほぎまつり候妾も事なく暮し居り候ましよそ事ながら御心やすむおぼしめし下されたく候扨て事かれて何くれの誌上に拙き水莖の趾かき流し居り候をいつしか御覽ぜられ候よしにてねんごろなる御詞にあづかり恐れ入り申候素よりいたりすくなくふつゝかなるは申すも更にていまだ初心の事に候へば仰越され候やうなど却ていたみ入り申候されど御心ざしのやさしさに甘えてこれよりは姉君とも賴みまゐらせ師友とも仰ぎまつらむをあなた樣にもよろづに拙きこの身をも御見棄てたく肉身の妹ともおぼしめされて幾久しく御教への鞭を執り給ひてよとこれのみひたすらにねぎ奉り候まことや御誌友の端にだに加へ給はらむとならばこれよりは何事もつゝみ給はずて御手紙のたび毎に日常の御經驗など書きしるさせ給はゞいかに嬉しかるべき妾は一度かく御友だちとなりしからには善きにつけ惡しきにつけでつゝみなく御教へをも受くべく又御諫めをもいたゞきたき考へに御座候なほ聞え上げまほしき事はさはなれどさまではさてなん餘は又々と後れん雁にとてあなかしこ

賞外佳作

㊝清子

近江　三井はま子

（上）

衣更着末つ方の月冴けき夜半梅が香送る窓の下、心細げに暗みゆくランプの心掻き立てんともせず、仕立さしの琉球紬の男羽織前に押しやりて思案に暮るゝ美人あり。年の頃、二十才ばかりと覺しく色白の細面に眉、目のあたりの愛らしき、さては鼻筋の通りたるなど一しほ目とまる心地す。名も房やかなる鬟のほつれ毛うるさげに亂れかゝりて結び上げたる大丸髷重げに、緑なす黑髮より漏れて見ゆる緋鹿の子の燃え立つばかりなるも何れあすべき時はありけり。

思へは三年の昔、鸞鸞の契り堅めしその程は、春は嵐山の櫻見んとて長閑き朝日に影二つならべ、秋は高尾の紅葉に互に赤き心をきそひ、朝に夕に手をとりて謠み交し、口さがなき人々に、腰きんちやくよ御酒德利よと笑はれしに、思はず面赤らめしも厭なる心地はせざりき。

初め二度三度はお友達の御交際と露、氣にも止めざりしが五度六度となり十度となり終に一月に三日とは宅におちつき居給ふ事なきに至り、漸々疑ひ初めては、御樣子のふし〴〵、力なきみゝず書きの女文字大にあまる文も、お召物の袂より出でし肉色の絹ハンカチーフになまめきたる香など一々怪しく、下女の竹より聞けば、祇園の芳春樓なる花子とやらんがお馴染のよし、あだなる花にいかにあくがれ給ふとも心の中にこそ百千の思ひに苦しめ、口より出しては夢にだに御恨みがましき言葉も申上し事なきに、何が御心に染までか、雨夜の星の數まれ〳〵にお歸り遊ばしても何彼につけてあら〳〵しきおしうち、悲しさやる方なきに、母上樣までお年の加減とはいふものゝ過ぎし月の御病氣後より、お氣短におなり遊ばし、物に事に我につらく當り給ふて、賢二も元は溫和しく、他所に明す如き事は夢にもせず、會社にても褒められもものなりしを、此頃の不品行、これも汝の機嫌の取り方の惡しき故、つい家に居難くてかくなりしなり、遂には家も屋敷も人手に渡る、はかない終りをせればならぬ

か、と老の繰言幾度となくお歎き遊さるゝに、一しほ悲しく何事も皆、この身の不束故なり、修めの足らぬゆゑなり、母樣の御言、露御無理はなけれど、御病氣前の母樣ならば良人にも優しう御諫言して下され、我にも柔かうおさとし下さるならんに、火事と地震と一時に會ひし如き我身、實家の父上は物堅き御性質、此家へ嫁ぐとて家を出でんとせし折、もはや今宵よりは堀口房なり、二度小林の姓はなのるまじきぞ、こゝの者となり度心起らは之れを見よ、と七寸五分の短刀賜はりしに、私も父の子でござります必ず／＼今迄のお教訓には背むきませぬ程に、もしも卑しい心が出ましたならば、これと相談致します、と誓ひしが、父上はこの頃の良人の不品行を知り遊ばし、御心は迎にも來り給ふ程ならんが一度云ひ給ひし御言葉の手前、それとも云ひ出で給はぬなるべし。此方よりもつげ參らせて獨り苦しき胸に秘めて、朝には比翼のありとしもなき片羽を恨らみ夕は連理の枝にかこちて露ひぬまなき二つの袖。愛の分量は限りありて一方に强ければ一方には弱しとかや。賴む良人に捨てられて何とて世にあるかひやあるべき、身の思ひに堪へかれて、簞笥の底より彼の九分五分取り出しゝ事や幾度ぞ。針の莚の其中に喫かき涙もて慰め給ふお清樣、人は鬼千疋の例にいへど、なか／＼に佛千萬の情あり。燃ゆる苦しみをお察し下され、彼の可愛ゆき目に露の白玉ぬき給ひ、紅薔薇の苔の如き口唇に、姉樣の御悲しみはよく知つて居ります、このお優しい姉樣を捨てゝ遊びに浮かるゝ兄樣、邪堅に當るお母樣、さぞこの家は鬼の棲家となつたと、お怒りでせうが、肉身の母樣より兄樣より姉樣が一番好き、姉樣がお實家へお歸りなさるやうな事でもありましたなら私は本統に此家には居りません、／＼姉樣と御一緒に御實家へ行きます、然しそれはお家の御厄介、それのみか母樣や兄樣はとても許して下さりません、そうすれば矢張御別れせねばなりません、お別れはいや、お別れする位なら死んでしまひます、どうか姉樣今暫時辛棒して居つて頂戴、其内には私も兄樣に諫めて諫めて、必然改心させます、と我膝をゆすぶりつゝ仇氣なき言葉に慰さめ、苦しみ、泣き、怒りたまはるお清樣を捨てゝなごてひとり行かるべき。如何に心を鬼に、十分覺悟はするとても忽ちゆるむ心の張弓。御病氣も肺とやら恐ろしき名に變りしとの事、それも一つは心を用ゐし餘りなりとお醫師樣の御言葉、彼の福よかなりし頰も肉落ち櫻の花に譬へし色も唯青白く、活々したりしお目も力なくおなり遊され、親指と人指指とを輪にして廻りかぬるとほこりなされし手首も二分の一程に細り給ひ、もはや一月はあやうしと、我のみかは、十指のさすところとなり給へるお清樣。

（下）

昨夜より又もや病加はりしとて醫師はつききり、家の者一同、一目も寢ず、例は留守勝なる主人賢二も枕元に、老母も房子も打並びて、すや／＼眠むる清子の顏をまもるのみ。

長の病氣に身體の弱りいとゞしく、眠むるかと見れば醒め、醒むるかと思へは眠むるうつら／＼しき樣、高島田に金縄結びて友に羨まれし美はしかりし髮は油氣なく艶失せてたゞ緣のみその昔をしのばせ、青ざめたる顏は頰骨表はれて紫ばみたる口唇も哀れなり。

先生……もう程もございませんでせうか……

老母はさも悲しげに心元なけに伺ふ。

そうですれ……どうも……

と氣の毒げなり、傍なる房子は忽ち袖もて顏を掩ひぬ、清子は力なき眼を開き。

姉樣、今れ、兄樣やお母樣や姉樣と嵯峨へ花見に行つた夢を見ましたよもう咲く時分ですれ……

臨終の若さも見えぬ慥かなる話振。房子は淋しげに笑みたゞへつゝ、
　そうですか、まだ少し早うございますがね……も半月もたてば見頃でせうよ、早く快くおなりなすつて、ご一所に行きませうね……
　はあ、行きませう、十分養生して早くよくなりますわ、
風前の燈火にも似たる我身さも知らでかく勇さむ言の葉を聞く人々の心や如何に。
　姉樣そしてね……
云はんさして込み上る咳と共に口より迸る血しほ、二月の花よりも紅く打ちふす大縞太紬の夜具の上に染め出しぬ。房子は驚きて抱き付けば、老母はせきくる涙拂ひも得ずまろび寄り、醫師は早くも手を出しぬ。
　しつかりなさいよ。
老母さ房子はおろ〳〵聲に
　竹早く〳〵ね、水を……、お清さんしつかりして頂戴……
糸より細き聲しぼり出して、
ね、姉樣……
はい……
あ、私は……もうだ……だめです……姉樣はどうぞ……し……辛棒して…… 居つて……
呼吸の苦しきに又も咳き入る。房子は身も世もあらぬばかりに悲しみ、煩悶え、云ひ出んさすれど咽喉ふたがりて、たゞ〳〵言もなくばかり。
清子はなほも苦しき呼吸の下よりいさ細くたえ〴〵に、
兄樣……お母樣……どう……ぞ……姉樣を……可愛がつて
……あげて……く下……さい……
云ひつる間に、はや死の神は容赦もなく愛の手より奪ひ去りぬ、泣きくづれる老母は骸にすがりて聲を限りに呼べば、さすが男子の賢二も堪へやらで。
　き清さん……ゆるして……おくれ……
今はのきは迄、我を一圖に思ひ下されしかさ思へば、房子、一しほ悲しさ苦しさたさへん方なく聲も惜まで泣き叫び共に連れてよさ身を悶ふ。事に馴れたる醫師さへ鼻打ちかむめり。
あはれさもあはれ、其名にしろく清くも人の爲めに病み、望ある若木の櫻、二九に足らぬ少女子の、さかりの春にもあはで、あたらしくも吝のまゝに散り果てぬ。

◎櫻の記

塚本在　胡蝶女史

世に櫻ほどめでたき花はあらじ春の朝霞かゝれる野山の末ふりにし柴の端軒に雪か雲かさ咲きいでゝ諸人のみやび心をあくがれしめ絶えて櫻のさまでかこたしむさてはやんごさなき大宮人にもかざされいやしき賤のめにもめでられやるせなきますらをの心をもなぐさめはたきよらなる世捨人の友さもなり朝日に匂ふすがたはやまさ心にさへたとへられ國つ人より始めて遠き國の人までもめではやさるゝはげにさることぞかし

評　やるせなきさいふ詞の用ひさまあまれり

◎觀花菖蒲記

塚本在　和多田文子

ふりつゞきぬる五月雨のそら、いつはれぬべしさもみえず。軒の玉水、おな木草のつゆ、見るものごさに、しめやかなり。日曜日さしいへば、おさなゞ國より來つる、學びのさもさ、打ち連立て、證人の許などを、おさなふごさ、例なるを、今日は朝より、たれこめたるに、學びの窓も、いと

しづかなれば、ひとり文机に向かひて、何くれと、ひきちらしたるに、ふみよむわざもうみて、外の方を見出だしたるほどに、故郷の事など、そゞろに思ひいでられて、母君は、いかにおはしますらん。さらでだに、なぐさめがたき此のごろのつれ〴〵を、まして一人おはする御身よ。年毎に、み心つくして、つくり給ふ庭の花菖蒲も、このごろこそ、さかりならめ。近きわたりならんにはなど、かへす〴〵も、おもへるをりしも、室の戸あけて、入り來る人あり。誰にかと見れば、今朝出でにし友の、かへり來つるなりけり。いとはやうなど、いふほどに、うるはしき花菖蒲、あまたもてきて、今日家にゆきけるに、今を盛に咲きたりければ、一人のみ見てかへらんは、いとほいなき心地して、つゆけさもいとはず、ひきでしまゝに、もてきつるなり。み心なぐさめたまふ、れうにもなりなんには、花のめいぼくならましなどいひて、いぬを見れば、白紫または、ゆはだのやうなるなど、いづれ劣らぬ色にて、まことに似るものもなう、うるはしきに、今しも思ひつる事なれば、故郷の便、えつるやうなる心地してうれしさいはん方なし。今日は居ながらに、花菖蒲をみて、いとよきたのしみしてけりと、思ふまゝを、消息のおくに、かいつけて、ふるさとにおくりぬ。

◎野あそび

東京　林喜代子

あさみどりなる空のけしき、いといみじう霞わたりて、四方の梢もうちけぶりたるに、心もそゞろうきたちて、野遊そびせばやと思ふ折しも、日頃むつましき友どち、二人三人柴の戸おとづれ給へり、いとうれしくて、いざ共にと立ちいづ、空の景色いとうらゝかに、遠山はまたく霞の衣に包まれて、おぼろげに、路の邊には黄金の花咲きみだれ、こゝかしこに少女子の若菜つむさまなど、いといたう心地よく、おのゝ歩もまがりくねれる、田道つたひて、さながら青海原のやうなる、野邊にいでぬ、きゝもしらぬ小鳥の聲おもしろく、雲雀のふしおもしろき、歌なときゝては此世の外の心地せられて、しばしながめゐつるに、はや友は若菜つく〴〵しなど、籠に半ばかりつめり、いとおどろかされて、そこゝとあさるに、みな友の見あらしたるにやあらむ、ふみにちられたるのみ、そこゝにふせるのみ、いとはらだゝしくて、草おしわけつ、すかし見つ、するにはるか彼方に、つく〴〵しの一本たけたけたきが生へり、うれしくてはしりゆき、つまむとするに、草むらよりふと何やらんとびいでぬ、いたうおどろかされて見やれば、雲雀の夢おどろかされて、とびいでしなり、あな心なき事しけり、かくともしらば、はしりきたらざらましをと思へど、はやせんなし、ひばりの聲にしらべあはせて、唱歌などうたひつゝ、やう〳〵友と同じばかり、つみ得たり、はやよきは見あたらねば、こたびはかしこにゆかんとするに、後の方に洋服着けたるいかめしき男の、今しもこの野邊の景色をうつしいでんとす、さまたげなさんもわろしと、そのまゝ見いたるに、はやうつしゑてゑましげに、おのれ等の顏見つゝ、かなたにゆくに、大方はわれ等もかの畫中の人物となりたるらんと、いとうれし、何事も皆わすれはてゝ、そこはかとなくつみありきしに、はや籠にも袂にもみち〳〵ぬ、ふとみあぐる空のけしきは、いつしかうすくろうなりて、烏らねぐらにかへりゆくに、うちおどろかされ、かなたなる友こなたなる友などよびおどろかして、春のけしきてふ歌などうたひつ、家路をさして行く路すがら、他のものは目にもいらず、只だかの野邊のさまのみ胸にうかびて忘れやらず、いざ今日のえものゝ、父母の君の夕げの膳にのぼせて、うれしげに笑み給ふ御顏みまゐらせんと、ひとり友にわかれて、ひたはしりにはしりかへりぬ。

◉歌の本旨

山口　松翠女史

歌は各自の思想を文字の上に顯したるものにて、なるべく誰にも解り易き事を勉むるものなれば詞の色艶は論ふ要なし、さるを當世の人の彼は歌人なれば歌に巧みなり我は歌人ならねば詠み得じなど云へるは大に事を誤れるなり

八雲たつ出雲八重垣つまごめに八重垣造る其の八重垣をこはこれ素盞嗚尊が出雲にて櫛稻田姫を娶りて相住みせんとて宮造り玉ひける折八色の雲のたち昇るを見て詠ませ玉へる歌にて其素朴にして、たゞありに單純なる、修飾もなく、彩色もなく、恰も幼兒が已れの欲する所を云ひ出でたる如く、包ます粧はぬ歌のよく、人を感動せしめ得るは自然の理りに合へる故のみ

世にいふ歌人も多少雅趣には富むへけれど、事に感し情を起す事必すしも常の人に優れりといふべからず、歌人にならずとて、物事にふれてなどか心の動かざる、其動く處の情を其儘にうつしたるもの眞正無汚なる歌なり、されば歌は平易にして其意衆人に通し衆人の同情を惹かんこそ本旨なれ、あながちに妙句雅詞を用ひんとして意を盡し情を表はす事を得ざるは歌の道の心を知らぬものといふべし

評　いまたいひつくしたりとはいひかたし

◉和歌の病的思想

東京　保田吊子

我が國の歌人は何が故に世を悲觀する者衆きか、理然らざる可らざる哲學上の情由もなく、宗教上然る所以の緣故もなく、只世を厭ふと云ふ、渠等果して世を厭ひしか、世渠等を容れざりしか、將たまた知らず、渠等世を厭ふと假に装ひし者か、渠等の苦衷より絞り出せし哀詠悲歌は渠等の號泣する慘響を帶びて聞ゆ也。

實に我が國の歌人は花鳥に對し、風月に對し、社會に對し、人生に對して多情の士なり、多恨の士なり、然れども其觀察は多く肉眼的なり、其象は見得れども、抽象を知る能はず、自然の美は感じ得れども、天地の踞宿を繹ぬる能はず、況んや人生の榮枯盛衰の上に超然として悠々たる無限界に其理想を懸け、以て自然の聲を聞くが如きに於てをや、況んや深奥幽玄なる哲理の其裏に存するを見出すが如きに於てをや、故に渠等歌人の思想中より、偉大なる理想と、莊嚴なる觀念とは一點たに拗し得ざるなり、宜なるかな、此思想に反映する和歌の雄渾なる氣魄、崇重なる詩想に乏きや。

さればこそ、或は杜鵑に愁し、初雁に悲み、月に泣き、砧に恨み、さては、妻戀ふ小鹿、鴫立つ秋の夕暮、等の品題に伴はれし、似而悲厭世觀によりて、我が歌人の感情に鎔化され『月見れば千々に物こそ悲けれ我が身ひとりの秋にはあらねど』的悲歌が我が和歌の趣味を渾成しめ、而して爾來幾百年、今日に到るまで此種の感念と思想を和歌の精神雅趣と信じ樂き生涯を經つゝありながら殊更に厭世脫俗の寒吟を試み、圓滿なる家庭に眠りてありながら、態と月に傷み、花に果敢なむの悲歌を謠ふて、以て本旨となすに到れり、心を憂愁の深淵に沈め、身を苦悶の谿に輝むし、煩に惱み、惱みに煩らへる人の口によりてこそ、眞個厭世歌は作られもす可し、焉ぞ多幸多福の人によりて作られ得可き者ならんや、

爵祿を捨て、金錢を捨て、名譽を捨て、最愛の妻子まで捨てゝ人生の誘惑と戰はん爲め、孤笻寒笠、飄然として青山白水に嘯きし、西行法師は、實に我が和歌壇上の厭世家なり、其詠ずる所は寂寞、其吟ずる所は凄慘、其歌ふ所は悲涼なり、然も渠が裏裡を割き來れば、或は悟りたるが如く、

或は迷ひたるが如く、情感と意志とは衝突して半熱半冷、五大爲に兩裂されんとして『我はかり物思ふ人や又もある』と哀訴しつゝ土に歸せしにあらずや、此人にして既に然り、其他の徒は知る可きなり、幾人か能く世を厭い世を捨つる者あらん要に厭世を裝ふ輩多きのみ、厭世は意志の薄弱を示す者、偉麗高潔なる和歌作者の頭惱に宿り得可き者にあらず況や厭世を裝ふ如きに於てをや、只形の美はしきを求め其纖巧を喜びて自の理想自の觀念を蔽ふて厭世的彫蟲を之れ事とす、之れ病的思想にあらずして何ぞや、斷々乎として此思想を和歌より驅逐し去らずんば寸前一歩の地は尺前數歩の地に聚き春波の如き希望を湛えたる新派和歌の革新を成效し得ざるなり。

◎誠意といふことを

下谷　岡田光子

誠意は、富める人貧しき人の、けぢめなく、此世に生くとし生くるものゝ、最と、めでたき寶なり、人は之あるが爲に、希望の光りをはなち、之あるが爲に、明日の生命を保たるゝなり、古昔より英雄といひ、豪傑と呼ばれ、烈婦といひ、貞女とうたはれし人々こそ、そが、鑑みとぞ覺えぬるを、かの、南朝の忠臣楠正成となむいへる、人の事蹟は、三才のをさな童べも、知らざることなき程の者なるが、後醍醐天皇、ある夜、うとうとと、見えさせ給へける、み夢より、知られて、終身を至信に誠意をさゝげ獻りはべり、七たび人間に生れこして、逆賊を鏖にせんとまで誓はれ、終に湊川に討死を遂げられけりし至誠の、今の世までも、いと、燗々として輝き來らんとは、いかに、其意の誠に、きよくはたいさぎよきに、あはれ、心あらむ者、己れの行ひを愧らい給へて、喉もとかき斫り死せでやはあるめり、又かの烈婦阿藤の、あはれ、うら年若き女子にしあらんも、胴をばひしほこもて剌し足にほだしをはめ、頸をばのこぎりもてひかんも、命の通はんきわは、妾が身のこなにさるゝとも、至誠を盡くし侍りて、享恩のいと渾かき君の一大事のわざはひを未發に防きまつりて、一藩士民の心を安からしめ給へけりしが、ほしや、此の烈婦をして、あはれ、苔むす刑場の露と消えせしめたる、あな天道は是か非か、神のみ心こそ、こゝろ得れ、いかに、佞奸のさぶりのにくしかりしこそなれよ、されど阿藤の其志の雄々しく、はた、きよく潔よかりしこそならむとは、げに、誠意こそ世にめでたき人の寶なれ、痾等常にこれを思へ侍れ、世に誠なき人々こそ、血の循環を失へたりし死人のごとく、空とぶ鳥のつばさなく、地にすむ虫の足なきと、いかに、をさなさ、けぢめなきことを、さるに、今の世の多くの人は、黃金の利にまなこくらみ、木を石とせめぎあへ、金のためには躍咎のなき人をも苦しめ給へて、いと、心地よきことのやうに思ひはべるこそ、あはれ心得ぬ、道といふ道はすたれ、德といふ德はやぶり、さらにつれもなにすましおる人の心こそ、あな悲しき、今にして、正成の忠、阿藤の烈に、見習はでやは、いかにあるべき、聖りの人の教へに、誠は天の道なり、之を誠にするは人の道なりと、げにいみゞき言なれ、世の賢士良女、少しくこゝに見給へて、唯口にのみ誠といはず、身に誠を行へはべりて、そが、めでたく、いと、いみじき寶の光りを、千とせ百とせの身後にまでも、輝やかし傳へはべり玉はんことあらんやは、

評　文意はよろしけれとかきさまいまだし殊に侍りの用ひさまわろし

女學世界夏季增刊

大懸賞文募集

才媛詞藻『花あやめ』夏の卷

投書締切　五月廿日

種類

◉小説（二十四字詰三百行限）短篇各種

◉國文（二十四字詰二百行限）文題隨意

◉普通文（二十四字詰二百行限）文題隨意

◉書簡文（二十四字詰百五十行限）文題隨意

◉新體詩（七五調三十句位まで）詩題隨意

◉和歌（短歌に限る）夏季雜題

我が女學世界は、發行日尚ほ淺きも、大いに天下の好評を博したるは、普く人の知悉する所也、弊館は此の深厚なる芳意に報ゆる爲め、來る六月十五日發行の定期增刊は、題して『花あやめ』と云ひ、これが編輯上の用意は、嶄新なる意匠を凝らし、有益なる資料を蒐めて、以て聊か讀書界に貢献するあらんことを期す、全篇の紙數は例の如く二百頁を超え、其内過半の頁數を懸賞文に充て、剩餘の紙面には、大家名流の手に成れる名文佳作及び講演談話等を採錄す、今や初夏の好季節に際し、滿山の新綠正に滴らんとするの時、乞ふ天下の諸孃よ、徐に清婉の想を練り、艶麗の筆を揮ひて、以て才名を方今の文壇に馳せられんことを、投書規定は別項に記する所を見よ

六月十五日發行

賞品

特賞　婦人用時計　壹個（特賞は小説に限り最優等者一名に與ふ）

甲賞（圖書切符）金參圓

乙賞（圖書切符）金貳圓

丙賞（圖書切符）金壹圓

番外　圖書を以て薄賞を呈す

(注意)

小説（特賞を除くの外）國文、普通文、書簡文、新體詩にて當選者甲賞五名、乙賞六名、丙賞十二名外に秀逸廿名を精選して賞品を與ふ又和歌は天地人の三名に乙賞以下の賞品を外に秀逸二十首に薄賞を與ふると投書の封筒に『花あやめ原稿』と必ず附記すべし

此募集廣告に特定あるもの丶外は例刊の投稿規程を準用するとさす

普通懸賞文募集

本誌には初號以來『才媛詞藻』の欄を設け、毎月一回賞を懸けて海内才媛の詞章を募集す、是れ方今の才媛文學を奬勵せんと欲するの趣旨に出づ、其の選評者は何れも國文學界の泰山北斗とも稱すべき大家先生也。海內の名媛乞ふ其の美識佳想に成れる玉作を投寄して近來振はざる才媛詞壇を飾られんことを

◎普通文（一行廿四字詰百五十行以下）
◎小　說（一行廿四字詰百五十行以下）
◎國　文（一行廿四字詰五十行以下）
◎消息文（一行廿四字詰五十行以下）
◎新體詩（七五調二十句位）

右各種の投稿題はいづれも寄稿者の隨意たるべし但し政治的時事論に涉らざると、亦小說は可成優美なるを佳とす（〆切毎月十五日限）

優等者懸賞品（今回の分）

甲　賞（圖書切符）金壹圓
乙　賞（圖書切符）金七十錢
丙　賞（圖書切符）金五十錢
秀　逸（三品）薄賞を呈す

和歌兼題

六月分　五月雨、琴（〆切五月十五日）
七月分　暑中休暇、螢（〆切六月十五日）
（天地人三名を選び懸賞文に掲げし賞品の乙以下を呈す）

投稿規程

一、本書は女子の手に成れる投稿を歡迎す
一、投書の種類は文章（文體は國文及普通文に限る）詩歌（新體詩及短歌今樣の類）小說は優美にして卑猥ならざるもの等とす
一、投書の期日は規定なきも懸賞文は所定に依る
一、投書の用紙は半紙二ツ折（和歌は端書に限る）半面十行一行二十四字詰にて文字は正楷に限る
一、投書は各種類を別紙に認め匿名を欲するものと雖とも必ず其姓名住所を記載するを要す
一、投書の送附は博文館編輯局宛にて封筒の表面に『女學世界原稿』と記載すること
一、投書は採否に拘らず一切返戾せざるものとす

（寄稿募集）本誌の材料として、家庭及び地方風俗、婦人社界の狀況、孝女節婦の美談佳話、各女學校の狀況、その他有益の資料を寄せられんことを希望す

學事

女子大學參看記

落花繽紛雨蕭々たる一日、今回開校の運びに至りたる小石川目白臺高田豐川町なる日本女子大學校を訪ふ、其節同校は入學生の試驗中にて應募者もなか〳〵多きよしに見受けられたり、まづ同校舍の敷地を一見するに位地は目白の高臺にありて土地の乾燥空氣の清淨は申すまでもなく周圍は青葉を以て裹まれ種々の樹木花卉は廣ろき庭園を彩どりて如何なる炎天烈日の候といへども生徒は其の綠滴たる林の中に遊ぶことを得て精神の快爽此上もなからんとおもはれたり、其の校舍は木造の二階造にして和洋折衷に作られ、長六十間、横八間半、規摸の大なる從來の私立女學校に見るべからざる處なり。 校舍と棟を異にして理化室あり又附屬の寄宿舍二棟ありて一は二十五間半、一は三十四間、双方共奥行四間半あり、故に中央の廊下は三尺ありて其兩側に寄宿生の室あり、室には疊を敷詰め、戸棚あり引出附の箱ありて銘々鍵を以て各自の必要ある品物を其中に入れ鍵を下す事となり居り、戸棚は單に夜具蒲團を入るゝ位にて其他の物品は多く入るゝ能はず、而して此の寄宿は家族制度の組織にして一方に三家族一方に四家族一方に五家族都合七家族の制に編成せられ、寄宿生は總計百五十名を容れ其の費用は一ヶ月一名に付僅かに六圓を要するとの事なり、又生徒は交替に自炊する事なるか之れは學校に割烹科の設ありて赤堀峰吉、山崎武八郎の兩氏が敎授せるを生徒が練習の爲め自炊せしむる由、校舍と寄宿舍との外別に校長の住宅.語學敎師たる洋人の宿所あり、之も木造二階建にして至極質素に作られたり。 同校工事は概ね落成を告げしが、目下殘れるは唯割烹敎場にて今現に其工事を急き居れり。

今本校の創立費を聞くに十一萬餘圓にして、其中に含まれたる敷地三萬二千餘圓(時價に見積)は三井家が校長成瀬仁藏氏の擧に賛成して自家の別莊として計畫せし處を全然寄附したるものなりといふ。 女子大學が此の好位地を得たるは非常の幸福といはざるべからず、本校今回の應募者は大學の部にて三百五十名、附屬高等女學校の部にて三百八十名にして內入學せしむべき數は大學に二百名、高等女學校に三百名、都合五百名な

りといふ、此の五百名中或は無試驗にて入學を許可するあり或は試驗を施すべきものもり其試驗もいよ〳〵結了したるが若し五百名採用するとせば勢ひ學力の不充分なるものも入學せしむるの傾となるべく、さすれば學校の躰面にも關するを以て當事者も大に熟慮しつゝある由、又同校職員の選定は左のごとし。

◎本校職員　（校長）成瀨仁藏、（學監）麻生正藏、（庶務主任）塘茂太郎

◎本校教授　（國文學）井上頼圀、（東洋史及漢文學）市村瓚治郎、（本邦史）萩野由之、（國文學）戸川安宅、（生理學）醫學博士大澤謙二、（日本禮法）小笠原清務、（邦畫）川端玉章、（國文學）吉田彌平、（兒童研究）高島平三郎、（英語及英文學）ミッセス、レオナード、（倫理、教育）成瀨仁藏、（應用理化）理學博士藥學博士長井長義、（和歌及書法）中島歌、（英語）村井知至、（西洋歷史）浮田和氏、（英語及英文學）ミス、グリーン、（西洋畫）松井昇、（英文學及國文學）松浦政泰、（家政）ミッセス、ブラッドベリー、（倫理學、心理學、教育學）麻生正藏、（國文學）木村正辭、（衞生）醫學博士三宅秀、（漢文及國文）三輪田眞佐、（和歌及國文）三宅龍、（教育學、教授法）篠田利英、（國文學）關根正直

◎囑托教師　（西洋料理）山崎武八郎、（日本料理）赤堀峯吉

◎科外講師　文學博士井上哲次郎、男爵神田乃武、藥學博士田原良純、文學博士坪內雄藏、醫學博士中濱東一郎、中川謙二郎、文學博士上田萬年、醫學博士青山胤通、文學博士三上參次

◎校　醫　東洋內科醫院長醫學士高田耕安、耳鼻咽喉科病院長ドクトル小此木信六郎

附屬高等女學校

◎教　諭　（國語、作文、家政）穗積銀、（歷史、地理、數學、體操）法貴スエ、（國語）戸川安宅、（毛筆畫）戸田玉秀、（唱歌、音樂）富田久、（習字）小野鵞堂、（毛筆畫）川端玉章、（英語）ミッセス、レオナード、（倫理）成瀨仁藏、（習字）中村梅太郎、（英語）村井知至、（英語）ミス、グリーン、（倫理）麻生正藏、（英語、數學）佐野トク、（國語、作文）三輪田眞佐、（理科、數學、體操、英語）平野ハマ

◎囑托教員　（裁縫）石原咲、（同）四手井榮、（生花）平野正好

高等女學校令施行規則

（文部省令第四號明治三十四年三月二十二日）

第一章　學科及其の程度

第一條　高等女學校の學科目は修身、國語、外國語、歷史、地理、數學、理科圖畫、家事、裁縫、音樂、體操とす但し修業年限を短縮したる學校に於ては外國語を缺く

外國語は英語又は佛語とす

外國語は之を缺き又は隨意科目と爲すことを得

音樂は學習困難なりと認めたる生徒には之を課せさることを得

第一項の學科目の外隨意科目とし教育、手藝の一科目又は二科目を加ふることを得但し修業年限を短縮したる學校に於ては此の限にあらす

第二條　修身は教育に關する勅語の趣旨に基き道徳上の思想及情操を養成し中等以上の社會に於ける女子に必要なる品格を具へしめんことを期し實踐躬行を勸奬するを以て要旨とす

修身は初は嘉言善行等に徴し又生徒日常の行狀に因みて道德の要領を教示し又作法を授け進みては稍々秩序を整へて自己、家族、社會及國家に對する責務を知らしむへし

第三條　國語は普通の言語、文章を了解し正確且自由に思想を表彰するの能を得しめ文學上の趣味を養ひ兼て智德の啓發に資するを以て要旨とす

國語は現時の文章を主として講讀せしめ進みては近古の文章に及ほし又實用簡易なる文を作らしめ文法の大要及習字を授くへし

第四條　外國語は普通の英語又は佛語を了解し且つ之を運用するの能を得せしめ兼て知識の増進に資するを以て要旨とす

外國語は發音、綴字より始め簡易なる文章の讀方、譯解、書取、作文を授け進みては普通文章に及ほし又文法の大要、會話及習字を授くへし

第五條　歷史は歷史上重要なる事蹟を知らしめ社會の變遷、文化の由來を理會せしめ特に我國の發達を詳にし國體の特異なる所以を明にするを以て要旨とす

歷史は我國の國初より現時に至るまでの重要なる事歷を授け兼て外國歷史の大要を授くへし

第六條　地理は地球の形狀運動並に地球表面及人類生活の狀態を理會せしめ我國及諸外國の國勢を知らしむるを以て要旨とす

地理は日本地理並に我國と重要の關係ある諸外國の地理の大要を知らしめ兼て地文の一斑を授くへし

第七條　數學は數量の關係を明にし計算に習熟せしめ兼て生活上必要なる事項を知らしめ思考を精確ならしむるを以て要旨とす

數學は算術を授くへし又學校の修業年限に應し代數の初歩及平面幾何の初歩を授くることを得

第八條　理科は天然物及自然の現象に關する知識を與へ其の法則並に其の相互及人種に對する關係を理會せしめ兼て日常の生活に資するを以て要旨とす

理科は重要なる植物、動物、鑛物に關する一般の知識、人體の構造生理及衛生の大要並に重要なる物理上及化學上の現象及定律、器械の構造及作用、元素及化合物に關する知識を授くへし

第九條　圖畫は物體を精密に觀察し正確且自由に之を畫くの能を得しめ意匠を練り美感を養ふを以て要旨とす

圖畫は自在畫とし寫生畫を主とし臨畫を加へ授け又時々自己の考案を以て畫かしむへし

前項の外幾何畫の初歩を授くることを得

第十條　家事は家事整理上必要なる知識を得しめ兼て勤勉、節儉、秩序、周密、清潔を尙ふの念を養ふを以て要旨とす

家事は衣食住、看病、育兒、家計簿記其の他一家の整理、經濟等に關する事項を授くへし

第十一條　裁縫は裁縫に關する知識技能を得しめ兼て節約利用の習慣を養ふを以て要旨とす

裁縫は普通の衣類の縫ひ方裁ち方及繕ひ方を授くへし

第十二條　音樂は音樂に關する知識技能を得しめ美感を養ひ心情を高潔にして兼て德性の涵養に資するを以て要旨とす

音樂は單音唱歌を授け又便宜輪唱歌及複音唱歌を交へ樂器使用法を授くへし

第十三條　體操は身體の各部を均齊に發育せしめて之を强健ならしめ四

肢の動作を機敏ならしめ容儀を整へ精神を快活にし兼て規律を守り協同を尚ふの習慣を養ふを以て要旨とす

體操は普通體操及遊戯とし普通體操に於ては矯正術、徒手體操、啞鈴體操を授け又便宜球竿體操及豆嚢體操を授くへし

第十四條 教育は教育に關する普通の知識を得しめ家庭教育に資するを以て要旨とす

教育は教育の理論の大要を授くへし

第十五條 手藝は女子に適切なる手藝を習はしめ指手の動作を巧緻ならしめ兼て勤勉を好むの習慣を養ふを以て要旨とす

手藝は編物、組絲、囊物、刺繍、造花等土地の情況に適切なるものを授くへし

第十六條 各學年に於ける各學科目の毎週教授時數は左表に依るへし

學科目＼學年	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
修身	二	二	二	二
國語	六	六	五	五
外國語	三	三	三	三
歷史地理	三	三	二	三
數學	二	二	二	二
理科	二	二	二	一
圖畫	一	一	一	一
家事	—	—	二	二
裁縫	四	四	四	四
音樂	二	二	二	二
體操	三	三	三	三
教育	—	—	—	—
手藝	—	—	—	—
計	二八	二八	二八	二八

教育を加へたるときは其の毎週教授時數は二時とし第四學年に於て國語の毎週教授時數を減して之に充て手藝を加へたるときは其の毎週教授時數は二時とし二學年以上裁縫の毎週教授時數を減して之に充つへし又外國語を缺きたる學校に於ては其の毎週教授時數は便宜他の學科目に配當すへし

修業年限を延長したるときは各學年に於ける各學科目の毎週教授時數は左の表に依るへし

學科目＼學年	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年
修身	二	二	二	二	二
國語	六	六	六	五	五
外國語	三	三	三	三	三
歷史地理	三	三	三	二	二
數學	二	二	二	二	二
理科	二	二	二	二	—
圖畫	一	一	一	一	一
家事	—	—	—	二	四
裁縫	四	四	四	四	四
音樂	二	二	二	二	二
體操	三	三	三	三	三

教育	—	—	—	—	—
手藝	—	—	—	—	—
計	二八	二八	二八	二八	二八

教育を加へたるときは其の每週教授時數は二時とし第五學年に於て國語の每週教授時數を減して之に充て、手藝を加へたるときは其の每週教授時數は二時とし二學年以上裁縫の每週教授時數を減して之に充つへし又外國語を缺きたる學校に於ては其の每週教授時數は便宜他の學科目に配當すへし

修業年限を短縮したるときは各學年に於ける各學科目の每週教授時數は左表に依るへし

學科目＼學年	第一學年	第二學年	第三學年
修身	二	二	二
國語	八	八	七
歷史地理	三	三	三
數學	二	二	二
理科	二	三	一
圖畫	二	一	一
家事	—	—	三
裁縫	四	四	四
音樂	二	二	二
體操	三	三	三
計	二八	二八	二八

土地の情況に依り前三表中各學科目の每週教授時數を增減するの必要あるときは其の事由を具し文部大臣の認可を受くへし但し每週教授時數は三十時を超ゆることを得す

第十七條　補習科の學科目は第一條の學科目中に就き之を定むへし

補習科の各學科目は隨意科目と爲すことを得

第十八條　技藝專修科の修業年限は二箇年乃至四箇年とす

第十九條　技藝專修科の學科目は技藝に關する學科目の外修身、國語、數學、理科、圖畫、家事、裁縫、音樂、體操とす

數學、理科、圖畫は之を缺き又は隨意科目と爲すことを得

音樂は學習困難なりと認めたる生徒には之を課せさることを得

技藝に關する學科目の種類及各學科目の程度は文部大臣の認可を受くへし

第二十條　專攻科の修業年限は二箇年又は三箇年とす

第二十一條　專攻科の學科目及其の程度は文部大臣の認可を受くへし

第二十二條　補習科、技藝專修科及專攻科の每週教授時數は三十時を超ゆることを得す

第二章　學年、教授日數及式日

第二十三條　高等女學校の學年教授日數及式日に關しては中學校令施行規則第十六條乃至第十九條の規定を準用す

第三章　編成

第二十四條　高等女學校の生徒數、學級の編制及教員の數に關しては中學校令施行規則第二十條第一項、第二十一條及第二十四條の規定を準用す

第二十五條　修身、音樂、體操及手藝は學年又は學級の異なる生徒を合して同時に之を教授することを得

隨意科目は學級の異なる生徒を合し五十人を超えさる場合に限り同時に之を教授することを得

第四章　設備

第二十六條　高等女學校に於ては校地、校舍、體操場及校具を備ふへし
道廳府縣立高等女學校に於ては前項の外寄宿舍を備ふへし但し文部大臣の認可を受け之を備へさることを得

第二十七條　校地、校舍、教室、寄宿舍、校具及住宅に關しては中學校令施行規則第二十六條、第二十七條、第二十九條乃至第三十一條、第三十三條、第三十五條乃至第三十七條の規定を準用す

第二十八條　校舍には左の諸室を備ふへし

一　通常教室
二　理科、圖畫、裁縫、音樂の各特別教室
三　講堂
四　圖書室、器械室、標本室
五　職員室、生徒控所、其の他必要なる諸室

講堂、教室は便宜兼用することを得
圖書室、器械室、標本室、教員室は便宜兼用することを得

第二十九條　體操場は分て屋外體操及屋內體操場とす
屋外體操場は方形若は之に類する形狀にして相當の面積を備ふへし
屋內體操場は生徒控所に兼用することを得

第五章　設置及廢止

第三十條　高等女學校の設置及廢止に關しては中學校令施行規則第三十八條乃至第四十條の規定を準用す
前項の外設置に關する申請には修業年限を具すへし

第六章　入學、在學、退學及懲戒

第三十一條　高等女學校生徒の入學、在學、退學及懲戒に關しては中學校令施行規則第四十一條乃至第四十五條、第四十八條乃至第五十條第一項、第五十一條乃至第五十三條の規定を準用す

第三十二條　他の高等女學校より轉學を志望する生徒あるときは學科程度同一なる學校に限り試驗を行はすして同一學年に編入することを得
中學校令施行規則第四十六條第一項及第二項の規定は前項の場合に之を準用す

第三十三條　各學年の課程の修了又は卒業を認むるには平素の成績を考査して之を定むへし但し修身、歷史、地理、理科、家事及教育に就きては試驗を行ふことを得

第三十四條　學校長は補習科を修了し又は專攻科、技藝專攻科を卒業せりと認めたる者には修業證書又は卒業證書を授與すへし

第七章　補則

第三十五條　中學校令施行規則第五十四條乃至第五十六條の規定は高等女學校に關し之を準用す

第八章　附則

第三十六條　本令は明治三十四年四月一日より施行す

第三十七條　本令施行の際現に高等女學校に在學する生徒に課すへき學科、學科目及其の程度に關しては其生徒の卒業するに至るまで仍從前の例によることを得

第三十八條　明治三十二年文部省令第五號第十四條の規定により高等女學校の生徒數に關し文部大臣に於て爲したる指揮は本令の規定に依り其の效力を失ふことなし

第三十九條　本令施行前に設置したる高等女學校に於て校舍及寄宿舍を設備に關し本令の規定に依り難き事情あるときは明治三十五年三月一日までは之に依らさることを得

第四十條　明治三十二年文部省令第五號及同第七號は之を廢止す

雜報

◎伏見宮御婿入式

去四月六日の黄道吉日を以て芽出度山内侯爵家に御入輿相成りたる伏見宮禎子女王殿下は御婿侯爵を伴はせられて同八日午後三時より紀尾井町なる伏見宮御本邸に於て御婿入式を行はせられたり當日同宮御本邸に於ては内外の御裝飾等滯りなく御整頓、眞木別當夫妻を始め家令、家扶、家從の人人何れも正装の上御婿並に奥方の御入來を待ち同四時の時辰を報ずる比山内侯爵は侯爵夫人禎子の方と御馬車に御同乘御參着御牧家令夫妻、田中家扶、桂木、八木下、後藤等各家從は御車寄にて奉迎御牧家令夫妻御先導にて御客間に案内暫時御休憩後御祝儀として長慰斗の三寶を進め畢て御二方に茶菓を進めらる御父貞愛、御母利子兩殿下には階上婦人室に御出座御婿並に奥方御牧家令夫妻の御先導にて右婦人室に於て兩殿下に御對面、引續き御祝儀として長慰斗三寶を進められ畢て御牧家令進で侯爵家よりの御土産品を披露し女中は兩殿下並に御二方の前に御献立を捧げ御三献の式あり眞木別當は兩殿下より賜はる御引出物を進められたり了つて山内侯爵は御牧家令の先導に依り再び階下なる御客間に退下、同五時より華頂宮同妃兩殿下を始め奉り山内侯爵家親族佐竹悦子、三條恒子、山内豐尹、同夫人、山内光子、山内豐中、山内壽子、山内豐政、同夫人、松平忠敬、同夫人、佐々木高行、同夫人、山内家家令萩原汎愛諸氏は順次宮御邸に參侯し家令家扶の案内に依り御客間に入り茶菓の御饗應を受け畢て兩殿下に御對面御餘興として數番の能仕舞等あり同六時より盛んなる御晩餐會を開かせられ同夜八時過ぎ御開きと相成りたり因にいふ本誌卷頭に掲げたる御肖像は禎子女王が未だ華族女學校の生徒として御通學中に在せられし頃の撮影なり

◎女子大學開校式の摸樣

小石川目白臺なる日本女子大學校に就ては別欄に記する如くなるが同大學開校式は去月二十日午後二時を以て開會せられたり重なる來賓は近衛公大隈伯爵同夫人副島酒井土方の四伯爵小笠原子爵澁澤男爵墺國公使菊地大學總長千家府知事松田市長江原素六兒島惟謙等の諸氏を始め四百餘名同校生徒父兄保證人等を合せて無

慮一千餘名に登れり、扨て式場は奏樂と共に一同着席成瀬校長先づ勅語を奉讀し次で校長開校の旨を述べドクトル、クリベル氏の祝歌創立委員會計監督澁澤男委員長大隈伯を始め近衛公(貴族院議長)千家男(東京府知事)等の演説毛利大日本女子教育會長、菊地大學總長、細川華族女學校長、高嶺高等師範學校長、土方伯、辻帝國教育會長等の祝詞あり終て立食の饗應あり午後五時散會したり當日は朝來雨天にして正午頃より雨滋々烈しく爲めに目白臺附近は道路泥濘深さ尺に達する程の有樣なりしにも拘らず來賓諸氏は車輛を連ねて續々參會せられ校の附近は殆んど人力車の堵を築きたる樣なりしが式場は校內左方の廣場に大天幕を以て設けられ、幕內に無慮一千餘名の會衆を容れたりき。式場の設備よく整ひたる上、大隈伯を始め演説、祝辭を述べられしはいづれも我邦敎育社會の各方面を代表せし諸名士なりしかば、式場の靜粛威嚴を加へて一しほ聽衆の感を惹きたり兎に角數年前にありては世上一般の疑問たりし女子の大學も今日此の盛會を以て目出度開校式を擧ぐるに至りしは我が社會の人文の發達進步を示せし善兆にして、併せて今後女學界一般の勃興を徴するに足るべかりしなり。

◎女子高等師範學校卒業式

三月三十日、同校にては、第十二回卒業證書授與式を擧行、當日來賓中の重なる者は、松田文相、菊地大學總長、澤柳普通學務局長、文部視學官等を始め凡二百餘名にして、皇后陛下御歌「みがゝずば」次に「おもへばはてなき」の唱歌をはるや、高嶺校長より、卒業生、全員二百二十四名に夫々證書を授與し、續きて松田文部大臣の、女子品性涵養に關する簡單なる演説ありたり、今、其の本科卒業生諸子の氏名は左の如し

▲高等師範學科

福島縣平民　橋本たけ
山形縣平民　加藤松代
香川縣士族　蒲生さき
富山縣士族　立花はる
北海道廳平民　建部よれ
山口縣士族　永地まちゑ
新潟縣平民　村山いく
福岡縣平民　空閑みちよ
高知縣士族　丸岡増
福島縣平民　阿部つる
鳥取縣平民　安藤きぬ
佐賀縣士族　澁谷さく

秋田縣平民　小原みよの
福岡縣士族　梶原きち
愛知縣平民　吉川ふみ
奈良縣士族　立野さみ
長崎縣士族　田島もさ
佐賀縣士族　永洲まさよ
石川縣士族　大村よれ
鳥取縣士族　山崎なみ
京都府平民　福本さみ
鳥取縣平民　安藤さつ
長崎縣平民　宮川壽美
愛知縣平民　鈴木濃野

●專修生

東京府平民	五十子のぶえ	愛媛縣士族	瀧　冬
德島縣平民	東條じゅん	山形縣平民	千田にわの
茨城縣士族	小田むめの	熊本縣士族	萱野千賀
熊本縣平民	鎌田こと	新潟縣平民	吉澤幸
三重縣平民	田中たか	高知縣士族	竹村千代
山梨縣平民	武井つな	新潟縣士族	村山つれ
茨城縣士族	内田すゑ	秋田縣士族	宇野ちぎ
長崎縣平民	大江きま	熊本縣士族	隈部よしを
長野縣平民	松木まつ	神奈川縣平民	木村梅
京都府士族	新開美枝	秋田縣士族	茂木あい

以上にして、次に、女子高等師範學校國語漢文專修科卒業生は、磯島つちの子をはじめ、三十九名。附屬高等女學校補習科卒業生は、林よれ子を始め、十七名。おなじく、高等女學校卒業生は、岩崎花子を始め七十四名なりき。

◉女子職業學校の近況

女子職業學校は、此種學校中唯一の學校なれば、校運日に月に盛んなると共に、入學女子の員數も著しく增加したるが、本年三月學年末に於ける卒業生の數は、敎員養成科十七名、甲裁縫科五十一名、甲刺繡科二十二名、甲編物科十五名、甲造花科十名、甲圖畫科六名、乙裁縫科四十七名、乙刺繡科二名、乙造花科三名、割烹科一名合計百三十八名にして、之れに以前の卒業生一千三十八名を加ふれば、總計一千百七十六名の多きに上るといふ、▲尙ほ同三月三十一日北條侍從には畏き邊の御命を奉して當校に臨まれ、現時の校況を記して叡覽に供すべきの御沙汰を傳へらる、當校の榮譽亦大なりといふべし。▲又た四月十二日は、嘗て皇后陛下同校へ臨御あらせられ、生徒の授業製作品等親しく叡覽の榮を賜り、御眞影並に恩賜金をも下し賜りたる紀念日なれば、同校にては小石川植物園に於て園遊會を催し、聖壽の萬歲を祝し永く皇恩を忘れざらんことを誓へり、又た同日は卒業生同窓會をも併せて催せしとて甚だ盛會なりし由

◉女服改良の運動

女服の改良を求むるの聲は婦人運動の盛なるにつれて漸く高まり、其の反響は各所に呼應し來れり中に就て女服改良會の如きは其尤なるものなるが其他二三の事實を報ずれば左の如し

○女服改良會　我國女子の服裝は衞生上、經濟上、容儀上共に改良の必要あることは、識者の夙に認むる所なるが、醫學博士弘田長氏は殊に熱心に此事を考究せられ、先頃同感の夫人達を會して、自己の考案を提出し、其が批評を請はれたり。其際同感の人々は女服改良會の設立を企圖し、設立委員をも撰定しぬ。爾來同感の人々互に改良に就いて、工夫を凝す所

ありしが、去る六日を以て大日本婦人教育會事務所に其委員會を開き、濱尾作子、高木かう子、鳩山春子、松前藤子、山脇房子、濟藤秋子、三輪田眞佐子の諸夫人相會し、各自の考案を持寄りて、種々協議を遂げ、改良服の躰裁も略一定したり。尚此上は廣く夫人方の同意者を得、先づ以て其の令孃方に改良服の着用を實行するのみならず、夫人方自身も愈々着用せらるゝことを約し、漸次世に着用者を多からしめて、以て遂に其目的を達せんことを決議したり。且つ同會は大方の夫人方に其一趣旨を賛成し、女服改良に就いて種々の實驗及考案を寄せられんことを望むと聞く。信に社會改良上好みすべき事なり。

○**山根氏の改良服裝**。　先頃歐洲より歸朝して頻りに躰育の奬勵を主張せる山根警視廳第三部長は、今度一種の男女改良服を案出し、既に自家の子女をして之を着用せしめ居る由。其改良服裝は男女とも總て筒袖にて腰下迄の身丈となし、下には股引(男女其仕立方を異にす)を穿ちて袴を附けしめ且つ下駄草履を廢して靴となし、女子の頭飾等の如き一切之を廢するなりと。

○**渡邊女學校の改良服**。　本郷東竹町の渡邊裁縫女學校は、校の性質上服裝について兼て考案を廻らせし由なるが、今般一の改良服を作り之を教員生徒の制服とする事にしたり。其改良服は筒袖袴にして筒袖は手首の處を細にて結ぶなりと。

○**山形縣師範學校**。　にては女子部生徒の服裝に關する規定を設けたるが、其中に下の如き條目あり。(第二條)學校内に於ては規定の袴を着すべし。但袴を着する時は下着は半身の者たるべし。(第七條)雨具又は外出防寒用としては袖合羽を着すべし。但吹雪烈しき日に限り高祖頭巾を用ふる事を得。

○**愛媛縣師範學校女子部高等女學校**。　および附近の各學校女教員等は女子服裝改良の議を決し委員を設けて新案改良を制定し一般の賛成を求め居る由。

○**文部省**。　なほ文部省の三島衛生主事は昨今頻りに工夫をこらして女學校の制服を考案中なりと。此案出來の上は公立女學校生徒に命令的に實行せしむる由。

◉女子體育法の調査

這般福岡縣敎育會に於ては、委員を置きて女子躰育法を調査せしめたるが、其女子躰育法調査案は左の如し。

我國、古來の歴史は措ひて云はず、現今社會が女子の美性及躾方等に對する要求は甚誤れり、風姿の美容儀の婉、德性の順良行狀の貞淑等は、勿論女子の習性とし稱揚すべきものなりと雖も、今や其要求中庸を失し、女子の品位の高潔ならざるも、亦其誤りたる要求に充てんことを務め、其弊や女子には恰も社會の玩弄物、裝飾物たるの觀なきにあらず、此儘にして改良敎育の法を講ぜざらんか、女子の將來は如何になり行くべきか、誠に悚然たらざるを得ず、委員は此觀察を基點として左の方法を論究したり

(一)女子の形容に關するもの(1)結髮は輕便なるものを奬勵すること(2)頭髮は一週一度以上洗滌せしむること(3)香油は淡泊なるを用ひしめ髮付等多く用ひしめざること(4)髮飾を輕便ならしむること(5)白粉は可成用ひしめず用ふるも可成輕薄ならしむること(6)鉛粉の害毒を戒むること(7)帶は餘り大なるものを用ひしめず緊縛せしめざること(8)學校に於て着袴せしむること(9)冬寒中容姿を優美ならしむる爲め薄着をせしめざること(10)足袋半股引を防寒用として用ひしむ

ろこと(11)下足は可成輕便なるものを用ひしめ雨天の外は雪駄草履又は低き下足を用ひしむること(12)尋常科女兒には可成筒袖を用ひしめ高等科女兒は袖を短くして輕便ならしむること(二)學校衛生に關するもの(1)女子用腰掛を特に設備すること(2)高等第三四學年女兒は座布團を用ひしむること(3)冬寒中は床板上及三和土間に上草履を用ひしむること(4)裁縫教室には机及腰掛を設備すること(5)午餐の時間を長くし辨當の分量を増さしむること(6)食物は女子に限り特に麁食するの舊習を改ためしむること(7)女子には特に修身科適宜の時期に於て女子衛生の方法を課すること(三)子守の兒童守方を改良すること第二奬勵すべき諸件(一)常に奬勵して運動を好むの習慣を養成すること(二)學校に於て女兒の體操を充實ならしむること(三)兒女の遊戯は從來ありふれたる方法に加ふるにノロッケー、ロンテニース、適當の奔走、ブランコ、鐵棒の懸垂等を課すること(四)女子の室外散歩を奬勵すること(五)體操にて習得したる姿勢は常に保たしむること

◉各國時間の差異

地球上に羅列する各邦國は、其位置によりて時間に差異あることとなるが、今世界の有名なる都府に於ける時間(日本東京の正午を基礎とす)の比較は左の如し

日本東京	正午
清國北京	午前十時廿六分五十六秒
波斯テヘラン	午前六時六分四十秒
露國ピータースブルク	同四時四十二分四十秒
英國倫敦	同三時廿分四十秒
獨國伯林	同三時五十八分三十二秒
佛國巴里	同二時五十分廿秒
伊國羅馬	同三時三十二分五十六秒
蘭國アルタルダム	同三時〇二分三十二秒
墺國維也納	同三時四十六分八秒
西國マドリット	同二時廿六分八秒
希臘雅典	同四時十六分
埃及カイロー	同四時四十六分廿四秒
米國華盛頓	午後九時三十二分四十八秒
智利サンチアゴ	同九時五十九分二十八秒

◉一時間の自轉車

近頃東京市内にては、自轉車に乘るもの頗る多く、キザ物の一つに數へらるゝ程なるが、これは世務忙はしくなり、時間を重んずるものだとすれば、已むを得ないことでありませうが、人の往來繁き本市内の如きは、最も取締を要する一つであらうと思ひます、いま其筋にて其通行數を調べしといふを聞くに

▲神田橋　官吏一四、學生一一、商人一六、職人五、女學生一▲日比谷見附　官吏二〇、學生八、商人一三、職人三、外國人一▲櫻田門内　官吏一、商人五▲同門外　官吏一〇、職人二、商人三▲虎の門内　官吏一〇、學生三、商人五、職人一

◉各國の婚姻年齡

男女の結婚年齡につきては、各國各制限を設けて、早婚

を防ぐの方法となせるが、今各國政府の許可せる婚姻年齡は左の如し

墺地利		男 十四年以上		女 十四年以上
英國		男 同上		女 十二年
獨逸		男 十八年		女 十四年
白耳義		男 同上		女 十五年
西班牙		男 十四年		女 十二年
佛國		男 十八年		女 十五年
希臘		男 十四年		女 十二年
匈牙利	新教徒	男 十八年	同	女 十五年
	舊教徒	男 十四年	同	女 十二年
葡萄牙		男 十四年		女 十二年
露西亞		男 十八年		女 十六年
瑞西		男 十四年		女 十二年

◎男装の女政治家

此のほど死去したる米國紳士モルレー、ホールといふ人は、紐育府第六街に住んで、三十年の久しき桂庵を營業として居りしが身の丈は漸く四尺七寸ばかり、重量が百十五ポンドといふ小作、長くデモクラット黨に屬して、煙草も吸ひ酒舖へも出入し、時には隨分人と爭鬪し議論し頗る活潑な人間であつたが、妻と稱する婦人と共に住み、養女が一人あつて、過去六年間といふもの熱心なる政治運動者として活動し、黨のクラブ員となつて盡力してゐたから、交際も從つて廣かつたが、偖之を男装の女子と知るものは一人もなかつた。豈圖らんや之を知つたのは其の死去のをり着用してゐたコートパンツ等を脱して見た時で、全然婦人の軀格であつたので、醫師始め衆人は皆意外の念をなしたといふ。

◎全國各女學校近況

◎東京市女子職業學校　東京市教育會の事業として計畫せらるゝ女子職業學校は牛込、赤坂、下谷、本所、芝の五區に一校づゝを設け、學科は普通學の外裁縫、洗濯、刺繡、編物、造花、圖畫、割烹、速記、簿記、電信、電話、機織、染物、麥稈細工等のうち一科若くば二科を專修せしめ、入學程度を尋常小學校卒業以上、修業年限を二ヶ年、專修生は六ヶ月とする豫定なりと。

◎女子美術學校　我國美術學校の設けありと雖、其範圍は狭く男子に限られたるの觀ありて、女子の美術教育に至りては殆んど顧みられざるの趣なきに非ず。女子の美術的技能は、素より男子に優れりとすべきにあらねど、女子には女子特得の技能を有するは蓋し否むべからざるものあり。故に女子のために美術教育を授け、其の特長を發揮せしめ、其の特能を完うせざるべからず、これ女子美術學校を設立せんとする趣旨の由なるが、其の規則概要左の如し。

▲目的　女子の德性智識を涵養し、兼て女子に適當なる優美の藝術を教授し、内に處しては賢妻良母たり、外に處しては文明を裨補するの技術家及教師たるものを養成す。

▲學科　普通科(三ヶ年)高等科(二ヶ年)に別ち、正科目なる日本畵

科、西洋醫科、彫塑科、蒔繪科、編物科、造花科、刺繡科、裁縫科の內志望の一科を課することゝし、各科に副科を置き普通學外國語及び美術に關する學問を必修せしむ。又別に實技のみを修むる者の爲に專修科（一ヶ年）を置き、又高等科を卒へて其蘊奧を極めんとする者の爲に、研究科（一ヶ年）を置く。

▲入學資格　高等學校卒業生は志望技術試驗のうへ高等科へ、高等小學校卒業生は無試驗にて普通科へ、專修科は其資格を問はずして入學を許す。

▲學費　普通科金壹圓五十錢、高等科金貳圓、專修科研究科金壹圓、（研究科は無月謝）、入學金は各科とも金壹圓とす。

▲寄宿舍　遠隔より入學する者の爲に設く、寄宿料一ヶ月六圓。

▲職員及講師　校長は藤田文藏氏、舍監は横井たま子氏（女子學院の舍監たりし人）、敎師には帝室技藝員、東京美術學校教授、女子高等師範學校教師たる人々これに當るといふ。

▲開校　四月一日より本鄕區弓町の新築校舍に於て開始せり。

⦿與風女學校の擴張　神田駿河臺の同學校は、維新の勤王家故正五位山田時章氏、時勢に感ずる所あり、去る明治十三年に創始せられしものにして、爾來高等普通の學科の授け、生徒の薰陶に務むること二十餘年。現校長山田倉太郎氏能く先考の遺緒を繼ぎて親ら敎鞭を執り、塾舍の監督には、時章氏未亡人（梅田雲濱氏の姪）山田登美が女史其任に膺り、親しく訓誨を加ふるを以て、現時女學校の通幣とも云ふべき、輕佻浮薄の風は毫も生徒に感染せず、風儀の醇正なるは稀に見る所なりとの事なるが、這回更に規模を擴張して、專ら女子教育の振興を圖ると云ふ。入學程度は高等小學二年級卒業以上なり。

⦿京都淑女學校開校式　京都市下京區不明門通中珠數屋町南入同校は大谷派本願寺の監督保護の下に設立せられしが、いよ／＼去る八日午前九時より、開校式を擧行せり。始めに君が代を奉唱し、次に田島校長は勅語を奉讀し、次に教學部長谷了然師は、新門主の告辭を代讀し、田島校長は謝辭を述べ、其より保證人總代若山庄造氏、職員總代加藤政子の祝詞、田島校長の訓辭、入學生總代足立信子の答辭あり。開校式の唱歌を以て式を擧りたり。當日は入學生は悉く出席し、式後職員生徒一同紀念の爲に撮影し、來集者一同へ茶菓を饗し、午前十一時散會せり、同校は下京區唯一の女學校にして、校長は敎育に多年の經驗を有する田島數惠氏、他の教職員は凡て女子のみを採用せり。

◎成女學校　同校が高等女學校卒業生以上の學力を養はんが爲め、先月より高等科を設けしが、尙豫備科をも設けて高等小學二年三年位の修業者をも入學せしむる由、尙又特別選科といふを置き、已に嫁したる婦人、或は年長者にして一般生徒と共に修業し難きものを特別の方法によりて授敎する由

◎大橋圖書館の創設

本館の老主大橋佐平氏は明治二十六年出版事業取調べのため、歐米を巡視せしに、各國の都市に圖書館の設備完きを見て、大に感ずる所あり、明年六月十五日、博文館創業第十五週年に相當するに際し、一大圖書館を設立するの計畫成り、石黑忠悳、上田萬年、田中稻城諸氏の協贊を受け、財團法人の方法を以て、其資金十萬圓維持費金二萬五千圓を寄附し、以て多年奉公の宿志を遂げんと、其趣旨書を公けにし、創立準備も進行せりと。

七號豫告

口繪

●侯爵山内豐景君同夫人禎子御方●露國皇后陛下●故稅所敦子刀自と其筆蹟●瓜生岩子女史の銅像●明治女學校全景●成女學校卒業生撮影●婦人の技藝●維盛卿の哀別其他

記事

▲論說●女子敎育意見(辻大日本敎育會長)●社會の腐敗救濟(鳩山春子女史)
▲家庭●女子の家庭敎育(塚本はま子女史)●家事の修養(平尾光子刀自)
▲傳記●日本武尊(三十六歌選中村秋香氏)●朗蘭夫人(中内文學士)●幸田氏の母(依田學海居士)
▲學藝●日本名蹟雜話(喜田文學士)●初夏の畑(藤堂敎諭)●養生訓の話(石原笠軒氏)●雨のはなし(岡田光子女史)
▲小說●題未定(川上眉山)●飛彈の木匠(泉鏡汀)
▲雜錄●夜半の煙火(花園女史)●おもかげ(鹽井文學士)●昔の日記(山崎とねよ)
其他「講義」「技藝」「文苑」「社交」等例に依つて材料豐富

每月一回五日發行

定價表

一冊(紙數二百八頁)…金二十錢
四冊(三ヶ月分)……前金七十五錢
八冊(半ヶ年分)……前金一圓四十五錢
十六冊(一ヶ年分)……前金二圓八十錢
内(定刊數……十二冊 增刊四回…三、六、九、十一月價格同一)
郵税 一冊 二錢

廣告料

	特等	一等	二等	三等
二十四字詰一行	……	四十三錢	三十五錢	三十錢
半頁卅二行	……	十三圓七十六錢	十一圓二十錢	九圓六十錢
一頁六十四行	割引 三十三圓	割引 二十七圓	割引 二十二圓	割引 十八圓

△等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の分に限る。
●總目錄御入用の方は二錢券相添へ申込あれ。

不許複製

明治三十四年五月五日發行 第一卷第六號

編輯人　松原岩五郎
發行人　大橋新太郎
印刷人　石川金太郎
印刷所　株式會社秀英舍(東京市京橋區西紺屋町二十六七番地)

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番

巖谷漣山人著有名畫伯插繪

毎月壹回
發行●全
部壹白冊
●洋裝菊
判美本

世界お伽噺

正價壹冊七錢●六冊前金四拾錢●拾貳冊前金七拾八錢●郵税壹冊貳錢

●第廿八編（小島沖舟畫）

獨逸 狐の裁判 下

全壹冊菊判密畫入美本正價金七錢郵税貳錢

狐の決鬪は狐の裁判の續稿にして、惡智惠あるライネッケ狐が、他の獸類を窘めては、舌三寸に獅子の大王を欺き遂せ、イゼクリムの狼の決鬪を物ともせず、牡猿の知惠に身の毛まで、綺麗さつぱり刈込んで首尾能く狼を退治た處で、獅大王の一の下臣と爲ると云ふ、智惠あるものは世に榮へ、智惠なきものは世に隱るゝ、眞意を爰に寓したる其物語の後篇なりさす、

●第二十九編（渡邊金秋畫）

アラビヤ 奇躰の洋燈 不思議の馬

全壹冊菊判密畫入美本正定金七錢郵税貳錢

例の世界お伽噺第二十九編は奇躰な洋燈と不思議の馬の二篇です、何が不思議と申して、何が奇躰と云つてこれ位また奇躰不思議のお話もあらびやの物語り、洋燈の精や木馬の精が乘り移つて居るのですから、これを讀む方がこゝによると本の精に誑まれるかも解りません、あうこわや〳〵のまぢは廣告から奇躰不思議な事にして監ませう。

既刊目次

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

（丁の一）



第七卷第五號　五月五日發行

口繪

●和蘭女皇と皇婿ハイトリヒ殿下●辨慶橋の櫻花●丁株主クリスチァン九世陛下●一等甲裝巡洋艦吾妻（以上アートペイパー）●二條公爵●英獨の二宰相●甲州身延山久遠寺●在清北京列國兵●粕壁手島の藤●厦門の名勝●政治家の墳墓●朝鮮國の風景●物故の諸名士●英國先女皇大葬式●多摩川附近の風景●近時の集會●東宮武官長村木少將●第二十旅團長宇佐川少將●北海道後志風景●北京に於ける列國軍醫將校●美術展覽會逸品

定價

一冊金三拾錢○半ヶ年分（增刊共八冊）金貳圓貳拾錢○一ヶ年分（增刊共十六冊）金四圓貳拾錢
○郵稅一冊三錢

發兌元　博文館

（丁の二）

文藝倶樂部

第七卷第六號

三十四年五月一日發行

每月一回 一日發兌

本文紙數三百二十頁 眞銅版八丁特別口繪二葉 丁兩面彩刷繪表紙

定價

一冊金廿五錢 〇三ヶ月分九拾五錢 半ヶ年分壹圓八拾錢 二ヶ年分（十六冊）三圓五拾錢〇 郵稅一冊三錢

發兌元 博文館

（丁の四）

再版出來報告

左記の各書籍は一時品切の爲め高需に背き居候處今回何れも再版出來仕候間續々購讀被成下度又々品切に相成候ては遺憾に付此段御報申上候

版	書名	定價	郵税
三版	社會學	本製五拾錢 並製卅五錢	郵税拾錢 郵税八錢
再版	通俗工衆官廳簿記	全壹册金廿五錢	郵税八錢
再版	錢屋五兵衛	全壹册金拾三錢	郵税四錢
三版	幼年讀本日本歷史	全壹册金拾五錢	郵税四錢
八版	管公	全壹册金八錢	郵税四錢
六版	惡七兵衛	全壹册金八錢	郵税四錢
六版	七本槍	全壹册金八錢	郵税四錢
六版	關ケ原	全壹册金八錢	郵税四錢
六版	作歌自在	全壹册金廿五錢	郵税六錢
八版	一休和尚	全壹册金六錢	郵税貳錢
版	草薙劍	全壹册金六錢	郵税貳錢
九版	田村將軍	全壹册金六錢	郵税貳錢
八版	姨捨山	全壹册金六錢	郵税貳錢

版	書名	定價	郵税
三版	西鄕隆盛	全壹册金拾三錢	郵税四錢
九版	大石良雄	全壹册金拾貳錢	郵税四錢
九版	寶の山	全壹册金拾貳錢	郵税四錢
再版	大日本帝國史	全壹册金四拾錢	郵税拾錢
七版	枕頭山水	全壹册金拾五錢	郵税四錢
五版	新文林	全壹册金廿四錢	郵税四錢
五版	中等教育世界商業史	全壹册金三拾錢	郵税八錢
四版	商業教料書	全壹册金四拾五錢	郵税拾貳錢
十五版	玉の井	全壹册金五錢	郵税貳錢
十四版	猿蟹合戰	全壹册金五錢	郵税貳錢
十二版	物臭太郎	全壹册金五錢	郵税貳錢
十一版	兎と鰐	全壹册金五錢	郵税貳錢
四版	圍碁入門	全壹册金拾五錢	郵税四錢

版	書名	冊數	定價	郵税
六版	鬼童丸	全壹冊	金六錢	郵税貳錢
四版	五色の石	全壹冊	金七錢	郵税貳錢
三版	法螺先生	全壹冊	金七錢	郵税貳錢
再版	大人國	全壹冊	金七錢	郵税貳錢
三版	工業大意	全壹冊	金廿五錢	郵税六錢
四版	易占骨相法	全壹冊	金廿五錢	郵税六錢
再版	謠と能	全壹冊	金廿五錢	郵税六錢
六版	內外遊戯法	全壹冊	金廿五錢	郵税六錢
再版	日本文學全書 第一編	全壹冊	金廿五錢	郵税三錢
再版	保元平治物語	全壹冊	金廿五錢	郵税三錢
再版	古今著聞集	全壹冊	金廿五錢	郵税三錢
四版	料理手引草	全壹冊	金廿五錢	郵税八錢
三版	家事要訣	全壹冊	金卅五錢	郵税八錢
五版	孔子	全壹冊	金拾三錢	郵税四錢
三版	白河樂翁公	全壹冊	金拾三錢	郵税四錢

版	書名	冊數	定價	郵税
十版	卯花月夜	全壹冊	金拾八錢	郵税四錢
五版	通俗商業簿記	全壹冊	金廿五錢	郵税八錢
八版	八咫烏	全壹冊	金六錢	郵税貳錢
六版	熊本城	全壹冊	金六錢	郵税貳錢
九版	日露戰爭未來記	全壹冊	金拾八錢	郵税四錢
七版	東照宮	全壹冊	金六錢	郵税貳錢
六版	高千穗	全壹冊	金六錢	郵税貳錢
六版	宇治川	全壹冊	金六錢	郵税貳錢
十二版	養蠶編（下）	全壹冊	金拾五錢	郵税五錢
九版	栽桑編	全壹冊	金拾五錢	郵税六錢
再版	十八史略講義	全壹冊	金廿五錢	郵税八錢
七版	玉取り	全壹冊	金六錢	郵税貳錢
三版	小人島	全壹冊	金七錢	郵税貳錢
十版	花の白雲	全壹冊	金拾八錢	郵税四錢
十五版	農學入門（一）	全壹冊	金拾五錢	郵税四錢

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

（丁の七）

農學大全

全壹册洋紙製總クロース金文字入
紙數千六百頁製本堅牢紙質精良

農は是れ國本なり富源なり國家此重要基礎を後にして不急の業を先にす國是を失するものに非ずや、然るに從來日新の學理を我農業に應川せず依然舊觀を改めざるは是が指導たる好著なきに基因せり豈に一大缺典にあらずや仍て今斯學專門の諸大家に請ふて農業大全を發行することゝなれり、部門十、農學の一切を網羅す眞に是れ國家の寶典

正價 貳圓五拾錢
小包 目方六百匁

農學大全（全壹册）目次

注意 來る五月卅一日（までに前金にて御申込に限り）特價金貳圓貳拾錢（外に郵稅を要す）（御注文は凡て前金、着金之順序により送本可仕候）

發兌元 東京本町 博文館

女學世界
毎月一回五日發行
（明治三十四年五月五日發行）第壹卷第六號（明治三十三年十二月廿五日第三種郵便物認可）

（定價金貳拾錢）

（東京株式會社秀英舍印刷）

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版③
明治34年4月～5月（第1巻第5号、第6号）

2005年12月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
印　刷　ジャパン リアルティ スーパービジョン株式会社
製　本　有限会社青木製本

ISBN4-7601-2837-9　C3321